
ポケモン不思議のダンジョン～時の探検隊・闇の探検隊～

春野ツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン〜時の探検隊・闇の探検隊〜

【Nコード】

N7377H

【作者名】

春野ツバサ

【あらすじ】

探検隊に憧れるナエトルは海岸で1匹のポケモンに出会う。そのポケモンは自分が人間だと言い……………時空を越えた時間と闇を巡る探検隊の物語。

E x p e d i t i o n - 1 夕焼けの浜辺（前書き）

初めまして！ 春野ツバサこと、ツバサです！！

このような場所に自分の作品を出すことは初めてです。

文章は得意ではありませんが、がんばって書いていきたいと思ひます。宜しくお願いします！！

Expedition - 1 夕焼けの浜辺

——風は乱れ、雷鳴が轟く。

その日は数日ぶりの嵐であつた。

それも、ここ数年例にない程の荒れ様——

ポケモン達は家路を急ぎ、商売をしている者は店を早々に閉め、嵐が過ぎ去るのを待った。

だが、この暴君が過ぎ去る気配は、一向に見えず、寧ろ益々その猛威を振るっていった。

風は益々酷くなり、雨は勢いを増していった。

そして、一際大きな雷が、空を2分するように、海に向かって落ちた。

その時——ふと、何かの悲鳴が響き渡つたような気がした。

だが、その声は雷鳴に打ち消され、誰かの耳に届くことは、終になかった。

そして、2つの影が、それぞれ別の場所へと、落ちていった。

——明けて翌日、昨日の嵐が嘘のような晴天であつた。

町には多くのポケモンが行き交い、賑わいを見せていた。

それはここ、トレジャータウンも同様であつた。

トレジャータウンは大陸の北西に位置する小さな町である。

だが、町には活気があり、遠く遠方の方から訪れる旅人も後を絶たなかった。

その理由はただ一つ。

ここには、有名な探検家が親方を務める探検隊基地、“ギルド”があるからである。

そして、そんなギルドを今日も訪れる、1人のポケモンがいた。

「……………」

それは1人のナエトルだった。

ナエトルはその場を動かず、ギルドの入り口の鉄柵とにらめっこをしていた。

「…………… 今日こそ、今日こそギルド^{なか}に入るんだ。」

ナエトルはそう言うと、首から下げたペンダントにそっと触れる。それから一体、どれくらいの時間が流れたのだろうか。

やがてナエトルは覚悟を決め、入り口の前にある格子の上に乗った。

「ポケモン発見!! ポケモン発見!!」

真下から上がってくる声にナエトルは一瞬ビクつくがそれでもまだ格子の上で粘っていた。(だが、少し震えていたりする。)

「誰の足型? 誰の足型?」

今度は入口の奥から声が聞こえてくる。

まだまだ粘っているナエトル。

「足型はナエトル! 足型はナエトル!」

「うわわわわっ!?!」

遂に耐えきれなくなったナエトルは慌てて格子から離れる。

「………… ハア。やっぱりダメだあ」

ナエトルはタメ息をつくとペンダントをじっと見つめる。

「………… 今日も、ダメだった」

ナエトルは自分で自分の事が嫌になっていた。

ほんの少しの勇気も出せない自分が情けなくてしょうがなかった。ナエトルはもう一度タメ息をつく、トボトボとその場から離れ、元来た道へと引き返していった。

だが、この時ナエトルは気が付いていなかった。

この場所にいたのは、ナエトル（じぶん）1人ではなかったことに。

ナエトルが立ち去った後、草むらから2人のポケモンが姿を現わした。

「おい、ズバット。今の見たか？」

「ああ。見てたぜ。ドガース」

ドガース、ズバットと呼ばれた2匹は、互いの顔を見合う。

「さっきの奴、なんか持ってたよな？」

「ああ。ありゃあ、お宝かなにかな。きつと」

「なら、やるこたあ1つだな」

「おう。へへッ」

そう言い頷き合うと、2人はナエトルの後を、追っていった。

——「うわあ。キレイなあ。」

夕日に映えた海にクラブ達が吹いたたくさんの泡が反射されなんともいえない光景をかし出してている。

ナエトルは暫しその光景にみとれていた。

「この景色を見てると嫌なことも忘れちゃうなあ。

いつ来てみても、ホントいいよね」

ふと、ナエトルは海岸線の方に目をやる。

そしてそこに、普段見慣れない物体があることに気が付く。

「？……あれ、何だろ」

ナエトルはそちらの方に向かって歩いていく。

近づいてみると、それは1人のポケモンがうつ伏せになって倒れている状態であるというのがわかった。

「わわっ！！ 誰か倒れてる！ た、たた大変だ！！」

慌ててナエトルは倒れてる者に駆け寄る。

「ねえ、キミ！ どうしたの？ 大丈夫！？」

だが、倒れている者は動かない。

……ま、まさか……

不吉な予感をナエトルが覚えたその時、

「……うつ、うつん……」

僅かに身動きするとその者はゆっくりと目を開けた。

「……！？……」

「気がついた！？ 良かったあゝ！ 動かないから心配しちゃったよあ」

「…………」

現状が理解できていないのか、それとも自分はまだ夢を視ているのか、

とにかく、目の前の物体^{もの}に驚き、一瞬言葉を失う。

「キミ、ここで倒れてたんだよ！？」

「きゃああああ！！」

……ナ、ナエトルが……ポケモンが……喋ってるうううう！？」

やはり現実だった。

あまりと言えばあまりな状況にその者は愕然とする。

一方、ナエトルの方も、訝しげな表情で相手の方を見る。

「きゃあ……って、もしかしてキミ、女の子？」

………プチ

ずきゅるるうううううい！！（何の音かはご想像にお任せします。）

「失礼ね！！ 誰がどう見たって女の子でしょう！！」

いつの間にやら立ち上がり、左足をだむつ、と砂浜に踏みつける相手。

対するナエトルはというと、顔を半分砂に埋もれさせ涙目でうつ伏せていた。

「……うう、ご、ごめん。」

でも、尻尾の先が分かれてないピカチュウの女の子なんて、ボク初めて見たから。」

………

ナエトルから言われた言葉を聞き、相手はさらに言葉を失う。

「………今、何と？」

一応聞いてみる。

何かの聞き間違いという可能性を考えたからである。

「え！？ 初めて見たって」

ナエトルは目をきょとんとさせる。

……ボク今、何か変なこと言っただかな？

「違う、その前！」

「……女の子……？」

「もう一つ前……！」

「……尻尾の先が分かれてないピカチュウ………」

「うわあああああ……！」

やっぱり、聞き違いじゃなかったあああああ……！」

ピカチュウと呼ばれたその者は頭を抱えその場につづくまる。

「ど、どうしたの！？ ピカチュウ……！」

「やかまひい……！ ワタシはピカチュウじゃないっての……！」

………

今度はナエトルの方が言葉を失う。

「……えーっと、どこからどう見てもピカチュウなんですけど」

「だあかあらあ……！」

人間なんだってば！　ワタシは！！」

「え？　ニンゲン？

まっさかあゝ。アハハハハハ！！」

全く信じるカケラもないナエトルは笑い出す。

その態度に、ピカチュウは怒りのあまりこめかみをぴくぴくと痙攣させる。

それに連動して尻尾がぴくぴくと動き出す。

……　つて、尻尾！？

ピカチュウは慌てて自分の姿を見回した。

黄色い毛で覆われた両手、頭上に生えた2つの耳。そして決定打はあの、電気ネズミ特有のギザギザした尻尾。

見るとナエトルの言う通り、尻尾の先は分かれず、きれいなまっすぐの線を描いていた。

「……うそ……」

シヨックのあまり、ピカチュウはその場にへたり込む。

「だ、大丈夫！？　ピカチュウ？」

「あんまり大丈夫じゃない……　かも」

……でも、一体どうしてこんなことに……？

ピカチュウは必死でポケモンこころなうた化原因を探り出そうとした。

だが、何も思いつかなかった。

それどころか、自分は何者で、何故ここにいるのかも分からなかった。

その様子は、傍目から見れば不審者丸出しの言動であつた。

「……　キミ、何か怪しいなあ。

もしかして、ボクのこと騙そうとしてる？」

疑いの視線めを向けられ、ピカチュウは慌てて取り繕おうとする。

「ち、違っ！！」

本当に人間だったの！ 信じてよ！！」

「……うーん、じゃあどうしてここに！？

どこから来たの？ 何でここに倒れてたの？」

「……それは……分からない。

何も思い出せないの」

「思い出せない……って、もしかして、記憶喪失つてやつ？」

「……多分……」

ピカチュウはそう言いながら左手で頭を掻く。

その時、ピカチュウから何かが落ち、砂の中に埋もれる。

「あれ？ 今何か落ちたよ？」

「え？ どこに！？」

ピカチュウは回りを見回す。

そして足下に——それはあつた。

——持ち上げてみるとそれは緑色に光る指輪だつた。

ご丁寧に革ヒモで下部を結びつけ、ペンダントにしてあつた。

「指輪だ。それ、キミの？」

「……分からないけど、多分……」

ピカチュウは指輪をじつと見つめる。

その時、何故かものすごく懐かしい気分になった。

「……なんか、すごく大切な指輪ものだつたような気がする」

ピカチュウはそう言いながら、ヒモを首に回し、後ろで簡単に縛る。

「キミの宝物なんだね。指輪それ。

ボクにもあるんだよ、宝物そついうの。見てみて。」

そう言つて、ナエトルが首からかけたペンダントを外そうとした

その時、

どんっ！！

後ろから誰かに押され、ナエトルはピカチュウに向かって突っ込

んでいく。

「うわわわわわー!!」

「きゃあー!」

2人は団子状態で砂浜に落っこちる。

「いったあゝ」

「もう!!」

何なの!? いきなり!」

正体はすぐにわかった。

それは、ドガースとズバット。

ナエトルの後を尾けていたあの2人だった。

どうやらさっきのはドガースの体当たりだったようだ。

「おっと、ごめんよ」

ちつとも悪いと思ってないような言い方のドガース。

その態度に、ピカチュウは少しムツとする。

「いきなり何するんだよ! 危ないじゃないか!」

「へへッ。それよりいいのか? 怒ってて。」

あれ、お前の物もんじゃないのか?」

ズバットはペンダントを指差す。

先には小さな石の欠片が通っていた。

どうやら攻撃を受けたときに落としてしまったらしい。

「あつ! それ!」

ナエトルが何かを言う前に、ドガースがペンダントそれを拾い上げる。

「ああっ!」

「悪いな。ペンダントこいつは俺達がもらってくぜ。」

「……………」

「何だ? 取り返しに來ないのか?

それともビビって動けないってか?

とんだ臆病者だなあ、お前」

ナエトルは震えて動かない。

いや、動けないといった方が正しいかもしれない。

そして、ピカチュウもまた、その場を動こうとはしなかった。そんな2人の様子を見て、ドガースは鼻で笑う。

「おい、行こうぜ」

ドガースはズバットの方を向く。

ズバットは頷いて、再びナエトルの方を向く。

「おう。じゃあな弱虫君。へへッ」

2人は浜辺の先にある洞窟へと入っていく。

ピカチュウとナエトルは、無言でそれを見送った。

「……た、大変だ!!」

ど、どうしよう!? どうしよう!?

あれ、すつごく大切な物なのに……盗まれちゃったよぉ!!」

半ばパニック状態でナエトルは辺りをぐるぐると回り始める。

その様子を少し、イラッとするピカチュウ。

「何迷ってんのよ。」

取り返しにいけばいいでしょう!?

当たり前の返答をされ、びくつくナエトル。

何を隠そう、彼は超がつくほどのヘタレなのだ。

わかっていても、迷わずその手段は通過^{スル}していた。

「ムリッ!! 無理だよ!!」

だって、アイツ等強そうだったしい!!」

……ヘタレだ。真の。

ピカチュウはそう思いながら眉間を押さえる。

「大事な宝物なんでしょう? このまま盗^とられちゃってもいいの!」

「?

「……うつ」

ナエトルは俯く。

勿論いいはずがなかった。

ペンダントは自分にとって、命の次に大切な物であつたから。
だが、

「……でも……」

やはり怖い思いの方が強かつた。

ナエトルは下を向いたまま曖昧な返事しかしない。

その態度にとうとう耐えきれなくなったピカチュウは、

「……ああっ！！ もう！！」

いいから、行くわよ！！」

そう言つとナエトルの左手（足？）を掴んで走り出す。

「えっ！？ ちょっと、待って！！ まだ心の準備があゝ！！」

抵抗もむなしく引つ張られていくナエトル。

2人はさっきの2人の後を追ひ、洞窟の中へと、足を踏み入れて
いった。

E x p e d i t i o n - 2 大切な宝物（前書き）

同じ職場の人のお身内さんに新型インフル感染者が発生。

身近でそういう事が発生すると、やっぱり少し恐いものがあります。

（汗）

「——ちよっと、あんまりくっつかないでよ。歩きにくいじゃない」

「……あ、うん。ごめん」

ナエトルはそう言う少しピカチュウから離れる。だが、ピカチュウの跡をピッタリとくっついて歩いていった。

——ここは海岸にあった洞窟の中。

ピカチュウとナエトルは、ナエトルの宝物を奪っていった2人のポケモンの後を追って洞窟に入っていた。

中は割と広い空間で、野性のポケモンが住んでいそうな環境が整っていた。

事実、歩いている途中でピカチュウ達は洞窟に暮らしているポケモン達と何匹か遭遇していた。だが、その度にナエトルが逃げ出してしまい戦闘にはならなかった。

そして現在は、逃走防止の為、ピカチュウが先頭を歩いているという状況であった。

「——でもさあ、ピカチュウってすっごくせっかちだよな」
「そうかなあ？」

自覚のないピカチュウは曖昧な返事を返す。

その返答に、ナエトルはこくこくと首を頷かせる。
「そうだよ。だって、ボクのこと無理矢理引っ張って洞窟に入っちゃうんだもん」

「ワタシから言わせれば、キミは優柔不断で決断力がない様に見えるけど？」

「うっ。」

「……そうなんだよね」

事実^{じじつ}を言われ、ちよつぱり凹むナエトル。

「——でもね！　ボクだってこのままじゃいけないと思ってるんだよ？」

変わらなくちゃいけないって。その為にも、色々がんばってるし……！」

「心掛けは立派でもそれに見合う行動力がないとねえ。

^{アクション}行動を起こさないと何を言ってもそれはただの口先だけの出任せにしか聞こえないよ？」

「……………」

ナエトルは反論できず、とうとう黙ってしまふ。

ピカチュウはそんなナエトルを肩越しにチラリと見て、タメ息をつく。

……………しょうがないなあ。

「……でも、まあ、確かに想うことは大切かもね。

考えなしに行動してもそれはただの無鉄砲としか思われないから」

「……うん！」

ピカチュウのフォローに、ナエトルはぱつと顔を輝かせる。

それを見て、ピカチュウもニコツと微笑む。

……………それにしても、今の言葉。

……………昔どこかで聞いたような気が……………自分で言ったのか、誰かに言われたのか、それはわからないが。

ピカチュウがもの思いにふけていると後ろにいたナエトルが——あつ……………と呟いた。

その声に、ピカチュウは顔を上げる。

——先の方から光が漏れている。どうやら一番奥まで辿り着いたらしい。

ピカチュウとナエトルは互いの顔を見合つとこっくりと頷き合つと、奥に向かって走り出した。

——そこには逃げたドガースとズバット。あの2人の姿があった。ピカチュウはナエトルの横に並ぶと軽くナエトルを小突いた。

——あの2人に、何か声をかけろという意思表示^{サイン}だった。

ナエトルは最初ぶるっていたが、やがて意を決して大きな声で叫んだ。

「……お、おい!!」

その声に気づいて振り向くドガースとズバット。

「なんだ。誰かと思ったら、さっきの弱虫くんじゃないか。

何しに来たんだ？ こんな所へ」

「迷子にでもなったのか？

なら、出口はあつちだぜ？ へへッ」

ズバットは笑いながら元来た道の方を指差す。

さらにナエトルを小突くピカチュウ。

「……ぼ、ぼぼボクの宝物返してよ!!」

あ、あああれは、ボクにとって、とっても大切な宝物^{もの}なんだから

!!」

ナエトルは僅かに息を切らしている。その様子を見て、ピカチュウは満足そうに頷いた。

だが、ドガースとズバットの2人は、それを鼻で笑い飛ばした。

「ほお、宝物ねえ？

やつぱり珍しいものなんだな？ これは」

「どこかで売っ払っちまえば高い値がつくかもしれないぜ？」

「へッ。そんなこと言われちゃあ、余計返せなくなっただぜ」

「……そ、そんなあ」

ナエトルはすっかり腰が引けていた。その様子に少し呆れるピカチュウ。

……まあ、ここまで追ってきてあれだけのことが言えたのだ。

今のナエトルにしてみれば上々だろう——そう思うことにした。
そしてピカチュウは一步前に入る。

「まあ、そう言わず。」

ここはワタシに免じて返してくれない？ ペンダントそれ」

ピカチュウの気に圧されたのか、僅かにたじろぐドガースとズバツト。

「……な、なんだ？ お前」

「そいつナエトルの仲間かよ？」

「違う」

迷わずはつきりきっぱりと言いつつピカチュウ。

『ええっ！？』

ピカチュウを除く全員が声を上げる（全員とは勿論ナエトルも含まれる）

「……こ、こういう時はお世辞でもいいから仲間だっていうもの
る？ フツー」

ナエトルに同情したのか、はたまた混乱しているのか、悪人らし
からぬ発言をするドガース。

「だって、さつき知り合ったばかりだし。友達でも何でもないし」

『冷たっ！！』

ドガースとズバツトの声がきれいにハモる。

「……でも、たいせつなもの宝物を盗られて、困ってる姿を見たら、助けるのは当
然でしょ？」

「……ピカチュウ……」

ナエトルは少し涙ぐんだ表情でピカチュウを見る。かお

だが、ドガースとズバツトは僅かに身動きはしたが、引く気は全
くなかった。

「……ふ、ふん！！」

取り返したきゃ、力づくで奪い返すんだな！！」

そう言つてドガースは上空に浮かび上がる。

ズバットはそれを見計らい、2人に同時に攻撃を仕掛けてきた。

——ドガースが喋っている間に、パワーを溜めていたのだ。

「エアカッター——！」

風が刃となり、ピカチュウとナエトルに襲いかかる！！

「わああああ——！」

ナエトルはその場にしゃがみ込むが、ピカチュウはそれをジャンプで難なくかわしていく。

『なっ！？』

ドガースとズバットは思わず声を上げる。

躲されるなどとは露程も思っていなかったからである。

その隙にピカチュウはきれいに地面に着地する。

「言い忘れてたけど、ワタシ結構強いよ？」

そう言つてピカチュウは壁を蹴るとズバットとの距離を一気に縮めた。

相手が空を飛んでいることは、ピカチュウにとってあまりハンデにならないようだった。

「なっ！！　しまっ！？」

ピカチュウはズバットに向かって跳び蹴りを食らわせようとする。
だが、

スカッ——！！

「……………あら？」

蹴りは空しく空を切っただけ。ピカチュウはそのままの体勢で落下する。

「うわきゃ——！！——！！」

『……………』

言葉を失う一同。辺りの空気が完璧に凍りつく。

「……あたたたた。」

——そっか。ワタシ今、ポケモンなんだっけ。

どつりで足のコンパスが短いと思って……」

ピカチュウは腰をさすりながら、起き上がる。

ふと、その時、ピカチュウは我に返った。

……ん？ ポケモン？

——そっか。ワタシ、今ポケモンなんだ。

ってことは、さっきから感じてるこのピリピリした感じは……もしかして——

ピカチュウはポケモンになってから、人間の時にはない感覚を感じていた。

そしてそれによって、自分が今電気ネズミであるということをはつきりと自覚した。

「……な、なんだか、強いんだか弱いんだかよくわからんヤツだな」

「あ、ああ」

さすがにどう対処していいのかわからず困惑するドガースとズバツト。

「……ピカチュウ……」

ナエトルもピカチュウの事を案じていたが、自分がどうにかしようという動きは全く見せなかった。

見事なまでのヘタレっぷりである。

「ゴメンゴメン。まだこの現状からたに慣れてなくてさ」

不敵な笑みを浮かべて立ち上がるピカチュウ。

「……でも、ここからが本番！！ 遠慮なく行くわよ！？」

そう言つとドガースとズバツトに向かって走っていくピカチュウ！！

「バカなヤツツ！！ 自分から突っ込んでくるなんてな！！
今度こそ食らえ！！ エアカッター！！」

無数の風の刃がピカチュウに向かって飛んでいく！！
だが、ピカチュウはそれを今度は4本足で、それもさつきとは比べものにならない速さで全てかわしていった！

「んなつ！？ さつきより速いだと！？」

ピカチュウは後ろ足でブレーキをかけ、立ち止まる。

「——うん。こっちの方が速く走れる。なんか変な感じはするけど」
「な、生意気なあ！！ ヘドロ爆弾！！」

相手に触れた直後に爆発する危険なヘドロである。

だが、これもピカチュウは後ろ足でさつきよりも高く跳躍するこ
とで難なくかわした。

そして、落下しながらドガースに接近していく。

ドガースはまたさつきのように蹴りがくると予測した。

「また跳び蹴り（それ）か！？ んなもんだたら——」

バシィッ！！

突如攻撃は上からきた。

ピカチュウが尻尾でドガースを叩き落としたのだ。

「残念。尻尾が本命」

今の一撃で（正確には技ではないのだが）ドガースは完全に目を
回す。

まず、これで一体K・O！！

ピカチュウは着地して同様に地面に落っこちたドガースに目をや
る。

ズバットは驚いて慌ててドガースに駆け寄る。

「ド、ドガース！？」

「さて、と。それじゃあ……これで決めるわよ！？

行くわよ！！電気ショーーック！！」

ピカチュウの両頬の電気袋に溜まった電気が一気に放出されドガースとズバットを直撃する！！

ぴバシイイイイイーーーー！！！！！！

『ういやあああああああ！？』

訳のわからん悲鳴と共にドガースとズバットは同時に崩れ落ちる。

「どお？ まだ戦^やる！？」

ピカチュウは電気袋をバチバチと光らせながら一步前に出る。

それは――戦^やうのならば遠慮はしないという――明らかな警告であつた。

「……うう、ちくしょお……」

体を焦げ付かせながらも、ズバットはよろよると起き上がる。

「ちいっ！！ こんな欠片^{ガラクタ}、頼まれなくなつたって返してやるよ！！」

そう言つてドガースはペンダントを放り投げる。

「お、覚えてろ！！」

悪役丸出しの捨てゼリフを残してドガースとズバットの2人は去つていった。

それを見て、ピカチュウは軽いため息をつく。

対するナエトルは、呆然としてそれを見ていた。

「……ス、スゴイ。

強い……」

……ピカチュウって、ホントに強いんだ。

ナエトルは感嘆の息を漏らす。

「ハイ」

いつの間に拾ったのか、ピカチュウはペンダントをナエトルの前に差し出す。

「あっ……！ 遺跡の欠片……！」

「これはキミの宝物。もう何があっても手放しちゃだめだよ？」

「うん！ ありがとう、ピカチュウ……！」

ナエトルはペンダントを受け取ると、それを大事そうに握りしめた。

「さて。こんな所、さっさと出ちゃおうよ」

そう言つとピカチュウは出口に向かって歩き出す。

それに続こうとナエトルもピカチュウの方を向く。その時――

――……ふわり……――

ピカチュウの後ろに、白い陰が揺らめいたのを、ナエトルは見た。びっくりして数回瞬きをしてもう一度ピカチュウの方を見る。

――だが、今度は何も見えなかった。

「……今の……何？」

……気のせいだったのだろうか。ナエトルは暫し呆然としてその場に立ち尽くす。

「何してんの……？」

早く……！！！」

既に遠くの方を歩いているピカチュウの声にかけられ、ナエトルは我に返る。

すると慌ててピカチュウの後を追いかけた。

こうして2人は海岸の洞窟を後にした――

――「本当にありがとね……！」

ナエトルはそう言つて何度も頭を下げる。胸元には、石の欠片の

ペンダントが揺れていた。

2人は洞窟を出て、元の美しい海岸へと戻ってきていた。

……成り行きとはいえ、つい勢いで助けちゃったけど、本当に良かったのかなあ。

ピカチュウは勢いまかせで行動してしまった自分の行いを反省していた。

だが、ナエトルが本当に嬉しそうな表情でこちらを見ているのを見て、考えを改めた。

——まあ、いつか。感謝されて悪い気はしないもんね。

「さっき盗まれたものだよ」

いつの間に外したのか、ナエトルはペンダントの先の石をくわえ、それをそつと砂浜の上に置いた。

「これはね、遺跡の欠片っていうんだ。

——と言っても、ボクが勝手にそう読んでるだけなんだけどね」

「へえ……」

ピカチュウは欠片をのぞき込む。

ただの石にしか見えないが……一体どこがすごいのだろうか？

ピカチュウの疑問に答えるかのように、ナエトルは話を続ける。

「一見ただのガラクタのようにも見えると思うけど。よく見て。不思議な模様が描かれてるの。わかる？」

ピカチュウはじつと目を凝らす。

よく見ると、石の表面に白っぽい線で何かの模様が描かれているのが見えた。

「本当だ……何か不思議な感じ……」

「ボクね、以前から昔話や伝説が大好きで、そういう話を聞いたり、本を読んだりするのが大好きだったんだ」

嬉嬉と言うナエトル。その瞳には憧れの色が宿っていた。

「謎の遺跡とか未開の地、そしてそこに隠されたたくさんの財宝！！
もう考えるだけでワクワクしてくるんだよ！！　そう思わない！
？」

「えー？……まあ」

いきなり同意を求められ返答に困るピカチュウ。

「そしてある日、ふとしたことで拾ったのがこの遺跡の欠片なんだ。
きつとこの模様には何か意味がある。

——この欠片が、伝説の場所へと導く鍵になっている。

いつしかそう思うようになったんだ。

だからね、ボクはこの欠片の謎を自分で解きたいって思ったんだ。
そしてその為には、探検隊になるのが一番いいって考えて弟子入
りしようと思ったんだ。

——けど

「けど？」

「……ボク、意気地無しでさ……」

「あー……」

ナエトルは白状するような言い回しで言うがピカチュウにはよく
わかっていた。

探検隊に弟子入りしようとしてできないナエトルの姿が容易に目
に浮かんできた。

「……いつも、入口の前までは行くんだけど……」

「手前で引き返しちゃうんだ」

「えっ！　うそ！？　何でわかったの！？

ピカチュウって超能力者！？
エスパー

……いや、誰でもわかるって。

ピカチュウは心の中でツツコミを入れる。

「それでさ。あのう……ボク、ピカチュウにお願いがあるんだけど

……」

「お願い!？」

——イヤな予感。ピカチュウはそう思った。

「お願い!! ボクと一緒に、探検隊やって!？」

……ほら来た。

いきなりといえはいきなりのお願いに、ピカチュウはこめかみを押さえる。

「さつき、ドガース達を倒した実力。

あれを見てボク、ピカチュウはただ者じゃないって思ったんだ。

ピカチュウならきつと、一流の探検家になれる!! そう思ったんだよ!!」

ナエトルが力説する中、ピカチュウはジト目でナエトルの方を見た。

「……何か、うまく丸め込もうとしてない？」

「ぎくつ！」

……そ、そんなことないよ!？」

そりゃあ、ボクは意気地無しだし……ピカチュウのことを頼りにしたいと思ってるよ?」

……やっぱ、他人^{ひと}任せ。ピカチュウはそう思った。

「……でも、ピカチュウと一緒にいると、ボク勇気がでてくるような気がするんだよ。

ピカチュウと一緒になら、ボクも頑張れるような気がするんだよ!

!」

……心の底から気のせいです。ピカチュウはまたまたツツコミを入れる。

「んー……でもねえ、大体、探検隊ってゆうものがよくわかんないし」

「探検隊は、依頼を受けてポケモンの救助に行ったり、悪いポケモ

ンを捕まえたり、未開の地を探検したりするんだよ。

どう？ 面白そうでしょ！？」

微塵もそんな気がおきないピカチュウ。

「けどワタシ、今までの記憶がないし……」

「だ、だから、いろんな所を探検していれば、いつかその原因がわかるかもしれないよ！？」

ピカチュウがポケモンになっちゃった理由^{わけ}も……！」

もう一押し！とでも言うかのように尚もナエトルは押してくる。

「それともピカチュウ、どこか他に行くあてとかあるの！？」

……うっ！？

イタイ所を突いてくる。

いきなりのカウンター攻撃にピカチュウは思わず呻いてしまう。

確かに右も左もわからぬこの世界。

自分は何故かポケモンになっているし、知り合いも他に誰もいない。

この状態で一人で投げ出されたら少々キツイものがある。

今ここで頼みの綱といえ、目の前にいるナエトルだけなのだが

（といっても全然頼りになりそうにないけど……）

ピカチュウは軽く息を吐くと、なにやら覚悟を決めたように頷いた。

「……た、確かに行くところもないし。」

これからどうしたらいいのかもわからないしね」

「！ じゃあ……！」

「いいわよ。探検隊、やるよ」

「本当！？ 本当に！？」

ナエトルは何度もしつこくピカチュウに尋ねる。

それに答えるように、ピカチュウは何度も頷いた。

「やったあ！！　ありがとう！！」

ボク達、絶対いいコンビになるよ！！　ヨロシクね！？」

「こちらこそ。よろしくね相棒^{ナエトル}」

「うん！　うん！！」

ピカチュウに負けないように、ボクも精一杯頑張るよ！！

一緒にがんばろうね！？」

ナエトルは心の底から笑顔で言う。

ピカチュウも頷き、にっこりと微笑む。

「じゃあ、まずはギルドに行って弟子入りしよう。

そこで探検隊の修行ができるんだよ。

修行はすつごく厳しいらしいけど——でも、がんばっていこうね

！！！」

「うん。それで、そのギルドってどこにあるの？」

「この先を行った崖の上にあるよ。ついてきて！！」

そう言うが早いか、ナエトルは走り出す。

ピカチュウは慌ててそれについて行った。

こうしてピカチュウは、ナエトルと共に、探検隊という新たな一歩を踏み出すこととなった。

一方その頃——

——ピカチュウがギルドを目指して歩き出したその同時刻、別の場所^{ところ}で別の場所を目指す陰^{もの}がいた——

場所はギルドから遠く離れた東の森。

訪れる者も滅多にいないその場所は、いつしか忘却^{わすれられた}の森と呼ばれるようになっていた。

そんな寂しい場所に、陰は一人立っていた。

小高い丘に登ったその陰は、辺りをぐるりと見回した。

「……ここが、そうなのか」

陰の頭上に生えた長い草がたなびき、視界を軽く遮った。

陰はそれをうつとおしそくに左へと払う。

「……ここが例の場所……全ての始まりの場所——」

陰はそう言うのと左腕に巻かれたバンダナをぐっと握りしめる。

やがて顔を上げ、きつと正面を見据える。

「——まずは森へ……」

そう言うのと陰は鮮やかな跳躍を見せ、一気に丘を駆け下りていく。

「……崩壊の……開始だ——」

瞳の奥に固い決意を秘め、陰は目的^{もり}地を目指して、一直線に走り

抜けていった——

Expedition - 2 大切な宝物（後書き）

Chapter - 1 終了。いや、良かった良かった。長かった。

我ながらちよつと長すぎ？ と反省してみたり。

ピカチュウ「作者さん。最後の方のあれは何？

思いつきり空探からネタ引っ張ってきてるじゃない。

一応、この小説の原作、時・闇なんでしょ？」

いやいや、アクセントと言ってくれたまへ。

それに、本格参入してるわけじゃないから大丈夫だ！！

ピカチュウ「……………いいのかなあ。ホントに（汗）」

さて、今回は本編をお休みして番外編の予定です！

ピカチュウ「ワタシが人間だった頃の話ね？」

そのたうり！！ 今回作中に名前も出てこなかった例の奴の若かり頃（きやつ）の姿も見られます！！

ナエトル「でも、早くない？ 本編始まったばかりなのに。まだ2話目だよ？」

その箇所は大丈夫だ！！

今回はさわりしか載つけないから！！ いわゆる、プロローグ？
つてやつです！！

だって、早く書きたかったんだもん。

ポケダンを始めた97%の理由は番外編これをやリたかつたから!!

ナエトル 「ええっ!?じゃあ、ボク達って残りの3%!?」

もしかして、ボク達ってオマケ!?」

いや、そこまでは言っていないけど……。

ピカチュウ「ほほう。オマケねえ」

ギクツ。

……や、やだなあ。ピカチュウ。怖い顔しちゃってえ。

第一、キミはどっちにも登場してるんだから文句はないでしょう?

ピカチュウ「やかましいわよ。今のワタシとあっちの私とで性格違キャラうく創ってるの、他でもないアンタでしょ?」

うっ!?! それを言われるとツライけど…… (汗)

ピカチュウ「つまり、あっちの私はワタシであってワタシじゃない。言わば、全く別物の存在!!」

うーん、否定はできないけど。

でも、別物ではないよ? そういうイメージでは創ってないです。

ピカチュウ「じゃあ、何なのよ?」

んー、背負ってるものの差? かなあ。

ピカチュウ「何それ? よくわかんないわよ?」

まあ、全て忘れちゃってるからねえ。キミは（笑）

ナエトル 「ニンゲンだった頃のピカチュウかあ。どんな姿だったのかなあ？」

ピカチュウ 「そりゃ、美少女に決まってるでしょ？」

なに言ってるの。今日の話でナエトルは見てるじゃない。後ろ姿だけど。

ピカ・ナエ 『……………はっ！？』

海岸の洞窟でナエトルが見たのはピカチュウが人間だった頃の面影なのだよ。はっはっはっ！！

ナエトル 「あれ、ピカチュウのニンゲンだった頃の姿なの！？

ボク、てっきり幽霊かと思ってた！！」

……………んな訳ないっしょ（汗）

ナエトル 「でも、後ろ向きだったから顔まではわかんなかったよ」

うーん、小説の場で顔の説明すんの、むつかしいです。そんなハイレベルなこと私に求めないで下さい。

まあ、一応容姿のデザインはできていることはいるんだけど……

ピカチュウ 「……………てか、ナエトル？ キミ、勝手にワタシの後ろ姿に人間だった頃の姿見てたの？」

ナエトル 「えっ！？ だ、だって、見えちゃったんだもん！！」

ピカチュウ「でも、見たことに変わりはないよね？」

というわけで、おとなしく罰を受けようね。」

ナエトル「そ、そんな！？ 理不尽だあゝ！！（涙）」

ちよ、待てい！！ なんで私の後ろに隠れる！？

私を巻き込むなあ！！

ナエトル「だ、だって！！ 一人じゃだもん！！」

うおのれ！！ ヘタレすぎるぞ！？

……び、ピカチュウ！？ ちよい、タンマ！ ストップ！ 考え直して！！

ピカチュウ「心配しないで。二人まとめて面倒みてあげるから」

うれしないわああああああ！！（涙）

（……放電中……）

ピカチュウ「さて、今回は番外編らしいのでこっちは休みね。

プロローグだって、作者さんは言ってたけど、どうなるかわかんないよね。

あ、あと、評価・感想の方もお待ちしています。

作者はおだてに弱い性格なので感想送っていただくと大変喜びます。

ひよつとしたら執筆ペースも上がるかも？ しれないです。それではまた！！」

Expedition - 3 ギルドへ（前書き）

最近モンコレの販売種類が激減しているという異常現象が発生中。
マンガ描くいい資料になるんだけどなあ。

誰か何か情報知ってる人いないかなあ。

ピカチュウ「それ、この場で言わなきゃいけないこと？

一応小説書く場所なんだけど。ここ。」

……す、すみません（汗）

Expedition - 3 ギルドへ

——「ここがプクリンのギルドだよ？」

ナエトルに案内されてやってきたのは崖の上に建った建物であった。

建物^{それ}を見て——ピカチュウは絶句する。

建物の外装が、プクリンというポケモンの形を模しているのだ。

……なんという手抜き……とゆうか、安直すぎる。

プクリンが親方だから建物までプクリンって……

——ポケモンのセンスってわかんない。

心の底からそう思ったピカチュウだった。

「探検隊になるにはまずギルド^こでチームの登録をして、一人前になるまで修行しなきゃならないんだよ」

「——あれ？」

でもここ、入り口閉まつてるよ？ どうやって中に入るの？」

ピカチュウは入り口を塞ぐ鉄格子に目をやる。

「入り口の前に穴があるでしょ？ あそこに乗らないと入り口が開かないんだよ」

「あー……」

ピカチュウはナエトルが今の今までギルド^この中に入れなかった理由^{わけ}を理解した。

——つまり、ビビってあの穴の上に乗ることができなかったのだ。穴をよく見てみると穴の上には木製の細かい格子がはつてある。

おそらくあの穴の下で誰かが見張っているのだろっ。

格子の上に乗っても落ちることはないであろうが、なんだか格子^{あそこ}の上に乗ったらこそばゆそうな感じがした。

「うう……でもなんか怪しげな所だね。やっぱり。
何度来ても慣れないや」

ナエトルは震えだす。どうやらせつかくの決心が鈍りだしているようだった。

その様子に、ピカチュウはこめかみを軽く押さえる。

「あー、もう！！　ここまで来て何迷ってんの！？

ホラ！　さっさと行った行った！！」

そう言ってピカチュウはナエトルを穴の上に押し出した。

押された勢いにつて、ナエトルはたたらを踏みながら穴の上に乗った。

「もう！！　いきなり押さないでよ！！」

「ポケモン発見！！　ポケモン発見！！」

真下からの声にびくつくナエトル。

「わわわっ！？」

「誰の足型？　誰の足型？」

ナエトルは逃げ出したくなる衝動を必死で押さえていた。

「足型はナエトル！　足型はナエトル！」

「——……　よし。後ろにいるもう一匹。お前だお前！！」

ピカチュウは自分のことを呼ばれていることに気付き思わず指を差す。

「お前も乗れ。」

ナエトルは足早に穴から離れ、代わりに今度はピカチュウが格子の上に乗った。

「ポケモン発見！　ポケモン発見！」

真下から上がってくる声に一瞬だが驚くピカチュウ。

目の前で見ているとはいえ、これはちょっと慣れそうにないなあ——と感じた。

「誰の足型？　誰の足型？」

「足型は！……足型は……？」

沈黙の時間ときが流れる。

「どうした！？ 見張り番！？」

応答しろ！！ 見張り番のディグダ！！」

「……………えーっと、足型はあ……………多分ピカチュウ！ 多分ピカチュウ！」

曖昧な返答に思わずひっくり返りそうになるピカチュウとナエトル。

……………いーのか。こんないい加減な見張り番で……

ピカチュウは心の底でツツコミを入れる。

「なんだ！ 多分ってー！！」

もう一つの声が怒声を上げる。

その声に、もう一つの声は困ったような声で答える。

「……だ、だつてえ、この辺じや見かけない足型なんだもん」

「あーもう情けないな！！ それでも見張り番かー！？」

「そんなこと言われてもう……………」

何やら小競り合いが始まる。

その様子にピカチュウとナエトルは思わず顔を見合わせる。

「……なんか、揉めてるみたいだね」

「そうね……………」

そうしてしばらくたつた後――

「待たせたな。まあ、確かにピカチュウはこの辺じや見かけないが、怪しい奴ではなさそうだな。

よし！！ 中に入れ！！」

声が言い終わると同時に塞がっていた鉄柵が上に上がっていきギルドの入口が姿を現した。

因みに今のでびびったナエトルはピカチュウの後ろに隠れたりしている。

「じゃあ、いい行ってみようか……」

「どうでもいいけど、なんで後ろに隠れてるわけ？」

「や、やだなあ。隠れてるわけじゃないよ。」

ただ、ピカチュウに先に行ってもらおうかなあ——って、思っただけで」

「……あつそ」

ピカチュウは肩をすくませ中へと入っていく。

中にはハシゴがあり、ここから地下へ降りる形になっているようであった。

2人は下に向かって降りていく。辿り着いた地下1回にはたくさんポケモン達の姿があった。

「う……わあ……！！ ポケモンがたくさんいる……！！」

これって皆探検隊！？　すごいや……！！」

「——おい……！！」

はしゃぐナエトルの後ろから声がした。

——振り向くとそこには派手めな出で立ちで、頭の形が音符のよ
うな形をしている鳥ポケモンが立っていた。

「さっき入ってきたのは、お前達2匹だな？」

「え？　……あ、はい……！！」

何故か直立不動になって答えるナエトル。

「ワタシはペラップ。」

ギルドーの情報通にして、ブクリン親方一の子分だ」

……うわ。自分で一番って言った。

こういうのに限って大したことないのが多いんだよね。

「勧誘やアンケートならお断りだ。さあ、帰った帰った」

そう言ってペラップは羽でピカチュウ達を払うような仕草をする。

「ち、違うよ！！ ボク達、探検隊になりたくて！！
このギルドに修行しに来たんだよ！！」

ナエトルが慌てて取り繕う。

ナエトルのこの言葉に、ペラップはギョツとした。

「ええ！？

…… た、探検隊！？ だって！？」

ペラップはピカチュウとナエトルに背を向けると何やら１人でぶつぶつ呟き始める。

…… 今時珍しい子だよ。このギルドに弟子入りたいだなんて。
あんなに厳しい修行はもう耐えられないと言って脱走するポケモン^のも後を絶たないというのに。

ペラップは肩越しにチラリとピカチュウとナエトルを見ると、なおも何やら１人でぶつぶつ言い続けている。

ナエトルはそんなペラップの姿に不安になったのか、おそろおそろ尋ねる。

「…… ねえ、探検隊の修行って、そんなに厳しいの？」

「はっ！！」

ペラップは肩をぎくりとする。

…… い、いかん！ このままではせつかくの貴重な人材が他のギルド^そへ流れてしまう！！

それだけはなんとしても避けねば！！

ペラップはくりりとピカチュウ達の方へと向き直る。

「いやいやいやいやいや！！

そんな事ないよ！？ 探検隊の修行はとーっても楽チン！！」

ペラップはそう言って満面の笑みを浮かべてピカチュウとナエトルの肩をベシベシと叩いた。

あまりのその態度の変わりようにピカチュウとナエトルは若干引き気味の様子だった。

「そつかー♪探検隊になりたいのかー♪なら早く言ってくれなくちゃー♪」

じゃあ、チーム名を登録するからついてきてね♪」

そう言うが早いか、ペラップはハシゴの方に向かって飛んでいく。ピカチュウとナエトルは驚きのあまり、呆然としてまだその場に佇んでいた。

「何してんの？ こつちだよ♪さあ早く♪」

ペラップはハシゴを降りていく。

ピカチュウとナエトルは互いの顔を見て頷くとペラップに続き順番にハシゴを降りていった。

——辿り着いたのは地下2階。

先ほどの賑やかだった1階と比べてポケモンの数が少なく、静かな空間が広がっていた。

「へえー。地下1階とは違って随分静かだね」

ナエトルは辺りを見回して呟いた。

「地下2階は主に弟子達が働く場所だからね。こつちだよ」

そう言うつとペラップは一番奥の部屋——この建物で唯一扉のある部屋に向かう。

「ここがブクリン親方のお部屋だ。

くれぐれも粗相がないようにな！」

ペラップは”くれぐれも”の箇所を特に誇張する。

その言葉に、ナエトルに緊張が走った。

「親方様。ペラップです。入ります♪」

ドアをノックすると恐る恐るドアを開け中に入るペラップ。

ピカチュウとナエトルもそれに続いて中へと入る。

部屋の中央に大きな椅子が後ろ向きに置かれてあり、ブクリンは椅子に腰掛けていた。

後ろ向きなのでピカチュウ達がその様子をつかがい知ることはできなかった。

「親方様。新しく弟子入りを希望する者達を連れてきました」

「……………」

しかしプクリンは答えない。

「!?」

ピカチュウとナエトルは首をかしげ、ペラップはプクリンの方にバサバサと飛んでいく。

「……………親方様？」

恐る恐るペラップが尋ねた。その時！

「やあっ!!」

僕プクリン!!　ここのギルドの親方だよ？」

いきなり振り向いた。

それも――椅子ごと。

一体どうしたらこういう芸当ことができるのか。

ピカチュウとナエトルは突然の出来事に思わず啞然とする。

「キミ達探検隊になりたいんだって？」

じゃ、まずチーム名を登録するからチームの名前を教えてください

「？」

「はあっ!?!　チーム名!?!」

そんなの考えてないけど……………どうしよう?」

ピカチュウが悩んでいるとそこへすかさずナエトルが、

「ポケダダンスです!!」

はつきりきっぱりと言いつつ放った。

「ポケダダンス!?!」

思わず聞き返すピカチュウ。

……………一体いつの間にチーム名なんて考えていたんだろうか?

まさか、この短時間の間に考えついたのかな？

「ポケモン不思議のダンジョンズで」ポケダンズ」！ボク、以前か
まえ
らずっと考えてたんだ」

嬉しそくにピカチュウの方を向くナエトル。

…… ああ。そうですね。ずっと前から考えてましたか。

入門できずにいたのに。チーム名だけは。しっかりと。

「決まったようだね。じゃあ、ポケダンズで登録するよ？」

そう言うつとプクリンは大きく息を吸い込み始める。

その様子を見て、ペラップは慌ててしゃがんで耳を塞ぎ始めた。

事情がわからないピカチュウとナエトルは訳がわからずただ眉をひそめているだけだった。

「とじろく とじろく ♪ みんなとじろく……」

たあああああ——！！！！！！」

瞬間！！
烈風が辺りを吹き荒び、
衝撃が辺りを襲った！！

ピカチュウとナエトルはそれをもに受け、大きく後ろへと吹飛ばされた！！

「あわわわわわわわ……」

「な……な……な……？」

衝撃で混乱したのかピカチュウとナエトルはひたすら「あ」と「な」を繰り返すばかり。

「おめでとう！！　これでキミ達も今日から探検隊だよ！？　記念にこれをあげるよ」

プクリンはそう言って奥から大きめの黄色い箱を取り出し、ピカチユウ達の前に置いた。

「これはポケモン探検隊キットだよ」

『ポケモン探検隊キット!?』

オウム返しのように問い返すピカチュウとナエトル。

「うん。探検隊に必要な道具ものがたくさん入ってるんだよ?」

そう言っただけ探検隊キットを開けるプクリン。箱の中から3つのアイテムを取り出した。

「まず、探検隊バッジ! 探検隊の証だよ。」

そして、不思議な地図。新しい地域へ行くとその情報が自動的に描き込まれていくとっても便利な地図。

最後にトレジャーバッグ。ダンジョンで見つけた道具を中に入れてとっておけるよ。

バッグの中も見てみて。」

そう言っただけプクリンはピカチュウにトレジャーバッグを手渡す。

ピカチュウはバッグを開け、中を探してみる。

出てきたのは青いバンダナと白いリボンだった。

「……何これ? 白いリボン?」

「——これは!! 波導のリボンだよ!」

驚いた口調でナエトルが言う。

「波導のリボン?」

「持ち主そのポケモンの持つ波導に合わせて色が変わる不思議なリボンだよ。」

ピカチュウ、触れてみなよ!」

「う、うん」

言われた通りにリボンを持つピカチュウ。

すると、リボンはピカチュウの波導に合わせて色を変えていき、最後に鮮やかなミントブルーの色に落ち着いた。

「ミント色だね。」

キミの波導は、森の木々のように穏やかなんだね」

「……そうは感じなかったけど」

ナエトルがボソリとつぶやく。

——が、ピカチュウは素早くそれに反応する。

「なんか言った？」

「うっ！？ ううん！？」

ナエトルは首をぶんぶか横にふる。

「ナエトルは何色？」

「ボクはリボンじゃなくて、これ！！ キトサンバンダナ！！

これを身につけてると防御力が上がるんだよ。すごいでしょ！？」

いつの間に巻いたのか、ナエトルの首には青いバンダナが巻かれていた。

「へえ。なんかバンダナそっちの方がいいなあ。

ねえ、取り替えない？」

「ええっ！？ い、イヤだよ！！

ボクだってバンダナこっちがいいよう」

「コラコラコラコラ！！

お前達！！親方様の前だぞ！？」

ペラップの叱責に2人は慌てて向き直る。

「その2つの道具アイテムは特別な物。キミ達の探検に役立つと思うよ」

「あ、ありがとう！！

ボク達、これからがんばります！！」

「うん、でもまだ見習いだからがんばって修行してね！？」

『はい！！』

ピカチュウとナエトルは声を合わせた。

——「——此処がお前達の部屋だ」

ピカチュウとナエトルはペラップに案内され、ギルドの一番奥の

部屋を宛がわれた。

中にはワラが2つ敷かれてあり、どうやらこれがベッドのようだ。

「わーい！ ベッドだあ！！」

そう言つてナエトルはベッドに向かつてダイブした。

「——つて、同じ部屋！？ ワタシとナエトル！」

「当たり前だ♪ 1チームにつき1部屋がギルドの原則しきたりだからな」

……まあ、ポケモン同士でなにかあるなんてことないだろうし、別にいいか。

そう思いピカチュウはもう1つのベッドに腰掛ける。

「お前達には住み込みで働いてもらう。」

明日は朝早いから今日は早めに寝て明日に備えるように。じゃあな」

そう言つてペラッパは部屋から出て行つた。

……早起きかあ。苦手だなあ。

ピカチュウはそう思っていた。

——月の光が窓から差し込んでくる。

それ ナイト月光が夜用ランプの代わりとなり、部屋の中を明るく照らし出していた。

「……………」

ピカチュウはベッドに仰向けになりながら、1人物思いにふけていた。

——あの後、特に何をするでもなく、ベッドに入つたナエトルはアッサリと眠りに落ち、今は熟睡していた。

一方、ピカチュウはというと、なかなか寝付けずにいた。

理由は、自分の身に起こつた出来事——

考えれば考えるほどわからなくなった。

何故自分はポケモンになつたのか？ 何故あの海岸で倒れていた

のか？

——自分は一体、何処から来たのか？

.....

あまり深く考えすぎると眠れなくなりそうな気がしたのでピカチュウはこれ以上考えるのをやめることにした。

..... ナエトルの言う通り、探検隊を続けていけばいつか自分が^こポケモン化理由も分かるかもしれない——

——ピカチュウはそう思うことにした。

ピカチュウはナエトルの方に目をやる。

よく眠っている.....

ピカチュウはくすりと笑った。

..... とりあえずはギルドの仕事を頑張らないとね。

これからヨロシク。ナエトル。

ピカチュウは小さくあくびをして眠りについた。

ピカチュウの意識は、夢の中へと——落ちていった——

Expedition - 3 ギルドへ（後書き）

ようやくギルドに到着しました。

そしてようやくポケダンを結成です！！

ピカチュウ「チーム名なんのひねりもないわね」

うーん、適当に凝った名前思いつかなかったんだよ。
文字数制限があるとむづかしいよう（汗）

ピカチュウ「元々ネーミングセンスがないもんね」

し、仕方ないだろおおおお！！？
それを言つなよおおおお！！（涙）

ピカチュウ「うあ、そんな号泣せんでも。わかった。わかったわよ
（汗）」

プクリン「やあっ！！」

うおっ！？ びっくりしたあ！！

……って、親方様！？なんでここに！？

プクリン「後書きのコーナーがおもしろそうだから来ちゃったよ
っ」

……さ、さいで（汗）

プクリン「あれ？ どうしたの？ トモダチ。

いつもとテンションが違うよ?」

……い、いやあ。

さすがに親方様相手だとどう対応していいのかわからなくて……つて、と、友達!?

私と親方様がつすか!?

プクリン 「え? 嫌なの?」

い、いえ!! めめめ滅相もない!! むしろ恐れ多いっす!!

プクリン 「良かった」。またトモダチが増えた」これからもよろしくね。ツバサちゃん」

こ、こちらこそ!! 末永くヨロシクっす!!

ピカチュウ「……なんで体育会系だ」

や、やかまひい!!

強い者には巻かれる主義なのだ!! 私は!! (小声)

ピカチュウ「……ま、まあいいけど」

コホン。

え、今回はいよいよポケダンス本格始動!! 初仕事である場所へ向かうよ!!

ピカチュウ「というと、やっぱりあそこ?」

イエス!! あそこだ!!

2人は初仕事を見事成功させることができるのか!?

ピカチュウ「お楽しみに」

それでは今回はこの辺にて!

ピカチュウ「おいとまします。さよなら」

ブクリン「じゃあね」トモダチトモダチ」

ツバサ・ピカチュウ『……………(汗)』

ピカチュウ「……作者さん？（怒）」

はっ！ はいい！！

ピカチュウ「前回もう少し早く更新するとか言ってたわよね？

それなのに何？ この遅さは」

……（汗）

い、いやあ、いろいろと想定外のこといろいろあつて。

そ、それに、7日に一回の更新が今回は6日でできたんだから、結構早いんじゃないかなあ、とか、思ってみたり。あ、あは。

ピカチュウ「……………」

あはははは（汗）

……………ええええつとお。

スミマセン！！ 逃げる！！（ダッシュ）

ピカチュウ「待ちなさいこらあ！！！」

——夢を……視ていた。

どこからともなく声が聞こえてくる。暗くて相手の姿を捉えることはできない。

「……応えてくれ……!!」

——誰かが、呼んでいる……?

「……。……は……にいる……。……は何処……。……」

……よく、聞こえない。何て言ってるんだろう?

ピカチュウはどこからともなく聞こえてくるこの声を、もっとよく聞こうとした。

その時——

「——起きろおおおおおおおお!!」

朝だぞおおおおおおおお——!!——!!——!!

バカでかい声に耐えきれずにピカチュウは目を覚ます。

気がつけば無意識に両手で耳を押さえていた。

「……う、ああ……」

「いつまで寝てんだ!! さっさと起きろ——!!」

……わかったから、騒ぐのだけはやめて。神経が壊れるから。

そう思いながらピカチュウはベッドから起き上がる。

気がつけばナエトルも目を覚まし、やはり同様に耳をふさいでいた。

「……み、耳があゝ……」

——最悪の目覚めだった。ひよつとして、これから毎朝こんなつるさい目覚ましで起こされるのだろうか？

「寝ばけてんじゃねー！！ とつと起きて支度をしろ！！
でないと親方様が……親方様のあれが……」

目覚ましのポケモンは何かを思い出しているのか、僅かに体を身震いさせる。

「お前達が遅れたら俺までとばっちりで親方様のあれをくらうんだからな！？

親方様のあれを食らいたくなきゃ、とつと集合しろ！！」
そついうと目覚まし係のポケモンは出て行った。

一方、ピカチュウとナエトルは眠気と騒音のダメージとで、まだ頭がボーっとしていた。

「ううっ……耳が痛い」

ピカチュウはまだ耳を押さえていた。

「なんか支度つて言ってたよね？ 支度つて一体何の……」
そこまで言つてはつとする2人。

ここはギルドの中。2人は昨日こギルドへ弟子入りしたことをようやく思い出した。

「そうだ！！ ボク達、ギルドに入ったんだつた！！」

「マズイ！！ 寝過ぐこした！！ 早く行かなきゃ！！」

2人は軽く身支度を済ませると慌てて部屋から出て行った。

朝礼はいつもプクリンの部屋の前の広場で行われる。

既にピカチュウ達以外の弟子達メンバーは全員集合していた。

「遅いぞ！！ 新入り！！」

一番最初に文句を言ったのはさっきの目覚まし係——

ドゴームと呼ばれるポケモンである。

「ウルサイッ！！ 朝からお前の騒音おおごえは聞きたくないヨー！！」

そう言ってペラップが羽をばたつかせる。

どうやらドゴームの声をうるさいと感じているのはピカチュウ達だけではないらしい。

ペラップの叱責にドゴームはうつと呻き、それ以降喋らなくなる。ペラップは辺りを見回すと、

「全員揃ったな。では、これより朝礼を行う」

——朝礼で話すことは大体決まっている。

弟子達の成果の評価や他のギルドの活動状況、さらには世界情勢などである。

また、朝礼は弟子達の顔合わせの場でもある。事実、ピカチュウとナエトルはこの場で簡単な挨拶と自己紹介をすることとなり、ナエトルがガチガチに固まったというおもしろエピソードができたりしている。

「では最後に親方様、今日の一言を——」

そう言ってペラップは一步後ろへと下がる。

因みにプクリンはさっきから一言も喋っていない。

ピカチュウはそのことに少し疑問を抱く。

——……一体？

「——……ぐう……」

「えっ！？」

一言——“ぐう”——という言葉が聞こえてくる。

その声にピカチュウは思わず声を上げる。

（ペラップに睨みつけられ慌てて視線を下げたが）

……も、もしかして寝てますか？ この人。

………しかも、目を開けたまま。

ピカチュウがそんなことを考えていたその時、ふと他の弟子達のヒソヒソ話が聞こえてきた。

ピカチュウ自身は全く聞かぬのだが、元々ピカチュウという種は聴覚がいいポケモンで、聞かぬ気なくても、勝手に聞こえてきた。

「……プリン親方って相変わらずスゴイよな」

「……ああやって朝は起きてるように見えて……」

「……実は目を開けたまま寝てるんだもんなあ」

……め、目を開けたまま寝るって、なんてどうでもいい能力。昨日は椅子ごと回転してみせたり、プクリンって一体……

「ははっ！　ありがたいお言葉、ありがとうございます！」「ペラップがプクリンに向かって一礼する。

……お言葉……って、ただ「ぐう」しか言っていないし。なんか無理矢理だなあ。

「みんな！ 親方様の言葉を肝に銘じるんだよ♪」

それでは最後に、朝の誓いの言葉！ 始めっ ♪

ペラップの合図に、他の弟子達が一斉に斉唱を始めた。

「ひとつ！ 仕事は絶対サボらない！！」

ふたーっ！ 脱走したらお仕置きだー！！

みんな笑顔で明るいギルド！！」

その掛け声を最後に、他の弟子達はそれぞれの持ち場へと散っていった。

後に残されたのはピカチュウとナエトルの2人だけとなった。

「ボク達、一体どうすればいいのかなあ？」

すぐるような目でピカチュウを見るナエトル。

だがピカチュウは、

「ワタシに聞かないでよ」

そっけなく答える。その時、

「おい、お前達。こっちに来てくれ」

声のした方に目をやればハシゴの所にペラップの姿があり、上へと飛んでいく。

ピカチュウとナエトルはペラップの後に続いて1階へと上がっていった。

2人は1階へやってくると、大きなボードの前に立つペラップの姿を見つけそちらへと向かった。

「お前達は初心者だからね。まずはこの仕事をやってもらおう」
「何これ？」

そう言ってピカチュウはボードを見つめる。
そのボードにはメモ用紙や貼り紙などがたくさん貼り付けられてた。

「これは掲示板だ。各地のポケモン達からの依頼が貼られている。最近悪いポケモンが増えているのは知っているか？」
ペラップのこの言葉にナエトルは頷いた。

「うん。なんでも時間が狂い始めた影響で悪いポケモンが増えてるって聞いたよ」

……時が——狂い始めてる？
時って時間のこと？

時が狂った影響で悪いポケモンが増えている——一体どういうこと？

ピカチュウは2人の会話が理解ができずただ1人首を傾げる。

「そうなのだ。時間の影響^{とき}で悪いポケモンが増えてるせいなのか、この掲示板の依頼もどんどん増えてきているのだ。

そういうわけでお前達には掲示板^{じしん}の依頼をバシバシ捌いていつてもらいたいのだ」

とりあえず最初は……これがいいかな」

ペラップは掲示板の中の1枚の紙を剥がしてピカチュウに手渡す。だが、それは見たこともない文字で書かれていたため何と書いてあるのか、ピカチュウには全くわからなかった。

ナエトルはそれをのぞきこむ、

「えー、なにに——

『初めまして。私バネブーと申します。

ある日、私の大切な真珠が悪者に盗まれてしまったのです！

真珠は私にとって命。頭の上に真珠がないと私落ち着かなくて何もできません！！

そんなとき！ 私の真珠が見つかったとの情報が——

どうやら岩場に捨てられていたらしいのですが、その岩場はとても危険なところらしく、私そんな所恐くて行けません！！

ですのでお願い！！ 誰か岩場に行って真珠を取ってきてくだ

さい！！

お願いします—— つて、これ、落とし物を拾ってくるだけじゃない！？」

「新入りは下積みが大切なんだよ。ガマンしな」

「うう……」

ナエトルはうなだれる。心なしか頭の葉っぱも萎れている。

「さあ！ わかったらとつと行った行った！」

ペラップに促されピカチュウとナエトルは渋々ギルドを後にした。

——ピカチュウとナエトルが遺跡の欠片を取り戻した海岸の洞窟も湿度が高めであつたが今いる湿つた岩場はそれ以上の湿度の高さであつた。

その中を、ピカチュウとナエトルはひたすら奥へと進んでいた。

「……なんか、蒸し暑い所だね」

「そうだね。早く真珠見つけて帰りたい……」

愚痴をこぼしつつ奥へと進んでいく2人。

それから暫くして、それ程苦勞することなく最下層へと辿り着いた。

最下層は広い岩場になつていて所々から地下から水が湧き出していた。

「ここが一番下の階かな？」

ナエトルは辺りを見回す。そして先の方で何かが光っているのが目に入る。

「ピカチュウ、あれ!!」

ナエトルが指差した方向を見る。ピカチュウ。

「もしかして、あれがそうじゃないかな？」

「行ってみよう」

2人が走り出したその時、

—— おーーっと、ちょーーっと待ったーーー!!——

ピカチュウ達の前に4人のポケモンが立ちはだかる。

「俺はアノプス!!」

「私はカラナクシ!!」

「僕はリーシャン!!」

「リリ〜〜ラ〜〜!!」

『我ら、岩場戦隊!!シメッターズ!!』

4人のポケモンはそう言い放って決めポーズを決める。

リーダーと思しきアノプスがピカチュウに向かって爪をむける。

「どっから来たか知らないがここは俺達^{うちの俺達}のナワバリだ!!」

従って、真珠も全て俺達のもの!! 欲しかったら俺達を倒——」

ピバシイイイイイ——!!!!

「やっぱりそうだよ!! バネブーの真珠だよこれ!!」

ナエトルは桃色^{ピンク}に輝く真珠をじっと見つめる。

「——うん、間違いないね。持って帰ろう」

そう言っ^てピカチュウは真珠をバッグの中にしまい込む。

『……………』

「さてと、それじゃあ帰ろうか?」

「うん!!」

電撃でコゲたポケモン達を無視してピカチュウとナエトルはその場から立ち去っていった。

「……………こんな終わり方……………か?……………ガクッ……………」

—— 「あ、ありがとうございます!!」

バネブーはしつこく何度もお辞儀を繰り返す。その度に頭の真珠がコロコロと揺れていた。

あの後湿った岩場から戻ったピカチュウとナエトルは依頼したバネブーに会い、真珠をバネブーに返していた。

「本当にもう、なんてお礼を言えればいいか」

「そんなあ、いいんだよ。」

これがボク達^{たんけんたい}の仕事なんだから」

バネブーに感謝されて上機嫌なのか少し胸を張っているナエトル。ピカチュウは少し呆れた様子でそれを見ていたがやがてバネブーの方を向き、

「もう盗まれないように気をつけて、ね？」

その言葉に、バネブーはこっくりと頷いた。

「これはほんの気持ちです」

そう言っただけバネブーは布袋と3本のピンを取り出し2人の前に置く。

それは栄養ドリンクと2、000ポケであった。

因みに”ポケ”というのはこの世界の通貨の単位である。

そのあまりの額の多さに、ナエトルは面食らった。

「ええっ！？ に、にに2、000ポケも！？」

こんなにもらっちゃってもいいの！？」

「ええ。もちろんですよ。真珠に比べたら安いもんです」

バネブーはそう言っただけでこりと頷いた。

「それでは、私はこれで。本当にありがとうございました」

バネブーはもう一度深々と頭を下げて去っていった。

「ピカチュウ見た！？ ボク達いきなり大金持ちだよ！？」

はしゃぐナエトルをよそにペラップが^{ポケ}お金の入った袋を見て何やら勘定をする。

「ふむ。オマエ達よくやったな。」

「……だが、お金は預かっておこう」

「ええっ！？」

ペラップの言葉に、ナエトルは反射的に振り向いた。

「殆どは親方様の取り分。」

オマエ達は——うん、これ位かな」

そう言っただけペラップは袋から何枚かのお金^{ポケ}を取り出し、ピカチュウに手渡した。

その額は――

「ええ〜っ!? たったの200ポケだけえ!?

ヒドイよ!!」とってきた働いたのはボク達なのにい!!」

「これがギルドの原則だよ。しきたりガマンしな」

……そりやそうだろう。

ほんにんいくら個人が営業でたくさんほんにんの契約を取ってきてもその利益が全
て個人に還元されるわけではないのだ。

えてして企業とはそういうものである。

――ピカチュウはそう考えていた。

……にしても、キャラ売り上げの1割しかもらえないなんて。

……人間の世界なら確実に裁判沙汰だよ。

「まあ、初めての仕事にしては上出来だよ、明日もこの調子でがんばっておくれ」

そう言うのとペラップはお金の入った袋を持って下へと降りていつてしまった。

「……ううっ……」

ペラップが去った後、ナエトルはがっくりと頂垂れた。どうやらよほどショックだったようだ。

「ナエトル、キミはいつから賞金稼ぎになったの?

お金の為に探検隊になったんじゃないでしょ?」

「それは……そうだけど……」

「ならいつまでもくよくよしない。

元気出して。ね?」

そう言うってピカチュウはナエトルの甲羅をペシペシ叩く。

「……………うん」

そう言うってナエトルは顔を上げる。

その顔に、ピカチュウはにっこりと微笑みかけた。

「それにしてもお腹空いたなあ。

ダンジョンにいと余計そう感じるけど。ご飯まだかなあ」

「皆さーん！ 食事の用意ができました。

晩ご飯の時間ですよー」

ちょうどそのタイミングよく鈴の音が聞こえてきた。

食事当番のポケモン、チリーンの鈴の音だった。

「やった！ ドンピシャのタイミング」

行こう、ナエトル！」

「うん！」

2人は食堂に向かって歩いていった。

『いっただつきまゝす！！』

食事の時間はいつも戦場だった。なにせ山積み盛られた果物が一瞬目を離れたスキに全て無くなってしまふ。そんな状態なのだから。

たくさん量を食べたければ1分1秒も無駄にはできなかった。

その様子はある意味野生ポケモンとの戦闘バトルより過酷である。

『ごちそうさまー！！』

食事が終わると弟子達はそれぞれの部屋へと戻っていく。

ピカチュウとナエトルもそうであった。

「ねえ、ピカチュウ。今日はいろいろあつて忙しかったね」

ナエトルは窓の外を見つめながらピカチュウに声をかける。

「うん、そうだね」

ピカチュウはバッグの整理をしながら答える。

今日入った湿ダンジョンった岩場で使えそうな道具を見つけたのでいろいろと拾っていたのだ。

「でも、初めての仕事が上手く行って良かったよ。

まあ、プクリンの所にお金を持って行かれちゃったのは悔しかった

「ただ」

「……まだ根にもつとるんかい。

ピカチュウはタメ息をつく。

「でも、これも修行だし仕方ないよね。

それにボク、バネブーに感謝された時すごく嬉しかった」

「うん。それはワタシも同じだよ」

そう言って顔を上げるピカチュウ。2人は顔を合わせ微笑みあう。

「……なんだか眠くなってきた。ボク先に寝るね。

「おやすみ。ピカチュウ——」

ナエトルはベッドに横になると目を閉じる。

それを見てピカチュウは小さく微笑むと、窓から差し込む月の光に目をやる。

「……おやすみ——」

誰にいつでもなく、ピカチュウは静かにそう呟いた——

（まだ逃走中）

……ふう、ここまで来れば……

シメツターズ『おい、作者あー!!』

うひゃあつ!? って、なんだキミ達か。なんか用？

アノプス「なんか用？ ぢゃない!!」

なんだ!あのあつけなさ!？」

カラナクシ「そうです! いくらなんでもあの扱いはひどすぎです
!!!」

リリーラ「ひ〜〜ど〜〜い〜〜」

んゝ、そんなこと言われても。

あそこって特に大したイベントもないし、でもただフツ―に突破して
終わりってゆうのもあつけなすぎて面白くないなあゝ。
って発想で生まれた存在だからねえ。キミ達って。

リーシャン「ならせめてちゃんと戦闘^{バトル}ぐらいさせろよ!!」

やだなあ。ちゃんとしたじゃないか♪

一瞬で片付けられただけで。

シメツターズ『それが不満なんぢやあああああ!!!!』

ええ、だって適当なアイデア思いつかなかったんだもん。

アノプス「うう、ちくしょお。こうなったら!!」

おい、リリーラ!!」

リリーラ「は~~~~い」

うおっ!?!? なにする!?!?

こらっ! 急にからみついてくんない!!

アノプス「ふっふっふ。ちゃんと活躍させなかった恨みだ。

おい、お前等!! やっちまえ!!」

カラナクシ・リーシャン『おお~~~~っ!!』

ちょ、まっ!!

だ、誰か! ヘルプミ~~~~!!

Expedition - 5 未来からのSOS(前書き)

ピカチュウ「今回はまた随分と早かったわね。」

まゝね♪特にこれといった弊害もなく、もうさくさくと勧められたよ♪

ピカチュウ「いつもこれ位早ければいいのにねえ。」

ぶぐう!!

……………い、言うてはなんことをお……………(汗)

——「起きろおおおおー！！！！」

朝だぞおおおおー！！！！！！」

ドゴムのこえ
やかましい目覚ましで目を覚ますピカチュウとナエトル。

「うう、相変わらずすごい騒音。こえまだ慣れない」

それでもピカチュウは何とか起き上がる。

ナエトルもまた同様に起き上がった。だが、騒音めざましのダメージがまだ残っているのか、少しフラフラしていた。

「さて、と。今日もがんばっていきますか！！」

そう言ってピカチュウは波導のリボンを取り付けたペンダントを首から下げた。

——朝礼を終えると今日も他の弟子達は自分の仕事に取りかかるため持ち場へとついていく。

またもピカチュウとナエトルだけがその場に取り残された。

「今日も依頼の仕事かな……？」

ナエトルはピカチュウの方を向く。

「そうだね。とりあえず掲示板に行ってみようか」

そついうと2人は掲示板を見に1階へと向かった。

「どれにしようか？」

「……そうだねえ。うーん」

ピカチュウとナエトルが掲示板をあちこち物色していると、

「おーい、オマエ達！！」

真横から声が聞こえてきた。

振り向いてみるとピカチュウ達がいる丁度反対側にその声の主——つまりはペラップが立っていた。

「オマエ達、今日はこっちの仕事をやってくれ」

そう言つてペラップは今自分が立っている場所にある大きなボードを羽差した。

「向ここの掲示板と、何が違うわけ？」

ピカチュウはボードをのぞき込む。

——一見隣の掲示板と大差はないように見受けられる。

違っていることと言えば、そのボードには何故かポケモンの肖像が貼り付けられているということ位であつた。

「これは……手配書だ」

ピカチュウの疑問に答えるように、珍しく低い重い声でペラップは言つた。

「ええっ！？……て、手配書！？」

手配書——という言葉にビビつたのか、ナエトルが素つ頓狂な声を上げる。

かまわず更にペラップは言葉を続ける。

「そうだ。ここにあるのは全員お尋ね者。

皆悪いことをして指名手配されている奴らだ。

それ故、彼らには多額の賞金がかけられている。

だから捕まえればお金がもらえるんだけど……でもねえ、最近凶悪なポケモンが多いからねえ。

皆手を焼いているんだよ」

ペラップはそういつて額に羽根を当て首を動かし、やれやれといった仕草をする。

その様子にナエトルは慌て出す。

「それをボク達が捕まえろつていうの！？

ムリッ！！　そんなの絶対ムリだよ！！」

ナエトルは思い切り顔をぶんぶか横にふる。

「ハハハハハッ」冗談だよ、冗談」

悪いポケモンっていつでも色々いるからね。

いきなり極悪ポケモンを捕まえてこいなんて、新米に言えるわけないじゃないか」

そう言っただけに笑うペラップ。それを見たピカチュウは、

……性質タチの悪い冗談である。

心の中でそう呟く。

「まあ、この中から弱そうな奴を選んで適当に懲らしめてくれ」

「……でも、弱いと言っても、悪いポケモンに変わりはないよね？」

……悪い奴そんなと戦うなんて……ボク怖いよ」

……確かに。これまでの戦いことを考えると野生ポケモン達と戦闘バトルをしていたのは専らピカチュウの方でナエトルは何もしていなかったのに等しい。

これでいきなり、しかもお尋ね者わるいポケモンと戦わなければならないのは少々厳しい。

相手が逃亡者となればまず間違いなく抵抗してくる。

戦闘は避けられないものと思ってもいい。

「これも修行のうちだよ。何とかしな」

ペラップは羽をばたつかせる。

その言葉にナエトルは頭の葉っぱを萎れさせ俯いてしまう。

「——と言っても、戦うにはそれなりの準備が必要か。

おお、そうだ！　おい！　ビッパ！！　ビッパー！？」

——ペラップの掛け声に答え、下から1人のポケモンが上ってきた。

多分本人は急いでいるつもりなのだろうが全然そんな風には見えない。

オマケに走ってくる途中でつまづいたりしている。

「お呼びでしょうか……？」

軽く息を切らしながらビッパと呼ばれたポケモンはペラップの横に並ぶ。

「おお、ビッパ。こいつらのことは知ってるな？ 最近入った新入りだ。」

この2人を広場に案内してやってくれ」

「はい……。了解でゲスう！」

そう言って敬礼するビッパ。その様子を見て、

……う……ん、律儀な性格してるなあ。

そう思ったピカチュウだった。

「こいつはビッパ。弟子の1人だ。」

ビッパの言うことを聞いて町の中を案内してもらうように。じゃあな」

ペラップはそういうと2階へと降りていった。

後に残された3人は――

「……ううっ、嬉しいでゲス……」

その声に反応してピカチュウとナエトルはビッパの方を向く。

見ると、ビッパは僅かに震えて涙目になっていた。

その様子に慌て出すナエトル。

「ど、どうしたの？」

「後輩ができたんで感動してるんでゲス。」

キミ達がギルド（ギルド）に来る前は自分が一番の下っ端だったんでゲス……」

……どうやらこのビッパ、相当の感動やさんらしい。

「じゃあ案内するでゲス。ついてくるでゲス」

ビッパに連れられピカチュウとナエトルはギルドの中を見て回る
こととなった。

連れてこられたのは地下2階。食堂や弟子部屋、グレッグルの店
などを順番に見て回った。

「じゃあ、次は外を案内するでゲスよ」

そう言ってビッパ達は外に出た。

——やってきたのはギルドの西側。たくさんの店が建ち並ぶ商店街
のような場所だった。

「此処がトレジャータウンでゲスよ」

「あ、トレジャータウンのことならボクもわかるよ」

そう言っただけでナエトルはトレジャータウンに並ぶ店を一通り説明し
始めた。

——銀行に連結点（連結、というものがもうピカチュウにはよく
わからなかったが。）

カクレオン商店、専門店に道具預かり所。ナエトルは店の特徴を
スラスラと説明していく。

あまりの詳しさに思わずピカチュウとビッパは感心する。

「——とまあ、こんな感じかな」

「なかなか詳しいでゲスね。それなら安心でゲス。」

「じゃあ、準備ができたならギルドに戻ってくるでゲス。」

戻ったらあつしもお尋ね者を選ぶのを手伝うでゲスよ」

「ありがとう。ビッパって優しいんだね」

ピカチュウはビッパの方を見てにっこりと微笑む。

「そ、そんな。……て、照れるでゲスよ」

ビッパは顔を赤らめる。

そのやりとりを見て、ナエトルは心の中が少しモヤつとした。
「じゃあ、あつしはお尋ね者ポスターの前で待ってるでゲスよ」
そう言っ**て**ビツパはギルドへと戻っていった。

それを見送るとピカチュウはナエトルの方を向く。

「じゃあ、行こっか」

「……………うん」

沈んだ調子で答えるナエトル。

その様子を不思議に思ったピカチュウは首を傾げる。

「どしたの？　なんか元気ないみたいだけど？」

「ううん。何でもないよ」

そう言っ**て**歩き出すナエトル。

疑問に思いながらもピカチュウもその後を追っ**て**いった。

2人は買い物をするためカクレオンの店へとやってきた。

2人は探検に必要な食料と、遠くの敵を攻撃するための銀の針^{とがとうへ}を購入した。

「……………なんか、これどこかで使ったことあるような……………」

ピカチュウは銀の針をじつと見つめて呟いた。

「昔のこと何か思い出したの？」

「ううん。何も」

ナエトルの問いに短く答えるとピカチュウは銀の針をバッグの中へとしまい込む。

支払いを済ませて2人がギルドへ戻ろうとしたその時、

「カクレオンさ……………ん!!」

ギルドへと続く道の方から2人のポケモンが駆けてきた。

「おおー。マリルちゃんにルリリちゃん！　いらっしやーい」

「すみません。リンゴください」

そう言いながらルリリは尻尾に乗り、小さな体で必死にジャンプする。

「はいよ。まいど〜！」

カクレオンはリンゴの入った紙袋をマリルに手渡す。

「ありがとう！ カクレオンさん」

マリルはリンゴの代金を支払うとルリリと一緒に元来た道へと引き返していった。

「今の2人って……？」

ピカチュウがカクレオンに尋ねる。

「マリルちゃんとルリリちゃんですか？」

いやね、あの2人は兄弟なんですけどね、最近お母さんの具合が悪いらしくって、代わりにああやって買い物に来るんですよ〜」

「ふうん。小さいのに偉いんだね」

「カクレオンさーん！！」

ピカチュウとカクレオンが世間話をしていると、マリルとルリリが何やら慌てた様子で戻ってきた。

「おや、どうした？ 慌てて戻ってきて」

「リンゴが1つ多いです！！」

「ぼく達、こんなに多く買ってないです！！」

ルリリがリンゴを頭の上に乗せてぴょんこぴょんこ跳ねる。

「……うわあ、カ、カワイイ。子供は正直だなあ。」

「ああ、それはワタシからのオマケだよ。」

2人で仲良く分けて食べるんだよ？」

どうやらカクレオンのサービスだったらしい。

このカクレオンもなかなか粋なことをする。

ピカチュウはそう思った。

「本当！？」

「わ〜い！　ありがとう！　カクレオンさん！！」

「いやいや。気をつけて帰るんだよ〜」

マリルとルリリがほくほく顔で帰ろうとしたその時、

「イテッ！」

つまずいたのか、ルリリが派手に転んでしまう。

それによつて、頭に乗せていたリンゴがピカチュウの手前までこころと転がっていく。

ピカチュウはリンゴ^{それ}を手で拾い上げる。

起き上がったルリリは辺りをキョロキョロと見回し、やがてピカチュウの手にあるリンゴに気がついた。

「す、すみません」

ルリリがピカチュウにペコリと一礼する。

ピカチュウはくすりと笑うと、リンゴをルリリの尻尾の上に乗せた。

その時！

——イイイイイン——

甲高い音と共に、ピカチュウは視界が揺らぐ感覚に襲われる。

——な、何！？　急に。目眩が……！？——

——キイイイイン！！——

もう一度甲高い音が聞こえたその次の瞬間——

ピカチュウの視界が急に暗くなり、目の前に閃光が走った！！

——た、助けて！！——

それは誰かの声——それも、助けを求める声だった。

「——ユウ？ ピカチュウ！？ ピカチュウってば！！」

ナエトルの声で、ピカチュウは我に返った。

「……えっ……？」

ピカチュウは辺りを見回す。

そして最後に、ルリリの方を向く。

ルリリはその視線に首を傾げる。

「？ どうかしたんですか？」

「おーい、ルリリーー！！ 早く来いよーー！！」

遠くからマリルの声が聞こえてくる。

その声に応えるように、ルリリは声のした方を向く。

「うん。今行くよ！ お兄ちゃん」

ルリリはもう一度お辞儀をするとその場を立ち去っていった。

「——かわいいねえ。あの2人」

ナエトルはピカチュウの方を向く。

対するピカチュウは、何も喋らず呆然とその場に立ち尽くしていた。

「ピカチュウ、どうしたの？」

その声でピカチュウはゆっくりとナエトルの方を向く。

「……ナエトル、今何か聞こえなかった？」

「何か——って？」

何かというものが分からずナエトルは首を傾げる。

「助けを……呼ぶ……声とか……」

「いや？ ボク何も聞こえなかったよ？」

「……聞いてない！？ あの声を？」

「ねえ、カクレオン。何か聞こえた？」

ナエトルはカクレオン達の方を向く。

その問いに、2人のカクレオンは互いの顔を見合わせると、やがて首を傾げナエトルの方を向く。

「いえ？ 何も……」

「ワタシも同じく」

「カクレオン達も聞いてないって。気のせいじゃない？」

……違う。気のせいじゃない。

確かに聞こえた。助けを呼ぶ声。

しかもあれは――

ピカチュウはさっき聞こえた声を思い出す。

……あれは、ルリリの声だ。

でも、何故あんな声が聞こえたのか。

ピカチュウはルリリの声が聞こえた原因がわからず頭を悩ませる。その様子を見ていたナエトルは、

「何ボーっとしてるの？ 早くギルドに戻ろうよ。ピカチュウ。」

急かすナエトルの声に気づき、ピカチュウは再び我に返る。

「……あ、うん」

ピカチュウは気のない返事と共に相づちをうつ。

――気のせい、ならいいんだけど……

いいようのない不安感を残したまま、ピカチュウはカクレオンの店を後にした。

――ギルドへと戻る途中で、ピカチュウとナエトルはさっきのマリルとルリリを再び遭遇した。

しかし今度は先ほどと違って2人の他にもう1人、見慣れぬポケモンがそこに立っていた。

身長はマリルの約2倍半位、茶色と黄色の2色のプリンを逆さにしたような体色のポケモンだった。

なにやらマリル達を話しをしており、会話をする2人の顔は凄くうれしそうだった。

ナエトルもそれに気づいたのか、自然と歩みがマリル達の方へと向かっていた。

「どうしたの？」

ナエトルの声に気づき、マリルとルリリはこちら側の方を向く。

「あ、あなた達はさっきの。」

実はぼく達、前に落とし物をしちゃって。

ずっと探してたんですけど見つからなくて」

「そしたらね、このスリープさんが、その落とし物なら見たことがあるって教えてくれたの！！」

マリルの言葉を続けるようにルリリが言う。

しかも相当嬉しいらしく、ぴょんぴょん跳ね回っている。

——スリープ——っていつのか。このポケモン。

ピカチュウはスリープと呼ばれたポケモンに目をやる。

……見た感じ普通のポケモンだけど……？

「そっかあ、それは良かったね」

「ハイ！ それで、今からその場所へ向かう所なんです」

「ありがとう！ スリープさん」

ルリリのお礼にスリープは首を横に振る。

「いえいえ。キミ達のような幼い子が困ってるのを見たら助けるのは当然です。」

さあ、早く行きましょう」

『うん！！』

大きく頷いてマリルとルリリはスリープと一緒に歩き出す。

——と、その時、スリープがピカチュウにぶつかってくる。

「おっと、失礼」

「……いえ」

スリープは会釈をしてマリル達と共に去っていった。

——イイイイイイン！！——

またあの甲高い音が聞こえてきた。

その音と共に、ピカチュウは再び目眩に襲われる。

「——うつ……これは……」

「スリープって偉いよね。感心しちゃうよ。」

ただでさえ最近悪いポケモンが増えてるっていうのに。
なかなかできることじゃな——」

——キイイイイイン！！——

ピカチュウは思わずこめかみを押さえる。

そして、ピカチュウの目の前が真っ暗になり、再び閃光が走った！

——それはトレジャー^{トレ}タウンとは違う場所だった。

どこかの山中と思われるその場所に、ルリリとスリープの姿があった。

「言うことを聞かないと、痛い目に合わせるぞっ！！」

「た、助けてっ！！」

涙目のルリリが完全に怯えた状態で震えていた。

——映像^{映像}は、そこで途切れた——

「落とし物早く見つかるといいよね」

ナエトルはそう言ってピカチュウの方を見る。

だが、ピカチュウは答えない。

「……ピカチュウ？ どうしたの？ 真っ青な顔して」

ナエトルの問いかけに、ピカチュウはゆっくりと振り向く。

「……ナエトル……ルリリが、危ない！！ 止めなきゃ！！」

「え！？ どういう事！？」

事態がわからずナエトルは慌て出す。

「視えたの。スリープにぶつかった時。

スリープに襲われてるルリリが！！」

「え？ ええええええ！！？」

それが本当なら大変だよ！！ …… 大変だけど、でも……」

ナエトルは下を向き暫く何かを考える。

「ピカチュウのこと、信じてないわけじゃないけど。

……でも、やっぱりボク信じられないよ」

「ナエトル……」

「だって、スリープはすごく親切そうに見えたし、マリル達とも仲良さそうだったよ？」

——確かに。スリープは悪いポケモンには見えなかった。

だが、それが真実ほんとうの顔とは限らない。

映像イメージ信じるならば、あれはスリープの裏の顔。

相手を油断させる為の罠フエイク——

ピカチュウには映像イメージのスリープの人格こそがその本性に見えてなかった。

理由などない。女のカン、というやつである。

「きっとピカチュウは疲れてたんだよ。

それで悪い夢でも見たんじゃない？」

……うわ。全く信じる気ないし、ナエトル^{コイツ}。

——まあ、実際に映像^{あれ}を視てない相手に信じる——というのがムリなのかも知れないけど。

「……そう……かもね」

ピカチュウは視えた映像^{もの}をただの夢だと無理矢理納得することにした。

「とにかく今はギルドの仕事をしなくちゃ。

早く戻ろうよ。きっとビッパも待ってるだろうし」

「そうだね」

会話を切り上げ、ピカチュウとナエトルはギルドに向かって歩き出していた。

——ギルドへと戻ったピカチュウとナエトルはビッパの所に戻り、一緒にお尋ね者を選ぶこととなった。

「ええーっと、どれにしよう？」

無数に貼られたポスターを一つ一つ眺めながらナエトルはどのお尋ね者を選ぶか迷っていた。

そこへ、先輩風を吹かせたビッパが咳払いを一つしながら、

「ここはひとつ、あつしが先輩として選んであげるでゲス」

「あんまりこわそうなの選ばないでね？」

わかってるでゲスよ——

ビッパがそう答えようとしたその時、どこからともなくサイレンが響き渡った。

「な、何！？ これ？」

音に驚いたナエトルが辺りをキョロキョロと見渡す。

サイレンが鳴り止むと同時に、お尋ね者ポスターを貼ったボードが突然裏返った。

その光景を目の当たりにし、またもやビビるナエトル。

「うわっ！？ 壁が裏返った！？」

「これは情報の入れ替えでゲス。

掲示板やお尋ね者ポスターは一定期間になると新しい情報に書き換えられるんでゲス。

ダグトリオ、というポケモンが担当してるんでゲスがね」

「へえ」

ビッパの丁寧な解説に納得したのか、ナエトルが小さく呟いて頷く。

再びサイレンが鳴り響き、裏返ったボードがまた元に戻った。

「情報が新しくなったでゲスね。

お尋ね者も新しく選び直すでゲスよ」

「……………」

ナエトルは応えず、何故か一点をじっと見つめ、わなわなと震えだす。

「ナエトル？」

「ピカチュウ……見てよ。

一番左端のやつ……………」

ナエトルに促され、ピカチュウは左端に貼られたポスターに目をやる。

そして、その内の1枚を見て絶句する。

「早く行かなきゃ！！ ルリリが危ない！！」

ピカチュウとナエトルは慌てて外に向かって走り出す。

その様子に、事情を知らないビッパは大慌て。

「え！？ 急にどうしたんでゲスカ！？

何処に行くんでゲスカ……！？」

接着が甘かったのか、一枚のポスターが剥がれ落ちる。
そのポスターに描かれていたのは、紛れもなく、あのスリープの
顔であった。

そろそろ企画的なものを何かやってみたいと思う今日この頃。

ピカチュウ「いや、無理だつて。

まだ話始まったばかりだし、早すぎるでしょう（汗）

」

えゝ、だゝつて、他の作家さんの小説でやってるコラボとか人気投票とか質問コーナーとか見てると楽しそうなんかもゝん。

ピカチュウ「ノリでやろうとすな（怒）」

ふつ、甘いな。私の人生半分は勢いとノリだ！！

というわけでご意見募集します！！

作者に、これやってみたら？とかいうのありましたらご一報ください。

メッセージ、感想どちらでも結構です。それではお待ちしております
すゝ

Expedition - 6 もう逃げない!! (前書き)

作者は序盤でこのダンジョンが最も苦手です。

スリープに苦戦する——というのも理由の一つですが、

……最も大きな原因、それは……

このダンジョン、遠距離攻撃多すぎ(涙)

イトマルは毒針打ってくるわ、ムツクル、ドードーは電光石火してくるわで、

……もお、最悪(泣)

こっちが反撃する前に力尽きてしまうわ!!

何回リプレイしなおしても必ず最低1回はここで倒れます(号泣)

……以上、ダメプレイ日記でした。はい。

——ギルドを出て飛ぶように階段を駆け下りるピカチュウとナエトル。

その先で、

「あつ！ あそこにいるのマリルじゃないかな!？」

見ると、交差点にマリルがひどくオロオロした様子で立っていた。

「マリル!！」

ナエトルの声に気付き、マリルは縋るような眼差しでこちらに駆け寄ってくる。

「ルリリは何処!？ スリープはどうしたの!？」

「そ、それが！ あの後3人で落とし物を探していたら、スリープさんがルリリをどこかに連れてっちゃって、呼んでも戻ってこないし……」

それで段々、不安になってきちゃって……

誰かに知らせようと思って戻ってきたんです」

マリルはブルブルと震えて涙目になっている。

どうやらかなり混乱しているようだった。

その様子を見たピカチュウは、

「大丈夫。落ち着いて。2人はどこへ行ったの?」

少しでもマリルの気持ちを落ち着かせようと、優しく問いかける。

「こ、こっちです!」

そう言うが早いか、マリルは走り出していく。

ピカチュウとナエトルも急ぎそれに続いていった。

——マリルに案内され、ピカチュウとナエトルは山岳地帯へとやっ

てきていた。

その中の一端——トゲトゲ山は辺りの岩がトゲのように突き出し、刺さったら痛そうな外観をしていた。

「スリープとルリリは……こっちの方へ消えていったの？」

「……………はい」

ナエトルの問いに、マリルは沈んだ調子^{トーン}で答える。

「映像^{ゆめ}でルリリとスリープは山の頂上のような所にいた。

つまり、2人はこの先にいるってことだと思う」

ピカチュウのこの言葉に、ナエトルは緊張して頷く。

「急がなきゃ！ 行こうピカチュウ！！」

ピカチュウが黙って頷くと、2人はトゲトゲ山山中に入る為歩きだそうとした。

その時、

「あのっ！ ……ボ、ボクも、ボクも一緒に連れてって下さい！！」
マリルの要望にピカチュウは思わず足を止めマリルの方を向く。

その瞳には、まだ若干の不安の色が宿っていた。

だが、強い意志も感じられた。

——なにが何でも、ルリリを助けたいという——強い思いが。

「ボク、ルリリのことか心配なんです！！ どうか、お願いします
！……」

マリルの言葉に、暫く悩んでいたピカチュウだったが、やがて静かに口を開く。

「……………気持ちわかるよ。でも、勇気と無茶は別。

キミは今、ルリリがいなくなった不安と恐怖で冷静さを失ってる。
そんな状態でトゲトゲ^{トゲ}山に挑んでも、きっと太刀打ちできないと思う。

つまりは無茶ってこと」

ピカチュウの言葉に、マリルは俯いてしまう。

そして、何もできない自分に、ふがいなさを感じていた。

ピカチュウは更に言葉を続ける。

「不安かもしれないけど、ここはワタシ達に任せて、キミはここで待っていて。」

待つことも、時には勇気だよ?」

ピカチュウに諭され、マリルは小さく頷いた。

その姿を励ますように、ナエトルが言葉を発する。

「大丈夫だよマリル。ルリリは必ずボク達が助けるから!」

「そうそう。何せワタシ達、探検隊だから、ね?」

ピカチュウは軽くウインクをすると、マリルをその場に残し、ナエトルと一緒に山中へと足を踏み入れていった。

——トゲトゲ山のダンジョンは今までの挑んだダンジョンと桁違いの難易度であった。

野生ポケモンの力量が段違いなのである。

そしてもう一つ、ピカチュウを苦しめる存在がいた。それは——

「っだあああああ!! またイシツブテ——!!」

そう。岩山だけあってこのダンジョン、イシツブテの出現率が格段に高いのである。

地面タイプを併せ持つイシツブテにはピカチュウの電撃の効果は皆無。

入って早々足踏み状態となっていた。

「ナエトル!! イシツブテをなんとかしてよー!!」

草タイプであるナエトルの攻撃ならイシツブテには効果は抜群!

! …… 抜群であるはずなのだが……

「……む、ムリ！！ やっぱりムリ！！」

肝心要のナエトルがちつとも戦ってくれなかった。

……まあ、逃げなくなっただけマシなのかもしれないが。

「こんな所で足止め食らってる場合じゃないでしょう！？」

山頂^{うっえ}ではルリリがもっと怖い目に合っているかもしれないっていうのに！！」

ピカチュウのルリリの一言に、ナエトルははっとする。

——ルリリ。そうだ。ボクはマリルに約束したんだ。ルリリのことを助けるって。

約束は守らなきゃ。どんなことがあっても！！

次の瞬間、ナエトルの目つきが変わった。

それは今まで見たことがない、強い意志を宿した目の色だった。

「ピカチュウ！ 離れて！！ ハッパカッター！！」

頭に生えた葉をイシツブテに向かって飛ばすナエトル。

効果抜群のその強力な一撃に、たまらずイシツブテ達は崩れ落ちる。

その一撃を見て、さしものピカチュウも感嘆する。

「なんだ。ちゃんとできるんじゃない」

ピカチュウはナエトルの方をむいて微笑む。

その表情に、ナエトルは顔を赤くする。

「えへへ。」

急ごう！ 早くルリリを助けなきゃ！！」

そう言っただけでナエトルは走り出す。

ピカチュウも、その後に続いていった。

この後は比較的楽に進むことができた。互いの弱点を補いながら、進んでいったからである。

2人は確実に、目的の山頂^{はて}へと、歩みを進めていった。

——その頃、山頂にはルリリとスリープの姿があった。

何も知らないルリリは落とし物を探して、辺りを見回しながら歩き回っていた。

「——あれ？ 行き止まり……？」

ルリリは岩壁の前で立ち止まる。進みたくても、もう道がなかった。

「スリープさん。落とし物は？ 落とし物はどこにあるの？」

ルリリはスリープに向かって問う。

だが、スリープは何も答えず静かにルリリに近寄ってくる。

その姿には、先ほどまでの物腰の柔らかさはなく、代わりに瞳には異様な光が宿っていた。

「ゴメンな。落とし物は……ここにはないんだ」

「え！？」

スリープのただならない気配を感じたのか、ルリリは僅かに恐怖を覚える。

気がつけば、一緒にいたマリルの姿も、ここにはない。

「……お兄ちゃんは何処！？」

「くくくつ。お兄ちゃんも此処には来ないよ。」

実は、お前のことを騙していたんだ」

「ええっ！？」

「お前の後ろに穴があるのが見えるだろう？」

そう言われルリリは後ろを向く。

見れば確かに、岩壁の中に小さなひび割れが入っていて穴のようになっていた。

「その穴には、昔ある盗賊団が財宝を隠したと言われていてな。」

俺は財宝が目当てでここにやってきたんだ。

だが、俺の体じゃ大きすぎてその穴に入ることはできねえ。

だから、小さなお前をここまで連れてきたってわけだ。」

事態と状況がわからず、ルリリはただ震えることしかできない。

「心配するな。俺の言うことを聞いて財宝を取ってきてくれさえしてくれば、家に帰してやるからよ。」

そう言っススリープはルリリに手を伸ばす。

ルリリはびくりと震え、半ばパニック状態となってその場から逃げたそうとした。

「お、お兄ちゃーん!!」

「こ、こら待て!!」

逃げようとするルリリの前に、スリープは慌てて立ちはだかる。

「全く!! ちゃんと帰してやるって言ってるだろう!？」

それとも、痛い目に遭いたいのか!？」

「……た、助けてー!!」

ルリリは目を閉じ、大声で叫ぶ。

構わずスリープはルリリに向かって手を伸ばそうとした。その時、

「そこまでよ!!」

朗々と響き渡る声にスリープは思わず手を止め、声のした方に目をやる。

そこにあつたのは、ピカチュウとナエトルの姿だった。

「……お前達は?」

スリープには見覚えがあつた。2人の姿が。

……確か、そうだ。トレジャータウンにいた連中だ。

それにしても、何故ここに?

「小さい子に悪事を手伝わせるなんて三流以下ね。」

手配書見たときは凶悪そうに見えたけど、どうやら大したことな

さそうね？」

その言葉に、スリープはギョツとする。

「！！　そうか！

お前達、探検隊だな！？」

「その通り」

スリープの問いに、ピカチュウは大きく頷いた。

「ボク達はポケダンズ！！　探検隊だ！！　悪い奴は見逃さないぞ
！？」

「じ、じゃあお前達、俺を捕まえに……！！？」

ナエトルの言葉に動揺し、スリープは及び腰になる。

だが、焦りはすぐに余裕へと変わることになる。

スリープは、ナエトルが少し震えていることに気がついたのだ。

……　そうか。こいつらはもしかして……

あることを思い浮かべたスリープはニヤリと笑う。

「お前達が俺を捕まえるだと？　新米のお前達がか？」

こいつぁお笑いだなあ」

……　しまった。気づかれたか。

ピカチュウの顔に、僅かに動揺が走る。

だが、そのことを気づかれてはいけない。

気付かれればそこにつけいられ、ますます相手のペースにはまっ
ていくことになるからである。

ならばこっは、

「ワタシ達を甘く見てない？

油断してると痛い目見るのはそっちかもしれないわよ？」

ピカチュウはわざと挑発的な口調で言う。

これで相手が挑発に乗って怒り任せに攻撃してくればそこに油断
が生じる。

ピカチュウはそう考えたのである。

だが、スリープは何も答えず、ただ眉をひそめているだけ。

……あら？ 失敗した？

ピカチュウはスリープが黙っているのは、挑発に乗らず、冷静であるからだと思い込んだ。

だが、スリープが発した言葉は、ピカチュウにとって思いもよらない一言だった。

「ワタシ——って、もしかしてお前、女か？」

……ぶち。

「だから男って言うなといつとろうがああ!!」

ピカチュウは怒りのあまり、スリープに向かって電撃を放ってしまっ。

だが、スリープは電撃を、アツサリと避けてしまった。

「なっ!？」

自分の攻撃を簡単によけられたピカチュウは思わず驚愕してしまっ。

「くくく。残念だったな。」

お前が電気ショックを使えることはわかっていた」

——わかっていた？ ワタシの使える技を？

ピカチュウはその言葉が一瞬理解できず、眉をひそめる。

だが、やがてしばらくしてあることに気づいた。

……そうか。特性——予知夢か。

それは特性と呼ばれる特殊能力。

ポケモンには誰にでも最低1種類はついている特別な力のことである。

スリープの種族が持っている予知夢は、相手の技の正体を知り、

かわすことのできる能力。

味方として使ったら便利なことこのうえない能力であるが、敵として使われたら非常に厄介な能力であった。

事実、ピカチュウもそう考えていた。

……これは、また厄介な能力を持っている。

特性をフルに活用されたら、こっちは相手に攻撃を当てられない。
そうなれば、倒すことは難しくなる。

「まあ、例え当たったとしても、電気ショック程度ではこの俺を倒すことはできんがな！」

ワハハハハハハハハハハ！」

自分の優位に確信を持っているのだろう。スリープは高らかに笑い上げる。

……これは、少しマズイかもしれないわね。

ピカチュウの内心に若干の焦りが生じていた。
スリープ
相手は戦い慣れしている。

スリープから放たれている気は、今までのどのポケモンよりも強烈であった。

ナエトルが動けないでいるのも、相手の気に圧されているからである。

かくいうピカチュウも、僅かだがスリープの気に圧されていた。

だが、ピカチュウには1つだけ勝算があった。

その鍵を握っているのは他ならぬナエトルである。

野生ポケモンと戦っている時に見たナエトルの技だけが、頼みの綱なのだが――

……果たしてちゃんと動いてくれるだろうか？

見れば、ナエトルは恐怖のあまり、動きが完全に停止してしまっている。

その姿に、ピカチュウの心に、不安が生じてきた。

「果たしてお前達にできるのかな？」

スリープはそう言つて両手を前に出す。

既スリープの方はピカチュウ達のことを片付ける気でいた。

そこはさすがお尋ね者だけあつて、相手を倒すことに、なんの躊躇も感じられなかった。

「この俺を捕まえることが!!」

……ともあれここは、やるっきゃない!!

ピカチュウは覚悟を決め、小さく首を縦にふる。

「やらいでか!!」

ピカチュウはスリープに向かってダツシュをかける。

さつき覚えた技、”電光石火”である。

……スリープはエスパークタイプ。間合いとか一切関係なしに攻撃ができる。

なら、相手が技を出す前に、攻撃をぶち込む!!

だが、ピカチュウがスリープの懷に飛び込む前に、スリープの姿がかき消えた。

慌ててピカチュウはその場でブレーキをかけ立ち止まる。

「テレポート!? 何処へ!？」

ピカチュウは辺りの気配を探る。そして、左方から気配が現れるのを感じ取った。

「そこだつ!!」

ピカチュウは感じ取った方向に向かって電撃を放つ。

だが、ピカチュウが電撃を放った瞬間にまたもスリープは気配をかき消し、攻撃は完全なる空振りに終わってしまった。

ピカチュウが再び相手の気配を探ろうとしたその時、背後にいきなり気配が現れた。

「催眠術！！」

その声に反応してピカチュウは後ろを向くが、時既に遅し。
ピカチュウはスリープの催眠術をモロに受けてしまった。

「……しまっ……」

ピカチュウは強力な睡魔に襲われる。

それに準じて、ピカチュウの動きに若干の鈍りが生じてしまった。
「ハハハハハハ！！ かかったな！」

気合いパンチ！！」

どごおっ！！

「きゃあああ！？」

スリープの気合いパンチがまともに入り、ピカチュウは大きく吹
っ飛ばされる！！

かろうじて何とか立ち上がるピカチュウだが、気合いパンチのダ
メージと、催眠術の影響で体はふらふらしていた。

「……くっ。……体が、ゆうことをきかない……」

「お前の相棒は観てるだけか？」

スリープはナエトルの方に目をやる。

その視線に、ナエトルは一瞬ビクリとして再び体を震わせる。
その様子を見たスリープは、ナエトルに嘲りの表情を浮かべる。

「どうやらお前達に俺を捕まえることはムリなようだなあ！！」

スリープはピカチュウの方を見て笑った。

「……………」

スリープの言葉に、ピカチュウは何も答えない。

その様子を見てナエトルは、

「……ううっ、ピカチュウ。」

ボクは……ボクはどうしたら……？」

それはピカチュウに対する問い——というより自分に対する問い。勿論、ナエトルも戦いに加わりたかった。だが、動こうにも体がゆうことをきかず動いてくれないのだ。どうしたら体がゆうことをきいてくれるのか——

ナエトルは必死でその答えを探そうとした。

だが、ナエトルが答えを出す前に、スリープが代わりに答えを答えた。

「簡単だ。この場から逃げ出してしまえばいい」

——逃げる——

それはナエトルがいつもやってきた行動^{こと}。

ギルドの門扉をたたけなかったこと。野生ポケモンとの戦闘^{バトル}。

——ナエトルはいつも逃げ続けてきた。

……今度も、逃げるべきなのかな？

だって、ピカチュウですら適わない相手に、ボクが勝てるわけないもんな。

ナエトルの心が「逃げる」に傾きかけていることを察して、スリープは更に追い打ちをかける。

「そうすればお前だけは助かるぞ？」

それは悪魔の言葉に等しかった。

スリープは、ナエトルに、仲間を見捨てると言っているのである。勿論ナエトルにそんなマネができるわけがなかった。

だがだんだんと、心は悪魔の言葉に従う方向に傾いていた。

「……………ボクは……………ボクは」

ナエトルは己の弱さに屈してしまいそうになる。

ナエトルの心が完全に折れようとしていたその時――

「だめよナエトル!!」

ピカチュウが大声で叫ぶ。

その声で、ナエトルはピカチュウの方を向く。

「今ここで逃げたら、以前のナエトルに^{まえ}戻っちゃう。

意気地無しで臆病者だった頃のナエトルに!

――だから、絶対に逃げちゃだめ!!」

「ピカチュウ……」

ピカチュウは気力を振り絞りスリープに向けて電撃を放つ。
だがその攻撃は、予知夢によりまたもかわされてしまう。

「ムダだムダだあ!! 電撃^{それ}では俺を倒すことはできない!!
いい加減諦めろ!!」

「あいにくだけどワタシ、諦めるって言葉知らないのよね!!」

その言葉に、ナエトルははつとする。

……そうだ。

ピカチュウはまだ諦めていない。いや、諦めちゃいけないって、
今もボクに教えてくれてるんだ!!

「……ボクは、ぼくはもう……もう逃げない!!
逃げるのは嫌なんだ!! ハッパカッター!!」

ナエトルの回りに大量の葉が出現する。

その葉の全てがスリープに向かって飛んでいった!!

「なにに!!?」
ナエトル

意外な所からの攻撃にスリープは焦ってテレポートを使ってその場
から離れる。

「体当たりいーいー!!」

——体当たり——というより特攻に近い。

ナエトルは何も見ずに、ただ真っ正面に向かって突っ込んでいった。

それをみて嘲るスリープ。

「バカめ!! 俺にテレポートがあるのを忘れたか!?

どんな攻撃も、避けてしまえば意味はない!!」

「避けられれば——ね」

その時、ピカチュウの不敵な声が響き渡る。

「!?!」

次の瞬間、スリープの体に異変が起きる。

体中に電気が回り、動きを抑制している。

それにより、スリープの動きは完全に封じられてしまった。

「なんだこれは!?!」

体が動かな……!! まさか!!」

スリープはピカチュウの方を見る。その反応に、ピカチュウは笑顔で答えた。

「そう。特性——静電気。」

さっきアナタが気合いパンチを使ったのを憶えてる?

あのとき、技を受けたついでにちょっと仕掛けさせておいてもらったのよ」

「まさか貴様、最初からそれを狙って……?」

その問いに、ピカチュウはこくりと頷く。

「だけど、なかなか効いてこないから少し焦っちゃったわよ。しょうがないから適当な攻撃をして、効果が現れるのを待ってた

ってわけ」

「……くそつ。汚え!!」

スリープは全てを理解して心底悔しそうな表情をする。

——今まで戦闘バトルの組み立ては、全て自分の思い通りに進んでいるとスリープ思っていた。

だが、そう思わせることも全て相手ピカチュウの計算の内だったのだ。それはスリープにとって予想もしていないことだった。

「アナタのように、直接戦やり合うのを避ける相手には丁度いいやり方でしょう？」

今よ！ ナエトル!!」

「何!？」

スリープは慌てて振り向く。

そこには、いつの間に接近したのか、ナエトルの姿があった。

だが、スリープはまだ諦めていなかった。

例えナエトルの体当たりおまじりを受けても、倒れるわけがないと自負していたのだ。

だがここで、幸か不幸か、スリープの特性予知夢が発動した。

「!! バカな!？ こいつ!？」

スリープが気がついたときには既に手遅れになっていた。

「噛みつく!!」

……俺の苦手な……悪タイプかみつくの技が使える……だと……!？

スリープはナエトルに噛みつかれたまま卒倒する。そしてそれきりそのまま動かなくなる。

「……何とか終わったわね」

戦闘バトルが終わったことを確認するとピカチュウはナエトルの方に歩いていく。

「……ボク……やったの……?」

ナエトルは呆然として体をわなわなと震わせる。

ただし今度は恐怖の為でなく、驚きの為。

自分が何をしたのか——今イチ実感が湧いていなかったせいだった。

「そうだよ。ナエトルが倒したんだよ？」

「ちゃんとやればできるんじゃない」

そう言ってピカチュウはナエトルの頭を軽く撫でる。

「ボク、やったんだ。」

「……ちゃんと戦えたんだ！ やったよピカチュウ！」

ようやく実感が湧いてきたのか、目に涙を浮かべてピカチュウの方を向くナエトル。

その様子を見て、ピカチュウは静かに微笑んで頷いた。

「——っと、忘れてた」

ピカチュウはルリリの方へと足を向ける。

今の戦闘を見て、ルリリは少し放心状態になっていた。

「助けにきたよ。大丈夫？」

「……あ、はい」

「怪我はない？」

ピカチュウはルリリをざっと見回して尋ねる。

「だ、だいじょうぶです」

まだシヨックから立ち直っていないのか、ルリリは曖昧な返事しかしない。

だが、怪我がないことに安心したのか、ピカチュウはにっこりと微笑んだ。

「良かった。お兄ちゃんが待ってるよ？」

「一緒に帰ろう？」

「……はい……」

そう言つとピカチュウとナエトルは倒れたスリープを引っ張って、

ルリリと共に山を下りていった。

はいはいどうも。ツバサでございます。第6話も無事終了でございます。

意外と早くここまでくることができてびつくりでございます！

ピカチュウ「って、何でこんな時間に更新してるのよ!?」（只今13時現在）

更新が早いことはいいことだけど、世間の社会人は仕事してる時間でしょう!？」

え? なんで……って、休みとったからだけど?

ピカチュウ「や、休み!？」

まさか、小説を書きたいがためだけにさぼったんじゃないでしょうね!？」

違うわ(怒)

んなわけあるか。人聞きの悪い。

まあ、一足遅れの夏休みだと思ってくれたまへ。

1日しか取れなかったけど(泣)

ピカチュウ「仕事があるだけでもありがたいと思いなさいよ。」

……………ま、まあ確かに。

不況と騒がれる昨今、仕事があるのはホントにありがたいことです
(合掌)

ピカチュウ「……………なんか急に現実的に。

ファンタジー色が台無しなんだけど。」

おおっと、そうでした！ では小説の解説でも！

ナエトル君がヘタレキャラを払拭する第一歩を踏み出しましたよ♪
ビュ〜ビュ〜♪パフパフ♪

ナエトル 「ありがとうございます（照）」

ピカチュウ「ようやくか……でもまだまだよ。

もっとがんばって完全払拭を目指さないと！！」

え〜、それはかなり遠い将来になるかと。

ナエトル 「や、やっぱり（汗）」

ピカチュウ「そうと決まれば、脱ヘタレを目指して特訓よ！！」

ナエトル 「と、特訓ってなんの！？」

ピカチュウ「決まってんでしょ？ 夏にふさわしく、怪談話よ！！」

ナエトル 「ええ〜っ！？ こ、怖い話い！？

ムリ！！ ぜえ〜〜〜っつたいにムリ！！」

っーか、もう9月入っちゃってるんですけど。暦の上でも秋だし。

ピカチュウ「細かいことは気にしない。んじゃ、怪談スタート！！」

（……………怪談話中……………）

ピカチュウ「——とまあ、そんな感じで地下鉄の線路の上に青白い感じの女の人——」

あれ？ ちょっと待ってピカチュウ。

ナエトルが気失って倒れてる。

ピカチュウ「……あ、ホントだ。白目むいてる」

まだ開始して1分も経ってないのにねえ。

ピカチュウ「やっぱりまだまだヘタレね（汗）ダメだわこりゃ」

ハートゴールド・ソウルシルバーをゲットしました!!
只今ジョウトの地方を満喫しております!!

ピカチュウ「……………小説は？」

え……………？

ピカチュウ「……………」

……………え、ええ〜っつと(汗)
行け! ヒノン! チーコ!! キミに決めた!!

? 「ヒノ〜!!」

? 「チコチコ!!」

ピカチュウ「話誤魔化すなあああああ!!」

——「ルリリ!!」

ダンジョンから戻ったピカチュウ達に気づいたマリルは開口一番にこの言葉を口走る。

ピカチュウに手を引かれて歩いてくるルリリに気がついたからである。

「お、お兄ちゃん!? お兄ちゃ~~~~ん!!」

マリルの姿を見て緊張が一気に解けたのか、ルリリはマリルの元へと一気に駆け寄っていく。

そして、辿り着くなり、大声で泣き出した。

「うゝええゝゝゝ!! おにゝいちゃゝゝゝん!! ごわがったよ おゝゝゝ!!」

泣きながら喋っているので何言っただかわからないルリリ。だが、マリルはそんなルリリを強い力で抱きしめる。

「ルリリ、だいじょぶか?

ケガとかしてないか?」

「大丈夫よ。どこにもケガはないから」

ルリリに代わってピカチュウがマリルの質問に答える。

「ホントに……? 良かった。」

……本当に……良かった。ルリリー!!」

マリルも安心して気が緩んだのか、ルリリを抱きしめたままわんわん泣き出す。

そんな兄弟の様子を、ピカチュウとナエトルは暖かな表情で見守っていた。

そんな2人に向けて話しかけてくる1人のポケモンが――

「ビビビ。私ハジバコイル。」

コノ辺リノ保安官ヲシテイル者デス。

コノ度ハオ尋ネ者ノタイホニゴ協力イタダキ感謝シマス」

そう言つてジバコイルは左右についた手の代わりであるU字型磁石を光らせる。

その後ろには、ジバコイルの部下であるコイル達に拘束され、がつくりと頂垂れるスリープの姿が。

「賞金ハギルドニ送ツテオキマス。

ゴ協力アリガトウゴザイマシタ」

そう言つとジバコイル達はスリープを連行ついでいった。

「これもみんな、ピカチュウさんとナエトルさんのおかげです。本当にありがとうございます。」

ほら、ルリリも」

マリルに急かされルリリもペコリとお辞儀する。

「助けてくれて……ありがとうございます」

「このご恩は一生忘れません」

「ハハハ。大げさだよ。」

当然のことをしただけなんだから」

そう言つてナエトルは顔を赤らめる。

だが、その姿には自信が満ちあふれていた。

スリープを自身の手で倒したことがその原因であろう。

「ルリリ、あんまりマリルおにいちゃんに心配かけさせちゃだめだよ?」

ピカチュウは少し屈んでルリリに言う。

その言葉に、ルリリは大きく頷いて、

「はい!!」

そう答えた。

ルリリの元気な声に、3人は笑いながらトレジャータウンへと戻つていった。

——「お前達、よくやったな♪ジバコイル保安官からお尋ね者の賞金が届いているぞ。」

これは今回の仕事の報酬だ♪」

そう言つて渡されたのは—— たつた300ポケ。

「ええっ！？三百^{これ}ポケだけ！？」

ナエトルにしてみれば、あれだけ命がけで戦つたのである。
にもかかわらず渡されたのが少量のポケのみ。

文句を言いたくなるのも当然といえは当然といえた。

「当たり前だ。これが修行というもののだからな♪」

ま、明日からもまた頑張つてくれ♪」

そう言つてペラップは笑いながら去つていった。

その場にはピカチュウと、シヨックで頂垂れたナエトルだけが残された。

「……せめてもう少しだけ多く分け前が欲しいよ」

「仕方ないじゃない。」

ま、ルリリを助けられたんだから。それで良しとしなきゃ」

「——うん。そうだよね。」

それもこれもピカチュウが未来^{ゆめ}をみたおかげだね。

ピカチュウの未来^{ゆめ}のおかげでルリリの場所もわかつたんだもん」

ナエトルの一言に、ピカチュウははつとする。

「……そう……だね。自分でも不思議だけど……」

ピカチュウは未来^{ゆめ}のことを思い出す。

……ルリリの声も、そのあとの映像^{イメージ}も、みんな未来に起こる出来事^{こと}だった。

でも、なんでそんな未来^{もの}が見えたんだろう？ あれは、一体……？

ぐるぎゅるるうう

突然ハラの虫がなり響いた。ピカチュウは音のした方を向く。

「……………あ」

ピカチュウの視線に、ナエトルは顔を赤らめる。

「……………お、お腹空いちやった。あは」

……………ナエトルめえ、人が（いや、今はポケモンか）真剣に考えているというのに！！

ピカチュウはナエトルに文句を言おうとした。その時、

くうるるるる

「……………」

もう一つ聞こえてきたハラの虫の音。

その音に、ピカチュウとナエトルは無言で顔を見合わせる。

「……………ピカチュウのお腹も……………鳴った」

ピカチュウは脱力する。

そしてそれにより、これ以上未来のこ^{ゆめ}を考えることを諦めることにした。

「……………うん。ワタシが悪かった。ワタシもお腹空いたみたい」

ピカチュウの言葉に、ナエトルはぱつと顔を輝かせる。

「じゃあ、ご飯食べに行こう！！」

そう言つと、ナエトルとピカチュウは食堂へと足を向けたのであった。

——その日の夜は久しぶりの嵐だった。

だが、数日前ほど酷いものではなく、朝までには止むだろうというのが気象予報士の見解であった。

雨は容赦なくギルドの窓に打ちつけ、風が木枠を揺らしていた。

「……すごい雨だね。今夜は嵐みたいだよ？」

「嵐かあ。」

「……なんかあんまりいい思い出がなかったような気がするなあ」
ピカチュウはベッドに横になりながらぼうつと窓の外を見つめている。

「そう言えば、ピカチュウに会う前の晩も嵐だったよ？」

「そうなの？」

ピカチュウの問いかけに、ナエトルは頷く。

「嵐の夜の次の日に海岸で倒れていたんだけど……」

「……………」

ピカチュウは黙りこくる。

外では雷が近づいてきているのか、ゴロゴロと音がしている。

……嵐の……夜……

ピカチュウは瞳を閉じて記憶の底をたどる。だが、何も思い出すことができなかった。

「どうお？ 何か思い出した？」

丁度そのタイミングで雷鳴が轟き渡った。

ナエトルの問いに、ピカチュウは静かに首を横に振る。

「ううん。何も思い出せない」

「そっか。（……それはそれでいいけどね）」

ナエトルがボソリと呟いた。

「え？ 何？」

「うっ！？ ううん！？ 何でもないよ！！」

ナエトルはぶんぶか首を横に振る。

ナエトルの意味不明なその行動に、ピカチュウは首を傾げる。

「あ、明日も早いし！ もう寝ちゃおうよ！ ね！？」

「うん。そうだね」

そう言つとピカチュウとナエトルは眠りにつく。
不思議なことに、何故か今日の夜は、いつもよりも長いように感じられた。

——その晩、ピカチュウはいつもとは少し違う夢を見た。

相変わらず映像はないがしかし、今回の夢はいつもの夢にはない、雷の効果音がついていた。

「——！！」

な、何をしている！？」

雷鳴が響き渡る——

「は、離してはダメだ——！！」

再び雷鳴——

「もう少し……なんとか……！」

「なっ！？ ……………——！！！」

今までで一際大きな雷の音が鳴り響く。

それにより、叫び声と思しき声がかき消されてしまう。

そしてそれっきり、声は聞こえなくなった——

「……………はっ……………！！」

ピカチュウは雷の音で飛び起きる。

額にはびっしょりと汗をかいていた。

「……何？ 今の夢。

……なんだか、妙に現実的リアルな感じが……」

ピカチュウは軽く息を整え窓の外を見つめる。

「……今のは、ワタシの記憶だったのかな……？」

嵐の夜に何かがあつて、ワタシは……海岸あそこに倒れていた――

……そうなのかな……？

……でも、もしそうなら、一体何が何があつたというんだろう……

……？」

ピカチュウはもう一度記憶の底を辿る。

だが、もしかして何も思い出すことができなかった。

「……ダメだ。何も思い出せない。」

夢のことは気になったがピカチュウはそれ以上思い出すのをやめることにした。

無理に思い出そうとしても思い出せないと思つたからだ。

思い出すことをやめることを決めると、ピカチュウは再びベッドに横になる。

「――夢といえば、あれも不思議だったなあ」

ピカチュウは昼間みた未来ゆめのことを思い出す。

「なんであんな未来ゆめが視えたのかなあ。

……もしかして、自分の記憶と、あの未来ゆめは、何か関係があるのかなあ。

でももしあるとしたら、一体どう関わっているんだろう」

ピカチュウは暫し目を閉じて考える。だが、いい答えは導き出せなかった。

「……あんまし考えすぎると眠れなくなっちゃうかな。

もう寝ちゃおうつと」

そう呟くとピカチュウは目を閉じ、再び夢の中へと、意識を沈ませていった。

——「初仕事は嵐——か。
ついてないな」

森の中を駆けていく一つの男の影があった。
もともと夜の森は視界が狭まり見通しが悪いが、今夜は嵐のせい
もあって森は闇同然といつてもいい過ぎではなかった。

だが「彼」は闇には慣れていた。
暗闇の世界で生きてきた「彼」にとって、闇は身近な存在だった
から。

「彼」は迷うことなく、目的の場所へと確実に近づいていく。
そして、森の奥で輝く緑色の光に気がつく。
「彼」はその光にゆっくりと近づいていく。
そして、目的であるその品物ものを発見みつけた。

——それは魔方陣の中心に存在あり、まるで時計の秒針のように、
静かに時間ときを刻んでいた。

「……これが。」

……初めて見たが、間違いない。

——遂に、見つけた！ 時間ときの歯車を——」

「彼」は魔方陣に近づきゆっくりと時間ときの歯車に手を伸ばす。
胸の高鳴りを必死で押さえ、そして歯車を——盗った。

歯車の消失によって魔方陣は暫く点滅を繰り返していたが、やが
て消えてしまう。

それと共に、あれほど吹き荒んでいた雨や風が。舞い散る木の葉
が。

ピタリと—— 停止とまった。

辺りは一瞬で静寂の世界へと変化を遂げてしまった。

——時間が、停止とまった——

「彼」は静かにそう呟いた。

——それは「彼」が最もよく知る世界。

光が差さず、音もない。まさに孤独と恐怖が支配する「無」の世界——

「彼」は暫しその場に佇み、寂しげに森を見つめていた。
その胸中は複雑だった。

自分がやっていることはここでは多分「悪」なのだろう。

「彼」自身も、そのことがよくわかっていた。

——だが、これも全て世界の為。

これから起ころうとしている最悪の運命シナリオを避けるため、仕方ないことだと自分に言い聞かせた。

「彼」は右手に握りしめた時間ときの歯車をじっと見つめる。

「まずは1つ目。次は……洞窟へ!!」

「彼」はくると踵を返すと次の目的地へと走り始めた。

——丁度この辺りだったか。「アイツ」と遭遇であったのは。

「彼」は記憶の断片を思い起こす。

このこと同じように、暗闇の世界でかけがえのない存在ひかりと出会った、大切な記憶を。

…… 此处は違った。なら、次の場所で。必ず!!

「彼」は自然と駆ける速さ（スピード）を上げていく。

理由それは目的を果たすのとは別に、自分にとって最も大切な存在ものを探す為であった。

…… 速く! もっと速く!!

逸る気持ちを抑え、「彼」は森を後にした。

——明けて翌日。嵐は去り、晴天に恵まれた日であった。

ペラップから今日は、依頼かお尋ね者、どちらか好きな方を選んでそれをこなすよう言われたピカチュウ達は、依頼の仕事を受けることにした。

（お尋ね者は暫くいいというナエトルの意見を尊重した為である）
やってきたのは昨日訪れた場所——トゲトゲ山である。

「えーっと、“空色グミを探して下さい”——ってことだけど、でもグミって何？」

ピカチュウは依頼書とにらめっこしながら呟いた。

「そっか。ピカチュウはグミを知らないんだっけ。

えっと、グミっていうのはね、すっごくおいしくて、食べると賢くなるお菓子なんだよ？」

……つまり、サプリメントってこと？ D。Aとか、ビ。ミン。とか……

「種類もいっぱいあってね？ ポケモンごとに好みが違うんだよ。

ボクがスキなのはダントツで若草グミだね！

もうあの味の爽やかといったら……」

グミの味でも思い出しているのか、ナエトルはうつとりとした顔をしている。

「まあとにかく、ちゃっちゃと見つけちゃおう！——」

昨日突破しただけあってダンジョンを進むのはそんなに苦ではなかった。

だが、登っても登っても、肝心のグミは見つけられずじまい。

ピカチュウとナエトルは途方にくれていた。

「——本つつ当にあるの？」

そのグミってヤツは……」

かなり疲れた声でピカチュウが言う。

実際かなり疲れていた。依頼された品物を探してダンジョンの中をくまなく探索したせいである。

「場所の指定をしてあるってことはあるってことだと思っけど？」
ダンジョン

「うう、これで見つからなかったら化けてでるわよ。」

よほど疲れているのか、ピカチュウはカリカリした声でいう。

……… あわわ。マズイよ。

ピカチュウ、かなり気が立ってる。早いとこグミ見つけないと。

そう思いながらふと前方の方を見るナエトル。

そこに、スカイブルーの色をしたグミらしき物体を発見する！！

「ピカチュウ！ あれグミじゃないかな！？」

そう言っただけでナエトルは走り出す。

ピカチュウもそれに気付き走り出そうとした。

その時！

—— 殺気！！ ——

「伏せてナエトル！！」

ピカチュウはナエトルを突き飛ばす。

それと同時に、ピカチュウの上空を何かが掠めていった。

「へへっ！ このグミはオイラがいただくぜ！！」

そう言っただけで立ち上がったのは1人のムックル。

「ズ、ズルイよ！！ ボク達が先に見つけたんだよ！？」

立ち上がるなりナエトルは抗議する。

だが、ムックルはそれを軽く聞き流す。

「うるせえ！！ 取った者勝ちだ！！」
もん

ムックルはそう言っただけで器用にグミを脚で持ち上げ、そのままくちばしの中へと放り込む。

「ああー！！！」

ナエトルが絶叫する。

ムツクルはグミを数回かむとごつくりと飲み込んでしまった。

「ほい。ごちそうさん♪」

……ムカツ。

「……わ、ワタシ達がどれだけ死ぬ思いして空色^{それ}グミを探したと思
ってんのよアンタは！！」

ピカチュウは半ギレ状態でムツクルに食ってかかる。

その様子に、若干引き気味の様子のナエトル。

……ヤバイ。ピカチュウ完全に怒っちゃってるよ。
ど、どうしよう……？

止めなきゃと思いつつもナエトルはピカチュウから少しずつ離れ
ていく。

だが、ピカチュウの怒りにも、ムツクルはなんのそのな様子で、

「あん？ 男がワタシとか言ってるんだよ。気持ちわるい」

……プチーン。

ナエトルは慌ててその場から逃げた。

もはや何を言ってもムダだと悟ったためである。

「だから、男ってゆうなと言ってんでしょー！！！！！！！！！！」

バチバチバチバチバチイイイイ！！！！

ピカチュウの怒りの電気ショックが辺りに火花を散らして炸裂す
る！！

「……ふう、今日は一段とすごかったね？」

電撃が収まったことを確認したナエトルはピカチュウの側へと戻ってくる。

「おかげでストレス発散できてすっきりした!!」

ピカチュウはナエトルに向かってウィンクを1つ送る。

その様子に、ナエトルはタメ息を1つつく。

……何という迷惑な発散法なのだろう。

ナエトルは心の中でそうツツコンだ。

「いやあゝ。参った。

アンタ見かけによらず戦^やるねえゝ」

ピカチュウとナエトルは声のした方を向く。

そこには、いつの間に回復したのか、ムックルが起き上がりこっちに近づいてきていた。

「オイラピカチュウ^{アンタ}の強さに惚れたぜ!!」

どうだろう？ オイラをピカチュウ^{アンタ}達の探検隊に入れてくれないかい？」

……えゝっ!？ 惚れたって……？

全然見当違いの方向を思い浮かべて思わずナエトルは動揺する。
一方のピカチュウは、

「んっんっんっん。仲間うんぬんよりも大事な問題があるのよねえゝ」。

ワタシ達が必死になって探してたグミをアナタが食べちゃったのよあゝ。

その落とし前は一体どうつけてくれるのかなあゝ？」

因みにピカチュウはこの台詞を笑顔で言っている。

だが、その目がちつとも笑っていないかった。

聞いている側としてはかなりの恐怖である。

事実ムックルも若干怯えていた。

「……………わ、悪かったよ。じゃあ、ちょっと待っててくれ!!」

そう言うのが早いか、ムツクルはどこかへと飛んでいく。

それから数分経って、ムツクルが小さな包みを持って戻ってきた。

「勝手にグミを食べちまった詫びだ。これをやるよ」

ピカチュウは包みを開けてみる。

中からは大量のグミが出てきた。

「オイラグミが大好きでさあ、あちこち飛び回ってはグミを集めてんだよ」

ピカチュウはグミを探る。すると、底の方から空色グミを見つけ出した。

「あつた！ 空色グミ！！」

これで任務完了！！」

「良かったねピカチュウ！！」

「それで、オイラを探検隊の仲間に……って話は……」

恐る恐るムツクルが尋ねる。

ピカチュウは悩む様子も見せずこう言い放った。

「うん。いいよ」

アッサリとO・Kが出た。

その様子になエトルはシヨックを受けたがムツクルは大喜びした。
探検隊にとって、最初の仲間チームメイトの誕生であった。
ポケダンス

というわけで、初仲間のムックル君です♪

ムックル 「ヨロシクな!!」

ナエトル 「ヨロシクね! ムックル♪」

ムックル 「あ? 馴れ馴れしく話しかけるんじゃないよ。
俺はアンタと仲良くする気はさらさらねえぜ?」

ナエトル 「えっ?」

ムックル 「アンタ、ピカチュウさんに惚れてんだろ?
つまりオイラ達はライバル同士。
敵と馴れ合う趣味はオイラにはねえんだよ」

ナエトル 「……ムックル、やっぱりピカチュウのことを……?」

おっとっと。意外な所でバトルの予感(笑)
さてどうなる??

どう思いますか? 当事者のピカチュウさん?

ピカチュウ「……あの2人、何の話をしてるの?」

……うわ。気づいてねえし。この電気ネズミ(汗)
さて、話は変わってここでお知らせです。

今回作中でその正体は明かされませんでしたでしたが話の重要人物が登場しました。

緑竜（仮名）「呼んだか？」
全員 「誰っ！？」

うわぁー！！ 勝手に出てくんなぁ！！

どがゲシッふみつめきよっ！！
（只今残酷な行為を行っております。都合によりカットさせていただきます。）

緑竜「むぎゅっ！？」

……ズリズリズリ。（何かを引きずる音）

——し、失礼しました（汗）
話を続けます。

話の整合がとれたので停止していた外伝の方を再開したいと思います。
す。

よって、暫く本作はお休みとさせていただきます。

ナエトル 「ええっ！？ また休み！？」

ムツクル 「おいおい作者さんよお。登場していきなりそれかよ？
酷すぎるぜ！？」

ピカチュウ「まさか、書くふりしてゲームする気じゃないでしょう
ね？

金銀とか、ド。クエ。とか。」

ギクウッ！？

……そ、そんなことはないよ？　ちゃんと執筆もするさ（汗）

ピカチュウ「何で汗なのよ？

……まあいいわ。向こうの2人にアンタをしっかり見張ってお　くよう頼んでおくからね？」

（……くっ。ネズミめ、余計なことを！！）

ピカチュウ「何か言った？」

いゝ、いえ！　何も！？

まあ、そんなに間は空けないつもりではいます。
なのでご心配なく。

では次は外伝でお会いしましょう。

本編よ、暫しの別れ！！それでは、

全員『サヨナラ』
♪

Expedition - 8 修業の日々 (前書き)

…… や、やっと完成(疲労)

…… だけど、ヤバイ。結局1ヶ月間が空いてしまった(滝汗)

ピカチュウ「アンタね……」

私的にはこんなはずではなかったのだけれど……

しかも今話はメインストーリーに何の絡みもないっていう(苦笑)

ピカチュウ「…… 覚悟はいい？(放電準備)」

うっ！？

よ、良くないです！！ なので失敬！！(逃走！！)

ピカチュウ「待ちなさい！！ こらあゝ！！」

——夢を……視ていた。

「彼」にとつてかけがえのない存在^{もの}——

生まれて初めて自分以外で命を懸けてもいいと思えたなくてはならない大切な存在——

——それが今、「彼」の目の前に——存在^いた。

手を延ばせば届きそうな距離。

——だが、「彼」の軀はまるで金縛りにでもあつたかのように全くその場から動くことができずにいた。

そして、何よりも大切な存在^{もの}であるその者が、自分に背を向けどこか別の場所へと行こうとしているのが「彼」にはわかった——

彼はそれを止めようと相手に向かって必死に呼びかける。

「——待て！ 俺だ！！」

俺は此処にいる！！ 気付いてくれ！！」

だが、それは「彼」の声には気付かず、どんどん遠くへと歩いていく。

「待て！ 待ってくれ！！」

行かないでくれ！！ 頼む！！

——行くな！！」

「彼」は手を伸ばし、それが自分から離れていつてしまうのをなんとか止めようとする。

だがそれは影^{シルエット}となり、「彼」の前から姿を消滅^けしてしまう——

「!!」

視界が夢から現実へと戻ってくる。消えゆく相手を無我夢中で掴もうとしたのだろう。

気付けば「彼」の左腕は肩と同位置まで上がり水平方向に伸びていた。

「彼」はタメ息をつき、伸ばした左腕を静かに降ろす。

……夢……か。

「森」から次の目的地へと向かう途中で「彼」はとある洞穴へと身を寄せていた。

洞穴は四方を木々に囲まれ人目につきにくい場所にあるため、野生のポケモンには見つかりにくく、休むにはうってつけの場所であった。

「彼」は手に入れたばかりの時間の歯車を取り出しそれをじっと見つめながらぎゅっと握り締める。

——……時間の歯車を手に入れたぞ。まだ一つだが——

——お前は、もう時間の歯車を手に入れたか……？

——このまま集め続けていけば——また、再会えるよな？

——もう一度……お前に……——

「彼」は応えない問いを問いかける——

その問いかけが、伝えたい相手に届くことを信じて——

——「うわわわわっ！？」　また来たあ！！」

ナエトルはイトマルの毒針を何とかかわしていく。

イトマルの注意がナエトルに向いてるその隙について、ムックル

がイトマルに向かつて突っ込んでいった！

「ツバサでうつー！」

ムツクルからの一撃を受け、たまらずイトマルは崩れ落ちる。

「……ハア。助かったあ。」

ありがとうムツクル」

「……あんた、そんなんでよく今まで探検隊やってこれたなあ」

ジト目でムツクルはナエトルの方を見る。

ムツクルからの冷視に、ナエトルは思わず、うっと呻き身動いでしまう。

「た、確かにボクは意気地無しだけど……でも、最近は随分変わってきたかなあ……って。」

……自分でも……思っ……て……」

次第に声の調子トーンを下げていくナエトル。

そんなナエトルの様子に、ムツクルは嘲笑を浮かべる。

「ピカチュウさんも大変つすね？」

ナエトル
「こんな奴が相棒じゃあ」
パートナー

その言葉に少しムカつとするナエトル。そして、心の中で、

……ピカチュウ、何か言い返して……！！

切にそう願った。

因みにピカチュウの姿はナエトルとムツクルの立っている場所から少し離れた所にあり、周囲をキョロキョロしながら辺りの様子を探っていた。

「んー？ ……まあ、確かにそうなんだけど――」

振り向かずにピカチュウは答える。

その言葉に、ナエトルは足をすべらせ、そして思い切り心を凹ませる。

対するムツクルは横目でチラリとナエトルを見てニヤリとした。
「でもいざというときはちゃんと頼りになるよ？」

だからワタシはナエトルのことを信じてるの」

その追加の言葉に、ムツクルは勿論、当事者であるナエトルは一瞬啞然とする。

ピカチュウから誉め言葉を聞いたのは両者これが初めてだったからである。

予想外の解答が返ってきてナエトルは顔を赤らめ照れ笑いをする。対してムツクルは、おもしろくなさそうな表情でちえっと小さく呟いた。

「どうやらピカチュウさんの相棒になるためにはアンタを超えなきゃならないらしいな」

「へえ。やってみなよ。やれるもんならねえ」

ナエトルとムツクルの間に白い火花が散る。

ピカチュウはそんな2人の様子などお構いなしの様子でしきりに辺りを探っている。どうやら誰かを捜しているようだ。

「あ！ いた！！」

目標を見つけたピカチュウはトコトコとそちらに向かって歩いていく。

「あのー、カラナクシさん。ですよね？」

ピカチュウはそこにいたピンク色のポケモン——カラナクシに声をかける。

カラナクシは驚きのあまりびくりとした表情でピカチュウの方を見る。

「——あ、アナタは！？」

「ワタシ達はポケダンズ。探検隊です。」

救助依頼を受け取ったので助けに来ました」

そう言つとピカチュウはにつこりと微笑んだ。

ペラップから今日も掲示板の仕事をいいつけられたピカチュウ達

は、三度トゲトゲ山へとやってきていた。

「えーっと、次の依頼は——っ」

カラナクシを救助した後、ピカチュウは次の依頼をこなす為バツグの中の依頼書をさがそと探し始める。

「えーっ！？ まだあるの！？」

ナエトルはぎょつとした様子でピカチュウの方を見る。

「だって、同じ場所ダンジョンに複数たくさんの依頼が来てるんだよ？

一件一件片付けてたら効率悪いでしょ？」

「そりゃそうだけど……」

「さっすがピカチュウさん！！ オイラ改めてあんたのこと見直しましたよー！！」

ムツクルからの賛辞にピカチュウはにっこりと微笑む。

「あー！ これこれ！！」

——オレンの実を届けて下さい——って依頼。丁度この上の階フロアだね。

さっ！ さくさく片付けちゃうよー！？」

ピカチュウは意気揚々と歩き始める。ナエトルとムツクルも、黙ってそれに従ってついて行った。

——今日のギルドはいつもにも増してポケモンの数が多かった。

それもそのはず。あのあとポケダズはトゲトゲ山での依頼を5つほど片付けたのである。

今いるポケモン達は依頼人だったり、救助されたポケモン達。

そのあまりの数の多さに、ペラップは思わず目を点にし、くちばしをあんぐりとさせていた。

ポケモン達はピカチュウとナエトルにお礼を言い次々と去っていく。

因みにムツクルの姿はここにはない。彼は仕事が終わると自分の家へと帰っていくのである。

いわゆる現地集合現地解散——というやつである（違つかもしんない）

「よくやったなオマエ達。これからもこの調子でがんばってくれ」
高額な礼金をかき集めながらペラップはそう言ってほくほく顔で去っていった。

「今日は随分頑張ったよね。お礼もいっぱいもらっちゃったし。
トレジャーバッグがパンパンで入りきらないよ」

「そうだね。すぐに使わない道具は何個か倉庫に預けておこうね」
そう言つとピカチュウとナエトルは夕食前にガルーラの倉庫へと向かった。

その日の夜。ピカチュウはまた夢を視た。
相変わらず映像はなく、声のみの夢を——

「……………を……………。ま……………。
……………は……………か？」

やはり何を言っているのかよくわからない。
だが、わかることが一つ。

この声は、明らかにピカチュウピカチュウに向けて話しかけている——
ピカチュウにはそう感じ取られた。

「……………ま……………ば、また……………な？
もう……………、……………に……………」

声は——そこで途切れた——

——「ピカチュウ、今日はどの依頼にする？」

明けて翌日。今日もポケダズは依頼の仕事を頼まれていた。

ナエトルは掲示板を覗きながらピカチュウに尋ねる。

だがピカチュウからの返事はない。疑問に思ったナエトルは横を見るがそこにピカチュウの姿はない。

何処にいるのかと辺りを見回してみれば、掲示板の反対側——お尋ね者ポスター板の所にピカチュウの姿はあった。

「……なに……見てんの……？」

一応ナエトルは聞いてみる。勿論返ってくる答えはわかりきっているが——

「今日はお尋ね者をやろうと思って。」

そう言ってピカチュウは微笑みながらポスターを一枚剥がしとった。

「でもピカチュウ、ボクお尋ね者は……」

——……まだ怖い。

そう言いたいのだろうとピカチュウにはわかった。

「大丈夫だよナエトル。キミはもう以前とは違う。」

なんたつてあのスリープを捕まえられたんだから。でしょ？」

「それは……そうだけど……」

「もつと自信持つて！ ね？」

今回はスリープ逮捕よりランクの低いもの選んだから。絶対大丈夫——！

「……そう……かな……？」

「相棒の言うことが信じられないの？」

ピカチュウは瞳を潤ませ少し上目遣いでナエトルのことを見る。その視線に、ナエトルは顔を赤らめる。

「うっ！？」

そ、そんなことないよ！？

わ、わかった。やろう！ ピカチュウ！！ お尋ね者逮捕！！」

ナエトルは自分で自分の士気を高め奮起する。

「さっすがナエトル！ そうこなくちゃ！！」

ナエトルがやる気を示したことに満足したピカチュウは指をパチンと鳴らす。

そして2人は、お尋ね者を捕まえる為、そのお尋ね者が潜んでいる場所——^{ダンジョン}湿った岩場へと向かって行った。

だが一つだけ。ピカチュウは重大なミスを犯していた——

それはポスターに記載されていたお尋ね者の詳細情報——^{データ}

——大親分イシツブテ——と書かれていたこと——

その事を、ピカチュウ達は全く知らずにいた。

—— 湿った岩場へとやってきたポケダンズ。

野生ポケモン達には目もくれずまっすぐお尋ね者の潜る階^{フロア}を目指した。そして、

「見つけたぞ！ お尋ね者——イシツブテ——！」

元々水系ポケモンが数多く生息しているこの場所^{ダンジョン}での灰色の体は目立つのか、目的の階^{フロア}へやってくるなり早々にお尋ね者を見つけることができた。

「げっ！ お前等、探検隊か！？」

イシツブテはピカチュウ達の方を向くなりうつと呻いて身動いだ。大当たり。

おとなしく捕まってくれる？ そうしたらあまり手荒なことしないで済むんだけど」

ピカチュウの説得（？）を、だがしかし、イシツブテは鼻で笑い飛ばした。

「——……そ、そうだな。おとなしく捕ま………るわけねーだろ！！」

「オイ！ お前等出番だぜ！！」
「！？」

——お前——「等」——！？
「等」という複数形のその単語に、当然ポケダンは疑問符を抱く。

「——ね、ねえピカチュウ。
お尋ね者って、相手は一人だけじゃないの？」
「え？ さあ。」

ワタシはただポスターの絵とランクを見て選んだだけだから」
「ち、ちよつと見せて！！」

ナエトルはピカチュウからお尋ね者ポスターをひったくってその内容を読む。

「——……大親分 イシツブテ……たくさんのポケモン達を従わせて悪事を企みます——

……って、ちゃんと書いてあるじゃない！！」

ナエトルは涙目になってピカチュウに食って掛かる。

「だってワタシ、足型文字読めないもん」

——足型文字——というのはこの世界で使われているポケモン達の文字である。

ポケモンの足型を組み合わせ使われているのだが。

元々人間であつたピカチュウが足型文字そんなものを知っているわけもなく、文字を読まずに選んでいたので、そんなことが書いてあるとは気付かなかつたのだ。

「だったら出かける前に聞いてよ！！」
「いいじゃない別に。相手が何人いようとワタシ達の敵じゃないって」

ピカチュウの楽観視した台詞にナエトルは言葉を失う。

「……さ、さつすがピカチュウさん。
ホント、大したポケモンですよ。アンタは」
3人が問答している間に下っ端達が姿を現す。
たくさんのポケモンと記載されていたことにより、ナエトルは、
きつと百体ぐらいのポケモンがやってくるのだらうと考え、その数
の多さにビビって思わず身動きをする。

——だが、その場に現れたのは——
たった4人——

「……」
「どうだ!! 驚いたか!？」

イシツブテは大声で笑い出す。

一方のピカチュウ達は、予想に反して現れた下っ端達の数のその
少なさに、言葉を失くし、思わず脱力する。

…… たった4人従えただけで、大親分つて。

「…… 驚いた。逆の意味で驚いた」

ピカチュウは額に手を当てながらなんとか言葉を紡ぎ出す。

ナエトルとムツクルもどうコメントしていいかわからず、呆然と
その場で立ちすくんでいた。

「くくくくつ!! まさかまたオマエ達に遭遇^{であ}えるとはな!!」
声をかけてきたのは1人のアノプス。

その言葉に思わず眉をひそめるピカチュウとナエトル。

「丁度いいですね。あの時の恨み、今日ここで晴らすことにしまし
よう!!」

また別の1人が口を開いた。今度はカラナクシである。

「……」
ピカチュウとナエトルは無言で顔を見合わせる。

「知り合いなんですかい? あの4人」

ムツクルはピカチュウに尋ねる。

だが、ピカチュウが答える前に、下っ端4人が反応を示した。

「そう！！ 我らこの岩場の主！！」
ダンジョン

アノプスが高らかに声を上げる。

「岩場戦隊！！」

これはカラナクシ。

「シメツターズ！！」

今度はリーシャン。

「で~~~~~す~~~~~」

最後にリリーラが喋り終わるとシメツターズは決めポーズを決める。

> i 2 5 5 9 — 3 8 4 <

「お前ら！ あん時はよくもやってくれたな！？」

アノプスがピカチュウを指差す（正確には爪を向ける）

「今日はこの前みたくはいかないからね！？」

リーシャンが勢いよく跳ねながら言う。

「私達の実力を見せてあげましょう！！」

「み~~~~せ~~~~る~~~~！！」

カラナクシとリリーラが一気にまくし立てる。

だが、特に怯んだ様子も見せず、逆にピカチュウは不思議そうな顔でただ右手で頬を軽く搔いているだけ。

ナエトルも、首を傾けいぶかしげな表情でシメツターズの4人を見ていた。

「——えーっと、誰だっけ？」

ピカチュウが言っではならん一言を口にする。

すると、その場にいた全員がその場に凍りついた。

『.....』

シメッターズは言葉を失くして暫くその場に佇んでいた。
そして暫し沈黙の時間ときが流れる。

最初に意識を取り戻したのはリーダーのアノプスだった。

「……フツ。さ、さすがだな。」

わざと覚えてないフリをして俺達の動揺を誘おうって魂胆だな！

「？」

アノプスはピカチュウの言動がこちらの油断を誘う為の罠だと考えた。
えた。

しかし――

「だから、誰だっけ？」

ピカチュウのこの一言にまたもやシメッターズの全員が言葉を失う。

『……………』

「ねえ、ナエトル。あのポケモン達知ってる？」

ピカチュウはナエトルの方を向く。

だが、ナエトルも首を横に振り、

「いや？　ボクも知らないよ？」

ぴぎいいいいいいいん！！

ナエトルの止めの一撃に、今度こそシメッターズは砕け散った。

……まさか、覚えてないってか？　俺達のことを……………？

シメッターズの4人それぞれが自分の世界に閉じこもり何やらブツブツ言い始める。

それから暫くこの4人が自問自答モードに突入したのは言うまでもない。

「お前等、本当にアイツ等と面識あるのか？」

イシツブテがまるで何か、かわいそうな者を見るような哀れな目でシメッターズの方を見る。

そしてそれと同時に、シメッターズしめったーずに助っ人を依頼したのは間違
いだったのでは……………？——とも思い始めていた。

『……………』

「……こ、この際、それは置いとくことにして!!」

『置いとくんだ!!（全員談）』

「今日は私達だけではないのですよ!？」

イシツブテからいただいた金を使って雇った取り巻き達サクラです!!」

『サクラって言った!!（ポケダンス談）』

カラナクシの声に従い、潜んでいた数十体の野生ポケモン達が姿を現す。

その様子はさながらモンスターハウスといった光景——

——因みにモンスターハウスというのはダンジョンの中にある野生ポケモン達が暮らす住みかのような場所のこと。

——入ったら最後。そのポケモン達に容赦なく集中攻撃されるという、恐怖の場所スポットである。

とあるダンジョンでは、モンスターハウスを突破しなければ次の階フロアへ進めないという危険な所もあるのだとか。

とにかく可能な限りモンスターハウスには近寄らない——が、探検隊の間では暗黙の掟ルールとされていた。

「どうだ！ 恐れ戦け!!」

そして俺様を捕まえるなんて浅はかな考えを持った自分を後悔するがいい!!」

自分の勝利を確信しているのであろう。イシツブテは高らかに笑い声を上げる。

「……ピカチュウ……」

ナエトルは不安げな表情でピカチュウの方を見る。
だが、ピカチュウの心は比較的落ち着いていた。

「大丈夫よナエトル。」

キミはもう臆病者まへのときとは違う。そうでしょ？」

ピカチュウはナエトルの方を見て微笑む。

——それはいつも一緒そばにいるピカチュウが一番よくわかっていること。

——スリープの一件以来、ナエトルは野生ポケモンとの戦闘バトルも少しずつだがこなすようになってきている。

——少しずつだが、ナエトルは変わってきている——

ピカチュウが今回お尋ね者の依頼を選んだのも、そんなナエトルの変化を見て大丈夫だと判断したからであった。

「——……うん。そうだね！」

ピカチュウの言葉にナエトルは自信を取り戻しモンスターハウスの方に目をやる。

ムツクルも、何も言われなくても既に戦いの構えを取っていた。

「——それに……」

ピカチュウにはもう一つ対抗策があった。

そしてそれを実行するために、トレジャーバッグの中をゴソゴソと探り始める。

「今日でお前達もお終いだ!!」

「あの時の恨み、今日こそ晴らします!!」

「覚悟しろよ!!」

「か~~~~く~~~~ご~~~~!!」

シメッターズとその他のポケモン達が一斉に構えを取る。

「かれ! みなのお!!」

イシツブテの号令と共に一斉にポケダンズに向かっていく野生ポ

ケモン達！！

ナエトルとムックルはそれを迎え撃つ為攻撃の姿勢を取る。
だが、ピカチュウだけは構えを取らずその場に立っている。
そして、トレジャーバッグから何かを取り出しそれを野生ポケモン達に向かって――投げつけた！！

それは一個の玉のような代物。

——その玉はポケモン達に向かって飛んでいくと弾け、中から何かの煙のようなものが辺りに漂い始める。

そしてその煙を吸ったポケモン達はバタバタと眠りだした。

「ん なっ! ? ん に や に ゆ い い い い い い い い ! ? 」

もはやこの場で起きているのはイシツブテとポケダングスのみ。

イシツブテには遠すぎて煙の効果が届かなかったらしい。

いきなりの展開にナエトルとムックルもその場で啞然としている。

唯一、玉を投げた張本人であるピカチュウだけが、不敵な笑みを

浮かべて立っていた。

「
——バクスイ玉。」

「昨日救助依頼のお礼でもらったんだ」

——バクスイ玉とはこの世界にある不思議玉の一種。

その効果は様々で今ピカチュウが使ったバクスイ玉は相手を眠らせる効果を持っている物である。

「何か遭った時の為に使おうと思って持ち歩いていたんだけど。」

「どうやら大当たりみたいね」

ピカチュウは辺りを見回す。気付けば、シメツターズと名乗っていたあの4人も、バクスイ玉の効果を直に受けぐっすりと眠っている。

「さて、と。これで取り巻きは誰もいなくなつたわね？」

残ってるのは、アナター人——」

ピカチュウはイシツブテの方を見る。その瞳には怒りの表情が静かに燃え渡っていた。

「！！ まさか貴様、最初からそれを狙つて——！？」

イシツブテが焦りと驚きの表情を浮かべる。

さきほどまで漂っていた余裕はもはや既に完全に失われている。

「ワタシはね、無関係のポケモンを相手にするつもりはないの。

まあ、お金を使って取り巻きを雇う小心者のアナタにはわからないかもしれないけどね」

急に弱気になったイシツブテの態度にピカチュウは皮肉の言葉を浮かべる。

数が増えると急に強気になる。

—— 集団を、自分の実力と勘違いして——

—— それはピカチュウが最も嫌いなタイプの相手。もはや相手を許そうという気は、ピカチュウには全くなかった。

「くそっ！！ なめるなよ！？」

オレ様一人でだつて十分に——」

イシツブテが戦いの姿勢を取ろうとした。その時——

「—— 遅いよ」

刹那——ピカチュウの姿はかき消え、次にはイシツブテの背後にその姿があつた。

電光石火で接近したのだ。

「んなつ！？」

イシツブテは振り向こうとする。だが——

「行くよ！ ナエトル！ ムツクル！！ パス——」

ピカチュウはそう言って尻尾でイシツブテをはたき飛ばした！！

それこそサッカーボールを蹴るかのよう！！

イシツブテはものすごい速さ（スピード）でナエトルとムツクルに向かつていく。

2人はそれを待っていたかのように、同時に攻撃を仕掛ける！！

「ハッパカッター！！」

「風おこし！！」

ムツクルの羽ばたかせた風にナエトルのハッパカッターが巻き上げられていく。

それはさながら即席のリーフストームといった感じであった。

リーフストームもどきは飛んできたイシツブテを待っていたかのようにその軀を中心へと吸い込んでいく。

「はぐうわああああああ！！？」

風おこしの威力を加えた高速のハッパカッターがイシツブテを容赦なく切り刻んでいく。

風が止んだその後には、気絶し、目を回しているイシツブテの姿がそこにあつた。

「——お尋ね者、確保ほかく」

ピカチュウはそう言ってウィンクを1つ送った。

——ジバコイルにイシツブテを引き渡しギルドへと戻ってくるとそこにはペラップが待っていた。

また報酬ギャラのピンハネ——もとい回収に來たのかとピカチュウとナエトルは思っていた。

が、今日はいつもと少し違っていた。

「ポケダンズ。ポケモン探検隊連盟——PEUより通達だ。

ブロンズランクに昇格だそうだ、おめでとぅ。よくやったな」

「昇格！？」

ピカチュウとナエトルは同時に声を上げる。

「——って、何？」

ピカチュウのすつとぼけた発言にペラップは足を滑らせる。それを見たナエトルが慌てて説明に入る。

「探検隊には階級ランクがあるんだよ。

功績てがらを上げればそれだけ階級ランクが上がっていくんだ」

「へえ〜。そうなの」

今イチ実感がないのかピカチュウは気のない返事をする。

ペラップは咳払いを一つし、通達文書に目を通す。

「たくさんの依頼をこなした理由もあるが、やはりこの間のスリー
プ逮捕ルークが大きいな。

新人がこの短期間で階級昇格ランクアップを果たしたのは初めてだ。

これからもこの調子でがんばってくれ」

いつになく上機嫌で言うペラップ。ピカチュウとナエトルは同時
にお互いの顔を見合う。

そして、喜びが徐々に実感となりその表情が笑顔になって顔にも
現れてくる。

そして、2人はお互いの手を合わせ、ハイタッチをして喜びを噛
みしめあった。

Chapter 4まで終了です。

というわけで、今回は遅延のお詫びも籠めて、投稿初の挿絵を仕込ませていただきました♪

ピカチュウ「記念すべき第一回目の挿絵が瞬殺キャラうつってどうなのよ？」

なんとなく描いてみたいシーンがここだった。

冒頭部分だとまだ正体明かしてない「緑竜」とまだ『外伝』でも明かしてないキミの人間ver晒すことになるから嫌だった。

『外伝』で絵仕込んだ後ならそれでもよかったんだけどねえ。

ピカチュウ「今後も挿絵とかすんの？」

気が向いたらね。もしかしたら済話とかにも修正で絵加えるかも。というわけなんでもし済話でここの絵が見てみたい！！とかありましたらご一報ください。前向きに善処したいと思いますので。

ピカチュウ「もちろん『探検隊』と『外伝』のどちらでも結構ですよ」

次回からはまたメインストーリーに戻ります。それでわまた！！

ツバ・ピカ『さようなら』

よしっ！ 完成！！

今回は割と早かったぞ！？

ピカチュウ「ん」。でも3日の時点で文章入力終わってたのよね？

残りの2日は一体何を？」

え？

えゝっと、微妙な文章調整。文の繋がりに変な所がないかとかの確認？

しかも今回はケータイでやったからめっちゃ大変だった（汗）

ピカチュウ「ああゝ。だからこんな時間に更新してるわけね？」

そのたうり！ 諸事情により暫くPCが使えなそうなんで。

なので暫くケータイで頑張ります。

それでは第9話、どうぞ！！

ピカチュウ「……どうゆう前振り？」

——早朝。

——ギルドの弟子達なかまが起きる少し前。

ペラップとプクリンは毎朝恒例の朝の話し合いを行っていた。ミーティング

内容はその日の朝礼で弟子達に伝える話の確認や弟子達の仕事シフの予定内容トはいふ、他のギルドやフリーの探検隊から入ってきた情報などの整理である。

こうして、今日もプクリンから渡された今日1日の弟子達の予定表イルに目を通していたペラップであったが、一読するなりその表情かおは驚きものの表情へと変貌を遂げた。

「お、親方様!! 本気ですか!?! この配分シフト!!」

ペラップはそう言って予定表スケジュールを持った羽をばたつかせる。

殆どシフトの配分はいつもと変わらないのだが、一番最後に記載されていたポケダنزの——

つまりはピカチュウ達の今日の仕事に、ペラップは驚きを隠せなかった。

そこに記載されていたのは「滝壺の調査——という仕事よていであった。

——数日前、ギルドから北へと行った先にある大きな滝に何かがあるという情報を得たペラップはそのことをプクリンに報告した。

プクリンは滝その話話を聞き、一瞬何かを思い出したような表情を浮かべたがペラップがそのことに気付く前にいつもの何を考えているのかわからない表情かおへと瞬時に戻したので気付かれることはなかった。

そして、数日の内に、その滝へ調査に向かう者を決めておくとペラップには伝えておいた。

その調査隊に選ばれたのがポケダنزというわけである。

「うん。そうだよ」

プクリンは嬉しそうな表情でペラップに答える。

その表情はいつも通り、何を考えているのかわからない顔であった。

「し、しかし、滝壺周辺はまだ未解明の地。

ポケダンスのような新人ルーキーよりも、もっと階級ランクが上の者に任せた方が

がよろしいのでは？」

それはペラップの率直な意見きもちであった。

——確かにポケダンスは最近階級昇格を果たしたばかりだし探検隊としての実力もつけてきている。

だが、本格的な探検を任せるにはまだ早いとペラップは考えていた。

しかしプクリンは——

「大丈夫だよ。ポケダンスなら」♪依頼の仕事とかも頑張ってるし。

それに、そろそろ探検隊らしい仕事をさせてあげようと思ってね

♪

プクリンにそう言われペラップは黙り込んでしまう。

ペラップはプクリンの考えに反対する気は毛頭なかった。反対すればどんな目に遭うかよくわかっていたから。

それに——プクリンは今まで判断を誤ったことは一度もない。

そのプクリンが大丈夫だと言っているのだから多分大丈夫なのだろう——

ペラップはそう思うことにした。

仕事の話はこれで終わった。だが、まだ一つ——一番重大な話が残っていた。

「それと親方様、これは先ほど入ってきた情報なのですが……—」
ペラップはそう言って一枚の情報試メールをプクリンに手渡す。

それを見てプクリンは僅かに眉をひそめる。
その内容は――

――キザキの森の時間ときの歯車が盗まれた――という情報ものであった。

――その日の朝礼の時間は騒然となった。

ペラップから例の話が弟子達みんなに伝えられたからである。

プクリンの判断で時間ときの歯車が盗まれたことについてはまだ伏せられていたが、でもそれでも、一地方の時間が停止とまってしまったのである。

そのことに、弟子達みんなは驚きを隠しきれなかった。

「えー、原因追及の為、ジバコイル保安官が既に調査に乗り出している。

不審な者を見かけたらすぐに知らせて欲しいとのことだ。

みんなも何かわかったことがあったら私が親方様に知らせるように。いいね？」

その言葉に、弟子達みんなは大きく頷く。

因みにプクリンは今日を開けたまま眠っている。

先ほどのミーティングでは起きていたのに朝礼の時間に眠ってしまつのは何故なのか――

それはポケモン七不思議の一つだと言われている。

「それじゃあみんなっ！今日も仕事にかかるよ」

「おおー！ー！ーっ！！」

弟子達はいつともよりも力強く応える。それはまるで、何かの不安を取りはからうかのようなのであった。

号令を終えると、弟子達みんなはそれぞれの持ち場へとついていく。
それはポケダンスも例外ではなく、ピカチュウとナエトルも、朝

礼を終えたその足で、すぐに依頼の場所ダンジョンへと向かうつもりでいた。ペラップに呼び止められるまでは。

「オマエ達、ちょっと来てくれ」

ペラップの声にピカチュウとナエトルは足を止めそして、半信半疑のままペラップの元へと向かっていく。

「オマエ達、随分仕事に慣れてきたようだな。」

特にこの間のスリープを捕まえたのは見事だったぞ」

ペラップのこの態度を、ピカチュウは気味悪がった。

いつものペラップならば、こんなにも自分達のことを誉めたりしないからだ。

……一体何を企んでいるのやら。

ピカチュウは胡散臭げな視線でペラップのことを見る。

だが、今日に限っては、ピカチュウの鋭い勘も外れていた。

「ブロンズランクに階級昇格も果たしたことだし。

今日はいよいよ探検隊らしい仕事をやってもらう」

ペラップのこの言葉に、ナエトルは瞳を輝かせる。

「ほ、ホント!？」

ナエトルからの疑問に、ペラップは首を縦に振る。

「不思議な地図を出してくれ」

そう言われてピカチュウはバッグから地図を取り出すとそれを床へと広げる。

ペラップは広げられた地図の一端を羽で差した。

「我々のギルドはここ。そして、今回調査してほしいのは——この滝だ。」

情報によれば、この滝には何かしらの秘密があるらしいとのことだ。

そこで、オマエ達にはこの滝にどんな秘密があるのか調べてきて

もらいたいのだ」

「どうだ？ わかったか？」

「うん。わかった。任せて」

ピカチュウは地図を折りたたみバッグへとしまい込みながら答える。

一方ナエトルはというと、何も答えずただその場に佇んでいるのみ。

見れば目にうつすら涙を浮かべたりしている。その様子にペラッ
プは驚き、慌てふためく。

「なっ！？ ど、どうした？ 大丈夫かい！？」

ペラップは羽をばたつかせる。

だがナエトルはその言葉には答えず、益々涙目になっていくばかり。

暫くしてようやくなんとか言葉を紡ぎ出した。

「……うん。平気。大丈夫。ちょっと感動して。」

初めて探検隊らしい仕事ができると思うと嬉しくて……」

ナエトルは首を横にブルブルと振るわせ涙を振り払う。

そして、いつになく気合いの入った表情でピカチュウの方へと振り向いた。

「よし！ がんばるぞ！！」

ね？ ピカチュウ！？」

ナエトルの言葉に、ピカチュウは黙って微笑んで頷いた。

——ピカチュウとナエトルはトレジャータウンで軽く一通りの準備を済ませて北へと向かった。

その道すがらのこと——

「朝礼の時の話だけ……本当なのかな？ 時間が停止とまったって。

——あり得るの？ 時間が止まるなんて。そんなこと」

——時間とは常に流れゆく存在^{もの}で、それを操作することは誰にもできない——

ピカチュウはそう考えていた。

だが心のどこかで、その概念^{かんがえ}が間違っているという気もしていた。理由は何故だかわからないが。

「うん。ペラッブは特に何も言っ^てなかったけど、多分、時間^{とき}の歯車^はが関係しているんじゃないかな？」

トゲトゲ山での1件以来、ナエトルは精神^{しん}だけでなく他の部分でも飛躍を見せていた。

最近のナエトルはピカチュウ並に勘がいい。ナエトルの読みは当たっていた。

——時間^{このいつけん}の停止に、時間^{とき}の歯車は関わっている。それも最悪の形で——

「時間^{とき}の……歯車……？」

初めて聞くその存在^{じゆんざい}に、ピカチュウは首を傾げる。

「うん。時間^{とき}の歯車は、世界中に存在^あって、それぞれの地域の時間を守っているといわれているんだよ」

その説明を聞き、何やら納得したような顔でピカチュウは頷く。

「——なる程。つまり、その地域^との時間^{とき}が停止^とまったってことは——盗まれたってことだね。」

キザキの森に存在^あった——時間^{とき}の歯車^はが——」

辺りに静寂が訪れる。聞こえてくるのは風による木々のざわめきとどこからか聞こえてくる鳥ポケモンのさえずり——

「ええっ!?! ——ぬ、盗まれたあ!?! 時間^{とき}の歯車^はがつ!?!」

そこまで深く考えてなかったのか、ナエトルは素っ頓狂な声を上

げる。

「まさか！ そんなのあり得ないよ！！
今までだってどんなに悪いポケモンでも時間ときの歯車を盗もうとしたポケモンなんていなかったんだよ！？」

それはまるで盗む——という考え自体が間違っているとでも言いたいような言い回しである。

実際ナエトルには信じられなかった。いや、信じたくなかった。時間ときの歯車が、それほど大事な代物であるとナエトルにはわかっていたから。

「でも現実には時間ときは停止とまってる。
盗まれたと考えるのが妥当だと思っけど？」
ピカチュウはかなり冷めた様子で反論する。

ナエトルとは対称的に、時間ときの歯車が如何に大切な存在ものであるのか——

人間であつたピカチュウにはいまいちよくわかっていないというのもその理由に挙げられるかも知れない。

ピカチュウの推測にナエトルはなんとか反論したかったが元々ナエトルが口でピカチュウに適うはずもなく、いい言葉が浮かばなかった。

「——でも……普通のポケモンだったら絶対にそんなこと——」
ナエトルはそこまで言つて言葉を切る。ある可能性を思い浮かべたからである。

「——……時間ときの……影響……」

——時間ときがおかしくなっていることで悪いポケモンが増えている
それはナエトルがギルドに入つて1日目にペラップと話をしていたこと。

それを今何となくだが思い出した。

「時間が狂い始めた影響でこんなことが起こり始めたのかな……？」
ナエトルはそこで言葉を切る。

——異変の影響でいいポケモンが悪になる。

そのことに、ナエトルはなんとも言えないやるせなさを覚えた。
「そうとも言えるし、そうとも言えないかもしれない。」

ただの悪ふざけなのか、それとも何か目的があって集めているのか——

いずれにしても——」

ピカチュウはそこで言葉を切る。それはいつになく真剣な眼差し

「おかしいことになってきている。

何か尋常ことが起きようとしている。そんな気がする」

その言葉に、ナエトルはのどをこくりと鳴らす。

この先一体何が起きようとしているのか——そう考えて不安を感じたためである。

一方ピカチュウは、“時間の歯車”と、“誰かが盗んだ”という
2つのキーワードが妙に焼き付き頭を離れなかった。

2つのことに、何らかの因縁を感じずにはいられなかったのである。

……これは一体……何なんだろう……？

ピカチュウがそんなことを考えていると、先の方から水の流れる
音が聞こえてくるのに気がついた。

いつの間にか目的地へと辿り着いていたらしい。

ピカチュウとナエトルはとりあえず今の話を一端忘れ本来の目的
に集中することにした。

——今日の仕事——メイン 滝の調査だ——

——2人は森を駆け足で通り過ぎ目的の場所へと到達した。

流れの激しい水がどやどやと喧しい音を立てて落ちてゆく——水の勢いがその滝の凄まじさをよく物語っている。2人はその雄大さに圧倒され、暫し呆然となつてその場に立ち尽くしていた。

「……す、すごいね。ここまでとは思わなかったよ」

「……た、確かに……」

ピカチュウもそう呟いて頷く。ここまで豪快な滝しづものだとは、正直思つていなかった。

滝——というものにも色々な種類がある。

細い水がちよろちよろと糸を引くように落ちていくシヨボイ……小規模なものから、今日の前にあるような幅数十メートルの壮大なものまで——まさに多種多様である。

何かしらの秘密がある——という点からも多少のデカさはあると覚悟してはいたものの目の前の滝は想像以上、というか完璧なる予想外。

ピカチュウもどう扱えばいいのか見当がつかなかった。

ピカチュウは辺りをざっと見回すと何か変わった箇所ところがないか確認する。

が、特に何も見つからなかった。

……まあ、そんなに簡単に見つかるようじゃ——秘密がある——なんて情報タレこみは入らないだろう。

となると、普通にはわからない何か鍵のようなものがある——そう考えるのが妥当ではあるが……一体。

ピカチュウがあれこれ考えていると、ふとナエトルが滝に近づいているのが目に入った。

その真意がわからず、ピカチュウは首を傾げる。

……一体……？

ナエトルは黙って右手（足？）を滝に触れさせてみる。
すると滝の水はナエトルの手の侵入を拒むかのように大きく後ろ
へと弾き飛ばしてしまう。

そのあまりの衝撃に、ナエトルは思わず尻もちをついた。

「イテテ。……凄い勢いだよこの水」

ナエトルは水に触れた手を軽くぶらつかせる。

「ピカチュウも触ってみなよ」

ナエトルに促されピカチュウはおそろおそろ滝へと近づいていく。
間近で見ると水の流れがより一層激しく感じられた。

ピカチュウは黙って落ち行く水に手を触れてみる。

そして、ナエトル同様激しい水の流れに遮られ大きく後ろへと吹
っ飛ばされた。

「……ったあ……」

手の平に衝撃が伝わってくる。その衝撃のデカサに、手は若干痺
れていた。

これに全身を打たれればただでは済まないだろう。そう感じた。

——とその時、突然ピカチュウの視界が揺らいた。

——あの不思議な現象の前兆であつた。
ゆめ まえふれ

「……うっ……これは……」

——まえ以前にもあつた……」

——キイイイイイン！——

ピカチュウを再び目眩が襲う。そのつらさに、ピカチュウは思わ
ず倒れそうになるのを必死で堪え、軽く体をよるめかせただけに何
とか留まった

「……また……あの目眩が……」

ピカチュウの意識は——そこで途切れた——

——今回の現象には映像イメージがついていた。
その代わり音がなく映像イメージには少し雑ノイズが走っている。
それはまるで一昔前の映画のようであった。

——そこには大きな滝を目の前にして立っている1つの影シルエットが存在した。

その影はピカチュウ達が今立っている場所から少し後ろへ下がると勢いよく滝に向かって突撃していった。

——視点アングルは変わり、滝の向こうから三回転半回ってキレイに着地する影の姿が映し出される。

その影は辺りを2〜3回見回すと先に続く道を発見し、そちらへと足を進めていった。

——映像イメージは、そこで途切れた——

「……また……視えた……」

ピカチュウはゆっくりと意識を取り戻すと滝の方へと目をやる。
そして、自分達が今何をすべきなのか——その解答こたえをうつすらとではあるが、見出したような気がした。

「どうしよう。どこから調べればいいのかなあ？」

ピカチュウが再びゆめ（また）映像を視たことを知らないナエトルは困り果てた様子でピカチュウの方を向く。

だがピカチュウは答えない。そしてその表情かおには、何故か緊張の色が走っていた。

ピカチュウがそのような表情をする理由がわからずナエトルは再び滝の方に向き直る。

辺りには暫く水の音のみが響き渡っていた。

数分の沈黙の後、ピカチュウはナエトルの方を向くと静かに口を開いた。

「……ナエトル……滝の中に入ってみよう……」

ピカチュウからの提案にナエトルは驚き声を上げる。

「ええっ！？ こ、滝の中に入るのおっ！？」

ピカチュウは黙って頷く。しかしその顔はどこか確信のあるような顔をしていた。

それは滝の先に何かがあることを知っているかのような——そんな表情であつた。

「また映像を見た。」

誰かがこの滝に飛び込んで、その先に続く洞窟に入っていくのが「……………」

ナエトルは黙って滝の方を向く。滝の水の勢いの凄まじさは先ほど身を以て体感している。

もし滝の中に入って先に何もなければどうなるか——それはゆうまでもないだろう。

「……ピカチュウは……ピカチュウはどう思ってるの？
やっぱり滝の奥に……洞窟があると思ってるの？」

ピカチュウは何も言わずナエトルのことを見る。

勿論ピカチュウにも不安はあつた。

過去に一度ルリリの危機の未来をピカチュウは視ている。

その未来は現実のものになった。だが、視えたのはその一度きり

前回のが当たっていたとしても、今回も当たっているとは限らない。

先ほどピカチュウが見せた緊張の表情はその不安の色であつた。

そして、ナエトルが自分の話を信じ、滝の中に飛び込むことができるのか——その心配の色でもあった。

だがピカチュウはナエトルの変化を、そして映像を信じる方に賭けた。

だからこそ今ナエトルに映像の事を話した。

今のナエトルならやれると——その思いが今ピカチュウがナエトルを見る視線には宿っていた。

そしてナエトルも、何も言わなくてもピカチュウの心情を察することができた。

2人は見つめ合ったまま暫しの時間が流れていった。

やがてナエトルは軽く息を吐くとピカチュウの事を見る。

その瞳には覚悟を定めたような思いが宿っていた。

「……わかった。ボクピカチュウを信じるよ。」

行こう！ 滝の向こうへ——」

その返事に、ピカチュウは微笑み黙って頷いた。

2人は今まで立っていた場所から数歩下がると滝の方へと向き直る。

そこは丁度何者かの影が立っていた場所と同じ辺り。

ピカチュウとナエトルは大きく深呼吸をすると滝に突っ込む為心構えを整えた。

見ればナエトルは少し足を震わせている。

——無理もない。今2人がやろうとしているのはお粗末な賭け。

——無謀と言ってもいいかもしれない。

さすがに今度ばかりはピカチュウも少し緊張していた。

……失敗すればどうなるか——

……いや、弱気になっちゃダメだ。

もし自分が不安な表情を見せれば、ナエトルはそれに気付いて益々不安になっちゃう。

そうなれば、滝に飛び込むことはできなくなる。

ナエトルに少しでも負担をかけないようにする為には、自分^{ワタシ}は常に余裕を持つてなくちゃいけない。

ピカチュウとナエトルはそれぞれの迷いを振り切るかのように同時に頭を横に振る。

——そして、決心^{かくこ}を決めた。

「準備はいい？ ナエトル」

「うん！ 思い切ってぶつかってみよう！」

ピカチュウは頷く。そして、滝の方に向かって駆ける体勢を取る。

「じゃあ、行くわよ？」

1……2……3……！

『せーのっ！ー！』

ピカチュウとナエトルは同時に駆け出す。

そして、目の前に立ちはだかる強固な水の壁に向かって勢いよく突っ込んでいった。

一瞬水の衝撃に耐えきれずピカチュウは目を閉じそうになったが、先に見えた空間に気付き大きく目を見開いた。

そして——ピカチュウは地面に着地した。

映像^{イメージ}の影のように三回転半着地はできなかったが、でもそれでも今のピカチュウにとっては満足であった。

ピカチュウは自身の体についた水を体を震わせ払う。見れば隣にはナエトルがうつ伏せ状態になって倒れている。

ピカチュウはざっと辺りを見回し最後に後ろを向く。

丸い入口の先には、滝の水がまるでカーテンのようになって流れていた。

「イタタ……こ、ここは……？」

ナエトルも気がつき辺りを見回す。

そこには、赤、青、黄。様々な色を宿した宝石を含んだ岩石がゴロゴロと転がっていた。

そして、先の方にはまだ道が続いていた。

それを見て、ナエトルはピカチュウが正しかったことを悟った。

「——やった……洞窟だ！！」

やっぱりピカチュウは正しかったんだ！！

行こう！ ピカチュウ！！ この先へ！！ 洞窟の奥を探検だ！！

ナエトルはそう言うのとピカチュウを待たず先へと駆けていく。

その瞳には、未知の場所^{もの}へと挑む、好奇心がありありと籠められていた。

ナエトルが懂れた——探検隊の醍醐味がすぐ目の前に迫っていた。

「何が待ち受けているのか——楽しみだね」

ピカチュウもずれたショルダーバッグの位置を直して楽しそうに先へと続く道を見つめる。

ポケダンス初の、本格的な探検が今幕を開けようとしていた。

——滝壺の洞窟^{ダンジョン}を、2人は慎重に歩みを進めていった。

幸いなことに出現^でくる野生ポケモンは9割方が水タイプのポケモンであり、水タイプに強いピカチュウとナエトルにとっては楽勝とまではいかなくとも容易に進める洞窟^{ダンジョン}ではあった。

だが、油断はできない。何が起るかわからない——それが未知の場所を探検する——ということなのだから。

数分後——2人は遂に洞窟の奥へと到達した。

辺りには大小様々な、色とりどりの宝石が剥き出しになっており、辺りをきらきらと輝かせていた。

2人はその光景に目を奪われ、思わずみとれてしまう。

「う……わぁー！！　すごい！　宝石がいっぱいだあー！！」

「……本当……すごくキレイー！！」

♀は基本的に光り物に弱いというがそれはピカチュウも例外でない様子。

ピカチュウは手近にあった宝石の欠片を1個手に取る。

……1個位持つて帰っても罰当たらないかな……？

ピカチュウが宝石のピンハネの衝動にかられているその横で、ナエトルが突然大きな声を上げた。

「ピカチュウ見て！　あそこに大っきな宝石がー！！」

ナエトルの視線の先を向けば、そこには一際大きな宝石が1個——堂々と立っていた。

2人はその宝石に向かって歩みを進めていく。近づいてみるとその宝石の大きさが一層よくわかった。

高さはおよそ35？くらい。ピカチュウとほぼ同程度の高さである。
る。

紅玉ルビーだろか、青玉サファイアだろうか。詳しい種類はわからない。

とにかくその宝石はまるでこの宝石達の主であるかのように、威厳と風格を漂わせて静かにその場に佇んでいた。

「すごいやー！！　こんな大きな宝石見たことないよー！！」

これ持つて帰ったらみんなびっくりするよね！？　きつとー！！」

そう言つとナエトルは宝石にしがみついて宝石を引き抜こうとした。

「う~~~~~ん!!
う~~~~~ん!!」

ナエトルは顔を真っ赤にして全力で宝石を引っ張った。
だが、あれだけの大きさ。宝石はびくともしない。
力が抜けたのか、ナエトルは一旦宝石から手を離れた。

「ハア、ハア……」

だ、だめだあ……びくともしないや」

ピカチュウはタメ息をつく。また、

——男のくせに……情けない——とも思った。

「ピカチュウ、ちよつと試してみてよ」

……うわ。女の子に頼みますかこの亀は。

と思いつつもピカチュウはとりあえず試してみることにした。

……あ。でもちよつと待って。

もしこれで抜けてしまったら、ワタシってナエトルより怪力なん
じゃ……?

そんな不安を抱えつつピカチュウは宝石を引っ張ってみた。

「……うっ……くっ……」

ピカチュウは持てる力の全てを使って宝石を引き抜こうとした。

だが、やはりびくともしない。

「……うっだめっ!! 無理っ!!」

ピカチュウは額に汗を浮かべながら頂垂れる。

「うーん、ピカチュウでもダメかあ」

……いや、もし仮にここでワタシが宝石引っ抜いたとしてもそ
れはそれで男として情けないものがあるぞナエトル……

ピカチュウは心の中でそんなツッコミをいれてみたりする。

だが、目の前の宝石を諦めきれないのか。ナエトルはもう一度ト
てから

ライしてみると言つてピカチュウと場所を交替した。

「う~~~~~~~~ん！ う~~~~~~~~つん！！！」

ナエトルが宝石と格闘している様子を、ピカチュウは黙って見つめていた。

……それにしても、本当びくともしないよね。

まるであの宝石の下に根っこがついてるみたい。

ピカチュウがそんなことを考えていたその矢先――

――キイイイイン！！――

今日二度目の目眩がピカチュウを襲う。

「……うつ。 また……」

甲高い音と共に、ピカチュウは今日二度目の現象に、意識を奪われていった――

――そこは現在^{いま}ピカチュウ達がいる所と全く同じ場所。

そこへ何者かの影がやってくる。

ピカチュウはその影に見覚えがあつた。

――滝の前で視た映像に出てきたあの影。それと同じ容姿であつた。

影は辺りを見回すと一番大きな宝石の前に立つとそれを引くので

はなく――押した。

すると、突然辺りを地鳴りのような震動が襲い始める。

……地震……？

影も訳がわからず辺りを見回している。

そして、左を向いた次の瞬間――影慌てた様子で走りだしていた。

だが間に合わなかった。既に大量の水が影の目前に迫っていたのだ。

影はあつという間に水に飲まれると、そのまま何処へかと流され

ていつてしまった――

「――……い、今の……」

ピカチュウは意識を覚ますなりこう呟く。その表情は驚きのあまり蒼白シルエットになっていた。

影が動かしした仕掛けのある宝石は今まさにナエトルが引き抜こうとしているまさに宝石それ。

もしまかり間違えて押してしまったら……？

……伝えなきゃ！！ ナエトルに！ 映像このことを！！

――宝石を押してはならない。ピカチュウはナエトルに話そうとした。

その時――！

カチリ

――何かが動く音がした――

「え！？ ウソッ！！」

ピカチュウは思わず声を上げる。

が、時既に遅し。ナエトルは宝石を押してしまっていた。

――その時、辺りが揺れ始める。何が何だかわからずナエトルは辺りをキョロキョロする。

「あれ？ 何だろ？」

「逃げるのよ！ ナエトル！！」

ピカチュウはナエトルの頭の葉を掴むとダッシュでその場から走りだす。

「イタタタ！！」

な、何？ どうしたのピカチュウ！？」

まだ宝石を採ってないのに――！ というおめでたい考えをナエ

トルは抱いていた。

「説明してる暇はないの！！ 後ろ見て！！」

「後ろ……？」

ナエトルは横目で背後に目をやる。既に大量の水が2人の後ろに迫ってきていた！！

「うわあああ——っ！！」

み、水だあああ——！！！！」

ナエトルは完全なるパニックと化す。

ピカチュウも全力で駆けていたがナエトルがパニックって暴れるのとナエトル自身の重さが比例して思うような速さで走れなかった。水は徐々に勢いと量を増し、あっという間にピカチュウ達に追い付き——呑み込んでいった。

水に視界を遮られ、ピカチュウは思わずナエトルの葉を掴んでいた手を放してしまった！

「……っナ、ナエトル！？」

ピカチュウは流されながらも必死でナエトルの姿を探したが溢れる水に揉まれ正確な位置を知ることができなかった。

「ピカチュウ——！！」

ナエトルも、必死でピカチュウの事を呼んだがその声は段々と遠ざかり、やがて完全に聞こえなくなる——

……ナエトル……だ、だめ……このままじゃ……

ピカチュウは薄れゆく意識の中、以前これと似たような経験をしたような気がしていた。

——絶対に離してはならない手を離してしまったような——そんな思いに捉われた。

だが、迫りくる水に吞まれ、ピカチュウの意識は——暗く冷たい水の底へと沈んでいくように——墜ちていった。

そして——とある場所に、2つの大きな水しぶきが盛大に上がった——

Expedition - 9 初めての探険（後書き）

滝壺探険前半終了です。

このEXP-9は最初はもう少し短い予定だったのですが後に続くEXP-10を書いている途中で終了予定枚数をオーバーしそうになったので急遽増ページとゆうことになり、あんな具合となりました。

プクリン「あゝ、やっちゃったねえゝ。2人共大丈夫かなあゝ？」

ふえ？

久しぶりっすね親方様。何故ここに？

プクリン「んゝ？ ポケダンは作中で安否不明になって出られなさうだからね。代わりに来たんだよゝ」

さ、さいで（汗）

プクリン「それにしても懐かしいねゝあの仕掛け。

ぼくがあれに引っ掛かったときは――」

スートーッブ！！

親方様！ ネタバレ！ ネタバレーーーー！！！！（大慌て）

プクリン「……え？

ネタバレ……って……？」

え、えー親方様がこれ以上ボ口を出す前にこれで失礼したいと思います（汗）

また次回！ それでは――！！

プクリン「あ！ ちょっと！？」

………まいつか♪

じゃあね〜。トモダチトモダチ〜♪
」

えー、2週間ぶりの探検隊です。

前回見事に罾に引っ掛かり水没してしまったポケダズ。

その行方や如何に――？

うーん、奴らがいないとスムーズに話が進んでいいなあ。

って、こんなこと言ったら後書きでしかれるので自重することにして（汗）

えー、前置きが長くなりました。

それでは滝壺探索後半戦、行ってみませう！！

——意識を失っている間、ピカチュウは自分の体が軽くなったように感じていた。

……あれ？　なんだか体が軽いし、フワフワする。
それに……温かいし。

……もしかしてワタシ、死んじゃったのかな？……

生き物は死ぬと生きていたときよりも体が軽く感じると聞いていた。ピカチュウは、自分が死んだと思い込んでいた。
勿論死んでなどいない。

気絶しているだけである。

そんなピカチュウに声をかけてくる存在^{もの}がいた。

「……もしもし？　キミ達、大丈夫？」

……あ、誰かが話かけてる。

誰だろ？　もしかして天使とかかな……？
そんな訳ないだろう。

ピカチュウは軽くうごめくとやがてゆっくりと意識を取り戻す。
何やら体が宙に浮かんでいるような、そんな感覚がした。
横目で見てみれば、体の半分が何かの液体に浸かっている。

ピカチュウは仰向けからゆっくりと上体を起こして地面と思しき場所に足をつけると、自分が浸かっている液体を手には握り取る。

その液体は温かく、独特の臭いがあり、ただの水でないことは容易に理解する事ができた。

「……こ、ここは……？」

ピカチュウはそう言って辺りを見回しながら尋ねる。

見れば、そこには自分以外にもたくさんのポケモンの姿があり、皆驚いたような表情でこちらを見つめていた。

「ここは温泉よ？」

そう言ってピカチュウの質問に答えたのは1人のヒメグマ。

「温泉!？」

ピカチュウは驚きの表情でヒメグマの方を向く。

——それは、ポケモンの世界にも温泉があるのか。意外——といった感じの声であった。

「——そう。温泉じゃ。」

ここの温泉は肩凝りやキズを癒すことで有名での。いつも多くのポケモンが訪れるんじゃないよ」

ピカチュウは声のした方を向く。

そこにいたのは1人のコータス——口調からするとかなりの高おとこ齢れいのようである。

ここでふと、ピカチュウはある疑問を抱く。

……あれ？ でもちよつと待って。

コータスって確か、炎タイプじゃなかったっけ？

炎タイプって確か、水が苦手だったような？

どうやって温泉入るんだろ……？

「でもビックリしたわよ。」

いきなり空からあなた達が降ってくるんだもの」

……降ってきた？ ワタシが？ 一体どういうこと？

ヒメグマの言っていることが理解できずにピカチュウは眉をひそめる。

「どうやら憶えておらんようじゃのう。」

お前さん達、突然空から落っこちてきたんじゃないよ。

ワシももう随分永い事温泉^{ニッ}におるが、温泉^{ニッ}に入り空から来たポケモンを見たのは初めてじゃよ。ホッホッホ」

……そうか。

さつき体が軽い感覚がしたのは、本当に空に放り出されて宙に浮いていたせいだ。

つまり、あの鉄砲水がどこから吹き上げられて、それで温泉^{ニッ}まで飛ばされてきたってわけね。

ピカチュウは自身の身に起きた出来事を理解して納得する。

……ん？ 何か忘れてるような……？

「――！！ そうだ！ ナエトル！！ ナエトルは何処！？」

慌ててピカチュウは辺りを見回す。

……まさか、別の場所に飛ばされてしまったのだろうか……？

ピカチュウの胸を嫌な予感が駆け巡る。

そして、あの時手を離してしまったことを心の底から後悔した。

「そこに浮いてるわよ？」

「へー！？」

そう言われてピカチュウはヒメグマの指差した方を向く。

そこには気持ちよさそうに眠りながら温泉にぶかぶかと浮かぶナエトルの姿が。

……こいつ、人がこれだけ心配してるというのに……！！

ピカチュウは人の気も知らずのんきに眠りこけるナエトルを見て若干の苛立ちを覚える。

だが、離ればなれにならずに済んだという思いが、次第にその心を落ち着かせていった。

「……ナエトル。

ナエトル、起きて」

ピカチュウは優しくナエトルを揺り起こす。

その揺さぶりで、ようやくナエトルは目を覚ます。

「……う……あ………ピカチュウ……？」

徐々にナエトルの視界が開けてくる。

その瞳に写るのは、心配そうな表情で自分を見つめるピカチュウの姿。

ナエトルはがばつと起き上がり、

「ピカチュウ！ 無事だったんだね！？ 良かった！！」

そう言ってナエトルはピカチュウを抱きしめる。

突然のことに驚き、ピカチュウは目をぱくりさせる。

その光景に、周囲からは冷やかしの声が飛んできている。

その声に気付き、ナエトルは我に返った。

「……え？」

……あ！ ご、ごめつ……！

つい、その……そ……そんなつもりじゃ……ボク……」

慌ててナエトルはピカチュウから離れる。

……ど、どうしよう……咄嗟のこととはいえ、ボクはなんてことを……

気まずさのあまりナエトルはピカチュウから視線を逸らしてしまう。

一方のピカチュウはというと、さっきから一言も言葉を発せずただその場に佇んでいてなんの反応も見せない。

その様子からナエトルは、ピカチュウが怒りのあまり声も出ないと錯覚していた。

幾ら同じ探検隊の仲間とはいえ、相手は女の子——いきなり抱きついたのは失礼だったと、ナエトルは自分の行いを猛省した。

ナエトルがどうしようかと悩んでいると、ピカチュウが動いた。

ゆつくりとナエトルに近づいていき——そして、手をあげる——

……怒られる……！

ナエトルはそう思い思わず目を閉じてしまう。

だが、それはナエトルの思い違いであった。
ピカチュウはナエトルの首元に手を回すと、静かに優しくナエトルを抱きしめた。

「……ピカチュウ……？」

予想外のピカチュウの行動にナエトルは慌て出す。

「……良かった。」

離ればなれになったかと思って……ちょっと怖かった……」

そう言っただけピカチュウは黙り込む。

その言葉から、ナエトルはピカチュウが自分のことを心配してくれていることに気が嬉しくなり、顔を赤らめる。

「ホッホッホ！ 若いもんはええのう」

そんな2人の光景を微笑ましい目で見ているコータス。

コータスの声で、ピカチュウはようやくナエトルから離れる。

だが、その顔はどこか赤いように見受けられた。

「あ……！ えと……その……」

今度はピカチュウが気まずさのあまり黙り込んでしまう。

一方で、コータスのことを知らないナエトルは、不思議そうな顔でコータスのことを見た。

「誰？ てゆうか、こいつ……？」

「ここは温泉じゃよ。さっきそっちのお嬢ちゃんには説明したんじゃないがな。」

お前さん、地図は持つとるかな？」

「地図？ 地図って、不思議な地図のこと？ それなら持つてるけど」

ナエトルはピカチュウが下げていたトレジャーバッグから不思議な地図を取り出し広げる。

コータスは地図を見て、温泉の位置を指し示す。

「ほれ、ここが温泉じゃ」

「えーっと、滝の場所がここだから……」

ナエトルは滝と温泉との距離をさっと大まかに計算する。

その距離はざっと数十キロを超えていた。

「わっ！ こんな所まで流されてきたんだ！！」

「本当だ。随分遠くまで飛ばされたのね」

いつの間にか復活したピカチュウが同様に地図を覗き込みながら言う。

コータスは、ピカチュウとナエトルの話を聞き、滝壺の洞窟から温泉まで流されてきたことを知り、驚きの表情を浮かべる。

「なんとっ！ お前さん達、そんな所から流されてきたのか！？
それは大変じゃったのう。」

「ここの温泉は疲れにも効く。ゆっくり浸かってから帰りなされよ」

「うん。そうするよ」

「ありがとう。コータス」

ピカチュウとナエトルは一言ずつコータスにお礼の言葉を述べると、温泉に身を沈め、ゆつたりと体の疲れを癒した。

——温泉で疲れを癒したピカチュウとナエトルはギルドへと戻り、事のあらましをペラップに報告した。

——滝の奥に洞窟があったこと。奥地にはたくさんの宝石があり、その中のひとつ——仕掛けのある宝石を動かすと水に流され、温泉まで辿り着いたこと等々——

ペラップは黙って話を聞き終えると、なにやら納得したような表情で頷いた。

「——なる程。」

それでオマエ達は温泉で傷を癒してから帰ってきた——と。そう

いうことだな？」

ペラップの言葉に、ピカチュウとナエトルは首を縦に振る。

「うん。残念ながら宝石は取ってこれなかったけどね」

ナエトルは項垂れながら言う。

だが——こればかりはどうしようもないだろう。

宝石あれの仕掛けはきっと、盗掘者から宝石を守るための罠しかけ——

欲に駆られたポケモンが仕掛けあの宝石を盗んでいくことを想定して置かれているものであろう——あそこにある、他の宝石を守る為に——

ならば、宝石達はあのまま洞窟あそこで密かに美しく光り続けたほうが

いい——

ピカチュウはそう思った。

まあ、ペラップは宝石かねものが欲しかったかもしれないが——

だが、その当のペラップは、報告に非常に満足していた。

ピカチュウの読み通り、宝石てみやげがないのは少し残念そうであるが、でもそれでも、ポケダズがここまでやるとは思っていなかったの
で話を聞き、素直に感心していた。

「いや！ いやいやいやいや！！ 大発見だよ」これは「

ペラップの大発見という言葉聞き、ナエトルは耳を疑う。

「ほ、本当！？」

誉められるとは思っていなかったナエトルは驚きの表情でペラップ
のこことを見つめる。

「ああ、本当だ」

滝の裏が洞窟になっているなんて、今まで誰も知らなかったワケ
だからな」

ペラップは頭のとっぺんを器用に動かしながらご機嫌な様子で答
える。

「そ、そつかあ。発見かあ」

未知の場所を発見したという喜びが徐々に実感となってナエトルの表情に表れる。

その表情は、心の底から喜んでいる——そんな顔であった。

だが、1人だけ素直に喜べないでいる者がいた。

それは他ならぬピカチュウである。

ピカチュウは、今日見た映像^{ゆめ}に出てきた影^{シルエット}に見覚えがあるような気がしてならなかった。

ピカチュウは記憶を辿り、影の特徴を思い出そうとする——^{シルエット}

——丸っこい身体、細く長く突き出た耳、そして……あの動き^{アクション}——
^{あのようないとう}三回転半着地ができるポケモンに、ピカチュウは他に心当たりがなかった。

そこで確信を持った——あの影^{シルエット}の正体を——

そのことを話そうと、ピカチュウはペラップの方を向く。

ペラップは何やはしゃいだ様子で、未だナエトルと話をしていた。

「これはスゴイ」

早速このことを親方様に——

「ち、ちよつと待って!!」

意気揚々とプクリンの部屋へと向かおうとするペラップに、ピカチュウは慌てて待ったをかける。

突然呼び止められたペラップはびっくりして足を止め、驚きの表情^かでピカチュウの方を見た。

「なっ!?! なんだい急に!?! 大きな声をだして。

びっくりするじゃないか!?!」

ペラップは意外と気が小さく、些細なことにも一々反応する、いわゆるチキンである。

なので、こういったことには非常に敏感に反応し、オーバーリア

クシヨンを取るのである。

「ご、ごめ、でも、気になることがあって……」

「気になること？」

「なんだい？ それは」

ナエトルとペラップは同時に首を傾ける。

「――滝壺あの洞窟ダンジョン、本当にワタシ達が一番最初はつけんじや？

誰か他に行ったことのあるポケモンがいるんじゃないの？

例えば――プクリンとか――」

辺りが沈黙に包まれる。

ナエトルとペラップはピカチュウが言っていることが理解できず、思考回路が停止してしまい、その場で固まってしまった。

『どうええええええええええ！？』

スリープモード

思考停止状態から回復するやいなや、ナエトルとペラップが同時に声を上げる。

そのやかましさに、思わずピカチュウは耳を塞いでしまう。

「いやいやいやいや！！ それはあり得ないよ！

それなら親方様は滝あそこを調べてこいだなんて言わないはずだよ！？」

ペラップは力一杯否定する。

ペラップはプクリンから滝壺あそこの洞窟の話を、今まで一度も聞いたことがない。

ギルドの中でプクリンとのつきあいが一番長いのが他ならぬペラップ自身。

もし本当にプクリンが滝壺の洞窟に行っていたのなら少しくらい話題に上ってもいいはず――ペラップはそう考えた。

「どうかなあ。

プクリンのことだから、『あ、ごめーん』言っの忘れちゃって

たあー♪』とか言いそうな気がするけど？」

……うっ！？……確かにそれはあり得る（かも……）

ペラップはピカチュウの鋭いツツコミに呻き、思わず納得しそうになる。

確かにペラップはプクリンとのつきあいが一番長いが、未だにプクリンのことを理解しかねる箇所ぶぶんがある。

ピカチュウの言うように、一度探検に行った場所を忘れてしまうことなど、プクリンには大いにあり得る話ではある。

話ではあるのだが――

「うー……そこまで言うなら親方様に確認してみるけど……」

このとき同時にペラップは、ピカチュウに関しても疑問を抱いていた――

何故、いきなりこんな話しをしたのか――と。

何も言わないままであつたのなら、滝壺の洞窟ダンジョンの成果は自分達の物であつたはずなのに――妙な奴だなどとペラップは感じた。

「と、とにかく、今から親方様に確認してくるから。」

おとなしくここで待っているんだぞ

解せない様子のまま、ペラップはプクリンの部屋へと足を運んでいった。

「――親方様。ペラップです。入りますよ？」

入口の部屋をノックしながらペラップは中へと入る。

そこには、珍しく正面を向いてる椅子に腰掛けているプクリンの姿が。

「やあペラップ♪ どうしたの？ 何か用？」

プクリンはいつも通りにこやかな表情を浮かべペラップを見た。

「あ、あの、親方様。」

つかぬ事をお聞きますが、親方様はあの滝の裏が洞窟ダンジョンだということをご存じでしたか？」

「え？」

プクリンはにこやかな表情のまま停止する。

こういう状態になるときのプクリンは、100%何かを知っている時の顔であると、ペラップは知っていた。

「……うーんと……えーつとお……」

……思い出♪思い出♪……

たぁー……!!」

プクリンはいつもの例のやつをやる——まあ今回はフリだけで技は出なかったが。

だが、ペラップをビビらせるのには十分だった。

プクリンは暫く辺りを2、3歩歩き回ると、

「あ、ごめーん♪ 言っの忘れちゃったあ。

よく考えたら確かに行ったことあるかもー」

ピカチュウが予想した通りの台詞を吐き、ペラップは呆然とする。

「……そ、そおですか。わかりました……」

ペラップはそれだけ言っつと、酷く疲れた様子でプクリンの部屋を後にする。

プクリンはそれを笑顔で見送った。

ペラップが部屋から去ると、プクリンは小さな笑みを浮かべる。

——それはギルドの中で誰も見たことのないプクリンの表情——

否、プクリン自身が、誰にも見せようとしない表情であつた。

「——なんでわかつちやつたのかなあ。

僕が滝壺の洞窟に行ったこと。

ペラップは知らないはずだし——

やつぱりピカチュウ達が気付いたのかな？ だとしたら——」

実はプクリンにはある思惑があつた。

そして、それを試す為ポケダンを滝壺に向かわせたのだが――
だが、あえてそれは言わずにおこうとプクリンは決めていた。
プクリンは暫く考え込むと、以前から考えていた計画まえを実行に移すことに決めた――

「――というワケだ」

ペラップはプクリンから聞いた事のいきさつをピカチュウとナエトルに説明した。

ナエトルは少し哑然としていたが、ピカチュウはやっぱりね、といった冷めた表情で話を聞いていた。

「こんなことなら、プクリンも初めから言ってくればいいのに……」

ナエトルは下を向いてぶつぶつ呟く。

だがそのことを、ペラップは咎めようと思わなかった。

何せ今回は完全なるプクリンの気まぐれに振り回された形となったのだから。

「まあ、親方様はああいうお方だからな。

今回は残念だったが、一応評価だけはしといてやろう。

明日からまたがんばってくれ」

「……………」

フォローになってないペラップのフォローに、ピカチュウとナエトルは黙って頷くしかなかった。

――夕食の後、ピカチュウとナエトルは部屋へと戻り、今日一日の出来事を振り返っていた。

「……………あーあ。今日は疲れちゃった。

早めに寝た方がよさそうだねこれは」

ピカチュウはいつもよりも早くベッドに横になるとそう呟く。

ナエトルはというと、窓の側に立ち、窓から差し込んでくる月の光をぼうつと見つめていた。

「今日は色々あったなあ。でもボク、今日はすごく楽しかったよ！！」

初めての探検ですごい緊張してたけど、でもワクワクもしてたんだ！！

そして、やっぱり探検隊になって良かったって、改めて思ったよ。そう言くとナエトルは首から下げた石の首飾りにそっと触れる。

「そしていつかはこの欠片の謎を解くんだ！！」

「うん。ナエトルならきつとできるよ。ワタシも信じる」

ピカチュウの言葉に、ナエトルは微笑み、力強く頷く。

「——そういえば、思ったんだけど。」

ピカチュウの目眩って、いつも何かに触ったときに起きるよね？突然思い出したかのようにナエトルはピカチュウの不思議な現象の話をする。

ナエトルに指摘され、ピカチュウは目眩が起きた時の様子を思い出す。

——ルリリの時。スリープの時。そして今回の滝壺の時——

言われてみれば、いずれも何かに触れた時にあの現象が発生していることに、ピカチュウは気が付いた。

「——確かに。言われてみればそうね。」

何かに触れることでそれに関係するものが視えてる」

「あともう一つ。ルリリの時に視たのは未来だったんだよね？」

ナエトルに聞かれピカチュウは首を縦に振る。

それを確認して、ナエトルは暫く何かを考え込んで、

「でも今回は探検に来ていたプクリンを視た——」

——ってことは、今回視たものは、過去の映像ってことになるよ

？」

「そ、そう言われれば——確かに」

「つまり——ピカチュウは、何かに触れることで、その存在の過去や未来を見通せる——そういう能力を持っているんだよ!!」

これってスゴイことじゃない!？」

この先、ポケモンを助けたり、探検の時とかにもきつと役立つ能力だよ!!」

こんな能力を持つてるなんて、やっぱりスゴいねピカチュウは!」

……誉めてくれるのはありがたいけど。

でも、いくら過去や未来が視えるといっても、あの能力は自分の意思で操作してるものじゃないからなあ。

ピカチュウは複雑な心境だった。

ナエトルが、自分の能力を当てにしてしまうのではないかと——とやっと変わり始めたナエトルが、自分の能力のせいで、また元の

——他人を当てにしてしまう性格のナエトルに戻ってしまうのではないかと——ピカチュウはそれを危惧していた。

——能力に溺れる者は能力に滅ぼされる——

そんな言葉をピカチュウは思い出す。

そして、なるべくならこの能力は使わないほうがいいのではないかと——ピカチュウはそう結論づける。

そのことを、ナエトルにも話そうとした。

その時——

「おいポケダンズ。親方様がおよびだ。急いできなさい」

部屋に入ってくるなりペラップがそう言い、ピカチュウとナエトルはそれぞれ顔を見合わせた。

――「親方様、チームポケダングズを連れてきました」
ペラップに連れられ、ピカチュウとナエトルはプクリンの部屋へ
やってきていた。

こんな遅くに何事だろうとピカチュウは考えプクリンの方を見る。
そのプクリンは、いつも通り、椅子にもたれ掛かったまま、ピカ
チュウ達に背を向けていた。

「やあっ！！ キミ達、今日は大変だったね！
でもキミ達の活躍はちゃんと見てるからね！ 安心してね♪」
突然椅子ごと振り返りこちらを向くなりこう言い放つプクリン。
この言葉に、ピカチュウは本当かと疑問を抱くが、勿論口にはし
ない。

「それでね、ここからが本題なんだけど、近々遠征に行こうと思っ
てるんだ♪」

『遠征！？』

聞き慣れないその言葉に、ピカチュウとナエトルは同時に首を傾
げる。

「ギルドをあげて遠くまで探検に行くのだ。
当然付近を探検するのとはわけが違うから準備もそれなりにして
いく。」

ギルドの中から選抜メンバーを選び出し行くのだ」

ペラップの説明を、ナエトルは興味津々に聞いていた。

「いつもなら新弟子をメンバーの候補に入れたりはいしないんだけど。
でも、キミ達、スゴイがんばってるから♪」

だから今回は特別に♪キミ達も選抜メンバーの候補に入れること
にしたんだよ♪」

「ええっ！？ 本当に！？」

驚きのあまりナエトルは声を上げる。

過去のギルドの歴史を振り返ってみても、新人が選抜隊に選ばれたことは一度もない。

新人が選抜隊に入るとは、異例中の異例といってもいい。

それだけ今回の決定は革命的であつた。

最初、プクリンからこの提案を聞かされたとき、ペラップは猛反発した。

ギルドの規則を根底から覆すものであると。

だが、プクリンは頑として意見を変えようとしなかったため、最後にはとうとうペラップも折れざるをえなかった。

正直、今日の探検で成果が^{てから}お流れになった、ポケダズが哀れに思え、候補に入れるくらいならまあいいか——という心理がペラップの中で働いたためでもあつた。

「ここらここら！！　まだメンバーに入れるとの決定事項ではないからな」

ペラップが釘を刺すように言う。

「遠征までにはまだ時間がある。

それまでにいい働きをしなければ、メンバーには選ばれないからね！！」

「僕はキミ達なら大丈夫だと信じているよ♪　だからがんばってね？」

その言葉に、ピカチュウとナエトルは大きく返事をして、プクリンの部屋を後にした。

「遠征だつて！　スゴイよね！？　なんか急に緊張してきちゃったよ！！」

ナエトルはかなり興奮した様子で言う。

メンバーの候補に入れられたということは、自分達の力がかなり評価されているということを意味していたからだ。

「落ち着きなよナエトル。」

ペラップが言ってたでしょ？　まだメンバー入りが決まったわけじゃないって」

ナエトルとは打って変わって、ピカチュウは冷静な口調で答える。

異例のこととはいえ、周りから見れば他の弟子達と同じスタートラインに立ったに過ぎない——そう考え、ピカチュウは選抜メンバーのことをあまり気にしないようにしよう意識していたためであった。

ナエトルの興奮あんななりしている姿を見てなおさらそう感じた。

「うん！　勿論わかってるよ！！　絶対遠征メンバーに選ばれよう！！」

頑張ろうね？　ピカチュウ！！」

張り切るナエトルを見て、ピカチュウは小さく微笑むと、黙ってこつくりと頷いた。

「あ！　ナエトルさん！　ピカチュウさん！」

声のした方を向くと、そこにはチリーンの姿があった。

だが、出てきたのは自室からではなく、何故か向かいのビッパ達の——つまりは、組の部屋から。

その事に、ピカチュウは疑問を抱く。

「チリーン？　何やってるの？　こんな所で」

「丁度今お二人の部屋へ行くこうとしていたんですよ」

何故かチリーンはウキウキとした様子でピカチュウの質問に答える。

「ボク達の？　どうして？」

今度はナエトルがチリーンに尋ねる。

するとチリーンは、少し怖い表情を作ってナエトルの方を見る。

「今ビッパさん達のお部屋に集まって皆で怪談話こわいをしてるんですよ。」

チリーンの恐面を、ピカチュウはキョトンとした表情で、対するナエトルは青ざめた表情で見ている。

「もう、今思い出しただけで……キヤー……!」

チリーンの叫びに驚きビビって、ナエトルは体をびくりと震わせる。

……怪談話……って、アナタ超能力エスパータイプですよ……？
なのにそういうの好きなわけ？ 何か矛盾してるような……

ピカチュウは心の中でそんなツッコミを入れてみたりする。
しかもこのチリーン、怪談話こののではなしがよほど好きなのか、いつもの三倍以上のテンションと声で先程から喋っている。

こんなにテンション高めのチリーンを見るのは、初めてのことであった。

「グレッグルさんの話なんてもお、特に凄くって。

よければお二人も一緒にどうですか？」

ピカチュウはチリーンに気付かれぬよう、小さく息を吐く。

「……うん。まあ、いいか。行く行く。」

「えゝ!? 行くの!? まちで!?!」

案の定というか、やっぱというか、ビビりまくりの声でナエトルが叫ぶ。

そんなナエトルの様子を見て、まだまだ鍛える必要性ありと、ピカチュウは感じ取った。

「じゃあ、ビッパさん達のお部屋へ行きましょう。」

「うん。おけ。」

「ちよっ! まっ!!! ボクは遠慮しとくよおおお!!!」

抵抗も空しくピカチュウに足を引っ張られ、ナエトルは連行され

ていく。

ポケダンスにとって、長いようで短い、中身の濃い充実した一日が、こうして終わりを告げようとしていた――

――というフリーズが使えるのはまだ先のこととなりそうであった――

ピカチュウ「ふう〜、ようやく帰ってこれたわね」

はいはい、お疲れさんでした。

2週間の休息期間、いかがでした？

ピカチュウ「もう退屈だったわよ。

作中行方不明扱いだから感想とかにも出らんなかったし」

まあまあ、無事復活したんだから良かったでわないか。

ピカチュウ「まあ、そりゃそうだけれども」

というわけで、次回からはいよいよ遠征準備編に突入！
その第一段階としてとある再会をしてもらうよ！？

ナエトル「へ〜。誰と？」

少なくともいい出会いではないね。

ナエトル「え〜、それなら嫌だなあ〜」

ピカチュウ「んじゃ、次話はパスってことで」

んなわけいくかああああ！！

あふお言っんじゃねええええ！！（怒）

ピカチュウ「そんなに怒らんでも。わかった。わかったから（汗）」

ったく！ という訳で、次回もお楽しみに。それではまた、

全員 『さようならっ』

E x p e d i t i o n - 1 1 本当の強さ（前書き）

さて、今回から話はネクスト・ステージに突入！！
その前段としてキミ達には初心に返っていただきます。

ピカチュウ「どゆこと？」

それは見てのお楽しみ♪

ピカチュウ「……なんだかなあ（汗）」

——「えー。というわけで、久しぶりに我がギルドも遠征に繰り出そうと考えている」

ペラップの言葉に色めき立つ弟子達。

滝壺の探索から一夜明けた翌日。

朝礼の時間にペラップから遠征に関する話が弟子達に伝えられた。前日に聞いていたピカチュウとナエトルは2度目であるが。だが、やはりナエトルは興奮を抑えきれないのか、ややそわそわした様子でいる。

他の弟子達も次々に期待の言葉を並べている。

騒ぎに加わらないのはピカチュウだけであった。

「久しぶりですねね！ 遠征するのは！！」

「あつしはまだ一度も遠征に行ったことがないんで是非行きたいでゲスー！！」

「ヘイヘイヘーイ！！ ヘイヘーイ！！」

「でもよ……てえことは、また弟子の中からメンバーを選ぶんだよな？」

ドゴームがペラップに尋ね、その答えに、ペラップは大きく頷いた。

「その通り♪ 出発は10日後。」

その間までに弟子の中から選抜隊を選び出し、その選抜隊で遠征に出かける。

みんな！ 選抜隊に選ばれるよう、がんばってくれー！！」

その声に、弟子達は力強く頷いて応える。

「それではみんなっ♪

今日も仕事にかかるよっ！」

『おおー……っ……！！』

弟子達はいつもよりも気合いの入った声で今日の朝礼を締めくくった。

プクリンとペラップがその場を去った後も、弟子達はその場に残り、未だ興奮冷めやらぬ様子で話し合いをしていた。

「きゃー……！　なんか燃えてきましたわ……！」

元々テンション高めのキマワリが更に高いテンションで言う。

その声の大きさはドゴーム並。と言っても言い過ぎではないかもしれない。

「何とか頑張つて遠征メンバーに選ばれようぜ……！」

「ヘイヘイ！　負けないぜ……！　ヘイヘイ……！」

「がんばりましょうね……！」

既に選抜入りの過酷な生き残りレースが始まっていた。

弟子達全員の目からは、気合いの入った火花が飛び、それが四方の至るところでぶつかり合っていたのだ。

——「えーっと、今日は……　っと、掲示板の仕事か」
ソフト
配分表を見ながらナエトルは呟く。

今日2人に任されたのは通常通りの依頼の仕事——

——だが、地道に点数稼ポイントぎをするには依頼の仕事を着実にこなしていくのが最も確実に効果的な方法だとピカチュウもナエトルも考えていたため、丁度良かった。

「たくさん依頼をこなして選抜隊に選ばれるようがんばらなきゃ……！
ね？　ピカチュウ」

「うん。そうだね」

ナエトルはいつも以上に気合いが入っていた。

それは——選抜隊に入る——という目標がそうさせているのだろ

うとピカチュウにはわかっていた。

だが、逆にこういう時こそ落ち着いて行動しなければならない——ピカチュウはそう考える。

確かに、高揚した気分はやる気を上げるメリットがある。

だがその分、注意力が散漫になり、周りのことが見えなくなるというデメリットもある。

そうになると、いつもは難なくこなしている仕事でも、ミスして失敗してしまう危険が高くなる可能性がある。

今やらなければならない最も大切なことは、^{てから}成果を上げることではなく、何か大きな失敗をしないこと。故に、依頼選^びも、いつもよりも——いや、いつも以上に慎重にやらなければならない。

——自分達の^{レベル}実力に見合ったものを。

そのことを踏まえ、ピカチュウは、ナエトルが欲張^{レベル}って難易度の高い依頼を選ばないよう、しっかりと見張るつもりでいた。

そんなことを考えていたとき、ふと、唐突に、ナエトルが足を止めた。

そして、何故か、掲示板の方をじっと見つめていた。

「あれ？ 掲示板の前にいるポケモン……どこかで見たような……」
ナエトルの視線の先にピカチュウも目をやる。

そこにいたのは、ピカチュウとナエトルがよく知る2人のポケモン姿が——そこにあった。

「げっ！ お前達は！？」

視線に気付きピカチュウ達の方を向いたポケモン——ズバットが呻いた。

ズバットの言葉に、ナエトルは眉をひそめる。

——……どこかで、会ったことがあったか……？——と。

ピカチュウはナエトルよりも早く2人のことを思い出していたので、軽くため息をつき、呆れ顔でズバ^{うい}ット達の方を見つめていた。

「何でお前達がここに！？」

少し遅れてズバットの連れ——ドガースもようやくピカチュウ達に気付き上擦った声を上げる。

ピカチュウから言わせれば目の前にいるズバットとドガースの方が、何故ギルド（ギルド）にいるのか疑問符であった。

「それはこつちが聞きたいわね？ ポケモン（ひと）の持ち物平気で盗んでいく泥棒さんがなんでギルド（ギルド）に入れたのか」

ピカチュウはあからさまにわかりやすい皮肉を述べる。

そして、こんな2人をギルドの中に入れた見張り番の2人にも、疑問を感じずにいらなかった。

「思い出した！！ ボクの大切な宝物（ペンダント）を盗んだ、あの2人だ！！」
遅れて響いたその言葉に、ナエトルを除くその場にいた全員がずるコケる。

……あ、あんたはああああ！！ 今頃気付いたんかああああ！！
遅いつつーの！！

そう突っ込まずにはいられないピカチュウだったが、言葉には出さず、そのままほっとくことにした。

「……はん。オレ達は探検隊なんだぜ？ ヘヘッ」

ズバットの言葉に、ピカチュウは眉をひそめ、ナエトルは驚きの表情を浮かべる。

「探検隊が掲示板の前にいて何が悪いってんだよ？ ああ？」

「えええええー！！！！？ お前達が探検隊いいー！！！！？」

驚きのあまりナエトルは声をあげ、逆にピカチュウは言葉を失う。

……こんな奴らを探検隊に任命するなんて…… とういう目をしてるんだかPEU……

「まあ、やり方は少しあくどいがな。ヘヘッ」

……うわ。自分であくどいって認めたし。

ピカチュウがそんなことを考えてるなど露にも思っていないズバットが胸を張ってそう言った。

「そついうお前達こそ何で此处にいるんだよ？ ここは弱虫くんが

来るような場所じゃねえぜ？」

ドガースがナエトルに向かって冷やかしの言葉をかける。

その視線にナエトルは僅かに体を震わせ怯んでしまう。もう既にこの時点で相手に負けてしまっていた。

「うつ……ぼ、ボク達も、探検隊になりたくて……」

そ、それで……ギルドで修業してるんだ……」

次第に声の調子トーンを下げていくナエトル。

その態度に、ピカチュウは情けなさを感じる。

もう少し強気な態度はとれないものか——と。

——あの時の自分とは違うのだから……

『なにいいいい！！？』

だがしかし、ナエトルの言葉に、ズバットとドガースは驚きの声を上げる。

「……た、探検隊——だつてええー！！？」

ズバットが素っ頓狂な声をあげる。

「お前達がか！？」

ドガースも、意外——といった声を出して言う。

「そうだけど。何か問題でもある？」

ピカチュウに問われ2人は黙り込む。

そして、目配せをし合うと、2人はナエトルの横へと並び、ピカチュウから少し離れた所まで連行れていく。

「な、何なの！？」

事態がわからずナエトルは戸惑いの表情いろを浮かべる。

「オイお前、悪いことは言わねえ。」

探検隊は諦める」

「ええっ！？ 何で！？」

「だって、お前臆病じゃないか。」

お前みたいな弱虫くんには探検隊はムリだぜ？」

「うつ………そんなぁ………」

——3人が何を話しているのか——離れているピカチュウの耳には入ってこない。

だが、話の内容はなんとなく推測できた。

おそらくドガースとズバットの2人は、ナエトルに探検隊を諦めることを勧めているのだろう。

いつもなら助け船を出すピカチュウなのだが、今回に限っては、ギリギリまで口を挟まないでいるつもりでいた。

ナエトル自身が、自分で連中に向かって反論することを期待していたから。

「……た、確かに。ボクは弱虫だけど……」

——でも！ そんな自分に負けないう修業してるつもりだよ！

！
そう言い、ナエトルはズバット達の手から逃れピカチュウの方へと戻る。

その瞳は、初めて出会った時のナエトルと違い強い意志を宿していた——

強くなる——と固く決意した意志が——

その瞳を見て、ピカチュウは満足そうな表情をし、笑みを浮かべる。

一方のズバットとドガースは、ナエトルに反論されるとは思っていなかったのか、呆氣にとられ、一瞬言葉を失う。

「……け、ケツ。ただがんばればいってモンじゃないぜ」

だが、すぐに調子を取り戻すドガースとズバットの2人。

「そうそう。世の中実力のある奴が勝つんだからな。」

要は実力だよ実力」

……うわ。実力で負けた人達に言われても説得力ゼロなんですけど……

「の割には大した事なかったわね？ 海岸の洞窟での戦い方は」

バトル
ようやくここで助け船を出すピカチュウ。その台詞に、ドガースとズバットの2人はうっと呻き僅かに身動いだ。

2人はピカチュウの事がすっかり苦手になっていた。

口は回るし、ふざけた態度のくせに実力は高かったりと。挙げ句、女の子に実力で押し負けた——という箇所が、2人にとって軽い心の傷となっていた。

「そ、そうだよ!! 実力っていうけどさ、そっちの方がボク達に負けてたじゃない!!」

待テ。アンタあの時なんもしてないでしょーが。

何でいつの間にか2人で倒したことになるのよ……?

その箇所について、ピカチュウがツツコミを入れようとしたが、先にズバットが鼻先で笑い飛ばし、

「へへッ。あん時はアニキがいなかったからだよ」
どこか得意気にそう言った。

「アニキ?」

ピカチュウは眉をひそめ、ナエトルは首を傾げる。

「そうとも。我が探検隊『ドクローズ』の仲間^{チーム}は全部で3人。そのリーダー——つまりはアニキがもの凄い実力の持ち主」

「はつきり言っちゃえばもの凄く強いってことなんだよ。へへッ!」
ドガスとズバットは胸を張って言う。

2人はこれでピカチュウ達がびびると——そう思っていた。
だが、びびるところか、逆にピカチュウは2人を益々情けない目で見た。

……なんだ。この2人も、ナエトルと一緒になのか……

「つまりそれって他人任せって——」

ピカチュウはそこまで言っただけ言葉を切る。

異様な何かを感じ取ったからである。

——気配とかそう言った類のものではない。——ただ、何かが、いつもとは違っていた。それだけは間違いなかった。

「おっ! ウワサをすればこの二オイ!!」

「二オイ?」

「へへっ！ アニキのおでましだ！！」

その瞬間——ギルドは異様な臭いに包まれた。

その臭いはピカチュウ達だけでなく、ギルドにいる者全員が体感することとなった。

「キヤーーーーー！！ 何かオナラ臭いですわーーーーー！！？」

思わずキマワリが叫び声を上げる。ヘイガニも堪らず鼻を押さえたりしている。

「あつしがしたんじゃないでゲスよーーーーー！！？」

と、何故かここでビツパが弁明する。

「ヘイヘイ！！ じゃあ一体誰がしたって言うんだよーーーーー！！？」
辺りは悪臭の煙にまみれ、見えなくなっていた。

ピカチュウとナエトルも、堪らず目を閉じ、鼻を塞いでいた。

「うつ……凄いニオイ……！」

「何これえ！？」

「ジャマだ！ どけ！！」

そう声が聞こえてきた次の瞬間——何者かがピカチュウに攻撃を仕掛けて来た。

臭いと煙で視界を塞がれ油断していたピカチュウは攻撃をモロに受け、吹っ飛ばされてしまう！

「きゃあ！？」

「ピ、ピカチュウ！？」

何が起ったのか、直接的に見ていないナエトルはわからなかった。

だが、声から察することはできた。

——ピカチュウが、何者かにやられた——のだと。

ピカチュウを吹っ飛ばした相手は、ナエトルのすぐ目の前に立っていた。

身長はナエトルよりも少し上。

白紫色の前髪の下から覗かせるその瞳は、探検隊、というよりも完全なるチンピラワルと言ったほうが正しいだろう。

「どけ！ お前も張り倒されたいのか！？」

「……うつ……」

相手の迫力に気圧され、ナエトルはその場を退いてしまう。

その様子を見て、ズバットとドガースの2人は大興奮。

「アニキー！！」

「さっすがアニキ！ やっぱアニキは強えーやー！」

「そんなことよりオマエ達、カネになりそうな仕事はあったのか？」

「掲示板にはそれらしい仕事カネツルはありあせんでしたぜ」

「しけてまずぜこのギルドは」

ドガースのこの発言に、その場にいたギルドの弟子達は全員ムツとする。

ギルドニをバカにすることは自分達を——果てには親方フクリンを侮辱したのに等しいのである。

「ならこんな所に用はねえ。とつとと行くぞー！」

『ハイっ！！』

ズバットとドガースは意気揚々と答える。そして、先にハシゴを登っていく紫色のポケモンの後に続くとする。

「おいてめえら。何見てやがる？ 見せもんじゃねーぜ！？」

ドガースが一喝するとそちらを見ていた他の弟子達が慌てて視線を逸らす。

「じゃあな弱虫くん。へへっ」

ズバットはナエトルを嘲笑うと、ドガースと共にこの場から立ち去っていった。

ナエトルは何も言わずにその場に立ち尽くし、黙ってそれを見送っていた。

いや、言わないというより、言えないでいる。といった方が正しかった。

ドクローズの連中を前にして、またも何もできなかった自分に、ナエトルは悔しさを感じていた。

「……………ううっ……………ったあ……………」

その声に気付きナエトルは我に返る。

そこには、ダメージから回復し、起き上がったピカチュウの姿が。だが、その表情は、怒りに満ちていた。

「……………やられた……………ワタシとしたことが……………油断したわ……………」

ただでさえ不愉快な相手に再会^あって気分を害していたのに、その仲間に一発食らって且つ気を失ってしまうとは——ピカチュウにとってこの事は、屈辱以外の何者でもなかった。

「——大丈夫？ ピカチュウ……………」

ナエトルがピカチュウに歩み寄りながら問いかける。

その表情は心なしに暗いものとなっていた。

「平気よこの位。」

それよりナエトルは？ アイツ等に、何かひどいことされなかった？

「ボクは……………大丈夫。」

……………でもボク、何もすることができなかった。

ピカチュウがやられたのに……………アイツ等を前にして、戦うこともできなかった……………」

ナエトルはギルドへ入って、自分が変わったつもりでいた。

野生ポケモン達とも、少なからず戦えるようになってきたし、凶悪なお尋ね者も捕まえた。

それらの経験^{こと}がナエトルを、自分を強くしていったと、ナエトルは考えていた。

だが、ドクローズの連中を——あの紫色のポケモンを相手^{まへ}にして、何故か体がいうことをきかなかった。怖さで動けなかったのだ。

「……アイツ等の言う通りだったのかな……」

ボクはまだ弱虫のままで、あの時と何も変わっていなかったのかな……」

「……ナエトル……」

ナエトルは下を向き黙り込んでしまう。

涙こそ流していないものの、その表情はもはや完全に泣いている表情であつた。

「……ピカチュウ。ボクは自分で自分が情けないよ。」

こんな風に思っちゃうボクは……やっぱり弱虫なのかな……？」

……違う。そうじゃない……

ピカチュウは心の中でそう呟く。

ナエトルの変化を、誰よりも感じているのは他ならぬピカチュウ自身。

出会った頃と比べて、ナエトルは確実に成長している。

さつきズバット達に反論できたのがその証拠。

まだまだ臆病の気の方が強いが、でもそれでも、ちゃんと一歩ずつ前に進んでいる。

——ゆっくと。確実に。

変化にはポケモンそれぞれのペースがある——

だから、焦らず自分のペースで行けばいい——そう言いたかつた。

だが——言えなかつた。

今のナエトルの落ち込みようは相当のもの。

ドン底状態では半端な優しさは逆効果になる——その思いがあつて、ピカチュウにその事を言わせることを思いとどまらせていた。

ピカチュウは目線を下に下げ、暫く何かを考えていたが、やがてナエトルの方に向き直り——

「……そうね。弱虫かもしれない……」

そう言い放った。

ピカチュウの辛辣な言葉に、思わずナエトルは足をすべらせる。ナエトル的にはピカチュウに、もう少し優しい言葉をかけてほしいと願っていたからである。

もちろんピカチュウもそのことはわかっていた。

だが今は、優しい言葉をかけるよりも、多少ツラくても厳しい言葉をかけるほうがナエトルの為になる——そう考えた。

ナエトルの成長を期待して、あえてこの言葉を、ピカチュウはかけたのである。

「……………そ、そうだよね……………やっぱり……………」

だが、それによりナエトルは完全なる自信喪失に陥りかけていた。その事を察したピカチュウは、

「——でも、たいせつ重要なのは現在いまじゃなくて未来をこれからどうするのか——じゃないの？」

ピカチュウの言葉に、ナエトルは顔を上げピカチュウを見る。

「キミは今、自分を変えたいと思ってる。心の底から変わりたいと願っている。」

そんな弱虫自分を変える為に——臆病な自分を克服する為に——だからギルドに入っこいたんじゃないの？」

「……………それは……………そうだけど……………」

「だったら、こんなところで挫けてる場合じゃないでしょ？」

きつとこれから先もつとツライ事や大変な事がいっぱい待ち受けてるわよ？

その度にこうやって凹むの？」

「…………………………」

暫く黙っていたナエトルであつたが、やがて小さく首を横に降る。そして、さつきとは打って変わったような瞳でピカチュウの事を見る。

——その瞳は強い意志を宿した色——ピカチュウも知る、あの——変わり始めた——強いナエトルの瞳であつた。

そのことに安心したピカチュウは、
「いつか宝物の謎を解くんでしょう？」

そう言ってナエトルが首から下げるペンダントを指差す。
その言葉を聞き、ナエトルははっとする。

そう。自分の夢——^{ナエトル}欠片の謎を解くこと——

——その日まで、どんなに辛く厳しいことにも、耐えてみせる——
——そう決めていた。

——^{ピカチュウ}相棒と一緒に。

「——うん。ありがとうピカチュウ。

ボク、元気だして行くよ——」

そう言って笑顔でピカチュウを見るナエトル。

その表情を見て、ナエトルが、いつも通り元気になったと判断したピカチュウは、掲示板から2枚の依頼を剥がし取った。

「——なら、今日の依頼をしなくちゃね」

そう言ってピカチュウはウインクを一つした。

——今回請け負った依頼は2つ——1つは救助。もう1つはお
尋ね者の依頼である。

場所は昨日行つたのと同じ場所——滝壺の洞窟であつた。

「どうして滝壺の洞窟なの？ 昨日行つたばかりなのに」

準備を済ませたピカチュウとナエトルは交差点で依頼と場所の確認をしていた。

「お尋ね者の依頼で丁度いい難易度^{ランク}のやつがこれしかなかったから
……ど、どうしてお尋ね者を……？」

恐る恐る尋ねるナエトル。もちろん返ってくる答えはわかりきっているが——

「ドクローズの奴らにやられた一撃のうっぶん晴らし」

…… やっぱり。 やっぱりね。

ナエトルは下を向き息を吐く。

いくら相手が悪人とはいえ、ストレス発散の為に相手を痛めつけるのは感心しない——心の中でそう呟いた。

そんな事をナエトルが思っているなどとカケラも知らないピカチュウは、またナエトルの表情が暗いことに気付き、

「選抜隊に入るんでしょ？ 遠征も近いことだし、がんばっていかないかね」

「——遠征。 そうだね！ よーっし、張り切っちゃうぞ！！」

ピカチュウ！ がんばろうね！？」

「もちろん！」

ピカチュウは笑顔でこれに答えると、ナエトルと一緒に、滝壺の洞窟目指して、歩を進めていった。

「——……ほう。 このギルドで遠征があるのか……」

「へへっ。 いいこと聞いちゃったぜ」

「ケッ。 アイツ等を待ち伏せて正解だったな」

ピカチュウ達がその場を去った後、どこに隠れていたのか、ドクローズの3人が姿を現した。

ドガースとズバット2人の希望で、ピカチュウ達に更なる仕返しをしようと画策し、ギルドを出てきた所を狙おうと、待ち伏せしていたのである。

「計画変更だ。 ギルドの遠征に潜り込んでお宝を横取りするぞ」

「へへっ。 さっそく帰って悪巧みだ」

「ケッ」

そう言い残し、ドクローズの3人はその場を立ち去っていった。

その日の夕刻。 ピカチュウとナエトルが依頼を成功させ、ペラッブからお褒めの言葉をいただいていたのと同じ時刻——プクリンは

来客と接客中であつた。

「えっ？ 本当に！？」

遠征の助っ人として参加してくれるの？」

プクリンは嬉しそうな声で——遠征の助っ人を申し出た相手に言う。

「ええ本当です。」

かの有名なプクリンのギルドが遠征すると聞きましたもので。

手前どもにも是非そのお手伝いをお願いまして。クククククク」

「それは心強いなあ」

ありがとう。遠慮無くお願いするよ。よろしくね」 トモダチトモダチ」

再び相手は“ククククク……”と含み笑いをする。

そしてその腹では——第一段階は成功した——そう思い込んでいた。

翌日。今日の朝礼はいつもと違っていた。

「みんなっ」今日は仕事の前に、新しい仲間を紹介するよ」

ペラップのその言葉に、僅かにざわつく弟子達。

「……また弟子入りかな……？」

「どんなポケモンなんでゲスかね？」

ペラップがそのポケモン達を呼び——姿を現す。

その姿に、ナエトルは、あっ、と呻き、ピカチュウは眉をひそめた。

その理由は、紹介されたポケモン達が、あるうことか——昨日遭遇^あった。

——あのドクローズの連中であつたからである——

というわけで、遠征準備編に突入♪

ピカチュウ「にしても、10日って長くない？」

それにはちゃんとした理由があります。

今後の展開に関わることで、詳しい理由はお教えすることはできませんけど。

ピカチュウ「でもねえ。やっぱ長すぎ……」

でも実際のゲームの日数をおおよそ計算してみると大体7日くらいだからそんなにかけ離れてるってわけでもないよ？

ピカチュウ「そうなの？ まあいいけど」

さあ、選抜隊のメンバー入りをかけた過酷なサバイバルレース！！果たしてポケダズは生き残ることができるのか！？

ピカチュウ「好ご期待！！ ってね♪」

……………一番言いたいこと言われたあゝ（泣）

Expedition - 12 ドクローズ(前書き)

新年一発目の『探検隊』更新です。

ピカチュウ「てゆつか作者さんさあ、一応メインこつちなんですよ？
なのに1ヶ月もほったらかしいと思ってんの？」

ああ、ごめんね。

先月は体調崩すわ『外伝』の集中更新するわ『すぺしゃる』やるわ
で忙しくってさあ、こつちを更新する余地がなかったの。

ピカチュウ「遅れたからにはちゃんとした話なんでしょうね？」

うんにゃ。

またメインとは関係ないサイドストーリー

ピカチュウ「……………（怒）」

あ、あは。怒ってるねこれは？（汗）

……………え、えええつとおー……………逃げる！！↑ダッシュ

ピカチュウ「逃がすかあ！！」↑追撃

——その日の朝は悪臭と共に始まりを告げた。

ペラップが新しい仲間を紹介すると言った直後の出来事である。

紹介された者達が弟子達の前に姿を現したのと同時にその臭いも発生した。

弟子達の内何人かは知っていた。

臭いその原因となる——その者の正体を。

「あ、アイツ等——！」

ナエトルは驚きの声を上げ、ピカチュウもまた、新しい仲間と紹介された連中ものたちを、嫌悪感丸出しの表情で見ていた。

「この3人が新しい仲間だ——」

他の弟子達が悪臭で渋い顔をしてるなか、ペラップはいつもと変わらぬ様子で平然とした態度で話をしていた。

どうやら彼は悪臭がそれほど気にはなっていないらしい様子。

その事に、当然だが弟子達の殆どが疑問を抱く。

「ケツ。ドガースだ」

「へへッ、ズバットだ。よろしくな」

まるで不良のような挨拶である。

その、お世辞にもいいとは言えない挨拶に、弟子達の誰もがいい印象を抱かなかった。

まあ、2人はそんな事知るよしもないのだが。

そして最後、ピカチュウを吹っ飛ばしたあの紫色のポケモンが——歩前に出る。

「そして俺サマがこのチーム『ドクローズ』のリーダー、スカタンクだ。

覚えておいてもらおう」

スカタンクと名乗ったポケモンはそう言った後辺りを軽く一瞥する。

スカタンクの眼付けに圧されたのか、弟子達は僅かにたじろいで恐怖心を抱いてしまう。

気にする様子も見せず小さく笑うと、スカタンクは最後、ピカチュウの方を向き視線を合わせる。

「特に。お前達にはな。クククク」

その台詞に他の弟子達は一斉にピカチュウへと視線を向け、ひそひそと騒ぎ始める。

だが、それに気付かずピカチュウとスカタンクは互いに火花を散らせる。

スカタンクは雑魚を見るような嘲りの上から目線で。

対するピカチュウの方はというと、やはり昨日の不意打ちを忘れていないのか、恨みがましい視線でスカタンクを睨みつけていた。

事情を知らないペラッパは火花に気付かず、ピカチュウとスカタンクの顔をそれぞれ交互に見て、

「何だ。顔見知りなのか。」

なら話が早い。

この方々は弟子ではなく、遠征の助っ人として参加してもらうことになったのだ。」

「ええっ！！？」

驚きの声を上げたナエトルに一斉に弟子達が注目する。

その視線に気まずさを感じたのか、ナエトルは顔を赤らめ下を向き、黙ってしまう。

「何だ？　なんでそんなに驚くんだ？」

ペラッパが不思議そうな表情で首を傾ける。

それはドクローズがチンピラだからです。

とでも言ってやろうかと思ったピカチュウであったが、だが、ピ

カチュウが口を開く前に、スカタンクがペラップに向かって、
「ペラップさん、アイツは一々大げさんですよ。」

気にしないでやってください」

まるで下っぱの失態を取り繕うかのようなその言い回しに、ナエトルはムツとする。

「……………まあいいか。」

とにかく、親方様は遠征にこの3人がいてくれた方が戦力になると判断された」

ペラップのこの説明に不満を持たぬ弟子達はいないであろう。

助っ人を雇う位ならその分一人でも多く弟子達じぶんを選抜隊に入れて欲しい――

それが弟子達全員が一致して出した意見であつた。

だが、意見それを言うことは許されなかった。

ドクローズを雇ったのは他ならぬプクリン自身。

逆らえばどうなるか――弟子達に戦慄が走つた。

弟子達がそんなことを思っているなどと露程も知らぬペラップは、

もはや誰一人として聞いていない説明をただ一人続けていた。

「ただ、いきなり一緒に行動しても連携チームワークはとれないからな。」

よつて、遠征が始まるまでの数日間、暫くこのギルドで共同生活を送ることとなつた」

短い期間だが、皆仲良くするようにな」

『……………』

弟子達は絶句する。

遠征が始まるまであと9日間。

その間あの悪臭ニオイと共に生活しなければならぬと思うと――

弟子達全員の意見が再び一致する。

――早く遠征が終わって欲しい――と。

弟子達は半ばやけくそ気味に声を張り上げる。

すると不思議なことに、あれほど揺れていた揺れが突然、ピタリと収まったのである。

そのことに、弟子達は安堵する。

とりあえず危機は去ったと――

その後はいつも通り。

他の弟子達は自分の持ち場へとつき、ポケダンズも、今日も今日とて依頼の仕事を任された。

掲示板へと向かう途中、ドクローズとすれ違う刹那、何やらスカタンクがこちらを見て笑っていたが、ピカチュウはこれを無視した。あんな連中、相手にする方が間違っている。

どこか冷めた様子でピカチュウはそう結論づけたため。

だがそれでも、無性に腹立たしい気分だったので、ピカチュウは今日もお尋ね者の仕事いらいを選ぶことにした。

場所は今まで行ったことのない場所ダンジョン――緑の草原――という場所であつた。

――「――それで、盗まれた品物ものって、どんなものなの？」

ピカチュウの質問に答えない。

というか、話自体を聞いているかも怪しかった。

今回請け負った仕事いらいは盗まれた品物ものを取り返すという至極簡単なもの。

だがピカチュウには気が重かった。

その理由は二つあつた。一つ目の理由は依頼主がお尋ね者が潜んでいると思しき場所ダンジョンに同行していること。

そしてもう一つが――

「……えーつと。依頼書によると、盗んで逃げたお尋ね者はモンジあいてヤラってことだけど、これは合ってる?」

またも何も応えない依頼人。

その様子に、ピカチュウはがっくりと頂垂れる。

そう。もう一つの理由がこれ。

今回の依頼人——コダツクは極度の黙り症。

こちらが話しかけても反応がないのだ。

今まで見たこともないタイプの相手にどう対応していいかわからず、ピカチュウは思い切り困惑していた。

「……えーっと、コダックワタシの話聞いてる？」

暫しの沈黙の後コダックは小さく頷く。そして、

「……………若草グミ……………」

先ほどの質問の答えを、ようやく今になって返してくれた。

それを聞き、ピカチュウはそれ以上質問するのを止めにする。ことにする。

いや、質問してはいけないと悟る。

「ナエトル、後ろをよろしくね。」

「ワタシは前を見てるから」

「うん。わかつたよ」

依頼人を最後尾にして間違って野生ポケモンに襲われても困るので、コダツクを間に挟み、ピカチュウとナエトルは前衛と後衛に分かれていた。

場所自体はそれ程厳しくなく、3人は順調に歩を進めていた。

「ねえ、キミも若草グミが好きなの？」

「ボクもなんだよ」

唐突にナエトルはコダツクに話しかける。

襲ってくる野生ポケモンも少なく、暇をもて余していたためであ

る。

コダックはチラリとナエトルの方を向く。
その視線にナエトルはにこりと微笑む。

「おいしよね。」

あの後味の爽やかさがなんともいえなくて」

ナエトルの言葉に答える代わりにコダックは小さく首を縦に振る。

「ワタシにはよく分からないなあ。」

食べてみたけど。

ワタシは黄色グミの方が好きかな」

「まあピカチュウは電気タイプだからね。」

あの味の良さはわからないだろうね」

ナエトルのこの言葉にコダックはこくこくと頷く。

……うあ、何か腹立つんですけど。

2対1の少数派意見にされてしまったピカチュウは何故だか心が
イラッと感じた。

何か言い返そうかとも思ったが、それはできなくなった。

目的のお尋ね者を進行方向先に見つけたからだ。

「いた！ モンジャラ。」

アイツ？ アナタのグミを盗んだ相手って」

コダックはまたもこくりと頷く。

ターゲット
相手を確認し、ピカチュウは完全なる戦闘モードへと頭を切り換
える。

「オーケー。じゃあ、行くわよ！？」

そう言うとピカチュウは地を蹴り、空中へと高く飛び上がる。

相手から見れば草むらから突然ピカチュウが飛び出してきたよう
に見える筈である。

勿論そのこともピカチュウの計算の内であつた。

「……………！？」

「電気ショックー！」

ピカチュウはモンジャラに向かって電撃を浴びせる。

草タイプの相手には勿論効果は今ひとつなのだが、だが相手を牽制するには十分であった。

「……………っ!!?」

「アンタがモンジャラね!」

コダックからグミを盗んだのは!」

コダックから確認がとれているので言う必要のない台詞ではあるが、相手の出方と態度を伺うには口上はもってこいだっただけ、ピカチュウはお尋ね者の依頼を行う時には必ずこれをやると決めていた。

「……………」

しかし、モンジャラは何も答えず自らがまとっているツルを揺らしているだけ。

その態度に、ピカチュウはまたまた困惑する。

「……………えーっと、悪いけど返してくれない?

コダックが困ってるんだけど」

「……………」

やはりモンジャラは答えずただツルを揺らしているだけ。

……………お願いだから。何か答えて。

ピカチュウが心の中で呟いたその時、

「……………グミ……………好き……………」

……………返す……………ヤダ……………」

その解答に思わず脱力するピカチュウ。

アンタもそういうキャラかい!!

ピカチュウは心の中で突っ込む。

今日はこういう性格の当たり日のようでピカチュウの気持ちはすっかりとだらけきっていた。

そこに、ピカチュウのことを敵と認識したモンジャラが、ピカチュウに向けて攻撃を仕掛けて来た。

「ピカチュウ!!」

ナエトルの声で我に返った。ピカチュウはモンジャラの攻撃を寸で
のところでかわし、近くの草むらへと着地する。

「ああいう性格キアラでも一応お尋ね者ってわけね」

「……テキ……倒す……」

モンジャラはもう一度ピカチュウに向かってツルのムチを仕掛け
てくる。

だが、ピカチュウはこれを楽し々とかわし、再びモンジャラに向け
て電撃を浴びせかける。

効果が薄いといってもやはりダメージは溜まっていく。

連続で電気ショックを受けて、モンジャラは僅かに息を切らし始
めていた。

あと1、2回の攻撃を加えれば倒せる――

ピカチュウは頭の中でそんな計算をすると、今度はモンジャラに
向かって駆け出していた。

使う技は電光石火。

これならばモンジャラとの相性に関係なく、尚かつ、一撃で決め
られると考えたためである。

だが、モンジャラの攻撃は、ピカチュウの予想外の方向へと向か
っていた。

ピカチュウを相手にするのは不利と判断したのか、モンジャラは
コダックに向けてツルを伸ばしたのだ。

敵からの攻撃に備え、コダックを真ん中においたのが裏目に出た。

「しまった!!」

ピカチュウの体勢は既にモンジャラへと向かっている。
方向転換は不可能であった。

コダックは自分に向かって攻撃が来ていることを察することはで
きても避けることは出来なかった。

コダックは目を閉じ、その場に踞る。

「危ない!!」

モンジャラのツルがコダックに届く瞬間、ナエトルはコダックの前に飛び出し、コダックを庇った。

ナエトルはモンジャラのツルでがんじがらめになり、身動きが取れなくなる。

すかさずモンジャラは次の攻撃を繰り出してきた。

「うわあああっ!!」

ツルを通じ、緑色の光がナエトルに到達する。

すると、ナエトルは凄まじい脱力感に襲われた。

メガドレインで体力を吸い取られたのだ。

からみつくから解放されたナエトルはその場に倒れ、踞る。

「ナエトル!!」

思わず声を上げるピカチュウ。

コダックも心配そうな表情でナエトルの事を見つめる。

「……だい……じょうぶ……だよ……」

ボクが……必ず守ってあげるから……」

ナエトルはそう言ってコダックに笑いかける。

その笑みにコダックは瞳を潤ませて頬を赤く染める。

するとコダックは、今までにない鋭い目つきでモンジャラを見、

そしてモンジャラに向かって水流を浴びせかけた。水鉄砲である。

だが、草タイプのモンジャラにとって今ひとつ効果がないのか、

モンジャラは水鉄砲を受けても平気な顔をしていた。

モンジャラが再びコダックに向けてツルを伸ばそうとしたがそれは叶わなかった。

技を出す前にピカチュウが電光石火でぶつかり、阻止したのだ。

「……許さない……」

ピカチュウの瞳には明らかに怒りの色が宿っていた。

ピカチュウは再び電光石火でモンジャラに接近しようとする。

だが、そうはさせじと、モンジャラはツルを伸ばしてピカチュウ

をからめとった。

「きゃあー!!」

その声に、ナエトルは思わず顔を上げる。

既にピカチュウがモンジャラのツルに捕らわれていた。

「ピカチュウ!!」

待ってて……! 今助ける……」

ナエトルは動かない体にムチを入れ立ち上がる。

そして、走りだそうとするナエトルを止めたのはしかし、他ならぬピカチュウの声であった。

「来ちゃだめナエトル!!」

「でも……!!」

このままじゃピカチュウが!!

心の中でそんな言葉を続ける。

「コダックを守るんですよ!」

だったらそれに集中して!!

ワタシは大丈夫だから!!」

ちっとも大丈夫見えないナエトルは戸惑い、迷ってしまう。

自分がどうすべきなのか——その答えを一瞬で導き出す決断力はまだ彼には備わっていなかった。

「それに、捕まこらってるのも考えの内なんだから!

近くにいたら巻き込まれかねないわよ!」

「!??」

ピカチュウの言った言葉の意味が理解できず、一瞬その場にいる誰もが首を傾げる。

「普通に電撃を浴びせても効果は低い——

けど、“からみつく”でワタシを拘束している今の状態なら——
どうなるかな?」

そう言ってピカチュウは笑みを浮かべながら電気袋を光らせる。

「……………!!」

ピカチュウの言いたいことを理解したモンジャラは慌ててピカチュウを自分から放そうとした。
だが遅かった。

ピカチュウはありったけの電気を、モンジャラに向けて放出した
！！

「—————っ！！！！」

痺れた感覚がモンジャラの全身を襲う！

いくらツルを伝っているとはいえこの通電率は異常であった。
モンジャラには理解できなかった。

何故、これ程まで電撃でダメージを食らうのか――

「ちなみにコダックが使った水鉄砲覚えてる？」

アナタはあの攻撃を大したことのない一撃^{もの}だろうと思ってたんだ
ろうけど。

でもワタシにはチャンスだった。

水は電気をよく通すから。

一つ一つの攻撃の意味を考えなかったのがアナタの敗因」

ピカチュウはとどめと言わんばかりに最後の一撃を食らわす。
その電気量は既に電気ショックのそれを上回っていた。

モンジャラは最後の―撃で目を回し、その場に仰向けになって倒
れ込む。

もはや完全にダウンしていた。

モンジャラのダウンと共にピカチュウを拘束していたツルも力を
失い、それによりようやくピカチュウは自由となった。

「ピカチュウ！！」

声のした方にピカチュウは目をやる。

ナエトルが、ふらつきながらピカチュウの方へと走ってきた。

「ピカチュウ、良かった。」

怪我とかしてない？」

「当たり前でしょ？」

強いんだからワタシ。

それよりナエトルこそ大丈夫？
なんかすっごいふらついてるわよ？」

「大丈夫！」

この位なんともな……………」

そう言いながらよろめくナエトル。

ピカチュウは慌ててそれを支える。

「全く無茶するんだから。」

はい、オレンの実」

ピカチュウはトレジャーバッグからオレンの実を取り出しナエトルの口の中へと放り込む。

ナエトルはそれを黙って食べる。

「……………ありがとう。ピカチュウ……………」

——モンジャラをジバコイル保安官に引き渡し、コダツクの手には若草グミが戻ってきた。

コダツクは嬉しそうにそれをじっと見つめている。

「良かったねコダツク。」

グミが戻ってきて」

コダツクはナエトルとピカチュウの方を向き深々と頭を下げる。

それを何度も繰り返し返した。どうやら感謝しているらしい。

「いいんだよお辞儀なんて。」

当然のことをしたただけなんだから」

コダツクはお辞儀を止めると、ナエトルの方へと一歩前に出、両手を前に出す。

ナエトルはコダツクにつられ、右足を前に出した。

コダツクがその手に、自分が持っていた若草グミを静かにおいた。

「……………これ……………若草グミ……………？」

ナエトルはコダツクの方を向く。

「でもいいの？」

キミの大切なもののに……？」

コダックはにこりと微笑み小さく頷いた。そして、

「……………好き……………」

ナエトルはこの言葉をグミのことだと思った。

ナエトルも、自分と同じグミを好きなことを知って、お礼のつもりでくれたのだらうと考えた。

「ありがとうコダック」

ナエトルが微笑むとコダックは顔を赤らめそそくさとギルドから去っていった。

「お前達、よくやったな」

これからこの調子でがんばってくれよ」

コダックが去った後、ポケダンはペラップから労いの言葉をいただいていた。

だが、それを快く思わない者達がいた。

他ならないドクローズの連中である。

ドクローズがギルドに潜り込んだのは遠征でのお宝の横取りは勿論ではあるが、ポケダンスに嫌がらせをかけるちよっかい為でもあった。

3人はなんとかポケダンスを追い落とそうと策を巡らせていた。

だが、なかなかその機会を得られずやきもきしていた。

しかし、機会は突然やつてくることになる。

その日の夜——夕食だけでは満足できず、ギルドの食料庫に盗み食いに入ったドクローズ。

そのことが、ピカチュウとナエトルに、探検隊ポケダンスにとってピンチ危機となることを、この時、誰も予想できなかった——

Expedition - 12 ドクローズ(後書き)

ピカチュウ「本っっ気でメインと何の関係もなかったわね今話」

いやいや、それがそうでもないんだよねこれが(笑)

ナエトル「どういう事？」

そんなん言えるわけないじゃない。

ただこれだけ。

今日の話を覚えておくといいことがある……かも？

ピカチュウ「何その曖昧発言」

(笑)

さて、いよいよ舞台はリンゴの森！

ここからは独自路線で進んでいくよ！？

ピカチュウ「一体何企んでるわけ？」

それは見てのお楽しみ♪

ただこれだけは言っておこう。

楽に辿り着けると思っなよ？（笑）

ピカチュウ「……何その、（笑）は……（汗）」

さあて、それじゃあ行ってみましょう！

レディー・ゴー……！

——「——お前達、今日はちょっと食料の調達に行ってきたくれ」

『……………は……………?』

突然のペラップの申しつけにピカチュウとナエトルは目を点にし、間の抜けた声を出す。

ドクローズがギルドへやってきて翌日の出来事である。

今日も依頼の仕事へ向かう途中であったピカチュウとナエトルは、出かける直前の所を、突然ペラップに呼び止められた。

前回のように、また探検の仕事を言いつけられるのかと期待したナエトルであったが、ペラップが言い放ったのはこの一言。

驚かないわけがなかった。

……………し、食料の調達……………って、んな子供のおつかいみたいな仕事を……………

そんなことを考えながら、ふとここで何かに気付くピカチュウ。

「——でも、わざわざ取りにいかなくても、カクレオンのお店で買えばいいんじゃないの?」

ピカチュウの言葉に、ナエトルも同じことを考えていたのか、こくこくと首を縦に振る。

ピカチュウの鋭いツツコミにしかし、ペラップは困ったような表情を浮かべピカチュウの方を向く。

「普通に売っている食材ものならばそれでもいいのだが——

取ってきてもらいたいのは“セカイイチ”という食材ものでな。

セカイイチはカクレオンの店でも滅多に手に入らない珍品いっぴんなのだ」

「——セカイイチ？」

聞いた事のないその品名にピカチュウは首を傾げる。

「知ってるよ。一個食べただけで満腹になるくらい大きくて、しかもものスゴく甘くておいしいリンゴ^{もの}だつて」

対するナエトルは、噂で聞いたセカイイチの特徴をすらすらと挙げてみせる。

「その通りだ」

そのセカイイチなんだが——親方様の好物なのだ」

そういえば、夕食の時にいつも頭の上に乗っけて踊っていたような……？

ピカチュウは夕食時の風景を思い起こす。

「ところが、今朝食料倉庫を見てみたら、セカイイチの在庫が——何故か減っていたのだ」

「減ってた？ セカイイチが？」

ナエトルは不思議そうな表情をして首を傾げる。

「うむ。前日調べた時には確かにあつたのだが……」

「夜中にブクリンがこっそり忍び込んで食べたんじゃないの？」

ピカチュウのこの推理は半分正解で半分はずれである。

セカイイチを盗み食いた——という事実は正解であるが、食べた犯人が誰なのか——という箇所^{ところ}がはずれていた。

だがそれは、食べた本人達にしかわからないだろう。即ち、ドローズにしか。

「うむう、あり得なくはないが——」

ペラップはそう言うと言翼を組み悩むような表情をする。

「とにかく、セカイイチがないと親方様は……——」

ペラップがここで言葉を切ると、辺りには沈黙が訪れる。
疑問な表情を持ちつつピカチュウとナエトルは首を傾げペラップ
の次の言葉を待った。

が、いつまで経ってもペラップは喋る気配を見せず、黙って目を
閉じたまま――

それはまるで何かを思い出しているかのようなのであった。

「――……………親方様は……………」

……………なのだ」

ずるっ。

ペラップの言葉に、ピカチュウとナエトルはずるこける。
肝心な部分が全く聞き取れなかったからである。

「……………な、何なの？ それ」

「とにかく頼む！！ セカイイチを取ってきてくれ！！」

両羽を前であわせて拝むようにして頼み込むペラップを目にして、
ピカチュウとナエトルは顔を見合わせる。

ギルド直々のお達しとくれば無下に扱うわけにもいかない。

遠征まではあと一週間程度――

ここでこの仕事を成功させれば、選抜隊に入れる可能性はぐっと
高くなる。

――ナエトルの頭の中でそんな計算が働いた。

「うん！ ボク達が採ってくるよ！ まかせておいてー！」

ナエトルがそう言うだろうと思っていたのか、ピカチュウも黙っ
てこっくりと頷いた。

それを見たペラップは

「よし♪」

セカイイチはリンゴの森の奥深くにある。

いいかい？ これは簡単なようでも重要な仕事だからね。

何しろ親方様の……がかかっているのだからな。だからしつかりたのんだぞ？」

「オーケイ。行くわよナエトル？」

「うん！がんばろうピカチュウ！！」

そう言つとピカチュウとナエトルは意気揚々とハシゴを登つていった。

その様子を見ている者達がいた。ドクローズの連中である。

「ケツ。アイツ等、食料を採りに行くみたいだぜ？」

「へへッ。昨日俺達が食べちゃったせいでとんだとばっちりだな」ズバットとドガースは顔を見合わせ嫌味つたらしい笑みを浮かべる。

「まさか昨日の盗み食いがこんな好機会になるとはな。クククッ」
ビッグチャンス
「好機会？」

スカタンクの言つた言葉の意味が分からずズバットは問い返す。

「ククククッ。そうだ。」

奴らを陥れる。絶好の——な

「なる程。確かにな」

「少しからかつてやるか。へへッ」

3人は顔を見合わせ視線を交わし合うと、ハシゴを登つて外に出、ポケダんズの後を追うため、ギルドを後にした——

——「う……わあゝ！ リンゴがたくさん実^なつてる！！」

一面に実っているリンゴの実を見て、思わずナエトルは感嘆の声を洩らす。

ピカチュウとナエトルはリンゴの森の入口へとやってきていた。リンゴの森——というだけあって、辺りに生えているのは8割が

リンゴの木であり、周囲に甘いいい香りを漂わせていた。

「……おいしそう。」

1個位食べても罰当たらないかな？」

ナエトルが手近な所にあるリンゴの木に近寄り、物欲しそうな目でリンゴを見つめる。

「ちょっとナエトル、何やってるの。」

遊びに来たんじゃないんだよ？」

ピカチュウは地図から目線を外し、呆れた表情でナエトルの方を向く。

「——あ。うん。わかってるよ」

ナエトルは名残惜しそうにしながらもピカチュウの方へと戻ってくる。

「えっと、ペラップの話だと、セカイイチが実^なっている木があるのは、この森の一番奥だって言ってたよね？」

「そうね。森の中だから見た感じ虫ポケモンや草ポケモンが多そうだから注意していかないと」

「うん！ がんばって成功させなきゃ！」

そして選抜隊に入るんだ——！」

ナエトルの張り切る様子に、ピカチュウは小さく微笑む。

「やっぱり選抜隊^{それ}が理由^{もくてき}？」

セカイイチを収^と穫^とつて、プクリンの評^{かぶ}価^{かぶ}をあげておこつて——」

「うっ。」

「……なんでわかったの？」

ほらあ、またそうやってわかりやすそうな表情する。

「わかるよ。キミの考えてることはね」

ピカチュウは苦笑混じりにそう答える。

その表情にナエトルは顔を赤らめ下を向き黙ってしまふ。

——まさか、自分の考えを読まれているなどとは思わなかったのである。

打算で依頼を引き受けた自分がナエトルはなんだか段々と恥ずかしく思えてきた。

「どうしたの？ 顔が赤いけど」

「…… な、なんでもないよ!？」

さ、さあ、行こっか!！」

「う、うん」

ナエトルはそそくさと歩いていき、ピカチュウもそれに続いていた。

「——アイツ等、ようやく行ったようだな。へへッ」

「ケツ。無駄口たたいてないでとっとと行けっつんだ」

ピカチュウとナエトルが問答している間に、ドクローズはピカチュウ達に追いついていた。

悪事しか行っていない彼等であるが、皮肉なことに、彼等の實力は探検隊としては高い部類に入っているのである。

——いや、寧ろ能力が高いからこそ悪に走ったのかもしれない。己の才能におぼれ悪に走る——というのはよくある傾向である。

「さて、後を追うぞ。先回りして奴らを痛めつけてやる」

ドガースとズバットはニヤリと笑い頷いた。

そして、ドクローズも、ポケダンスの後を追ひ、森の中へと歩みを進めていった。

——ズバン!!

大きな音を立ててバタフリーが崩れ落ちる。

ピカチュウの電撃で一発K・Oとなったからである。

「——ふう。これで最後かな？」

ピカチュウは辺りを見回す。

辺りには、電撃で黒こげ——もとい、目を回している野生ポケモン達に転がっていた。

「こっちも終わったよ！」

少し離れた所からナエトルが声を上げる。

ナエトルもまた、襲ってきた野生ポケモン達を全てK・Oしていた。

「じゃ、先進も」

ピカチュウはトレジャーバッグをかけ直すと歩き出そうとした。

——が、途中で歩みを止め、その場に立ち止まる。

「？ どうしたの？」

「……………」

ナエトルが尋ねるがピカチュウはそれに答えず黙ったまま——

——次の瞬間、何かが動いた。

ピカチュウはそれに合わせ、右手だけを——動かした。

ふぎいいいいいい！？

悲鳴と共にパラスが転がり落ちてくる——

その胸には、銀の針が刺さっていた。

「——よくわかったね。

あの木にパラスが隠れてるって——」

ナエトルは倒れたパラスをじっと見つめてそう洩らす。

「うーん、気配でなんとなく、ね」

生き物には“気”というものが存在する。

別の呼び方では波導とかオーラなどと言ったりもするが、全て同じ存在である^{もの}。

感覚の鋭い人間やポケモンの中には、その気を敏感に感じ取ることができるのである。

ピカチュウもまたそうであった。

「しかも、今殆ど動いてなかったよね？」

なのに銀の針命中してるし」

「うーん、なんかこういう風に使ってたような気がするのよねえ」

そう言いながらピカチュウは手に持った銀の針をくると回転させる。

何故かはわからないが、ピカチュウは銀の針の命中精度が異様に高かった。

飛び道具は相手に向けて投げて攻撃する道具の一種である。

当然相手が避ければそれまで。ダメージを与えることはできない。だが、ピカチュウは狙いを外したことがない。

しかも、通常知られている飛び道具が与える以上のダメージを、相手に与えていた。

「――す、すごいね。」

ニンゲンだった頃は狙撃手^{スナイパー}だったんじゃないの？」

「そんなわけないでしょ？」

ほら、先へ進むよ？」

そう言っただけで今度こそ歩き始めるピカチュウ。だが、またも足を止める。

そして、今来た路の方をじっと見つめる。

「ピカチュウ、どうかした？」

「……………うん。何でもないよ。行こ」

ピカチュウは奥に向かって歩みを進めていく。

その道すら――

……一瞬、何かの気配を感じただけど……気のせいかな？

ピカチュウはもう一度だけ後ろをチラリと見る。

が、やはり何もない。

そのため、気のせいであると結論づけ、その後は振り向かずひたすら前を向いて歩いた。

だが、ピカチュウの勘は当たっていた。

ピカチュウ達の後を尾けている者達がいたのだ。

「――ククククツ。中々カンの良い奴だな。危なかったぜ」

そう言つて地中から姿を現したのはスカタンクである。

このスカタンクは穴を掘るを習得していた。

ピカチュウがスカタンク達の気配に気付き、振り向いた瞬間に咄嗟に穴を掘つて地中の中に姿を隠したのである。

「偶然じゃないですかいアニキ？」

ズバットの疑問に、スカタンクは首を横に振る。

「――いや。あのピカチュウ、俺サマ達の存在こゝろに気付いてやがった」
苦々しくそう洩らすスカタンク。

スカタンクは自分の気配を隠すことに絶対の自信を持っていた。

事実、かつて気配を隠した状態で相手に見つけたことは今まで一度も経験したことがなかった。

そのため、気配隠しで自分の存在しやうたいがバレることは絶対ないと自負していた。

だが、今日その自信が打ち砕かれた。他ならぬピカチュウによって。

そして先ほどまでの戦闘――

この2つのことで、スカタンクも、ピカチュウはかなりの実力者である――ということを、認めざるを得なかった。

「――おい、お前達をボコったのはあのピカチュウの方だったんだな？」

「！？」

ドガースとズバットは顔を見合わせる。

「……へ、へい」

「そうだけど……」

ドガースとズバットは小さい声で答える。

2人は、ピカチュウに負けたことをまだ気にしていた。

そして、^{その}負けた事を思い出したのか、その表情が段々と険しいものへと変わっていった。

「……あの女、俺達に恥かかせやがって」

ドガースが洩らしたその言葉に、スカタンクが反応する。

「――女？ アイツ、女なのか！？」

スカタンクはピカチュウが^{メス}であることに気付いていなかった。

……確かに声は高めではあると思っていたが……

「――だがあの容姿――」

スカタンクはピカチュウの外見のことを指摘する。

ポケモンの♂と♀に外見に違いがある種がいる――ということが発見^{みつ}かったのはもう随分前のことである。

なので近年では外見だけでそのポケモンの性別が区別されることがよくあるのである。

スカタンクもそうであつた。

「アイツは間違いなく女ですよ。」

あの女、俺達のことを散々なじったんですから。

アニキ知ってるでしょ？ 俺達が口げんか苦手なの」

—— なんていう判別法なのだろう。

自分の子分ながら、スカタンクは2人のことを、少々情けないと感じた。

「—— なら、決まりだ。

奴らを分断してピカチュウだけを狙う」

『ええっ！？』

スカタンクの言葉にドガースもズバットも耳を疑う。

2人はピカチュウに実力で押し負けている。

狙うのであれば、自分達よりも弱いナエトルの方を狙った方がいいのではないか——

そんな情けない考えを2人は抱いていた。

「—— で、でもアニキ。狙うならあの女じゃなくてももう1人の方がいいんじゃない……」

「そうだぜ。ナエトルなら楽勝で勝てるしな」

「クククッ。わかってねえのはお前等の方だ」

スカタンクは含み笑いをする。その言葉の意味がわからず、ズバットもドガースもぼかんとする。

「見た感じあのナエトルの方は大したことねえ。

この森の野生ポケモンでも充分ななんとかなる実力だ」

スカタンク話に納得し、ズバットとドガースはこくこくと頷きながら話を聞く。

「—— だが、ピカチュウは違う。

あの女は放っておいたら後々面倒だ。

だから潰しておく。俺サマ達の手でなんとかできる今の内にな」

「な、なる程……」

ズバットは感心したような声で納得の表情をする。

ドガースも同様に体をぶかぶかと上下させる。

「……確かに。」

あの女一人で俺達を相手にするのは無理だろうしな」

今回は自分達しかいないから負けてしまった。だが今回は違う。

今回はスカタンクアニキがついているのだ。スカタンクさえいればどんな相手にも勝てる——

ドガースはそう思っていた。そして、その考えが表情かおにも現れ、頬が緩んでくる。

「でも、どうやってアイツ等引き離すんですかい？」

「ククククツ。任せておけ。ちゃんと考えてある。」

とりあえずまた奴らを追うぞ。そして頃合いを見て、計画を実行に移す——」

——ピカチュウとナエトルはリンゴの森の奥深くまでやってきていた。

目的の場所であるセカイイチの木まではあと一步の所まで迫っていた。

野生ポケモンの襲撃もなく、ピカチュウとナエトルは順調に歩みを進めていた。

だが、ピカチュウはやはり違和感を感じているのか、辺りの様子をちらちらと伺いながら歩を進めている。

そんなピカチュウの視線に気をつけながら、スカタンクは尾行を続けていた。

そして、2人が広い空間のあるフロアまでやってきた辺りで——

「——よし。この辺でいいだろう」

スカタンクは持ってきた透明の玉を使うと姿を消し、手近な箇所ところ

に生えてる木に向かって体当たりをする。

すると、木からたくさんのスピアー達が落つこちてきた。

この辺り一帯がスピアーの群生地であることを知っているが故の行動であった。

スピアー達は巢を襲撃されたと勘違いし、襲撃者を捜し始める。

だが、透明な玉を使っていたスカタンク達の姿は見えず、代わりにその目に飛び込んできたのは先を歩いているピカチュウ達――

その為、スピアー達はピカチュウ達が襲撃者であると誤認してしまった。

スピアー達は真っ直ぐピカチュウ達に向かって飛んでいく。

その羽音を、ピカチュウの敏感な耳が捉える。

だが、振り向いた時には既に、スピアーの大群は目の前へと迫っていた。

「伏せてナエトル!!」

ピカチュウはナエトルを突き飛ばし自らも身を屈める。

丁度その機会タイミングで大量のスピアー達がピカチュウ達の頭上を通り過ぎていった。

ナエトルはピカチュウに文句を言おうとしたがその時間は与えられなかった。

通り過ぎたスピアーがUターンし、こちらへ戻ってきていたからだ。

「ハッパカッター!!」

ナエトルはスピアー達がこちらに辿り着く前にスピアー達を迎撃しようと技を繰り出す。

だが、相性の問題もあってハッパカッターで倒れたスピアーの数

はごく僅かであった。

ピカチュウもまた銀の針を使ってスピアー達を迎撃していた。

電撃で対応するには相手の数が多すぎ、なおかつスピアー達との距離が離れすぎていたからである。

ピカチュウとナエトルがスピアー達と攻防を繰り返している間に、スカタンクはある仕掛けをしていた。

「ククククッ。これでよし。」

あとはピカチュウが一人でセカイイチの所にやってくるのを待つだけだ」

スカタンクはピカチュウ達を見る。

ピカチュウ達はスピアー達に集中していてその視線に気付いていない。

「行くぞお前達」

「へい！」

スカタンクは奥へ向かって走り去っていく。

そしてドガースとズバットも。ピカチュウ達を嘲ると、スカタンクに続いていった。

一方、そんなことを知らないピカチュウとナエトルは、目の前の相手^{スピアー}を捌くのに手一杯の状態となっていた。

「っ！ 数が、多すぎる！！」

ピカチュウはスピアー達との距離を一旦空けるため、その場から跳び、大きく後ろへと下がった。

その時——着地の瞬間、ピカチュウは地面の感触に違和感を覚える。

普段の地面の感触と違い、妙に軽い感じがした。
構わずピカチュウが地面を踏みしめる力を強めると——

——それが発動した——

地面に大きな穴が開き、たった今まであつた足場が突如——消失した。

「きゃあああああ!!?」

その声に驚いてナエトルは声のした方を向く。だが、そこには誰もいなかった。

ついさっきまでそこにいたはずのピカチュウの姿が——突如として消えてしまっていた。

「……ピカチュウ? ピカチュウ!？」

——返事はない。否あるはずがない。呼んだ相手は既に、この階^{フロア}には存在しないのだから。

「ピカチュウ——!!!!!!」

無情にもその声はスピーカー達の羽音にかき消され、誰かの耳に届くことはなかった。

そして、またも2人は離ればなれとなってしまうた。

策謀を働かせた者達の計略によって——

リンゴの森編、まさかまさかの続くです！！

ナエトル「ここで続く！？　んなのあり！？（驚）」

うん。あり（笑）

本当は1話完結させるつもりでいたんだけど、続くにしちった♪

ナエトル「ていうか、ピカチュウはどこ行っちゃったの！？」

安心しな。消えちゃいないから。

ただちょーっぴり遠くへ行っただけだから♪

ナエトル「全然安心できないよ！！？（汗）」

（笑）

さて、次回は初の単独行動。

無事2人は合流することができのか——好ご期待♪

ナエトル「てか作者さん……ボックスピアー達に囲まれちゃってるんだけど……どうなるの？」

………がんばれよ♪↑ぽんと甲羅に手を置く。

ナエトル「ええええー！！！？（滝汗）」

Expedition - 14 セカイイチの前の対峙（前書き）

前回のあらすじでも

——ドクローズの企みによって引き離されてしまったピカチュウとナエトル。

落し穴に落ちたピカチュウの行方は？

そして、スピアー達に囲まれるナエトルの運命は——？
全ては今話を見ればわかる——かもしれない。

ピカチュウ「いや何！？ 最後のその曖昧な発言！？」

——「兄貴い、さっき仕掛けたあれは一体なんですかい？」

セカイイチをかじりながらズバットが問いかける。

「——アレか？ 前にある商人から買ったものだ。ククククッ」

スカタンクはやはりセカイイチを一口かじり、笑いながらそう答えた。

彼等がいるのはリンゴの森の奥地——セカイイチの^な実る^き大樹であった。

ピカチュウ達を罠にはめた後、彼等は何事もなくこの場所へと到達していた。

そして、やがて一人でやってくるであろう相手を、セカイイチを食べながら待っていた。

「アレを仕掛けた後でその場所を踏むと踏んだ者は罠を受けたのと同じ状況になるんだとよ。

少々値は張ったが、役に立ったな。

買っという正解だったぜ。ククククッ」

スカタンクの言っている「アレ」とはピカチュウがはまったあの落とし穴のことである。

不思議のダンジョンの中には極まれに、落とし穴などの罠が発生するダンジョンがある。

だが、それは極一部で通常のダンジョンには存在しない。リンゴの森もそうであった。

だが、遠い地方には、使う用途は違うが、似たような性質を持つ“装置”という物が存在する。

スカタンクが手に入れたのはまさにその装置であった。

しかもこの装置、自分が狙った箇所^{ところ}に仕掛けることができ、発生する現象^{もの}も罠^{トラップ}と酷似している物が非常に多い。

今回スカタンクが使った落とし穴を発生させる装置がそのいい例である。

これも不思議のダンジョンの特徴の一つなのだが、一度下の階^{フロア}へ降りる（または上る）と、それより前の階^{フロア}へと戻ることができなくなる。

つまり一度ダンジョンに足を踏み入れた者が選べる選択肢は、途中で諦めて脱出するか、先へ進んで突破するか、の2択のみなのである――

ピカチュウが脱出を選ぶことはまずないだろう――スカタンクはそう読んでいた。

ならば、先にダンジョンを突破し、奥地^{奥地}で仲間が来るのを待つに違いない――そう考えていた。

つまりスカタンクは、ピカチュウ一人を確実にセカイイチ^{ここ}の樹におびき寄せるために落とし穴の装置を使い、二人を分断したのである。

「けど兄貴、本当にあの女来やすかね？」

ドガースは口いっぱいにセカイイチをほおばりながら思っていたことを口にする。

「クククッ。来るさ。」

逆に来なけりやその程度のヤツだったってことだ」

そう言っつスカタンクは笑いだす。

――セカイイチの大樹^きに、怪しげな笑い声が響き渡った――

「……ううゝ、ったあゝ」

ピカチュウは腰をさすりながらそう洩らす。
そして、暫く経った所で適当に辺りを見回した。

——先ほどまでいた場所とは違う場所。

気付けば、あれだけ喧しく聞こえていたスピアー達の羽音が今は完全に消えており、しんと静まりかえっていた。

それにより、ピカチュウはさっきの穴から、下の階へと落ちてしまったのだと理解した。

「——とりあえずスピアー達との戦闘は避けられたみたいだけど——」

ピカチュウは再び辺りを見回す。

だが、いくら探してもナエトルの姿はない。

どうやら下の階へと落ちてしまったのは自分だけであると——そう理解した。

「……また離れちゃったのか……」

ピカチュウはため息をつく。

ナエトルと離ればなれになるのはこれで二度目である。

——だが、滝壺の洞窟の時ほどの悲愴感を感じてない。

今回は相手の居場所がわかつている。

同じ空間にいる限り、必ず逢える——ピカチュウはそう思うことにした。

「——これからどうしようかなあ……」

ピカチュウはこれからのことを考える。

前の階に帰ることが出来ないのは、ピカチュウもよく分かっていた。

そうなるを選べるのは——脱出か突破の2択のみ——

だが、脱出は選べなかった。

穴抜けの玉を所持していない——というのも理由としてあったが、それ以上に、ピカチュウ^{たったひとり}だけで脱出するワケにはいかなかったからである。

——帰るときは二人で帰る——

ピカチュウはそう決めると立ち上がり歩き始める。

先の階^{フロア}へと続く階段を探す為であった。

——「……あ、はあ、はあ……」

ナエトルはスパイア達の魔の手からなんとか逃れ、階中^{フロア}を駆け回っていた。

——目的は勿論、下の階^{フロア}へと続く階段を探すためである。

ナエトルは、ピカチュウが何らかの理由で下の階^{フロア}へと落ちたのだと考え、戦いを避けて下の階^{フロア}を目指していた。

元々逃げるのが得意だったナエトルにとってスパイア達の攻撃から逃れることはそれほど難しいことではなかった。

だが、スパイア達が簡単に逃がしてくれるはずもなく、現在^{いま}はナエトルとスパイア達の追いかけっこが続いていた。

——ミサイル針に毒針。

スパイア達はナエトルを追い掛けるその間も技を繰り出し、追撃する。

そのどれも、ナエトルは巧みにかわし、逃げ続けていた。

——どれ位逃げ回っただろうか、ナエトルは走っている先に階段を発見する。

階段を見つけ、ナエトルは安堵する。

——あとは階段に駆け込むだけでいい——そう思っていた。
だが、安心は脆くも崩れ去る。

階段の目の前に、数匹のスピーアー達が立ちはだかったのである。

そして後ろには今まで追い回していたスピーアー達。
完全に挟まれてしまった。

「……っ……!!」
追い詰められたナエトルはその場で立ち止まり、緊張の表情で身を固くした。

——「——ここがリンゴの森の一番奥か——」

ピカチュウはあれからすぐに下へと続く階段を発見し、リンゴの森の奥地へとやってきていた。

とりあえず、当初の目的であるセカイイチの収穫を済ませてしまおうと考えたピカチュウはセカイイチの大樹^きを目指して歩みを進めていた。

そして、暫く歩き続けていると、先の方に、一際高い大きな大樹が生えているのが目に入る。

ピカチュウの足は、自然とそちらの方へと向かっていった。

「……うわあ……」

ピカチュウは思わず声を洩らす。

その巨大な大樹^きは、まるで他のリンゴの木から隔離されているかのように、中心に1本立っていた。

近づいてみると益々その大樹^きのでかさがよくわかり、ピカチュウはこの巨木が、まるでこの森の木の主であるかのように錯覚した。

葉の間から洩れる太陽の陽光とさざめきがピカチュウの心を優しく包み込み、穏やかにする。

目的を忘れ、ピカチュウは暫しこの巨木をじっと見つめていた。
「——っといけない。見入ってる場合じゃなかった。」

セカイイチ探さないと」

ピカチュウは大樹の上の方を見上げる。

そして、その大樹に実る、たくさんのリンゴの実に気がついた。

「もしかして、あれがセカイイチ？」

どうやって採ればいいんだろう……？」

セカイイチはかなり高い位置に実っていてピカチュウの身長では届きそうにない。

そうになると、やっぱり樹に登って1個ずつ採っていくしかないかなあ。

まあナエトルはまだ来ないだろうし、時間はあるけど。

……でも……木登り苦手なんだよなあ……

ピカチュウがそんなことを考えていたその時である。

「——ククククッ。そんなの簡単じゃねえか」

——どこからか声がする。その声に、ピカチュウの耳がぴくりと反応した。

自分以外にこの場に誰かがいると思っていなかったピカチュウは驚いた様子で辺りを見回した。

「誰!？」

ピカチュウの問いに答えるかのように、森の中に「ククククッ」という声が響き渡る。

そして、ピカチュウの目の前に、セカイイチの大樹から3つの影が落ちてきた。

「——アナタ達は——！？」
驚きの表情で、ピカチュウは目の前の相手を見つめ、そう洩らした。

——バシユン——！

ナエトルの放ったハツパクターがスピアーの一体を打ち落とす。だが、スピアー達の数は全くといっていいほど減っていなかった。1体を倒してもまた新たな1体が付け加えられる——それがひたすら繰り返される。

まさに無限ループ状態と化していたからである。

スピアー達はまるで、数は力——とでもいうかのように、その圧倒的な兵力でナエトルを圧倒していた。

その無数とも言えるスピアー達が1体1体個別にナエトルに襲いかかってくるのである。

いくらナエトルが攻撃を避けるのが上手いからといっても、さすがに全ての攻撃を捌くのは不可能であった。

本来ナエトルの種族は素早さ^{スピード}に特化した種族ではない。

その動きには自ずと限界が生じてくる。

スピアー達はそれを見逃さなかった。

スピアー達の攻撃は確実にナエトルにダメージを蓄積させ、動きを鈍らせていく。

徐々にナエトルの体力は限界に近づいていった。

「……もう、一体だけ出てくるんだろう？」

いい加減にしてほしいよ全く^{たたく}」

ナエトルは終わりの見えない戦闘^{たたかい}に焦りを感じ始めていた。

この先で待っているであろう相棒^{パートナー}と一刻も早く合流しなければな

らない――

そんな想いがあつた。

それ故、こんな所で時間を食つてゐる場合じゃないと、若干の苛立ちも覚え始めていた。

……こんな時、ピカチュウがいてくれたら……

ナエトルは今は離れてしまった相棒パートナーに想いをはせる。

そのことが、ナエトルに更なる隙を生み出した。

スピアーは容赦無く自分の毒針をナエトルに向けて突き立てる！
そのことに気付いたナエトルは寸でのところでかわし、攻撃してきたスピアーに向けて体当たりを仕掛ける。

その一撃により攻撃してきたスピアーは倒れるが、背後から別のスピアーが一体近づいてきた。

そして、未だ気付いていないナエトルの甲羅せなかに、毒針を突き刺した――！

「うああっ――！」

後ろからの不意打ちにたまらずナエトルは崩れ落ちる。

今の一撃により遂にナエトルの体力が限界を迎えた。

ナエトルはその場に倒れたまま動かない。

だが、ナエトルが倒れても、スピアー達は攻撃の手を緩めない。
スピアー達は倒れたナエトルに向かって容赦なく毒針を突き立てていく。

……ピカチュウ……

心の中でナエトルは呟く。

助けにくるはずのない相手に。まるで縋りつくかのように。
必死に、その名を呼び続けた。

——「ククククツ。ドクロース参上!!」

スカタンクは大樹^きから飛び降りるなりそう言い放つ。

スカタンクの台詞に合わせてズバットとドガースは決めポーズを決めたりしていた。

「へへッ。随分来るのが遅かったなあ」

「俺達はここでセカイイチを食いながらお前が来るのを待ってたんだぜ？」

あんまり来るのが遅すぎて食い過ぎちまったよ。ケツ」

「……………」

ズバットとドガースの言葉にピカチュウは何の反応も見せず、ただ黙り込んでその場に立っていた。

目の前にいる連中が何故、また何の為にここにいるのか——その理由を理解しかねていたから。

「何だ？ 驚きのあまり声も出ないってか？ へへッ」

「いつもの強気な態度はどうしたんだよ？」

それともなにか？ 仲間^{ナエトル}がいらないと心細くて怖くて泣きそうってか？ ああ？」

ドガースとズバットはピカチュウが何も喋らないことを良いことに、まるで今までのうっぷんを晴らすかのように好き放題に言いまくる。

2人とは対称的に、スカタンクは口をつぐんだまま。

ピカチュウがどんな反応を見せるのか——見てみたいという心理が働いたからである。

その当のピカチュウはというと、ドガースとズバットの話を完全

に聞き流して（元々聞く気が無い）、今度のことを頭の中で整理していた。

思えば、今回の探検はおかしな事ばかり続いていた。何故か——その解答を、断片的ではあるが、ピカチュウは理解し始めていた。

——まず最初に感じた何者かの気配。

やはりあれは気のせいではなくドクローズのものであると理解した。

そして先ほどの落とし穴——あれもドクローズの仕業だろう。

何故そんなことをしたのか——ナエトルがいないことから考えても、それは自分とナエトルを引き離すためであるという結論を導き出した。

ピカチュウは鼻で小さく笑うと、呆れた表情でスカタンクに目をやる。

「わざわざこんな手の込んだことして。ご苦労なことね。」

「よっぽど暇なのね？ アナタ達」

ピカチュウの挑発を含んだ言葉に、ドガースとズバットは表情を変え、態度を一変させる。

「なっ！？ 何だとこの女っ！！」

「それとも、悪いことばかりやってるから誰にも相手にされなくて寂しいから他人を妨害して相手の注意を引いてるとか？」

「こっ！ こっっ！！」

ピカチュウの挑発にアツサリと乗るズバットとドガースの2人。

2人は今にもピカチュウに攻撃を繰り返す打さんといわんばかりの勢いである。

これでこのまま相手が攻撃かけてくれば悪いのは相手。

例え相手をボッコボコ——もとい返り討ちにしても正当防衛を主

張できる——ピカチュウはそんな筋書きを立てていた。

だが、ピカチュウの目論見をスカタンクが阻止する。
スカタンクはドガースとズバットを制し、あの嫌みったらしい含
み笑いをする。

「何か勘違いをしているな？」

俺サマはお前に協力してやろうと考えていたんだぞ？」

「協力？」

胡散臭げな表情でピカチュウは眉をひそめる。

ピカチュウはスカタンクの言葉を、全くと言っていいほど信じて
いなかった。

寧ろ信じるという方が無理であった。

「さつきセカイイチをどうやって採ろうかと言っていただろう？」

「……………」

ピカチュウは口を閉ざす。

その様子にまたもや笑みを浮かべるスカタンク。

「簡単なことだ。見ている」

そう言つとスカタンクはセカイイチの大樹きに向かって歩いていく。
そして、辿り着くなり、大樹きに向かって、思い切り体当たりした。
スカタンクのたけあたり
衝撃で大樹は揺れ、それに連動し、セカイイチが1個、また1個
と落ちてきた。

「！！」

「ほらな。簡単だろう？」

とつとと拾つてギルドへ帰るがいい。ククククッ」

スカタンクの嘲笑につられてドガースとズバットも笑いだす。

ところが、ピカチュウは黙ったままそこから一步も動こうとしな
い。

その表情は、ドクローズに対し、あからさまに疑いの眼差しを向

けていた。

「？ どうした？ 拾わないのか？」

せつかく親切にしてやっていっているというのに」

「あのねえ。この状況ではいそひそひですか。ありがとうございます。って拾う人がどこにいるっていうのよ。」

何か企んでいるのが見え見えなんですけど」

ピカチュウはこめかみを押さえながら答える。

「おいおい。その言い方はないだろう？」

こっちは親切にしてやってるんだぜ？ 人の親切は素直に受けるもんだらう」

「そうだぜ。人の好意を踏みにじるなんざ探検隊にあるまじき行為だぜ？ へへッ」

……いや、他人の持ち物盗んでいくような探検隊に言われたくないんですけど。

「疑り深いヤツだな。少しは信用したらどうなんだ？ ん？」

「……あのねえ。信用してもらいたかったら自分達の行動を改めることね。」

ここに来るまでに散々嫌がらせしてきた相手を、一体どうやって信用しろっていうわけ？」

「なんの話だ？ ククククッ」

あくまでスカタンクはとぼけようとする。

これがかまかけなのではと警戒してのことである。

だが、ピカチュウにとって今の言葉はかまかけでも何でもない。

既にピカチュウの思考はスカタンクの思考を遙かに上回っていた。スカタンクがとぼけることも、ピカチュウには予想の内だったのである。

だから次はこんな言葉を言ってみることにした。

「言わなくてもわかると思うけど？」

そう言ってピカチュウはスカタンクから視線を外しドガースとズバットの方を一瞥する。

その視線は明らかに——お前等がやったんだろ？——という意味が明確に込められていた。

「何だ？ 俺達に因縁つける気か？ ああ？」

「酷でえ女^{ヤツ}だなあ。無実のポケモンを疑うなんてよお」

……ほくら乗っかってきた。

ピカチュウは内心でほくそ笑む。

先ほどまでの会話で、スカタンクは自分の手の内を明かさな^た性格であることがピカチュウには読^ちめていた。

それはつまり言い換えると、相手と駆け引きができるということである。

駆け引き^{うごき}ができる相手に勝つ^いためには、自分側^{じぶんがわ}も相手の心理部分を深く読み、その中にある穴をつき、裏をかかなければならない——正直言^{まこと}ってこれとはことんメンドくさい。

ピカチュウはドクローズを、そこまでせねばならない相手だと認識^みていなかった。

なので、駆け引き^{うごき}をする必要性も感じていなかった。

駆け引きするよりも、楽な相手が他にいたからである。

「誰もそんなこと言^いってないけど？」

「ケツ。口で言^いわなくても顔にしっかり書いてあるんだよ——」

俺達を疑^うってるってな——」

「そうだそうだ。俺達がやったってという証拠でもあるって言うのか？

文句があるなら証拠を見せてみな。へへッ」

ドガスとズバットは余裕を見せそう言った。

それは、自分達の行いが絶対^{やったこと}にばれるわけがないと自信を持っていたからである。

だが、スカタンクだけはこの会話に危機感^{やりとり}を募らせていた。

傍目からすればこの状況はドガスとズバットが有利であると感じるであろう。

だが、スカタンクは気付いていた。

2人がピカチュウの誘導に乗せられていることに。

このまま会話が続けばいずれろがでかねない——スカタンクはそれを危惧していた。

スカタンクは何とか会話を妨げようと口を開こうとその隙を伺おうとする。

だが、スカタンクが口を挟む前に、ピカチュウが先に口を開いた。

「事実でしょ？」

それとも何？ 前の階で木に体当たりしてたのはスパーク^{フロア}ふっかける為じゃなくてリングゴでも採ろうとしてたからなの？」

ピカチュウの言葉に、今度こそドガスとズバットはまともに顔色を変える。

「！！ なっ！？ なんでそれを！？」

「なんで俺達の仕業だっけわかったんだ！？
姿を消してたはずなのに！？」

はい大当たり。ご苦労様。

ピカチュウはにやりと口元を歪ませる。

自分の推測が正しかったことへの確信と、こちらのかまかけにア

ッサリと乗った相手の浅はかさにおかしさを堪えきれずに。

「——ふん。やっぱり、アンタ達の仕業だったんだ」

「あ？——！！」

「テメエ、はめやがったな！？」

ピカチュウがハツタリかましたことにドガースはようやくここで
気付く。

さらに遅れてズバットは、ドガースのはめられたという言葉でよ
うやく気がついた。

「こっ！！この女あまっ！！」

ズバットは額に青筋を浮かべる。

2人の様子に、スカタンクは首を横に振り、軽くタメ息を吐く。

「……バカか？ テメー等は……」

スカタンクの呆れる様子にドガースとズバットは羞恥のあまり俯
いてしまう。

その様子に、ピカチュウもやれやれといった仕草を見せ、

「本当、ダメな仲間持つと苦労するよね同情するよ」

ピカチュウの言葉に再びドガースとズバットが食いつくが今度は
ちゃんとスカタンクがそれを制した。

「ククククツ。言ってくれるじゃねえか。

確かに。お前の言う通り、お前をはめたのは俺サマ達だ。

引つかからなかったのは少し残念だったけどな」

これ以上隠す必要性がないと判断したのか、いともアッサリとス
カタンクは今までの行いを自分達の仕業だと認める。

だがこれは諦めたわけではなく、スカタンクはまだ自分の優位に
確信を抱いていたためであった。

「——だが、それを知ってお前は一体どうすると言うんだ？ え？」

「……………」

ピカチュウは応えない。

スカタンクの言う通り、今の状況をどうするか——ピカチュウはまだ決めかねていたのである。

「まさか俺達と戦うなんて言うんじゃないだろうな？

頭のいいお前ならわかるはずだ。今のこの状況をな」

ピカチュウの心情を知ってか知らずか、スカタンクが言い放つ。

そしてズバットとドガースは、ピカチュウを挟み込むようにピカチュウの左右へと回り込む。

ピカチュウはそれを、横目でチラリと見た。

「俺達は3人でお前は1人。

どう足掻いてもお前に勝ち目はねえ」

スカタンクはピカチュウにさらに^{プレッシャー}圧力をかける。

——戦う前に相手の戦意を削ぐという方法はよく知られている。

スカタンクはこのことにも長けていた。

大抵の相手は^{これ}圧力で怯み、戦闘にならないことの方が多く、これはスカタンクの自慢でもあった。

戦わずして相手に勝ったという——強者のみが得られる充足感であると自負していたのである。

対するピカチュウは、スカタンクの^{プレッシャー}圧力など気にもとめず、冷静に現状を分析していた。

^{ドガースとズバット}……左右の2人は以前に^{まえ}戦ってるから何とかなるだろうけど、問題は正面——

スカタンクとは一度も戦ったことがないから、どれだけの^{レベル}実力なのか未知数——

果たしてどうなるか——

ピカチュウは臆する様子もなくただその場に佇んでいる。

そのことに焦れたのかスカタンクは、

「悪いことは言わねえ。」

謝るんなら今の内だぜ？

詫びさえ入れりゃあ俺達もこれまでのことは水に流してやるぞ？

ククククッ」

スカタンクの台詞にピカチュウはふつと笑う。

そして、今の言葉を聞いて、これからやるべきことを、はっきりと理解した。

「……ふつ。」

ウソつくんならもう少しましなウソついたらどう？」

「なんだと？」

「ワタシ1人をここへおびき寄せた時点でアナ達が戦う気満々でいることが丸わかりよ？」

スカタンクは顔色を変える。

——そう。ピカチュウがどう反応しようともスカタンクはピカチュウと戦う気でいた。

そのことを、ピカチュウは先ほどのスカタンクの言葉で察知していた。

——戦う以外、選択肢はない——と。

先ほどピカチュウが見せた笑みは、その諦めと開き直りの笑みであつた。

「どうせ海岸の洞窟このまへのバトルで負けたことへの腹いせのつもりだったんでしよう？」

スカタンクは言葉を詰まらせる。

その表情には、明らかに動揺の色が見て取れた。

「ナエトルとワタシを引き離したのは、ワタシを放って置いたら後々面倒になってくると危機感を感じて今の内に潰しておこうという考えが芽生えたから。」

そして、ワタシ1人だけなら3人で一斉にかかればなんとかないと判断したから。でしょ？」

こいつつ！　そこまで読んでやがったのか！？

スカタンクは、自分の考えを完璧なまでに読んだピカチュウに驚き、啞然とする。

ドガースとズバットも、ピカチュウがたった今言い放った言葉がスカタンクが話していた内容をそっくりそのまま詠唱したことに驚愕し、目を点にする。

拳げ句、頭の弱い2人は、ピカチュウは超能力者なのでは？——という錯覚まで覚えてしまっていた。

「まあ、そう思いたくなるのも無理ないけどね。」

だって強いもんワタシ」

「……クツ、ククククツ。」

ばれてたのか。じゃあしょうがねえな」

それはもはや開き直りともとれる発言であつた。

スカタンクはピカチュウとの駆け引きは無駄だということを悟つた。

悔しいことではあるが、駆け引きにおいては、自分よりも相手の方が何倍も上であると、認めざるを得なかったからである。

——ならば、スカタンクが取れる行動は、たった一つしかなかった。

「——なら、これ以上、無駄話が必要ねえな」

スカタンクはそう言いながら両前足を左右に開く。

それは威嚇であり、攻撃の姿勢でもあった。

「まあそうなるね」

ピカチュウはそう言いながら右手で頬をぼりぼりと搔く。

ピカチュウはまだ戦う体勢を見せていなかった。

「言っておくがな、俺サマは相手が女だからといって容赦はしねえ。俺達の前に立ちはだかる相手は、誰であろうと、叩き潰す!!」

「あ、そう。

でも、そんな台詞吐いてる時点でもう相手を見くびってる証拠だよ?
よ?

油断してると痛い目みるのはそっちかもしれないわよ?」

「言ってくれるな。

行くぞ!! お前達!!」

『おうっ!!』

スカタンクの掛け声ですバットとドガースは一齐にピカチュウに向かって飛び出していく。

ピカチュウもまた、スカタンク^その声で表情が変わり戦闘モードへと切り替わった。

今ここに、ピカチュウと、ドクローズによる戦いの幕が切って落とされた――

ピカチュウ「——ちょっと、また続くなの!？」

うん。続くだ。

ピカチュウ「一体いつまで続くのよ。

ゲームではそんなに重要な幕所じゃないわよここ?」

一応リングの森編は次話で終息させるよ。

だから大丈夫大丈夫♪

キミは思いつきり奴らとバトってくればいいから（笑）

ピカチュウ「しょーがないわねえ」

ナエトル「あー、ボクは一体どうなるの?」

あ、忘れてた（汗）

ナエトル「……ひ、酷い（泣）」

……で、できた（汗）

ピカチュウ「遅い（怒）」

わかってる。自分でもわかってるから（汗）
どうも月2週目は調子がよろしくないなあ。なんで？

ピカチュウ「知らないわよ。いいからさっさとあらずじ言っ」

……は、はい（汗）

えー、ナエトルがスパアのフクロに合うなか、ピカチュウはセカイイチの樹の前でドクローズと対峙する。

ナエトルの運命は？

そして、ドクローズとの勝負の行方は？

全ての決着がここに決まる——！！

——ナエトルは無力感を感じていた。

無数のスピア達に囲まれ、襲われている。

にも拘わらず一向に動く気配を見せず、その場でうつ伏せになって倒れている——

もはやナエトルは相手^{スピア}に対して反撃する気力を完全に失くしてしまっていた。

体力が限界に達し、まともに動けない——というのも理由としてあったが、だがそれだけではなく、他にも原因があった。

一番の原因、それは——

——ピカチュウが側にいないこと——であった。

今までにも何度か戦意喪失^{こたなつた}ことはあった——だが、そのたびにピカチュウに励まされ、助けられてきた。

ピカチュウが一緒^{そば}にいてくれたからこそ、自分は前に進んでこられたのだとナエトルは気付いた。

——いや、気付かされた。

ピカチュウがいなくてここまで気力が萎えてしまったのがその決定的な証拠。

——そして同時に、自分一人だけでは、何もできぬのだということと思い知らされた。

己の無力さを呪い、絶望感を抱きながら、ナエトルの意識は、暗い闇の底へと、墮ちようとしていた。

——「スモッグ!!」

「風起こし!!」

毒ガスを含んだ毒風がピカチュウへと迫る。

ピカチュウはそれを高く跳躍^とび、上へ逃げることによって毒風の範囲から逃れる。

だが、そこへすかさずスカタンクが、まるで待っていましたと言わんばかりに、攻撃を繰り出してきた。

「嫌な音!!」

不快な音が辺りに響き渡る。

音の技の前では、どのような回避方法も意味を成さない。

ピカチュウの耳を嫌な音がまともに捕らえ、貫いた。

それによりピカチュウはバランスを崩し、不安定な体勢となる。そこへすかさず、ドガースとズバットが次の攻撃を繰り出してきた。

「体当たり!!」

「ツバサで打つ!!」

連続で攻撃を繰り出し猛追してくる2人に対し、ピカチュウはこれを落下しながらもなんとか避けていく。

だが、空中ということもあり、ピカチュウの動きに徐々に限界が生じてくる。

やがて、ズバットの翼の一部が、ピカチュウの脇を浅く捕らえた。それにより、ピカチュウは僅かに顔を歪める。

その隙を突き、ドガースが追撃を繰り出してきた。

ぐばあ!!

ドガースの体当たりがまともに入り、鈍い音が響き渡る。

嫌な音の効果もあって、かなりの衝撃がピカチュウの全身を伝わってきた。

それでもなんとか体勢を整え、ピカチュウは地面に着地した。

「……はあ、はあ……」

ピカチュウは息を荒げる。今の一撃が相当聞いたのか、片目をつむり、かなり険しい表情をしていた。

その様子に、スカタンクは余裕の表情を浮かべる。

「もうお終いか。デカイ口叩いてた割には大したことないな。え？」
やかましい！！

ピカチュウはその言葉を声には出さず、心の中で悪態をつく。

「——何故反撃してこない？」

あいつ等の話ではお前はかなりの実力だと聞いていたんだがな。

え？」

「……………」

ピカチュウは応えない。応える必要性を感じなかったから。

「逃げ回るのがお前の得意技なのか？ え？」

それとも、俺サマ達があまりに強すぎて戦う気が失せたか？ ク

ククククッ！！」

スカタンクの笑いにつられて空中にいるズバットとドガースも笑い始める。

もはや3人は、自分の勝利を信じて疑っていないかった。

一方のピカチュウは、この状況に若干の焦りを感じ始めていた。予想に反して、ドガースとズバットの2人が手強かったからである。

——以前戦った時と比べて、あの2人の動きが格段に伸びている——ピカチュウはそう感じていた。

それは、あの2人が力量アップしたからでなく、スカタンクという絶対者があるからであるとピカチュウは睨んでいた。

——仲間であるという利点を上手く利用して相手はかかってきている——

今更ながらピカチュウは、3対1というこの現状が不利であると受け入れざるを得なかった。

しかし一方で、この状況を打ち破る対抗策をピカチュウは既に考えていた。

——だが、この作戦には危険も伴っていた。

使うタイミングを誤れば作戦が台無しになってしまう——ピカチュウはそのタイミングを、攻撃を避けながらずっと待っていた。

作戦の要となる、重要人物の到着を——

……ナエトル……

ナエトルならきつと、大丈夫だよな？

ワタシはそう、信じてるからね——

ピカチュウは目を閉じ、心の中でそう呟くと、再びスカタンクの方に向き直る。

今の自分にできる——最大限の努力をする為に——

——ピカチュウとドクローズが戦っている刹那と全く同時刻——

ナエトルは暗く閉ざされた闇の中で、遠く離れた視線の先に光を見つけた。

そしてその光が、まるで何かを訴えかけるかのように、強く輝き続けているかのようにナエトルには感じられた。

……ピカチュウ……？

ナエトルにはその光がピカチュウのように見えた。

そして輝き続ける光は——ピカチュウが、自分に向けて何かを伝えてるように見受けられた。

……ピカチュウが……ボクを……呼んでる……？

その言葉に応えるかのように、光は更に輝きを増して反応を見せる。

そして、更に何かを訴えかけてくる——

——ボクのことを——待っている——！

想いと共にナエトルはかっと目を開くと現実の世界へと戻ってくる。

目が覚めた視線の先には、1体のスピアーが、止めの一撃と言わんばかりに毒針をナエトルに向けて突き立てている所であった。

咄嗟にナエトルは地面を転がり、スピアー達の輪の中から抜け出ると、痛む体に力をいれ、氣力を振り絞り何とか立ち上がった。

「……あ、はあ……」

こんな……所で……寝てる場合じゃ……ない……

……ピカチュウが……ボクが……来るのを……信じて……待ってるんだ——！」

その瞬間——ナエトルに変化が起きた——

頭の葉が輝きだしたのだ。

——それはナエトルの想いの現れ——

何が何でも負けないという——強い意志が、形おもいとなって具現化した瞬間であった。

スピアー達は再びナエトルに向かって対峙する。

——今度こそ仕留める——

そんな意思表示の現れであるかのように——

全てのスピアー達が両手の毒針をナエトルに向けるような姿勢を取った。

だが、臆することなくナエトルはスピアー達を睨みつける。

両者の睨み合いは暫し続き、やがてスピアー達が——動いた。

スピアー達はナエトルを逃がさぬよう、全方位から向かってきた避けることも逃げることもできぬと——ナエトルの逃げ場はないと、スピアー達の誰もがそう思っていた。

ナエトルはその場を動かず意識を集中させる。

そして、目を開くと、体を捻らせ、その場で1回^{ターン}転した。

「——ハッパ……カッター……!!——」

ナエトルの放ったハッパカッターが四方へと飛んでいき、その全てがスピアー達に命^{ヒット}中する!!

回転力が加わったことにより、その威力は、通常の倍近い攻^{きれあじ}撃力を備えており、相性の悪さという点を克服していた。

ハッパカッターはまるで嵐の如くスピアー達を強襲し、次々と打ち落としていく。

やがて葉の嵐が収まる頃には、全てのスピアー達が地に伏していた。

「……はあ、はあ……」

……や、やった……スピアー達を……全部、倒し……」

ナエトルは力を失いその場に倒れそうになる。

だが、気力でなんとかそれを堪えた。

「……急がなくちゃ……」

ふらつきながらもナエトルは歩き出す。

——休むことは許されなかった。

一刻も早く、先へ進まねばならない——

ナエトルは階段を下りると、動かない体にムチを入れ、走り始めた。

そして、この先にいるであろう相手に必死の想いで、呼びかけた。

「——ピカチュウ——！！！！！！——」

「——！！！！——」

ピカチュウの耳がぴくりと反応する。

——それは、通常では感じられない何かを感じ取ったから——
そしてその正体がなんであるかを——ピカチュウは理解した。

「——来た！！——」

ピカチュウの言葉の意味がわからず、スカタンクは眉をひそめる。
ドガースとズバットの2人は、バカにしたような笑みを浮かべピカチュウを嘲笑う。

「なんだ？ 何が来たって？」

だが、ピカチュウはスカンクの問いかけに応えずその場で黙り込んでいる。

そのことに、スカタンクは怪しさを覚える。

「デメエを迎えに来た天国の案内人とかじゃねえんですかい？」

「ハハッ！ そりゃあいいや——！！」

ドガースとズバットは再び笑い出す。

——これで海岸の洞窟での復讐^{リベンジ}ができる——2人はそう思っていた。

だが、スカタンクの考えは違っていた。

スカタンクには、ピカチュウが口元に笑みを浮かべているように見えたのである。

——まるで、自分の勝利を確信しているような——そんな表情に見えた。

「——さっきどうしてワタシが攻撃してこないのか——質問してたよね？」

「……！」

ピカチュウからの突然の質問に、スカタンクは驚いた表情^{かお}をする。その様子に、ピカチュウはくすりと笑みを零す。

先ほどまでの立場が完全に逆転していた。

「その質問に今答えてあげる。」

アナタ達は、ワタシが臆して攻撃してこないと思っていた——そうだよな？」

解説をしつつピカチュウは上空のズバットとドガースにも目をやる。

ピカチュウの一瞥に気圧され、2人は思わずたじろいでしまう。

「なっ、何がおかしい！？ 事実だろうが！？」

「そ、そうだ！！ お前全然攻撃してこなかったじゃないか！！ 俺達にびびったからだろう！？」

2人の怖じ気っぷりに可笑しさを堪え切れず、ピカチュウはくすりと笑い声を洩らす。

「残念だけどハズレ。」

——ワタシはね、攻撃をできないんじゃない。“しなかった”の

よ
「

『!!!?!』

ピカチュウのこの言葉を、ドクローズの3人は誰一人として理解できなかった。

——戦いにおいて攻撃は基本。それをやらずして一体どうやって相手を倒すというのか——

いくら考えても、スカタンクはその答えを見出せなかった。

スカタンクが悩んでいるその隙に、ピカチュウはバッグの中に手を入れ、中を探り始める。

「——そして、攻撃しなかった理由は——

この瞬間を待っていたから!!」

ピカチュウは何かを取り出すとそれを地面に叩きつけ、破裂させる。

すると、辺りに閃光^{ひかり}が走った!!

その閃光^{ひかり}に、ドクローズの3人は目が眩み、立ち尽くしてしまう。

「!!? なっ、なんだあ!?!」

「あの女、何しやがった!?!」

「くっ!!! 一体何を——!!?!」

その閃光^{ひかり}の正体が分からず、スカタンクも事の成り行きを黙って見ていることしかできなかった——

ナエトルは森の奥^{ダンジョン}を目指し、必死に駆けていた。

——その時である。

まるで何かの呼び鈴のような音が、ナエトルの耳に聞こえてきた。

「!?!」

突然聞こえてきた音に疑問を抱き、思わず足を止める。

——一体何だろう？

そう思った次の瞬間、突然ナエトルの体が輝き出した。

いきなりの発光現象に驚き、ナエトルは自分の体を見回す。

「え？ え！？ 何これ！？」

体が――光ってるぅぅぅ！！？」

光はより一層強くなり、ナエトルの全身を包み込んでいく。

[illegible]

——光が消えたその跡にナエトルの姿はなかった。

次に目を開けた時にナエトルが居たのは、逢いたいと——強く願っていた者の、すぐ側であつた。

——突然の「それ」の出現に、ドクローズの3人は面食らう。

「なっ!？」

「なんでナエトルが!？」

口々に驚きの言葉を述べるドガースとズバットの2人。

「ちっ！！ さっき使ったのは集まれ玉か！？」

ここにきてようやくスカタンクはピカチュウが使った道具の正体を悟った。

— 集まれ玉 —

はぐれた仲間を自分の手元へと呼び戻すことのできる不思議玉の一種。

ピカチュウはその玉を使い、ナエトルを自分の元へと呼び寄せたのである。

「そういふと、よろしい？」

スカタンクはようやくピカチュウが言った言葉の意味を理解した。

——ピカチュウには、最初から戦う気などなかったのである。
——独りでは——

集まれ玉の使用には制限がある。

それは——相手が近くにいること。若しくは、同じ階内フロアにいること。

自分と相手の距離が離れすぎてしまっていると、集まれ玉は効果を発揮しない。

だからピカチュウは待っていたのだ。

ドクローズ
自分達の攻撃を避けながら、相手がやって来るのを。
ふたりになるの
この状況を、作り出す為に——

「だって、3対1つてどう考えても不利だもんね。

さつきまでの戦闘たたかいを見て益々そう感じちゃったよ。

チームワーク
団体に対抗する為にはこっちも団体でいかないとね」

「くっ……！」

スカタンクは言葉を詰まらせる。

それと同時のタイミングで、今まで目を閉じていたナエトルがゆっくりと瞳を開いた。

その瞳に映ったのは、他ならぬ、ピカチュウの姿であった。

「……うつ……あれ……？　ピカチュウ……？」

状況が理解できず、ナエトルは瞬きを繰り返す。

——自分はまだ夢を視ていてのではないか——？　そう錯覚を覚えただけである。

「遅いわよナエトル」

ピカチュウは微笑みながらナエトルの方を向く。

それにより、ナエトルは、現状これが夢ではないことを理解した。

「——お待たせ。遅くなつてごめんねピカチュウ」

2人はそのまま暫し笑い合う。

「本当だよ。あんまり遅いんで待ちくたびれちゃったよ？」

——つて、怪我してるじゃない!？」

ピカチュウはナエトルが全身傷だらけなのを見て驚く。

——自分の元へ辿り着くまでにナエトルの身に何が起こったのか

——その想像が容易についた。

その想いが表情にも現れ、ピカチュウは表情を曇らせる。

だが、当のナエトルはもう傷のことを気にしていなかった。

体力はまだ回復していなかったが、気力が完全に回復していたのである。

「大したことないよこれ位。」

それより大変だったんだよ？　ピカチュウがいなくなっちゃったから、ボク一人でスパーク達の相手をしなくちゃいけなかったんだから。

まあなんとか片付けたけどね」

得意げに言うナエトルの言葉に、スカタンクは衝撃を受ける。

——あれだけの数のスパークを、一人で倒しただと!？」

俺サマは、ナエトルの實力を、甘くみていたというのか!？」

——スカタンクの計算が徐々に崩れつつあった。

——いや、初めから壊れていたのかもしれない。

——ピカチュウとナエトル——それぞれの實力を過小評価しすぎ
ていたのが、その最も大きな要員であった。

「そういうピカチュウこそ怪我して——つて、あれ!？　なんでド
クローズが!？」

ナエトルのすつとぼけ発言にピカチュウはこめかみを押さえ、ド

クローズはするける。

だから、気付くの遅いってば。

ピカチュウは心の内でそう呟く。

ドクローズの面々も、気付かれていなかったことへのショックでどう対処してよいかわからずその場で動きを止めている。

皆が驚きと動揺で動きを止めて硬直するなか、ナエトルだけが未だ状況について行けず、ただオロオロとしてピカチュウとドクローズを交互に見つめていた。

「んー、平たく言うと――

これまでのことは、全部ドクローズあいつの仕業だったってこと」

「え！？ どういうこと！？」

ナエトルは理解ができず、困惑した表情でピカチュウを見つめる。
「キミが倒したスピアー達をけしかけたり、ワタシを落とし穴に落として離ればなれにしたのは、ドクローズこいつがやったことなのよ」

「ええ！？ 本当に！？」

気持ちいい位のその驚きっぷりに調子を取り戻し、スカタンクは含み笑いをする。

「そうとも。」

その女にいつもくつついているお前がジャマだったんでな。

お前達を分断するためにやったんだ」

「なっ！？」

ナエトルは絶句する。

「そして今も。」

セカイイチを採ろうとしたワタシをジャマしてる」

「……なんて……卑怯な……」

——許せない。ボクはお前達を許さないぞ!!」
その言葉と同時にあった。
ナエトルの頭の葉が再び輝きだしたのだ。

今まで見たことないナエトルの様子に、ピカチュウは驚いた表情を見せる。

「——ナエトル？」

その、頭の葉は……?」

ピカチュウに指摘され初めてナエトルも自分の状態に気がつく。

「……えつと……なんだかよくわかんないんだけど。」

でも、“こう” なってからなんか、技の威力が上がったような気がする……」

——特性——新緑——

これならもしかしたら、いけるかもしれない——

ピカチュウはナエトルの異変の正体を察知した。

——ナエトルなどの一部の草ポケモン達が持つ、新緑という特性

体力を著しく消耗したポケモンがその最後の力で、自らの力を高めるという能力^{ちから}である。

新緑を発動していると一時的にそのポケモンは草タイプの技の威力を高めることができる——

ナエトルに起こっているのは、まさにその現象であった。

「——ナエトル、辛いかもしれないけど、もう少し“そのまま”の状態で戦える?」

「えっ!? う、うん!!」

アイツ等をたおして、セカイイチを持って帰らなきゃ!!」

ナエトルは気合いの入った表情でドクローズに目を向ける。

それを見て、ピカチュウも笑みを浮かべながら正面に視線を戻した。

「そうだね」

「ほう。今日はえらく威勢がいいな。」

初めて逢った時はびびっていたというのに「

スカタンクは目を細めてナエトルに視線を送る。

その視線に、一瞬だけたじろいだナエトルであるが、すぐに表情を引き締める。

「うつ。」

……本当言うと、今でもまだ少し怖いけど……

でも、今日は退かない！ 退くもんか！！」

そう言ってナエトルは戦う構えしせいを見せる。

その姿勢すがたを見て、ピカチュウは感心する。

…… ナエトル、また少し強くなったんだね。

ナエトルがまた一歩成長した事を感じ、ピカチュウは嬉しく思った。

——そして、負けられないとも感じていた。

ナエトルの為にも——

「ククククッ。」

いいだろう。そこまで言うなら戦ってやる。

——ただし、後悔するなよ！？」

「さあ？ それはどうかしらね！？」

それが戦闘再開の合図となった。

ピカチュウは真っ直ぐスカタンクに向かってダッシュして駆けて行く！！

スカタンクも、それに気付いて上を見上げる。

「お前達！！」

「ケツ！ おうよ！！」

「わかってまさあ！！　へへッ！！」

ズバットとドガースは上空からピカチュウを狙い撃ちしようとする。
える。

だが、2人が攻撃する前に、先にナエトルが動いた。

「ピカチュウ！　上に跳躍^とんで！！」

ハツパカッター！！」

ナエトルの声と同時に、ピカチュウは何も言わずに宙に飛び上がった。

それと同時に、あのスパーク達を退けた、葉の嵐が再び吹き荒れた！！

「ぎゃあ！？」

「うぐお！？」

ピカチュウの方に集中していて油断していた2人は、ハツパカッターの嵐をモロに受ける！！

スカタンクも例外ではなく、大量の葉が迫ってきた！！

「くっ！！　何だ！？　この威力^{パワー}は！？」

相性的に有利であるはずのスカタンクも、これには面食らった。そして、飛んでくる葉の全てを、乱れひっかきで打ち落とした。だが、そこに隙が生じる――

ハツパカッターに集中するあまり、スカタンクはもう一人の存在を、忘れていたのである。

「――よそ見してる場合？」

突然後ろから声が聞こえてきた。

慌ててスカタンクは振り向くが――遅かった。

振り向こうと後ろを向いた瞬間、スカタンクに鈍い痛みが生じた。ピカチュウが、尻尾でスカタンクを叩きつけたのだ。

「ちいっ!!」

「電気ショックッ!!」

ピカチュウはスカタンクに向けて電撃を照射する!!

スカタンクは大きく後ろへ下がるが避けきれず、電撃の一部を掠めてしまう。

スカタンクは、ピカチュウから少し離れた所——セカイイチの方へと着地する。

今の電撃が効いたのか、スカタンクの体毛の一部が帯電し、全身を巡っていた。

……クソッ。何だ!?

さつきとはえらい違いようじゃねえか!?

仲間増えただけでそこまで変わるものなのか!?

——スカタンクには理解できなかった。

さつきまで、あれほど弱っていたはずのピカチュウが、今は完全に元気を取り戻し、自分に向かってきている——

何がそこまでピカチュウを奮い立たせているのか——その答えが見出せなかった。

スカタンクは自分達が不利であると感じた。

——このまま戦い続ければ、負けるのは自分達の方であるかもしれない——そう思い始めていた。

スカタンクは2人を倒すことを諦め方針を転換する。

スカタンクは目配せをし、ズバットとドガースの2人を呼び戻す。そして、ピカチュウとナエトルの方へと向き直る。

「ククククッ。なかなか戦るじゃねえか。

俺サマを本気にさせた相手は久しぶりだぜ」

そう言ってスカタンクは一步前に出る。
そしてドガースも。スカタンクの横へと並ぶ。
唯一ズバットだけが、後ろへと下がった。

……一体……？

ピカチュウはスカタンク達の動きが読めず一瞬戸惑うが、すぐに
落ち着きを取り戻す。

——あと一撃加えられれば倒せる——！！
ピカチュウは頭の中でそんな計算をした。
既に勝利は目前であると——信じて疑わなかった。

「その実力に免じて、俺サマ達も本気で相手をしてやろう」
スカタンクとドガースは構えを取る。

ピカチュウは警戒するが、その言葉をハツタリであると判断した。
「ナエトル。次の攻撃で決めるよ」
「わかった」

ピカチュウとナエトルは攻撃の姿勢を取る。
——だが、2人が再びドクローズに攻撃することはできなかった。
「ククククツ。果たしてお前達にこの攻撃が耐えられるかな？
俺サマとドガースの——スペシャル毒ガスコンボを——！！」

その一瞬の後——何が起きたのか、ピカチュウにはわからなかった。

気がついた時には、自分は地面に倒れ、ドクローズの姿はなかった。

そして、あれだけたくさん実っていたセカイイチの実が、全て消え失せてしまっていた。

セカイイチ^{それ}の消失は。ピカチュウ達にとって——いや、探検隊ポケ
ダ^ダンズにとって、結成以来初となる、任務^{たんけん}失敗を——意味していた。

というわけで、リンゴの森編は今回で終了です。

読んでお分かりの通り、ポケダズがドクローズに敗北してしまいましたよ。

ここの所はゲームと同じです（笑）

ナエトル「……せ、セカイイチがあ（汗）」

ふっ。これはまだほんの序章だ。

この後キミ等には更なる苦心を味わってもらおうから♪

もう、ドン底まで叩き落とすつもりでいるから覚悟していたまへ♪

ナエトル「……ボク達のこと嫌いなのか？ 作者さん……」

そんなわけなからうて。

寧ろキミ達の事を想ってこうしているのだよ。

これを取り越えれば、更にもう一段階上の強さを手に入れることができるんだ多分！！

ナエトル「……た、多分……（汗）」

さて、解説でも。

前回空気扱いだったなえ♪君が新技を習得でございます♪

ナエトル「でもあれってなんの技？」

ちゃんとした技名は後の話で発表するから控えるけど、一応オリジナル技だよ。

あ、断つときですけど、文中で葉の嵐と表現しましたが、あれはリーフストームという意味ではありません。

この技はハツパクターの強化版のようなものとお考えください。詳しい解説が知りたいという方がいらっしゃいましたらお知らせください。善処いたしますので。

ピカチュウ「……………」

ナエトル「ピカチュウ？ どうしたの？」

ピカチュウ「……負けた負けた負けたワタシが負けた——」

ナエトル「ぴ、ピカチュウ！？（汗）」

げ。負けたことがショックでトリップしとる（汗）

ナエトル「……………（滝汗）」

……また遅れた（汗）

ピカチュウ「てか、『外伝』じゃなかったの？ 次って」

うんそうなんだけど。

でも、外伝の方がちよつとストック底割れの危機だから暫く休むことにしてこつち更新した。

ピカチュウ「まだ原稿進んでないわけ？」

あと1話書ければ楽になるんだけどねえ。

その1話までに辿りつけない（汗）

（何かが飛んでくる）

うおっ？ 危なっ！ 何これ！？

ピカチュウ「銀の針ね。何かついてるわよ？」

えゝ、何々？

——とつとと書け（怒）——

って、これって、脅迫やん！

ピカチュウ「完璧怒ってるわね。もう一人のワタシ（汗）」

……こ、怖（震）

しかしナエトルの方は違っていた。

ナエトルは失敗した原因が自分達にあるのではないことをなんとか分かって欲しくて、必死で取り繕おうと口を開いた。

「……ごめんペラップ。」

——でも、仕方がなかったんだよ。悪いのはボク達じゃなくてドクローズの奴等が——」

「おだまり！」

ナエトルが全てを言い終わる前に、ペラップの叱責が飛ぶ。

それに思わず反応してしまい、ナエトルはびくりと体を震わせて話の途中で口を閉じてしまう。

ナエトルが口を閉ざしてもペラップの腹の虫は収まらず、目を三角にして羽をばたつかせ、再び喚き散らした。

「言い訳は聞きたくないよ！」

何だい？ 自分達の失敗を棚に上げて他人の責任せいにするとは！

そんなヤツ等だと思わなかったよ！ おまえ達を信用した私がバカだった！」

「……………」

返す言葉が見つからずナエトルは黙り込んでしまう。

その様子にピカチュウはタメ息を一つつき、そして心の中で、

——言わなければいいのに。

と思う。

——だが、言いたくなる気持ちもわからなかった。

ピカチュウもナエトルと同じ心情きもちでいたから。

そしてそう思う傍らで、ドクローズと、そして自分に対する怒りの念がどんどん湧き上がっていた。

一頻り辺りを飛び回った後、ペラップは元いた場所へと脚を着ける。

そして、2人を睨み付けながら、こう言い放った。

「お前達、今日は夕飯抜き！」

「ええっ！？ そんなあっ！」

よほどシヨックだったのか思わずナエトルは非難の声を上げる。

ナエトルのこの反応が気に入らなかったのか、ペラップは額に青筋を浮かべつつ再び羽をばたつかせる。

「そんなあ！ ぢやない！」

大切な仕事ができなかったんだ！ それ位の罰は当然だ！」

「……………」

——罰——という言葉が堪えたのか、ナエトルは再び黙り込む。
ピカチュウも、苦い表情で視線を下に下げるしかなかった。

「ふんっ！ 泣きたいのはこっちだよ！」

ワタシはこれから任務失敗を、親方様に報告しなければならないんだよ！？

セカイイチが無いことを知ったら親方様がどうなるか……

うわああああああああっ！

思い出したいくない！ 思い出したいいいいいいいいっ！
過去にも似たような経験でもあるのか、ペラップは何かを思い出したような表情をして再び騒ぎ始める。

その顔は恐怖のあまり血の気が引いており、真っ青になっていた。

「親方様には夕食の後ご報告に行く！ その時はお前達も一緒について来るように！」

親方様の“アレ”を食らうのがワタシだけというのはあまりにも不公平だからな！ わかったね！？」

そう言い残し、ペラップは下に向かって降りていく。

後に残されたピカチュウとナエトルは、ショックで暫しの間、その場を動くことができなかった。

——その日の夕食の時間はいつもと雰囲気が変わっていた。

ペラップは、出された食事に手もつけずにひたすら頭を抱えてうずくまっているし、ピカチュウとナエトルは、席にもつかず、黙って奥の方で突っ立っているだけであった。

その様子を、ドクローズの3人は気にすることなく普通に食事を続けていたが、他の弟子達は違っていた。

弟子達は、ピカチュウとナエトルの2人が何か大きな失敗をしたのだらうと雰囲気で察知した。

実はこのような出来事はギルドではしょっちゅうあることなのである。

そしてその時、他の弟子達がとる行動も、大方は決まっていた。

弟子達は、ペラップに気づかれぬよう、普通に食事を取るフリをして、ある行動を起こしていた。

それが一体何なのか——それは後になればわかることである。

食事の時間が済むと、ピカチュウとナエトルはペラップと共にプクリンの部屋へとやってきた。

プクリンに任務失敗の報告をするという——恐怖の時間の始まりであった。

「やあっ！ 君たち、セカイイチを採ってきてくれたんだってね？
ありがとう」

セカイイチが無いことを知らないプクリンはいつも通り笑顔で椅子ごと正面を振り向いた。

その視線に気まずさのあまり、ピカチュウとナエトルは視線をそらしてしまい、ペラップは体中からだらだらと冷や汗をかいている。

「……そ、それがですね。」

……そのう、大変言いにくいのですが……この者達がですね、セカイイチを採ってくることにその……失敗しましてですね……」

恐怖のあまりペラップは言葉を濁して所々を曖昧にし、なるだけ遠回しに説明しようとする。

ペラップの言葉に、プクリンは顔色一つ変えずに、

「あ、そうなの？」

いいよわかったよ」

失敗は誰にでもあるもの。気にしない気にしない」

笑顔でそう応える。単に話を聞いていないだけかもしれないが。

「それで、セカイイチはどこにあるの？」

——やはりである。

もはやプクリンの頭の中にはセカイイチの事しかないらしく、話を聞く気がない様子。

ペラップの話を全くとっていい程理解していなかった。

——うわ。何もわかってないよこの人。

ピカチュウは心の中でそんなツツコミを入れる。

「で、ですから！ セカイイチを採ってくることに失敗したわけですから、セカイイチはここに無いということです！」

業を煮やしたペラップがどこか観念した様子でかいつまんで要点だけを説明する。

それを聞いて、さすがに話を理解したのか、プクリンは笑顔のままで停止する。
フリース

「……え……？」

「わーーーーーっ！　わわわわわわ！
来る！　あれが来るうううううううう！」

ペラップが叫び終わると同時に、突然辺りが揺れ始めたのである。

いきなりの地鳴りに事情を知らないナエトルは大慌て。

「あわわわわわわ！ なっ？ ななななな！？」

——何が起きているのだろうと言いたいのであるが、地面が揺れているためうまく喋ることができない。

その間にも、プクリンの泣きタイムは続いている。

「……ううううええええ……」

プクリンの鳴き声に合わせて、地鳴りもさらに強さを増していく。更には何故だかわからないが、正体不明の爆発まで起きている。

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい
しし！？」

ペラップは恐怖のあまり羽で頭を覆い机の下に隠れている。

プクリンの泣きがいよいよ本格化しようとしたその時――

ドアをノックする音が聞こえてきた。

「ごめんください。入りますよ?」

そう言うところ、静かに中へと入ってきた。

「なっ！？」

入ってきたその相手の姿に、ナエトルは思わず声を上げ、ピカチ
 ユウは衝撃で目を見張る。

——そこに立っていたのはドクローズの3人であった。

何故連中がここへやってきたのか——そのことにも疑問を抱いた二人であつたが、だがそれ以上に、もっと驚くべき事があつた。

——連中が手にしているセカイイチ——

そのセカイイチは、紛れもなくリンゴの森のセカイイチであると、

すぐに2人は察知した。

ドガースとズバットはピカチュウとナエトルを押し分けると、スカタンクの為に道を開く。

スカタンクはその道を通ってプクリンの前まで行くと、目の前にセカイイチを置いた。

「……あ、セカイイチ」

先ほどまであれだけ泣きじゃくっていたプクリンの表情がセカイイチを目にして一瞬で豹変した。

「手前どもからの贈り物です。お近づきのしるしにどうぞ」

「わあっ」 僕の為にわざわざ採ってきてくれたのお？

ありがとうっ」 トモダチトモダチっ」

プクリンの表情が完全にいつも通りの笑顔へと戻ると、セカイイチを頭の上に乗せて踊り出す。

「……あ、ありがとうございますう！」

アナタ様のおかげでワタクシ共、命を救われましたですう！」

何時の間にか机の下から出て来るなり、ペラップがスカタンクの元へと駆け寄る。

今のペラップには、スカタンクが救世主のように見えてならなかった。

「いえいえ。手前共も今はこちらでお世話になっている身。

困ったときに助け合うのは当然のことですよ」

——嘘だ！ スカタンクは嘘をついてる！

ナエトルは心の中でそう叫ぶ。

だが、状況がそのことを、口に出して言わせてくれそうになかった。

ナエトルはペラップとスカタンクのやりとりを、怒りの表情でただ黙って見ていることしかできなかった。

「おおー！ 何という素晴らしいポケモンなんでしょう！

アナタ様こそ探検隊の鏡！ 神と呼んでもおかしくありません！」

この時ペラップの頭の中では、スカタンクの位置が、完全に神位^{ボジション}置へと固定されていた。

ペラップはこれでもかというほどスカタンクを誉めちぎる。

ペラップの賛辞に気をよくしたのか、スカタンクはいつもよりも長めに含み笑いをする。

「コラッ！ お前達何をボーツと突っ立ってる！

さつさと恩人に頭を下げんか！」

ペラップはそう言ってピカチュウとナエトルを無理矢理押さえつけ、頭を下げさせる。

「……………うぐっ」

^{ドクローズ}

こんなヤツ等に頭を下げるなんてまっぴらだと思ったナエトルであつたが、ペラップに頭を押さえられているので抵抗することができなかつた。

ピカチュウとナエトルが頭を下げる姿を、ドクローズの3人はにやや笑みを湛え、爽快な気分で見下ろしていた。

「では今夜はもう遅いので休みます。

遠征を楽しみにしていますよ？」

「ワタクシも！ アナタ様のような方と遠征に行けるなんて本当に楽しみですう！」

2人の頭を押さえつけたままペラップはにこやかに言う。

スカタンクはそれを含み笑いで応えたと、

「では、失礼します」

「ありがとー！ おやすみートモダチトモダチー」

にこやかに見送るプクリンの挨拶を背にして、ドクローズは部屋

を後にした。

「——しかし兄貴い、何であの時アイツ等を助けたんですかい？」

自分達の部屋へと戻る途中でズバットがスカタンクに問いかける。
「あのままアイツ等がヒドイ目に遭うのを見てる方が良かったと思うんですがね？」

どうやらズバットはスカタンクがピカチュウ達に助け船を出したのが納得がいかない様子。

ズバットと同意見なのか、ドガースも体を上下に動かし、
「俺もそう思うぜ。まあアイツ等が頭を下げるのを見たときは気分良かったけどな」

「ククククッ。何もわかってねえなあお前等」

スカタンクの言葉に、ズバットとドガースは顔を見合わせる。

「俺達がギルドに潜入^{もぐりこみ}したのは何の為だ？ 遠征の為だろ」

「……まあ……」

「……そうだけど……」

ズバットとドガースは煮え切らない態度で返事をする。

スカタンクは含み笑いをしつつ更に言葉を続ける。

「今はプクリンに信頼されるのが一番なんだよ。」

プクリン^{アイツ}に目えつけられてギルド^{じい}を追い出されちゃ元もこもねえからな」

「——そ、そうか」

「確かにそう言われればそうだよなあ」

「——それに、任務^{これ}失敗アイツ等はプクリンの信用を失った。」

遠征に行ける確率は——ゼロだ。一石二鳥とはまさにこのことだ。

ククククッ」

——そう。スカタンクの狙いがまさにこれ。

リンゴの森での戦闘中に、ポケダンを実力で倒すことは難しいと判断したスカタンクは、方針を転換することにしたのである。

その方針とは——2人のギルドでの信用の喪失——早い話が追いつ落としてある。

スカタンクがリンゴの森でセカイイチを根こそぎ奪っていったのも、任務を失敗させることが目的であった。

スカタンクの狙いによりやく気づいたドガスとズバットの2人は、感心したような表情をし、

「た、確かに！」

「さっすが兄貴！　そこまで深く考えてるなんて！
やっぱり兄貴は天才だぜ！」

2人の誉め言葉に気をよくしたスカタンクはまた含み笑いをする。

「とにかく、遠征先でお宝を発見^みつけたら——」

「ギルドの連中を倒して——」

「お宝を奪ってトンスラする！」

「今回の計画は楽勝つばいぜ。ケツ！」

「へへッ！」

「ククククッ」

密談にも聞こえない会話を繰り返しながら、ドクローズの3人は部屋へと戻っていった。

——「……………ハア」

ナエトルは大きなタメ息をつく。

プクリンの部屋から自室へと戻る途中、2人の会話は全く無かったと言っている。

重苦しい雰囲気の中、両者は無言のまま黙々と歩いていた。

自分達の部屋へと辿り着き、今までの緊張が一気に解けたのか、ようやく息をつく余裕が出てきたようでナエトルは口を開いた。

「あーあ。またスカタンク達にやられちゃったなあ」

「……………そうだね」

ナエトルの呟きにピカチュウは短くそう応える。

「まさかあそこでアイツ等がセカイイチを持ってくるなんて思わなかったよ」

「……………」

「アイツ等絶対この展開を狙ってセカイイチを持ってつたんだよきつとー」

さっきのことを思い出してまた怒りが込み上げてきたのか、ナエトルは愚痴をこぼし始める。

その愚痴を、ピカチュウは黙って聞いていた。

「——そう言えば、ピカチュウ今日はやけに静かだったよね？」

いつもならああいう場面なら必ず怒るか皮肉を言うかのどっちかなのに」

ナエトルの言葉に、ピカチュウはそちらを向き、笑顔を浮かべる。だがその笑顔はどこかぎこちない、妙な笑顔であった。

「……………そりゃあ、ね。」

怒ってないって言ったら嘘になるけど…………

…………でも、あそこで怒ったとしても…………ワタシ達が失敗したって
いう事実は…………変わらな…………」

ピカチュウは途切れ途切れに言葉を紡ぎ出す。

その体はふらつき、今にも倒れそうな状態であった。

ピカチュウのただならぬ様子を察したのか、ナエトルは慌ててピカチュウの側に駆け寄る。

「ピカチュウ？ さつきから様子が変だよ？ 具合悪いの？」

心配そうな表情で見つめるその眼差しに、ピカチュウは何でもなようなフリをし、無理して笑顔を作って笑おうとする。

「だ……じょ……なんともな……」

その言葉を言い切る前に、ピカチュウはベッドに倒れ込む。

「ピカチュウ！」

慌ててナエトルはピカチュウを仰向けの状態に起こす。

その息は荒く呼吸も乱れている。おまけに両頬が赤い。

思わずナエトルはピカチュウの額に手を当てる。

「——熱い！ 熱あるじゃない！？」

ナエトルの声に反応し、ピカチュウはうつすらと目を開ける。

「……………ドクローズと戦ったとき……………どうやら……………毒を受けたみたい……………」

「ど、毒！？」

ピカチュウの言葉に、ナエトルは絶句する。

——ドクローズとの戦闘の時に、ピカチュウ達が最後に受けた毒ガススペシャルコンボ——

あれにはスカタンクの二オイだけでなく、ドガースの毒ガスの成分も含まれていた。

ピカチュウはその毒ガスの部分に当てられてしまったのである。

その事にピカチュウが気付いたのはギルドへ戻った後であった。ペラップの説教を受けている間、ピカチュウは体に違和感を感じていた。

だが、特にその時は気にすることもなく、そのまま放置してしまっていた。

——きつとまだ戦闘のダメージが残っているのだろうと——ピカチュウはそう考えていたのである。

だが、時間が経っても症状が改善することはなく、寧ろどんどん悪化していった。

プクリンの部屋にいた間はめまいが酷く、所々意識が飛んでいる部分もあった。

その時点で気付いたのである。

——ドクローズとの戦いの時に、毒を受けたのだと——

「油断したわ……」

あの技は、ワタシ達を倒すって意味合いもあったんだろうけど、逃走用のものとワタシは思ってた……

……でも、まさかこんな追加効果オマケがついてたなんて……

意外だっ……色んな意味で……本当にやられ……」

もはや喋ることも辛いのか、ピカチュウはそこまで言って口を閉ざしてしまう。

それを見て、ナエトルは冷静さを失い、慌て始める。

「た、大変だ！ 誰かに知らせなきゃ！」

ナエトルは人を呼びに行こうと外へ向かって駆け出そうとする。だが、ピカチュウがそれに待ったをかける。

「……だめだよ……皆とつくに休んでるよ……」

起こしたら悪い……でしょ……？」

「でも、このままじゃ……」

ナエトルは不安げな表情でピカチュウのことを見つめる。

その視線に、ピカチュウは笑みを浮かべ、

「だいじょうぶ……」

バッグの中にモモンの実が入ってるから……取ってくれる……？」

ナエトルは頷きバッグの中からモモンの実を取り出す。

そしてそれをハッパクターで小さく切り分けると、その1欠片を、ピカチュウの口へと運ぶ。

ピカチュウはそれをゆっくりと噛み締める。

「……ありがとう……」

「ピカチュウ、大丈夫？」

心配そうな眼差しでナエトルはピカチュウを見つめる。

ナエトルはこのまま、ピカチュウが力尽きてしまうのではないかと、心配だった。

その不安が表情^{かお}にも現れ、ナエトルの顔は今にも泣きそうな表情^{かお}をしていた。

そんなナエトルの心情を察して、ピカチュウはナエトルに向かって優しく微笑みかける。

「……ワタシは平気よ……」

それより……ごめんね……」

ピカチュウが謝る理由が分からず、ナエトルは眉をひそめる。

「なにが？」

「……今日のこと……全部……色んな意味で……ホント……ごめん……」

「……どうしてピカチュウが謝るの……？」

ナエトルは静かに聞き返す。

その言葉と表情には、若干の憤りが込められていた。

構わずピカチュウは言葉が続ける。

「……あの時……ワタシは判断を誤った……」

勝負に勝つことばかり考えてて……相手が何を考えているのか……全く分からなかった……」

ピカチュウの言葉を、ナエトルは黙って聞いている。

だが、その顔つきは、段々と険しいものとなっていた。

「あの時ワタシが……判断を誤らなければ……こんなことにはならなかった。

……仕事も……失敗することはなかった……

ワタシの責任だよ……」

——ドクローズと対峙した最後の瞬間^{とき}、ピカチュウは冷静さを失っていて読みを誤った。

いつもならそのような事は絶対にないのに。

それ程までに、ドクローズを倒すことに躍起になっていた。

どうしても、ドクローズの奴等が許せなかったから——

元はと言えば悪いのは自分達であるのに、それを逆恨みしてつまらない妨害工作を仕掛けてきたりしたことを——ピカチュウはそれが許せなかった。

もしあの場でいつも通り冷静でいられたなら、スカタンクの企みにも気付いて違う結果となっていたかもしれない——ピカチュウはその事を悔いていた。

——自分がつまらない意地を張った所為で、このような結果になったのだと——ピカチュウは自分を責めていた。

だが、そんな想いはナエトルの一言により覆される。

「ピカチュウは悪くない！」

今まで黙って聞いていたナエトルであったが、それを否定するかのように、大きな声を上げる。

その声に、僅かだが、ピカチュウは体を震わせ驚いた表情を見せる。

「ピカチュウは全然悪くないよ！」

……それより……ボクの方が……」

ナエトルはそう言ったきり黙って下を向いてしまう。
その目には、うつすらと涙をにじませていた。

「……ボクは……ピカチュウが具合が悪いのに気付かなかった。
一番近くにいるのに……気付けなかった……
……そんな状態になるまで……何も分からなかった……
……ごめん。ごめんね。ピカチュウ……」

——ナエトルの瞳から涙が零れ落ちる。

相棒がここまで苦しんでいたことに、何も気付くことができなかった自分に無性に嫌気が差した。

——自分が情けなつた。不甲斐なかつた。悔しかった。その思いが涙と一緒に溢れてしまい、とうとう耐えきれなくなってしまうた。

涙を流すナエトルの姿を見て、沈んでいたピカチュウの気持ち少し和らいだ。

そして、自分が沈んでいたら、ナエトルもまた不安になってしまふということ——思い出した。

ピカチュウは小さく笑う。

「相変わらず大げさだなあ。

大丈夫だつてば。これくらいのことですぐにかなったりしないから。」

ナエトルだつて知ってるでしょ？ ワタシが強いって」

ピカチュウの言葉に、ナエトルははつとした表情をし、顔を上げる。

……そうだ。ピカチュウは強いんだ。
毒で負けたりしない。

——それなのにボクは——

……ボクは……ピカチュウのことを信じてなかった。信じきれて

なかった。

ピカチュウがこんな時こそボクがしっかりしなくちゃいけないのに――何を迷ってたんだろう。

ナエトルは何かを振り払うかのように首を左右にぶんぶかと降る。そして、笑顔でピカチュウを見つめる。

「……そうだよな。」

ピカチュウなら……絶対大丈夫だよな?」

ナエトルの言葉に、ピカチュウは微笑んで小さく頷く。

「このまま起きててもしょうがないから……今日はもう寝ちゃわない?」

ピカチュウの提案に、ナエトルは首を縦に動かす。

「うん。ご飯も食べられないしね。起きてても辛いだけだよ。」

ピカチュウ、早く眠って。

毒を抜くためにも、少しでも体力を減らさないようにしなくちゃ。

ボクが診てるから」

「……でも……」

ピカチュウが心配そうな顔をするが、ナエトルはにこっと微笑み、

「ボクなら大丈夫!」

ケガは少し痛むけど、全然平気だよ!

ピカチュウの方が重症なんだから。余計な心配しないで。

ゆっくり休んで。ね?」

「……ありがとう。おやすみ。ナエトル」

そう言うとピカチュウは目を閉じ意識を沈ませていく。

その様子を静かに見守るナエトルであるが、やがて眠るピカチュウの手をそっと握り、

「……おやすみ。ピカチュウ……」

ピカチュウの側を離れることなく、ナエトルはその場で横になると、静かに目を閉じていった――

え、というわけで、倒れました。

今まで、恐るるものは何もない！ 不敗伝説を誇っていたあの電気ネズミがとうとうぶつ倒れやりました！

ピカチュウ「……なんでそんなに嬉しそうなのよアンタは」

そりゃあ今までいけいけで通してきたチミがこの小説で初めて見せた弱気な姿だからねえ。書いてて楽しくてしょうがなかった♪

ピカチュウ「……………（汗）」

ナエトル「ピカチュウが素直に謝ったよ！？（驚愕）」

そうなのだ。あれは毒状態になってて熱で浮かされてたから正常に頭が働いてなくてあんなに素直だったんだねえ（笑）

ナエトル「明日は嵐が来るかも」

ピカチュウ「……………こ、こいつらは（怒）」

でもさあ作者さん。普通モモンの実って毒を完全除去できるはずよね？

なんかまだ体の調子がいまいちよくないんだけど」

あー。通常のゲーム通りならそうだよな。

でも、なんか即効治っちゃうってのもつまんないし、それになにより、体調不良でダウンするキミを書きたかったから。

ちよいと仕様を変えてみました♪

ピカチュウ「……つまり、体調不良でへろへろに弱ったワタシを書きたくてわざとあんな風にしたと……？」

そうたうり！　って！　何故電気袋を光らす！？

ピカチュウ「いや、今までの話を聞いて怒らない方がおかしいですよ？」

いやいやいや！　待て待て待て！
お前まだ完全復活しないだろ！？

ピカチュウ「やかましい！　例え差し違えてでもアンタに制裁を加えたる！」

何時の時代の人間だお前は――！？

ナエトル「って！　何でボクまで――！？」

（放電中）

ピカチュウ「……さ、さすがに体調不良で放電すると疲れるわね。

……あ、めまいしてきた。

そういうわけなんで今回はこの辺でおいとまさせていただきます。

次回もよろしくお願いします。それではあ……

（早く帰って寝よう）

ようやく更新です。長かった（汗）

ピカチュウ「遅い。どんだけ待たせんのよ」

すみません。返す言葉ありません（土下座

ピカチュウ「待たせたからにはストーリーに進展はあるんでしょうね？」

いいえありません。

暫くストーリーの進展はなくてだらだらした展開が続くと思います。重ね重ねすみません（土下座

ピカチュウ「アンタね（汗）」

——ピカチュウはいつものように夢を視ていた。

——だが、いつも視る夢とはどこか違う夢。そう感じていた。相変わらず映像はないのだがしかし、今回は会話の内容をはっきりと聞き取ることができた。

「——！！——」

突然の行動に戸惑ったのか、その者は言葉にならない驚きの声を上げる。

「——いきなり何だ」

一人じゃないのか、声の主は尋ねるように口を開く。声の低さからして男だろう。

すると、その声に応えるかのように、別の所からもう一つ別の声が聞こえてきた。

「なんかね、急に手を繋ぎたくなって」

——それは女の声。まだ少女と言っても良い程のあどけなさを漂わせていた。

「……お前な」

少女の言葉に呆れるような声で言葉を返す男。

「こうしてるととっても温かいんだよ？」

キミの心が伝わってくるっていうか、キミと繋がってるって感じることができるんだ」

「……お前の方が温かい。」

俺にも、お前の心が伝わってくる——」

「ありがとう。……——」

「……………ん」

ピカチュウはいつもよりも早く目を覚ます。
窓に目をやると、夜明け前なのか、外はまだ薄暗かった。

「……今のは……夢……？」

ピカチュウはさつきまで視ていた夢の余韻に浸る。

ただの夢にしては妙に現実的リアルな感じがしており、また懐かしい気がしていた。

「それとも、ワタシの記憶……？」

ピカチュウは今視た夢が自分の記憶なのではと考える。

「だとしたら、あれは一体誰の声だったんだろう？」

ピカチュウは夢の中に出てきた2つの声の正体に疑問を抱く。

1つは少女の声——これをピカチュウは自分の声なのではないかと推測をする。

ならもう一つ——自分と会話をしていたあの男の声。あれは一体何者なのか？

残念ながらピカチュウには全く憶えがない。故に声の主の正体に見当がつかなかった。

——だが何となく気になる。そんな想いをピカチュウは抱く。

ピカチュウは部屋の中をざっと見回す。そして、自分のベッドのすぐ側で眠るナエトルに気がついた。

「……ナエトル。ずっとワタシの事診ててくれたんだ」

そう言いながらピカチュウはふと手元に目をやる。

そこには、眠っていてもなお離すことなくピカチュウの手を握り続けるナエトルの手。

それを見て、ピカチュウはふっと小さく笑みを洩らす。

「……手。どうりで温かったわけだ」

そう呟きながらピカチュウは再びベッドに横になる。

夜明け前ということもあり、もう少し眠ることにしたのだ。

何より、体の調子がまだ完全には元に戻っていない。

早いところ回復させておかないと今日の仕事に支障がでるだろう

ピカチュウは横になると、同時にある疑問が頭の中に過ぎる。

……ということは、ワタシには、手を繋いでくれる誰かあいてがいたんだ。

その人は今……どうしているんだろう？

ワタシのこと、探していたりするのかな……？

疑問を抱きながらも、ピカチュウは落ちてくる瞼の重みに堪えきれず、再びゆっくりと瞳を閉じていった。

——「えー、最後に。遠征まではあと1週間だ」

ペラップの言葉に、弟子達の全員が色めき立つ。

「選抜隊の発表は出発当日の朝行う。

それまで各自、選ばれるようにしっかりと努力するように。いいね？」

ペラップの言葉に、弟子達は力強く頷く。それを確認したペラップが、

「それではみんなっ、仕事に取りかかるよっ」

『おおー……！』

掛け声を最後に、弟子達はそれぞれの仕事場へと散っていく。

だが、ピカチュウとナエトルの2人は久しぶりにまだその場に残っていた。

「ピカチュウ、体はもう大丈夫なの？」

不安そうに尋ねるナエトルに対して、ピカチュウは明るい表情で、
「うん。大丈夫！ もうすっかり元気！」
そう言って左腕をぶんぶか振り回す。

「本当に？」

それでもまだ心配なのか、ナエトルは疑いの眼差しをピカチュウへと向ける。

「本当だよ」

「ホントのホント？」

「本当の本当の本当」

「……そう。良かった」

ようやく納得したのか、ナエトルは安堵の息を洩らす。
その様子に、ピカチュウは笑みを浮かべる。

「ナエトルが一晩中側にいてくれたおかげだよ。」

ずっと手握ってくれてたことも、ね」

ピカチュウの言葉に、少し照れたような表情で、ナエトルは頬を赤らめる。

「えへへ。ボクにできることっていつたら他に何も思いつかなかったから」

——あの時、ピカチュウの様子を診ながら、ナエトルは子供の頃、まだ両親と暮らしていた時の事を思い出した。

ある日、病気で熱を出した自分の看病を懸命にしながら、母親はナエトルの手を一晩中握り続けてくれていた。

ナエトルはその手を通して、母親の心を子供ながらに感じる事ができた——心の底から安らぐことができたのを憶えていた。

だからナエトルは、少しでもピカチュウの気持ちが和らぐようにと同じことを実践して、ピカチュウの手をずっと離さなかったのだ。

ある。

——少しでも、ピカチュウの力になれるようにと——
もちろんその想いはピカチュウにもしっかりと届いていた。

「ありがとう。おかげでいい夢見たよ？」

「へえ、どんな夢？」

「それはねえ、内緒」

ピカチュウはそう言って人差し指を口元に当てる。

「ええ？ 何だよそれ。気になるなあ」

「えへへ」

「あはは」

ピカチュウとナエトルは目を細めて笑い合う。

その時、どこからともなく腹の虫の音が聞こえてきた。

「……あ……」

その音にナエトルは赤面する。どうやら今の腹の虫はナエトルのものだったようである。

それを聞いたピカチュウは苦笑いし、

「お腹空いた？」

「……うん。少し」

ナエトルは力なく応える。

「そうだよ。ワタシも少し空いてる」

昨夜は夕食抜きで結局何も口にすることができなかった。

ピカチュウは毒消しの為にモモンの実を口にしていたが、あれは治療の一環という意味合いの方が強く、食事とは言い難い。

早い話が、2人は満足のいく食事を取っていないということである。

「——でも、大切な仕事を失敗しちゃったんだし、当然と言えば当

然なんだけどね」

さっきまでの明るい笑顔と打って変わってナエトルの顔は暗い表情へと変わってしまう。

どうやら昨日の失敗のことをまだ引きずっているようであった。

「まあ、過ぎたことを気にしてもしょうがないし、また今日からがんばればいいよ。でしょ？」

「……うん。そうだよね？」

ピカチュウの励ましにナエトルは顔を上げる。

その表情はまだ暗かったが、気持ちだけは楽になれたようだ。

「よし！ また一からがんばるぞー！」

「おー！」

「あ、ペラップ！」

ピカチュウは近くにいたペラップに声をかける。

その声に反応して、ペラップはピカチュウ達の方を向く。

「今日はワタシ達何をすればいいの？ また依頼の仕事？」

「はあ？ 何を言ってるんだお前は？」

重要な仕事もできなかったくせに依頼の仕事だと？ 10年早いわっ！」

……うわ。まだ根に持ってるよこの鳥。

どうやらペラップは昨日の夜、プクリンの部屋で起きた出来事を忘れていないようであった。

中間管理職の得意技、下の者にストレスを発散する通称——パワーハラスメントを発症していた。

「失敗したヤツ等に依頼の仕事なんか任せられるか！

お前達は当分の間雑用係っ！」

「ええっ！？ そんなぁ！」

依頼の仕事ができなければ評価を上げることができない。

本気で焦ったらしく思わずナエトルは非難の声を上げる。
ナエトルのこの反応が気に入らなかったのか、ペラップは怒りで
つり上がっていた目をさらにつり上げる。

「当然の結果だ！ これはさっき受けた親方様直々のお達し！
今度のことは親方様も相当腹を立てているということだ！ とり
あえず今日は見張り番の仕事でもしておけっ！」

「わかったわよ」

ペラップの言葉におとなしく頷くピカチュウ。

文句を言っても良かったが、今のペラップを刺激してもかえって
逆効果になると判断した。

言いたいことだけ言ってペラップはその場から立ち去ろうとする。
だがその途中で、思い出したかのように歩みを止める。
そして、ピカチュウ達の方に向き直り、こう言い放つ。

「それと！ 今度のことでお前達が選抜隊に選ばれることはほぼ無
くなった！

発表の時は期待しないことだな！ ふんっ！」
それだけ言つとペラップはどこかへ飛んでいってしまった。

「あれは完璧個人的な恨みが含まれてるわねえ」

ピカチュウは困ったような表情を浮かべ頬を掻く。

なんとかペラップを宥めたい気もしたが、今自分達が何を言つて
も聞いてくれそうにない雰囲気を漂わせていた。

「……さあて、どうしたもんかなあ。」

「……落選……？」

ピカチュウが悩んでいる横でナエトルが小さく呟く。
その声に反応してピカチュウはナエトルの方を向く。
ナエトルはショックのあまり、顔が完全に凍り付いていた。

「ナエトル？」

「……ボク達、もう遠征に行けないってこと？」

縋るような想いでナエトルはピカチュウへと視線を向ける。
その視線に、ピカチュウも表情を曇らせ、

「……まあ、そうなるね」

ありのままの事実を告げる。下手に嘘をついても仕方のないことであるから。

ピカチュウの言葉を聞き、望みが完璧に断ち切れたのか、ナエトルは俯いてしまう。

「……そんなあ。」

ただでさえお腹空いて力でないのに、あんなこと言われたら益々やる気がでないよ……」

……あー、ナエトルまた落ち込んだじゃった。

せっかく元気になったと思ったのに。

……まあ、ショックを受けるのも当然か。選抜隊に入るんだって今まで頑張ってきたんだもんね。

ピカチュウは暫く黙って俯くナエトルを見つめていた。
が、一向にナエトルの表情が晴れることはない。

……それにしても、プクリンも意外と厳しいんだな。

一度の失敗で雑用係に降格だなんて。

確か、失敗しても気にしないよって言ってなかった？

「ほらナエトル、元気だして」

ピカチュウは落ち込むナエトルをなんとか慰めようと口を開く。
だが、ピカチュウ自身もなんと慰めればいいか分からないため、
月並みの台詞しか出てこない。

「……………」

しかし、いつもならこの言葉で元気を取り戻すナエトルであったが、今日はよほど根が深いらしく、何の反応も示さない。

その様子を、ピカチュウは困ったような表情で見つめる。

……あー。こりや完全にブルー入っちゃってるわねえ。どうしたもんかなあ。

これからどうすればいいのか——ピカチュウ自身にもその答えが見つかっていないためどうフォローすればいいのかわからない。

失意の状態でその場に立ち尽くす2人に、突然何者かが声をかけた。

「おーい、2人共ー」

声の気付きピカチュウは声のした方を向く。

そこにいたのは、

「ビッパ？ どうしたの？」

——そう。声をかけてきたのはビッパ。

ピカチュウの声に反応して、ビッパは少々慌てた様子を見せる。

「しーっ！ もっと小さな声で話すでゲス！」

「！……」、「ごめん。」

で？ 一体どうしたの？」

「ちよっとついてくるでゲスよ」

ビッパはそう言うところかに向かつて歩き出していく。

疑問に思うピカチュウであったが、何かあるのかと気になったため、おとなしくついて行くことにした。

——ビッパに連れられて辿り着いたのはピカチュウ達の部屋。

ビッパに促され、2人は中へと入っていく。

そこには何故かキマワリやチリーン。さらにはハイガニやドゴー

ムの姿もあった。

自分達の部屋に集まって一体何が始まるのか？ 事態がわからずピカチュウもナエトルもただ首を傾げるしかなかった。

「……よし。グレッグル以外には誰にも見られてないでゲスね」
ビッパは外の様子を確認しつつおそろるおそろる皆の所へとやってくる。

「一体何なの？ 皆集まって」
ピカチュウの言葉に、ビッパ達は顔を見合わせ小さく頷き合う。
そして、キマワリとチリーンがピカチュウとナエトルの前に、リ
ンゴを1つずつ置いた。

「あ！ リンゴ！？」

それまで黙っていたナエトルが思わず声を洩らす。

そしてピカチュウも、驚きの表情で目の前に置かれたリンゴに目を
やった。

「お腹空いてますでしょ？」

「皆で夕飯を少しずつ残しておいたでゲスよ」

チリーンに続いてビッパが口を開く。

——そう。 昨晚、食事の時間にビッパ達がペラップに隠れてやっ
ていたことが実はこれ。

プクリンのギルドの規則は厳しく、仕事を失敗して夕飯抜きなん
てことはざらでそれほど珍しいことでもない。

よってその時は、他の弟子達が夕飯を持ち寄り、おあずけを食ら
った弟子にわけ与えるというのが、ある種弟子達の慣習のようにな
っていた。

「まあ、ドゴームだけは最後まで悩んでいましたけど」
と、ここでキマワリが余計な合いの手を入れる。

これに、当然のことながらドゴームが食いついた。

「なっ！？ 何だとっ！？ そんなわけないだろうが！」

「あら。ワタシちゃんとちゃんとみてましたのよ？」

アナタがタご飯とにらめっこして悩んでいる姿を」

「ちよ、ちよっとキマワリ。ドゴームも」

2人の間に険悪なムードが流れケンカに発展しそうなことに気が付き、ナエトルは慌て出す。

だが、ナエトルが慌てるその横で、ビツパが、

「あの2人はいつもああでゲス。気にする必要ないでゲス」

冷たくそう言い放つ。

……いつもあなの？ あの2人。

ピカチュウは心の中でそんな疑問を抱くがもちろん口にはしない。言って火に油を注ぐようなマネをしようとは思わないからである。

「ヘイヘイ！ そんなことより、早く食べるよ！ ヘイヘイ！」

「そうでゲス。見つからない内に早くするでゲス」

ヘイガニとビツパの言葉に、ピカチュウとナエトルは互いの顔を見て頷き合う。

そして、

「いただきます！」

そう言って2人は凄い勢いでリンゴを食べ始めた。

よほどお腹が空いていたのか、周りの目も気にせず一心不乱に食べ続ける。

そして数分と経たないうちに、

「ふう〜。ごちそうさま！」

おいしかったあ。生き返ったよ！」

ナエトルは満面の笑みを浮かべる。

隣では、同じタイミングで食べ終えたピカチュウが、両手を合わ

せていた。

「ごちそうさま。ホントにおいしかったよ。皆、ありがとう」

ピカチュウはここにいる一人一人の顔を順番に見ていく。

「満足していただけて良かったです。」

それとピカチュウさん？」

「なあに？」

チリーンに声をかけられピカチュウは応えながら首を傾げる。

「ピカチュウさんは毒を受けていらっしやいますね？」

ほぼ抜けているようですが、完璧じゃないです。まだ残ってますよ？」

チリーンの言葉に、ピカチュウは表情を曇らせ、ナエトルは驚きの目でピカチュウを見る。

「……なんで、その事を……？」

ピカチュウは無意識にチリーンに向かって問いかける。

その問いかけは、チリーンの言葉が正しいということを物語っていた。

「チリーンはギルドの^{メディカル・チェック}看護係も担当していますの。」

^{エスパー}超能力の力で、^{コンディショニング}ポケモンの体調をチェックすることができるのですわ」

チリーンに代わってキマワリが解説する。

それを聞いて、

「……なる程ね。^{エスパー}超能力か。それなら隠しておけないよね」

ピカチュウは苦笑いを浮かべながらそう洩らす。

その言葉に慌てたのはナエトルであった。

「ピカチュウ？ さっき大丈夫だって言ってたのに。」

あれは嘘だったの!？」

「……………嘘じゃないよ。」

だって、動くことに何ら問題はないから」

ピカチュウはナエトルの方を向きながらそう応える。
だがナエトルは動揺を隠せずにいた。

——ピカチュウが完全に復調していないことを隠していたのが、
ナエトルにはショックだったのだ。

もっとも、ピカチュウがその事を隠していたのは、これ以上ナエトルに心配をかけさせないためであつたのだが。

「それでも完全に解毒しておかないとまた体調が悪くなりますよ？
癒しの鈴!」

チリーンの体から心地よい鈴の音が辺りに響き渡る。

その美しい音色に、ピカチュウをはじめ、この場にいた全員が暫し、その音色に聞き惚れた。

「……………」

「どうですか？ 気分の方は?」

鈴の音が止みチリーンがピカチュウに向かって尋ねる。

その音色を、目を閉じて黙って聞いていたピカチュウは、鈴の音が止むなり、ゆっくりと目を開いた。

「……………うん。すごくいい。ありがとうチリーン。それに皆も」

「お礼なんていいんですわ。」

ワタシ達皆ギルドの仲間じゃありませんの」

「……………キマワリ」

キマワリの言葉に感動したのか、ナエトルは少し潤んだ目でキマワリに目をやる。

「ハイハイ! そうだぜ!」

仲間が困ってる姿を見たら助けるのは当然だぜ！　ヘイヘイ！」

「ヘイガニいゝ」

「がんばって皆で遠征メンバーに選ばれようぜ？」

ヘイガニに続いてドゴームも励ましの言葉を述べる。

それを聞き、ナエトルはそれぞれの顔を順番に見ていく。

「……うっ、でも、さっきペラップが、ボク達は落ちるだろうって」
だが、ナエトルは再び下を向き俯いてしまふ。同様に、ピカチュウも険しい表情を浮かべていた。

「そんなの！　そんなのまだわかないでゲス！」

ナエトルの言葉を振り払うかのようにビッパが言葉を発する。

その言葉に、他の弟子達も大きく頷いた。

「ヘイヘイ！　そうだぜ！　遠征まではまだあと1週間もあるんだ！
どうなるかなんてわかんないぜ！　ヘイヘイ！」

「そうだ。諦めるのはまだ早いぞ？」

ビッパに続いてヘイガニとドゴームが言葉を続ける。

その言葉に、ナエトルは再び顔を上げる。

「そうですね。まだメンバーは決まっていますわ」

「……キマワリ……」

「最後まで諦めずにがんばりましょう！？」

「皆、ピカチュウやナエトルとも遠征に行きたいんでゲスよ」

「チリーン、ビッパも……」

ナエトルは目に涙を浮かべて仲間達の顔を見る。

——嬉しかった。素直に。

仮に自分達が選抜隊に選ばればその分この中の誰かが落ちることになる。

そのことがわかっててなおも自分達を励まし、応援してくれているのだから。

ナエトルはそれが嬉しくてしょうがなかった。

ナエトルは徐ろにピカチュウの方を見る。

その視線に気付いてか、ピカチュウは小さく笑みを浮かべる。

「ワタシは最初から諦めてないよ？」

だってワタシ、諦めるって言葉知らないもん」

その言葉を聞いて、ナエトルははっとする。

——それは以前スリープと対峙した時にピカチュウが言った言葉。
ピカチュウはいつだって諦めずに進んできた。そして、そんなピ
カチュウを信じて、自分も進んできたということを、思い出した。

「——そうだったね。」

ピカチュウはそんな言葉、知らなかったよね？」

ナエトルは苦笑しながらピカチュウと視線を交わし合う。

そこには、もうすっかり迷いを振り切ったすがすがしいナエトル
の顔がそこにあった。

「——うん。わかったよ。」

ピカチュウが諦めないのなら、ボクだって諦めない！ うっん、
ボクだけ諦めるわけにはいかないよ！」

「さっすがナエトル！ そうこなくっちゃ！」

それでこそワタシの相棒だよ！」

ピカチュウの賛辞に、ナエトルは力強く頷く。

「うん！」

皆も、ありがとう！

ボク達も選抜隊目指して、がんばってみるよ！」

「よし！ よく言ったぜ！」

「その意気でゲス！」

「元気出していきましょう！」

ナエトルの言葉に全員が志気を高める。

——選抜隊目指して、最後まで諦めずに頑張る——という目標がその胸に刻まれた。

「さてと。お腹も一杯になったことだし、今日の仕事をしますか。確が見張り番って言われてたわよね？」

ピカチュウの疑問に答えるかのように、ドゴームは大きく頷いた。「そうだ！ このワシがビシビシ鍛えてやるからな！ 覚悟しろよ！？」

「上等！ パーフェクトにこなしてあげるわよ！」

ね？ ナエトル」

「うん！ がんばるよ！」

決意も新たにピカチュウ達は部屋から出て、それぞれの持ち場へと向かっていった。

遠征を前に思いがけない所で意外な想いを知ることとなったピカチュウとナエトル。

だがその想いが、今の二人にとって癒しとなったのは、言うまでもない。

遠征まで、あと——7日——

ピカチュウ「……作者さん、冒頭のあれはいいの？

思いつきりフライングしてんじゃないの」

いや、まあ、多分大丈夫だと。

あれはナエトルが手を握っててくれて心の底から安心してたからあの夢を視たって感じで記憶がリバーズしたわけじゃないから。

ピカチュウ「こじつけっぱいわね」

ツッコミは受け付けませんよ（笑）

Expedition - 18 ピカチュウの決意（前書き）

お久しぶりの探検隊です。

またまたお待たせしてどうもすみません（土下座）

ピカチュウ「じゃ、ペナルティ受ける？」

勘弁してくれマジで（泣）

——「おい！ ピカチュウにナエトルー！ 今日のもう上がりだ！ 戻ってきていいぞー！」

ドゴームから業務終了の合図が伝えられる。

——だが、2人が呼びかけに応えることはできない。

2人共くたくたに疲れ果てていたからである。

リンゴの森での騒動から一夜明けて翌日。ピカチュウとナエトルの2人は、いつもの依頼の仕事ではなく、見張り番の仕事を任されていた。

見張り番とは、見張り穴と呼ばれる穴の中に入り、そこから外からやってくる来客の足形を判別するという仕事である。

最初ドゴームから話を聞かされたとき、ピカチュウもナエトルも、それ程難しい仕事ではないと考えていた。

だが、いざ始めてみると、その考えがおおいに間違っているということを思い知らされた。

見張り穴からドゴームが待機している場所までは距離があり、かなりの大声で叫ばなければ聞こえないことと、訪れるポケモンの足形を瞬時に見極めなければならぬため、常時上を向いていなければならなかったりと、想像以上の過酷さであった。

終わってみれば、依頼の仕事の時以上の疲労感が2人を襲っていた。

「……こ、こりは、結構しんどいかも……」

息も絶え絶えに言うピカチュウ。一日中声を張り上げていたせいか、その声はかなりかすれている。

「……ホントだよ。疲れたあ。」

でも、デイグダは毎日見張り番をやってるんだよね？　すごいや」
……た、確かに。あの小さい体のどこにそんな力があるんだらう。
もしかしてデイグダって、何気ない奴なんじゃ……？

「さて、業務終了のお達しも来たし、戻ろうか」

「うん。そうだね」

疲労で重たい体を引きずり、2人は上へと戻っていった。

さて、気になるのは見張り番の評価。

目を閉じ、沈黙を守っているペラップを前にして、ピカチュウとナエトルは緊張の面持ちで結果を待った。

「……結果は……」

ペラップの溜めで更に緊張感が増したのか、ナエトルはごくりと
のどを鳴らす。

朝の事もあり、いい評価はもらえないのではないかと心配してい
た。

不安な気持ちを抱くなか、それまでだんまりを決め込んでいたペ
ラップが、ゆっくりとそのくちばしを開いた。

「……パーフェクトだ。よくやったな」

意外にも高評価である。まさかの満点評価にピカチュウもナエト
ルも安堵し、笑みを洩らす。

「これは今回の報酬だ」

そう言っただけ渡されたのはポケと装飾品、栄養ドリンクに復活の種
などのかなり豪華な代物であった。

2人の働きに満足なのか、朝よりは少し機嫌よくペラップはそれ
らの道具を手渡してくれた。

その日の夜。夕食を済ませ、自室へと戻ったピカチュウとナエト
ルは、前日の傷と今日の仕事の疲れとで、ベッドに横になるなり、
すぐに眠りに落ちてしまった。

——明けて翌日。

今日も2人は依頼の仕事は任されず、代わりにギルドの食料庫と倉庫の在庫調査と、カクレオンの店の商品の入荷状況のチェックを言い渡された。早い話が今日も雑用である。

調査を終えた2人は次の仕事を済ませる為、カクレオンの店に向かう為に、トレジャータウンの中を歩いていた。

「あーあ。今日も雑用かあ。

早くまた探検に行きたいよ」

「仕方ないよ。プクリンの命令なんだし、おとなしく従わないと。そのうちまた行けるようになるよ。

それまで与えられた仕事をちゃんとやらなきゃ。でしょ？」

「……そうだよな。たまにはこんな仕事も有りだよな？」

「そうだよ。

——それに、リンゴの森でやられた傷を治すのには丁度いい機会だしね」
タイミング

和やかに談笑しながら歩く2人。

そんな2人に、反対方向から歩いてくる1人のポケモンが声をかけてきた。

「よっ！ お前等！」

白い体毛に額の中央に赤い模様。両手に鋭い爪を持つそのポケモンはヤルキモノと呼ばれるポケモンである。

ヤルキモノはトレジャータウンの近くにある森に住んでいて、散歩がてらよくタウンにやってくるポケモンである。

ピカチュウとナエトルも、トレジャータウンを訪れたときに何度か顔を逢わせていたのですっかり顔馴染みになっていた。

「おはようヤルキモノ」

「今日もいい天気ね？」

「おう。そうだな！」

それより、珍しいじゃないか。この時間にお前等がこの辺りをうろつろしてるなんて。

今日は探検の仕事は休みなのか？」

ヤルキモノの質問に気まずさを感じたのか、ナエトルは言葉を詰まらせる。

だが、それとは対照的に、特に気にする様子もなく、ピカチュウはヤルキモノにありのままを説明する。

「うん実はね、この前の探検でちよつと失敗しちゃって、雑用係を言いつけられてるの。」

だから暫く探検には行けそうにないかなあ」

「そうか。ま、失敗くらい誰にでもあるさ。気にするな！」

「うんありがとう」

「ところでお前達、ガラガラ道場というのは知っているか？」

「ガラガラ道場？ 何それ？」

聞き慣れないその施設の名前に、ナエトルは首を傾げる。

「知らないか。まあ無理もないけどな。」

ガラガラ道場っていうのはな、探検隊の修練を目的に作られた探検隊専門の道場だ」

「へえ。そんな施設があるの？」

感心して頷くナエトルであるが、ヤルキモノは少し困ったような表情を浮かべて、

「ただなあ、少しばつか問題があつてよ。」

その道場、名前の通りいつもガラガラでよ、そのせいで一度は潰れちまつたんだよ」

「ええっ！？ つ、潰れちゃったのっ！？

「じゃあ、道場はもうないってこと!？」

驚き声を上げるナエトルにしかし、ヤルキモノは目を閉じ、爪を立てて横に振る動作をする。

「まあそう慌てんな。話は最後まで聞けって。」

確かに一度は潰れちまったんだけどよ、その後、多くの探検隊から要望が寄せられてきてな。

その声援こえに応えて、今回見事に復活を果たしたってわけだ!」

……ガラガラなのに探検隊からたくさんの要望が来たの? なんか、矛盾してるような……

ヤルキモノの説明を聞いていてそんな疑問が生じるピカチュウ。もちろん言葉には出さない。

「んで、俺はガラガラに頼まれてこうやって道場の宣伝をしてるってわけだ。」

どうだお前等。探検行けなくて暇なら一度行ってみたらどうだ? あそこはいろんな種類タイプのポケモン達と戦えるからな。修練トレーニングするにもってこいの場所だと思うぜ?」

「うーん……考えとくよ。仕事はまだ残ってるし、時間があつたら行ってみるよ」

修練とか特訓が苦手なナエトルは曖昧な返答を返す。

その返答こたえに満足したのか、ヤルキモノはそれ以上何も言わずその場を去って行った。

ナエトルはそれを黙って見守る。その時――

「……探検隊トレーニングの、修練が出来る場所――か」

聞こえるか聞こえないかの小さな声で、ピカチュウは一人、そう呟いた。

——カクレオンの店で入荷情報を聞いた後、ピカチュウとナエトルは報告の為ギルドへと戻っていた。

報告を受けたペラッパは内容を聞くなり納得し、この後は自由^{フリー}に過ごしていいと言い渡された。

時間の空いたピカチュウとナエトルは、とりあえず外に出ようと思ひ、ギルドの入り口へとやってきていた。

「——さて、と。夕飯まで自由にしていいって言われちゃったけど、何をしよう？」

いざとなると何も思いつかないよねえ」

独り言を呟くナエトル。

いつもならここでピカチュウのツツコミが飛ぶ所である。が、今日は何も飛んでこない。

疑問に思つてナエトルがピカチュウの方を向く。

すると、気になる事でもあるのか、ピカチュウは下を向き、なにやらひたすら考え事をしていた。

「ピカチュウ、どうする？ 何しよつか」

しかし、ナエトルの問いかけに全く応えず、ピカチュウは沈黙を保っている。だが、まるで何かを決意したかのように、やがて意を決してナエトルの方を向き、ゆっくりと口を開いた。

「——ナエトル、特訓するよ」

——それは予想だにしていない言葉であつた。

ピカチュウの口から発せられた特訓の2文字に、ナエトルは目を丸くし、驚きの表情を見せる。

「ええっ！？ と、特訓！？」

ナエトルの頭の中ではこの後、特に何をするでもなくただのんびり過ごそうと考えていたためその言葉は完璧に予想外であつた。なので、この反応は当然といえば当然であつた。

「一体どうしたの？ 何で急に特訓なんて」

「別に急ってわけでもないんだよね。」

実を言つと、暫く前から考えていたことなの。

この先、今まで以上に危険な場所に行く事もあるかもしれない。

その時、今の實力じゃ切り抜けられない出来事に出くわすことだ
つてあると思う。

万が一そうなたらどうなるか——怪我で済めばいいけど、下手
をすれば最悪の可能性だつてあるかもしれない」

——最悪の結末——

その言葉が効いたのか、ナエトルの顔が青ざめていく。

「そうならない為にも、ワタシ達、今以上に強くならなきゃいけない
んじゃないか——つてね」

ピカチュウの言葉を、ナエトルは黙つて聞いている。

だが、その表情は複雑な表情（かお）をしていた。

「今度のことがあつて益々そう思った。」

——ワタシ達には、まだまだ、色々と至らぬ箇所（てん）がたくさんある。
そしてそれらを克服していかなきゃならないつて——」

「……ピカチュウは、十分強いと思うけど？」

——それはナエトルの本心。

心の底からそう思っている、率直な意見だつた。

今までピカチュウの戦っている姿勢（すがた）を見てきて、本当の意味での
強さというものを、ナエトルは学んでいた。

そしていつか自分も、ピカチュウのように強くなりたいと、心の
底から真剣にそう思うようになっていた。

そのピカチュウに、自分には至らない所があると言われては、目
標にしているナエトルとしては当然納得がいかなかった。

「——でもスカタンク達には負けたよ」

「それは、悪いのはボク達じゃなくてアイツ等が——」

「理由はどうであれ負けたのは事実。負けたのはワタシ達が弱かったから。」

ワタシ達にもっと実力があつたら、きつとあんな結果にはならなかったと思う。違う？」

ピカチュウの指摘にナエトルは俯いてしまう。

——ドクローズの連中に負けてしまった事を、ナエトルはまだ認めたくなかった。

だが、負けが現実^{それ}。

どれだけナエトルが拒んでも、現実を受け入れなければならぬ。ピカチュウの言う通り、あそこで自分達が最後の^{あのかた}一撃に耐えきつていれば、あるいは違う結末になっていたかもしれない——ナエトルはそう考える。

ピカチュウの意見に、ナエトルは、無言で小さく首を縦に振る。それを見て、ピカチュウは微笑み、

「——なら、もっと強くならなくちゃね。」

今後またドクローズと戦う時が来るかもしれない。

その時に、もう負けないように——」

「……うん。そうだね。」

ボクももっと……強くなりたい」

——ピカチュウに負けないように。せめて、ピカチュウと同じくらい、強くなりたい！

ナエトルは心の中でそう付け足す。

「決まり——だね？」

「うん！——でも、どうやって強くなるの？」

「さっきヤルキモノが言ってたでしょ？」

探検隊専用の修練施設トレーニングがあるって」

「ああ、確か道場がどうか——」

「そこに行ってみよう!」

行き先を決めると、2人は目的の道場へと向かうべく、ギルドの階段を降りていった。

——トレジャータウンの中心から少し南へ行った所にあるガラガラ道場。

ヤルキモノの行った通り、訪れるポケモンものがいないのか、賑やかな中心と打って変わって、ここだけ閑散としていた。

「ここだね。ホントに誰もいないや」

辺りを見回してナエトルはそう洩らす。

周囲には人っ子一人見られない。

だが、集中して修練するトレーニングには丁度いい。ピカチュウはそう考えていた。

「とにかく、中に入ってみよう?」

ピカチュウとナエトルはおそろおそろ中へと足を踏み入れていく。そこには、道場の中央にどっかりと座り込み、居眠りをしている1人のポケモンがいた。

左手に太い骨を持ち、頭全体が頑丈な骨で覆われている。

いかつい風貌に似合わず、鼻から鼻ちようちんを出しながら眠っているその姿に、どこことなく可愛らしさが漂う。

「あの〜」

おそろおそろナエトルは眠っているポケモンに声をかける。

すると、ナエトルの声に反応し、膨らんだり萎んだりを繰り返していた鼻ちようちんがぱちんという音を立てて割れる。

音に気付いて、ようやく眠っていたポケモンは目を覚ました。

「……ん、ん？ 誰だよ。人が気持ちよく眠っているのに起こすのはあゝ？」

完全に目が覚めていないのか、そのポケモンは目をこすり、寝ぼけた声で返事を返す。

「ここで修行ができるって聞いたんですけど……」

ナエトルに続きピカチュウがポケモンに向けて口を開く。

「そっだよ。ここは探検隊を鍛える場所だよ……って、まさかお前達、ここに修行に來ただか？ ということは客か？」

……気付くの遅すぎ。それとも、あまりに人が來なさ過ぎてばかりだったとか？

などと思いつつもピカチュウは笑顔で「そうです」と答える。

ピカチュウの返答を聞いて、相手のポケモンは完全に意識を取り戻したのか、それまで半開きだった両目がかっと見開き、目を覚ます。

「……きゃ、客だ。……遂に……とうとう、客が……來ただあああああああ！」

あまりのオーバリアクションにピカチュウは一瞬だが引いてしまいそうになる。

だが、それだけ自分達が道場^{きやう}に來たことが嬉しかったのだろう。そう思い直した。

「ここはガラガラ道場！ 探検隊を鍛える為の場所だよ！

んでもって、オラがこの道場の師範。ガラガラだよ！」

名前を名乗られたのでピカチュウとナエトルも自分達の名前を名乗り、自己紹介する。

軽い挨拶を済ませたところで、再びガラガラが口を開いた。

「道場を再開したのはいいんだけどよお、客がだあれも來なくてな

あ。

オラすつげえ落ち込んでたんだあよ」

そう言つて愚痴をこぼし始めるガラガラ。

とつとと修行トレーニングを始めたいピカチュウであつたが、なんとなく話の腰を折つてはいけないうような気がしたのでここは涙を飲んでぐつと我慢して話を聞いていた。

「そしたら！ お前達めえが来てくれただよっ！

お前達めえはオラの最初の客つてわけだよ！」

「……それで、道場の使用料とかは幾らになるんでしょう？」

ここに来る前に一応ヨマワル銀行でお金を下ろしてきていた。今まで、足りない道具の補充など、必要最低限の額しか使つていなかったため、その預金額はかなりのものになっているというのはここだけの話である。

「いやいやいや！ オラお前達めえが来てすつごく喜んでるだ！

料金なんていらねえ！ 無料タダでいいから道場ここ使つてけろっ！」

「えっ！？ いいの！？」

無料——という言葉にピカチュウはありがたさを感じる。一方で、若干の不安も抱いた。

「——本当にいいの？」

確認の為ピカチュウは念を押してもう一度ガラガラに尋ねる。

疑っているわけではないのだが、修練トレーニング終了後に、法外な請求をしてくるのではないかと考えたためであつた。

だが、ピカチュウの不安を取りはからうかのように、ガラガラは大きく一つ頷いて胸をどんと叩き、

「もつちろんだ！ 遠慮ねげえしねえで、修行してってくれ。

お願いだ！ どうかこの通り！」

そう言つて土下座までしてきた。

それを見てピカチュウは慌ててガラガラを立たせようとし、同時に、このポケモンには嘘はつけないということを、思い知らされることとなった。

――「あそこが修行部屋に通じる入り口だよ」

ガラガラに案内され、ピカチュウとナエトルは修行部屋へと通じる扉の前へとやってきていた。

入口に来るまでの間に、2人はガラガラから修行部屋の簡単な説明を受けた。

部屋数はポケモンの種族と同数の17種類。

中にいるポケモン達を倒し、部屋の最奥部に辿り着ければ終了という仕組みになっているらしい。

この修行部屋も、不思議のダンジョンと同じ仕組みになっている。入る度に中の構造は変わり、そしてそれプラス、中には一切の道具を持ち込むことができないという。

つまり、己の実力だけで突破を目指すという、まさに修行と呼ぶにふさわしい扱いといえるだろう。

「じゃあ、とりあえず午前は個人練習。午後は一緒に連携の練習でことでもいい？」

今後の予定を確認するピカチュウ。それに対し、ナエトルは大きく頷いて、

「うん、わかった！」

「それじゃあ、がんばってね？」

「ピカチュウもね！」

そう言うと、ピカチュウとナエトルは、それぞれ別の種類の修行部屋へと入っていった。

「——おい、あいつつて確か、電気タイプ……だったよな？」
修行部屋で待機していたポケモン達のうち1人が呟く。

修練にやってきた相手を目にして、驚きを感じたからである。

1人の声につられて全員が来訪者の方に視線を向ける。

相手が電気タイプかどうか——それは、その者の容姿^{すがた}を見れば一目瞭然であった。

そのポケモンは電気タイプの代名詞と呼ばれるポケモンだったからである。

「ほ、ホントだ。正気かよ？」

電気タイプのポケモンが地面^{こゝろ}の間に挑んでくるなんて
ポケモン達は口々にそう洩らす。

聞こえてるのかいないのか、そのポケモンはざわつくポケモン達に聞こえるよう、わざと大きな声で疑問に応えた。

「残念だけど本気だよ」

「なにいいいい！？」

聞かれてると思っていなかったのか、ポケモン達は全員一斉に驚きの声を上げる。

たった今、入ってきた電気^{でんき}ネズミ——つまりはピカチュウの声に反応して。

ピカチュウが修練^{トレーニング}として選んだ場所——それは地面タイプのポケモンがいる部屋——地面の間であった。

電気タイプであるピカチュウが最も苦手とする種族^{タイプ}のポケモンが集まる部屋。

ピカチュウはあえてその部屋を選んでいた。

しかもその理由は——

「だって、これくらいの枷^{ハンディ}がなきゃ、修行^{トレーニング}にならないでしょ？」

「んなっ!？」

「なんだとおおお!？」

ピカチュウが地面の間を選んだ理由——それは、電気技に頼ることなく相手を戦闘^{バトル}を行うため。

これから先、電気技が効きにくい相手と戦うこともあるかもしれない。その時の事を見越した故の選択であつた。

だが、ピカチュウの言葉を、この場にいたポケモン達は全員、自分達は見下されている——と判断した。

ポケモン達は、怒りの表情でピカチュウを睨み付ける。そして次第に殺気を膨れ上がらせていく。

「このっ、舐めやがって!」

「なら望み通り、返り討ちにしてやるよお!」

そう言つてポケモン達は一斉にピカチュウに向かって走り出してくる。

「さあ? それはどっちかしらねっ!？」

ピカチュウもポケモン達に向かって突撃していった。

ピカチュウは走っている最中に、頭の中で戦いの順番を組み立てていた。

……相手が地面タイプである以上、電気技は使えない。

——となると、打撃技を中心に攻撃を組み立てていけないと。

今ワタシが覚えてる技で使える技は——

「電光石火!」

目にもとまらぬ猛スピードでピカチュウはヒポポタスに向かって突撃していく!

元々素早さの低いヒポポタスにとって、ピカチュウの速さ^{スピード}についてけるわけもなく、電光石火^{それ}をまともに受けて、目を回してしまっ

た！

「ちい！ 食らえ！ 砂地獄！」

ナックラーを中心にすり鉢状の穴が形成され、広がっていく。

この穴に捕らわれると動くことができなくなってしまう。厄介な技である。

「つとお！？」

ピカチュウは穴に落ちないように素早くその場を離れ別のポケモンに向かって突っ込んでいく。

他のポケモン達もピカチュウに当てようと、次々と攻撃技を繰り出してきたが、ピカチュウはそれらの全てをよけきってしまった。

その後もピカチュウは相手の攻撃を巧みに避けつつ、攻撃を決めていくという戦法をとり、相手の数を少しずつ、確実に減らしていく。

「このっ、ちょこまかしやがって！ 食らえ、地震！」

業を煮やしたサンドパンが地面タイプの大技、地震を発動させた。地面を揺らして相手にダメージを与える地震はその場にいる者全員にダメージを与える。もちろんピカチュウが食らえばジ・エンドである。

「さすがにそれは食らうとまずいわね」

そう言つとピカチュウは手近な所にいたゴマゾウに向かって駆けていき、そして、踏み台にして空中へ逃れた。

「ぐえっ！？」

踏み台にされわけのわからないうめき声を上げるゴマゾウ。

ピカチュウが空中へと逃れた丁度そのタイミングで、地震が発生した。

ピカチュウと、技を出したサンドパン以外の全員が地震によるダ

メージを受け、それにより、大半のポケモンが戦闘不能になった。
早い話が自滅である。

「もう一度電光石火！」

空中で体勢を整えると、ピカチュウはサンドパンに向かって突っ込んでいく！

既に何発か攻撃を受けていて体力が残り少なかったサンドパンが電光石火に耐えきれぬわけもなく、あっさりと戦闘不能に陥った。
このいちげき

それにより、この階での戦闘は終了した。
フロア

「……………ハア。終わったあ」

ピカチュウは立ち上がったて息を整える。

攻撃こそ受けていないものの、相手の攻撃を避けるため始終走り回っていたため、かなりの体力を消耗していた。

「今持つてる技だけじゃ、少しずつダメージを蓄積させるしかなかったとはいえ、結構時間かったよねえ」

それは相手を全滅させるまでにかかった時間。

自分の技が、どれくらいの力量レベルなのかを意味している。その時間はピカチュウにとって決して満足のいく結果ではなかった。
もの

もし、実際のダンジョンで同じくらい時間をかけていたら、お尋ね者ならあつという間に遠くへ逃げていることだろう。

ピカチュウの中で、今の自分に足りないものは何なのか——その答えが、うつすらとはあつたが見えてきたような気がしていた。

「……………電気技以外にも何か別の技が必要だねこれは」

そう呟くと、ピカチュウは次の階へと、歩みを進めていった——
フロア

というわけで、次回から特訓編に突入でございます♪

ピカチュウ「てなわけで、ワタシ達の特訓に付き合ってくれる探検隊の皆様を募集いたします♪」

待て待て待て！ 何勝手に決めてんのっ！？

ピカチュウ「あれ？ ダメなの？」

ダメに決まってるでしょ！

次話以降の話の原稿仕上がってるのに、んな募集したらこれからの話の展開が狂って大幅な書き直しを——（没

ピカチュウ「そういうわけなんで、腕自慢の探検隊の皆さん、ワタシ達と戦ってみたい方の参加を心よりお待ちしておりますねえ♪」

話勝手に進めんなあああああ！

皆さん！ 募集なんかしませんよー！？ お間違えないようどうかご注意をおおお！

さて、話変わってお知らせです。

既にご存じの方もいらっしゃると思いますが、ユーザー登録無しの感想の書き込みが解禁となりました。

それにより、この小説の感想欄も規制解除し、誰でも感想が書けるよう変更いたしました。なので、ユーザー登録していない方でもお気軽に感想書いていただけます♪

ピカチュウ「それって、感想ちょうだいって言ってるのと同じ——」

黙らっしゃい。

なので、皆様からの感想、どしどしお待ちしております♪どうか気軽に書き込みください♪

もちろん、『外伝』や『レジエクロ』の方も規制解除しております。そちらの方も併せてお願いいたします。

では今回はこの辺にて。

ツバ・ピカ『さよなら〜』

よし、次は『レジエクロ』だ！（走り

ピカチュウ「行っちゃった（汗）」

Expedition - 19 特訓の日々(前書き)

ピカチュウ「ちょっと作者さん、とうとう六月一度も更新しなかったわね?」

うっ(汗)

い、いや、ホントは六月の最終日に更新しようと思ってたんだよ。でも、結局間に合わなくて……(滝汗)

ピカチュウ「言い訳はいいから。今回はちゃんとペナルティ受けてもらっわよ?」

ちよ、待ってくれええええ! (滝汗)

——「そろそろ出てくる時間ころあいだよ」

独り言葉を洩らしながら、ガラガラは修行部屋へと続く入口の前へと歩いていく。

ピカチュウとナエトルが中へと入ってから、小一時間が経過しようとしていた。

実はこう見えてこのガラガラ、挑戦者の力量を見抜く事ができる才能を持っている。

そのガラガラの見立てによると、今の二人が修行部屋へと入り、仮に突破したとするととなると、その為に費やす時間は早くて一時間、もしくはそれ以上。

もし、途中で倒れてしまったのなら、もっと早い時間に戻っているはず——

なのに、開始から現在までなんの音沙汰もない。

ならば、二人は順調に修行部屋を進んでいるのだろう——今のところは。

そう判断していた。

ガラガラは入口の手前でうろろして落ち着きのない様子を見せている。その時——

一つの扉が開いた。

「おおっ！」

ガラガラは期待の目でたった今開いた扉へと視線を向ける。中から出てきたのは——

「……ふう」

——先に出てきたのはナエトル。

その体はあちこち傷だらけになり、痛々しいものとなっていた。

ナエトルが修練の舞台として選んだのは『岩タイプの間』。岩ポケモンの出てくる部屋である。

ピカチュウと違い、戦闘経験バトルの少ないナエトルは、まず戦闘慣れバトルするため、自分の力で確実にダンジョンを突破できる事を第一に考えた。

それ故、相性の点を踏まえ、一番相手にしやすい岩タイプの間を選んだのである。

「おおっ！ 突破したるか！

なかなか戦るでねえか！」

「えへへえ。ちよつと大変だったけどね」

ガラガラガラの賛辞にナエトルは照れ笑いをする。

「あれ？ ピカチュウは？ まだ戻ってきてないの？」

ナエトルは辺りを見回す。

見たかぎりこの場にピカチュウの姿はない。

ピカチュウの事である、きっと自分より先にクリアしていると思っただけに、その表情は意外そうであつた。

ナエトルの言葉に対し、ガラガラは表情を曇らせる。

ガラガラガラの様子がおかしなことに気付いたのか、ナエトルは不思議そうな表情で首を傾げる。

「ああ、あの娘っ子は……多分、失敗して戻ってくるだよ」

「どうして？」

ガラガラは心痛な面持ちでナエトルにピカチュウが地面タイプの部屋に入ったことを説明する。

それを聞いたナエトルは、話が進むごとに顔つきがどんどん険しいものになり、事の重大さを理解した時には、すっかり青ざめてしまっていた。

「ええっ！？　じ、地面タイプの部屋に入っちゃったの！？
地面タイプ——って、ピカチュウと相性最悪じゃない！　いくら
なんでもムチャだよ！」

ナエトルの言葉に、何故か自分が怒られているように感じ取った
のか、ガラガラは持っていた骨をぶんぶか振り、必死の形相で、
「お、オラも止めたがええって言っただよ！

だどもあの娘っ子、それくらいの難関がなきゃ修業になんねえ——
って……」

「……ピカチュウ」

ナエトルは心配そうな様子で修業部屋の方を見つめる。

だが、ピカチュウが出てくる気配はなく、扉は閉ざされたままで
あった。

——それから更に一時間が経過した。

だが、まだピカチュウが出てくる気配は見えない。

何事もなく、ただ時間だけが過ぎていくこの状況に、ナエトルは
心配を通り越して、段々と不安になってきていた。

「……ピカチュウ、まだ出てこないよ？」

心配そうな表情で見つめるナエトルに対し、ガラガラはうーんと
唸って首を捻らせ、

「おっかしいなあ。」

失敗したにせよ突破したにせよ、どっちにしろそろそろ出てきて
もおかしくないはずなんだがなあや」

ナエトルとガラガラは再び修業部屋の方へと向く。

だが、扉が開く気配は一向にない。

動きが全くないこの状況に痺れを切らしたのか、ナエトルはとう
とう耐えきれなくなり、

「やっぱりボク、中に入る！　ピカチュウ探しに行ってくる！」

「ちょ、待つだあよ！」

後から入っても、先に入った奴と同じ空間に入れるとは限らねえだあよ！」

慌ててガラガラはナエトルを止めようとする。

だがナエトルはガラガラの静止を振り切り、意地でも中に入ろうとする。

「でも！　じつと待つてることなんてできないよ！」

ナエトルとガラガラが問答をしていたその時である。

突然扉が開く音がした。

『！！』

ナエトルとガラガラは口論を止め同時に入口の方を向く。

そこには、体中あちこちを傷め、ナエトル以上にボロボロになったピカチュウの姿があった。

「……はあ、疲れたあ。」

やっと出てこれたあ」

「ピカチュウ！」

嬉しさのあまり大きな声でピカチュウを呼ぶナエトル。

ナエトルの声に気付き、ピカチュウはそちらの方を向く。

「あれ？　ナエトル、早かったんだね？」

ワタシより先に戻ってるなんて」

状況が全く理解できていないピカチュウは、何も考えずいつも通り笑顔を見せる。

そんなピカチュウの様子を見て安心したのか、ナエトルは安堵の表情を浮かべ、息を洩らす。

「ピカチュウ、良かったあ。心配しちゃったよあ」

「え？　どうして？」

心配される原因がわからずピカチュウは首を傾げる。

「だって、地面タイプの部屋に入ってたっていうから。

ピカチュウ地面タイプは苦手じゃない。やられちゃったんじゃないかと思って——」

「ああ、そのこと？」

大丈夫だよ。まあ、ちよつと苦労はしたけどね。
なんとか突破できたよ」

ピカチュウの説明を受けて驚いたのはガラガラである。

苦手なタイプの修業部屋を選んで、まさかクリアできると思っていなかったのである。

ガラガラは、驚きのあまり、啞然とした表情でピカチュウを見つめ、

「し、信じられねえだよ。

まさか、本当に突破しちゃうとは、正直思わなかっただよ」

「ま、強いからねワタシ」

そう言つてピカチュウはウィンクを一つ。

その言葉に、ガラガラは目を点にし、ナエトルは苦笑いをする。

「——さて、じゃあ次はコンビネーションの練習、行くよっ!？」

——ピカチュウとナエトルは短い休憩を挟み、今度は連携コンビネーションの練習をするため、二人で『水の間』に入っていた。

文字通り水タイプのポケモンがいる修業部屋であり、二人にとって最も得意とするタイプの部屋であった。

「——さて、午前中は電気技全く使わなかったから充電ばっちだし、こつからは全力でフルパワーで行くよ!」

そう言いつつ電気袋を光らせるピカチュウ。

それに負けじと、ナエトルも気合いの入った表情で、

「ボクも! 気合い入れていくよ!」

張り切る二人の前に、一人のニョロモが姿を現す。

「あ！ 来たよピカチュウ！」

ナエトルはやる気の入った表情でニョロモを見つめ戦う姿勢を見せる。

ナエトルの視線にニョロモも気付いたのか、同様に戦闘態勢に入っている。

これでいつ戦闘バトルが始まってもおかしくない——周囲に張り詰めた空気が流れ、緊張感が漂っていた。

だが次の瞬間、その緊張感をぶち壊すような発言がピカチュウの口から発せられる。

「逃げるよナエトル！」

『はいいい！？』

言うが早いかピカチュウはその場から走り去ってしまう。

いきなりの逃走にナエトルとニョロモは目を点にし、呆然とした様子でその場に立ち尽くしてしまう。

「え？ ちょ、ピカチュウ！？」

我に返ったナエトルは慌ててピカチュウの後を追いかける。

「ど、どうしたの？」

何で逃げちゃうのっ！？」

「一人を相手にしても連携コンビネーションの練習にならないでしょ！？」

仲間が集まるのを待つんだよ！」

「な、なる程」

ナエトルは納得した様子で頷く。

因みにニョロモはピカチュウ達の後をぴったりとくっついて追いかけてきている。

逃げられると思っていたいなかったニョロモは慌てた様子で二人の後を追ってきていた。

「待~~~~て~~~~！ 逃~~~~げ~~~~る~~~~な~~~~！」

「嫌だよー！」

どうしても捕まえたきや仲間でも呼んでみたら？」

「言っただな~~~~よ~~~~し~~~~」

ピカチュウの挑発にあっさりと乗ったニョロモは大きな声で他のポケモン達に呼びかける。

ニョロモの呼びかけに応えて、次々と他のポケモン達が顔を出し、ニョロモの後に続いていく。

気付けば、十体以上の大軍勢がピカチュウ達を追いかけてきていた。

「わっ！ ちょ、いくらなんでも多すぎでしょあれ！」

「もう少し！ この先の広間で迎え撃つよ！」

ピカチュウとナエトルは通路を抜け広間へとやってくる。

周囲にはたくさんの水ポケモンが溢れており、ピカチュウ達は完全に取り囲まれる状況となっていた。

「追い詰めたぞ~~~~！ 覚悟しろ~~~~！」

最初に遭遇したニョロモが一歩前に出て間延びした声を出す。

それに併せて、他の水ポケモン達も威嚇するかのようになり声を上げている。

だが、その様子に臆することなく、ピカチュウは小さく笑みを浮かべて頬の電気袋を光らせる。

「——さて、これだけ集まれば十分だね。

それじゃあ、始めようか！？」

ピカチュウの言葉を合図に、バトル スタート戦闘が開始された。

「ハッパカッター！」

まず先制したのはナエトル。

ハツパカッターが真つ直ぐニヨロモに向かって飛んでいき、避ける間も与えず直撃する。

元々相性がいい事もあり、その一撃によつて、ニヨロモはあっさり倒れ、目を回してしまふ。

「隙ありい！ 水鉄砲お！」

がしかし、ナエトルがニヨロモに気を取られてる隙を狙つて、別方向から別のニヨロモが攻撃を仕掛けてくる！

「えっ！？」

その声を聞きつけて、ナエトルはそちらの方を向く。

既に水鉄砲はナエトルに向けて放たれており、その標的を完全に捉えていた！

——ダメだ！ 間に合わない！

既に攻撃は目前に迫つており、反撃は不可能であると悟つたナエトルは目を閉じその場で動きを止めてしまふ。

いよいよ水鉄砲がナエトルに命中するかと思われたその時——

「電気ショック！」

突如現われた電気の壁にぶつかり、水鉄砲は蒸発してしまふ。

「ピカチュウ、ありがとう！」

「油断しないで。次また来るよ！？」

「うん！」

ナエトルは水鉄砲を放つたニヨロモに向かって走つていき体当たりを仕掛ける。

体当たりをまともに受けたニヨロモは一撃に耐えきれず、空中へと高く吹っ飛ばされる！

「ピカチュウ！ 今だよ！」

「オッケー！ 電気ショック！」

ピカチュウは先程よりも強い電撃を二ヨロモ目がけて解き放つ！
バチバチバチイイイツ！

大きな音を立てて派手に電撃が辺りに放たれ火花を撒き散らす！
それは明らかに電気ショック以上の電力、そして威力。
あまりのその威力の大きさに瞬間言葉を失い、ナエトルは面食ら
つてしまう。

「——今の、“10万ボルト”！？
ピカチュウ、いつの間に10万ボルトを覚えたの？」

「え？ いつ——って。
えーっと、いつだろう。うーん……」

ピカチュウは腕を組んで悩む仕草を見せる。
その隙を相手は見逃さない。

「マッドショット！」

その技名を聞いて、ピカチュウとナエトルはぎよつとする。
マッドショットは地面タイプの技。ピカチュウが食らえばひとた
まりもない。

「ピカチュウ、伏せて！ かみつく！」
咄嗟にナエトルは跳躍ジャンプをし、ピカチュウを飛び越えマッドショッ
トに向かってかみつくを繰り返した。
かみつくを受けたマッドショットは粉々になり、ただの土塊と化
す。

それにより、攻撃はピカチュウには届かず、相手の放った技は無
効となった。

「びつくりしたあ。ありがとナエトル」

「油断禁物——でしょ？ ピカチュウ」

ナエトルの言葉に、ピカチュウは笑みを浮かべる。

「よし！ ワタシも負けてられないね！

どんどん行くぞお！」

そう言ってピカチュウは先程マッドショットを放ったニョロモに向かつてダッシュをかける。

ピカチュウがこちら側に向かつて来るのを見て、ニョロモは好機チャンスだと捉えた。

近づいてくる相手ほど、狙いやすいものはないからである。

「バカ！ そっちから近づいてきてくれるとはな！

もう一度食らえ！ マッドショット！」

ニョロモはピカチュウに向けて再びマッドショットを繰り出す！
だが、構わずにピカチュウは突っ込んでいく。

その距離はどんどん縮まっていき、マッドショットがピカチュウに当たると思われた次の瞬間——

ピカチュウは体を捻らせ、尻尾を使ってマッドショットを弾き飛ばした！

「んなつ！？」

「もう一発！ 10万ボルト！」

眩い電光が辺りを包み込む！

ピカチュウが放った10万ボルトは、ニョロモだけでなく、周辺にいたポケモン達を全て巻き込み、一人残らず全てK.O.してしまった！

「——あれ？ 少し威力が強すぎた？

これじゃ特訓にならないね」

ピカチュウは黒焦げになって目を回しているポケモン達に目を向けながら首を傾げる。

まさかの一発オールK.O.に驚いたのか、さすがにナエトルも動

揺の色を隠せず、辺りを見回す。

「ま、まあまだ先もあるし。」

ここで力を使い果たしてもしょうがないんじゃない？」

ナエトルの言葉に納得したのか、ピカチュウは数回頷き、

「うーん、それもそうだね」

ピカチュウとナエトルは互いの顔を見合わせ笑顔を浮かべる。

ふとその時、ナエトルが何かに気がつく。

「——あれ？ ピカチュウ、その尻尾」

「尻尾？」

ナエトルに指摘を受け、ピカチュウは自身の尻尾に目をやる。

見れば、尻尾全体が銀色の光沢を持ち、鈍い輝きを放っていた。

このような現象は今まで見たことがないため、ピカチュウは不思議そうな表情でそれを見つめる。

「何これ？ 尻尾が光ってる？」

「これは、“アイアンテール”だよ！」

「アイアンテール？ 鋼タイプのあの？」

アイアンテール——尻尾を鋼のように固くし、相手に叩きつけて攻撃する技である。

もちろんそのことはピカチュウも熟知している。疑問なのは、何故今そんなものが発動したのかであった。

「でも、何で急に？」

「ほら、ピカチュウよく攻撃に尻尾を使ってたじゃない。

きっと自分でも知らないうちに自然と尻尾が鍛えられてたんだよ！だからアイアンテールが使えるようになったんじゃないかなっ！？」

「なる程。確かにそれは言ってるかもしれないね」

そんな会話をしているうちに、銀色の光沢を放っていた尻尾は力

を失い、元のピカチュウ自身の色である、黄色い尻尾へと戻ってしまった。

「あ、消えちゃった」

「うーん、どうやら技の発動がまだ不完全みたいだねえ」

ピカチュウは自身の尻尾をじっと見つめる。

そして、

「暫く個人練習はアイアンテールの練習かな」^{これ}

小さくそう呟いた。

「さて、それじゃ、練習に戻るっか」

「うん！」

ピカチュウがナエトルの方を向くと、ナエトルは大きく頷いて応える。

その返事に、ピカチュウも頷くと、二人は次の階へと足を運んでいった。^{フロア}

そんな感じで特訓は続き、三日間が過ぎた――

――『みつっ！ 皆笑顔で明るいギルド！』

「それじゃあみんなっ、仕事にかかるよ！」

『オオーーーーーッ！』

ペラップの掛け声に弟子達はいつも通り元気に応えると、それぞれの持ち場へとついていく。

「ペラップ！ これ、倉庫にある道具の在庫数を書き記したリスト
！」

そう言ってピカチュウは紙切れをペラップに押しつける。

「カクレオンのお店の入荷状況は帰ってきてから報告するから！
行くよナエトル！」

「うん！」

言うが早いか、ペラップの返事を待たずピカチュウとナエトルは
急ぎ梯子を登って外へと出て行ってしまう。

「おいこら！ お前達！」

ペラップが口を開いたその時には、既にピカチュウ達の姿はな
くなくなっていた。

右の翼に紙切れを握り締めたまま、ペラップはため息をつく。
ここ数日、ペラップはピカチュウ達の様子を気に掛けていた。

依頼の仕事ができずに雑用ばかり押しつけられているのに、文句
も言わずに黙々とそれをこなしている。

しかも、その表情はかなりいきいきとしているのである。このこ
とがペラップには不思議に思えた。

選抜隊に入ることが絶望視されたはずなのに、明るく振る舞って
いられる理由は何なのか——疑問でしかなかった。

実をいうと、ペラップはポケダンズに落選のことを伝えたとき、
少しきつく言い過ぎたと反省をしていた。

だが、なかなか素直になれないのがこのペラップ。謝るといっ
とを、最も苦手としていた。

それ故、どうピカチュウ達に接すればよいか、その方法がわから
ず数日間思い悩んでいた。

「……親方様に相談してみるか。」

アイツ等が毎日何をやっているのかも気になるしな」

ペラップはそう決めると、プクリンの元へと向かうべく、プクリ
ンの部屋へと翼を飛ばたかせていった。

——一方、ピカチュウとナエトルは、今日も朝一で道場へと足を運
び、特訓を開始していた。

いつも通り、午前は個人のレベルアップである。

そして、個人練習の後、休憩と残りの仕事を兼ねてトレジャータウンをぶらついた後、午後に再び道場へと戻り、次の練習を開始しようとしていた。

「——ねえガラガラ、他にもっと強いポケモンと戦える修業部屋はないの？」

戻って来るなりいきなりガラガラにムチャ振りを振るピカチュウ。というのも、この三日間で、ピカチュウは十七種類ある修業部屋の殆どを制覇していたのである。

ピカチュウのムチャ振りに、ガラガラは悩んだ表情で、

「ううーん、他の部屋っちゅうてもなあー」

ガラガラは暫くうんうん唸って辺りを行ったり来たりする。

数分経ったところで、何かを思い出したような表情をし、ぽんと骨で手を打つ。

「おおっ！　そういえば、確かもう一つ修業部屋があつたはずだよ！」

「本当！？　どんな部屋！？」

「ええーっと、確かあれは……」

そつだ！　思い出しただ！『探検隊の間』　ちゅう部屋だよ！」

『探検隊の間！？』

ピカチュウとナエトルは同時に声を八モらせる。

「『探検隊の間』——って、一体どんな部屋なの？」

ピカチュウの疑問に、ガラガラは少し困ったような表情をする。

「いやあ、詳しいことはオラにもわからねえだよ。」

元々この道場を開いたのはオラのじいちゃんだよ。オラにもわからねえことがこの道場にはたくさんあるだよ」

「その一つが『探検隊の間』ってことだね。」

何がおきるかわからない……か。面白そうじゃない」

探検隊の宿命さがなのだろうか、未知のものに挑むという好奇心に、ピカチュウの興味がかき立てられる。

「じゃあ、その、『探検隊の間』ってやつに入ってみるよ！」

ピカチュウの大胆発言に、ガラガラは慌てたような表情を見せる。

「ほ、本気だか！？　どんな相手が出るのかもわからねえのに！？」

「もちろん！　逆にわくわくしてくるじゃない！」

「ねえ？　ナエトル」

「ふえっ！？　う、うん」

突然振られてびっくりしたのか、一旦間を置いてナエトルは応える。

どうやらピカチュウと違ってナエトルは少しびびっていたらしい。声が少々うわずっていた。

「……そこまで言うなら止めねえけどよお。」

言っとくだが、オラは一応忠告したからなっ！？

後でオラに文句言わねえでけるよ！？」

どうやらガラガラはピカチュウ達が失敗したときの非難を恐れているらしい。これはこれでヘタレな根性である。

ガラガラの忠告に、ピカチュウは笑みを浮かべて頷き、

「わかってるよ。」

「じゃあ、行ってみようかナエトル？」

「うん！」

覚悟を決めたのか、ナエトルは力強く頷き大きな声で応える。

ナエトルの返事と同時に、ピカチュウは両手を扉につけ、力を入れて扉を開く。

そして、恐る恐る、ピカチュウとナエトルは中へと入っていった。

そこは、今まで入った修業部屋と異なり、一部屋しかなかった。だが、その一部屋がかなりの大きさを誇っており、ちょっとしたホール位の広さがあると言っても言いすぎではなかった。

そして、ピカチュウ達が入ってきた入口とは別に、反対側にもう一つの入口があった。

「——誰もいないね」

適当にナエトルは辺りを見回す。

ナエトルの言う通り、部屋の中にはポケモン一匹すら見つけることができない。

この部屋は見通しがいいため、隠れるということは不可能に近い。誰かが潜んでいるという可能性はゼロに等しかった。

「多分、向こうにあるもう一つの入口から来るんですよ。」

誰もいないってことは、まだ対戦相手さんは準備が出来てないってことなのかもね」

「一体どんな相手が来るんだろう？」

「探検隊の間っていう位だからやっぱり探検隊が来るんじゃないの？」

「うっ、怖い探検隊じゃないといいなあ」

相手がわからないということに不安になったのか、ナエトルは僅かに体をぶるつかせる。

その様子を見て、ピカチュウは呆れてタメ息をつく。

——大体、怖い探検隊って一体どんな探検隊なのよ？

ピカチュウがナエトルに活を入れようと口を開こうとしたその時

「——何だよ。誰もいないぞ？」

——声が聞こえてきた。

もう一つの入口の方から。

その声に反応して、ピカチュウとナエトルは同時に声のした方向く。

すると、先程聞こえてきた声と一緒に、また別の複数の声が聞こえてきた。

「強い奴と戦えるって聞いたから入ったのにな。

ガラガラの奴、嘘つきやがったな？」

「まあまあ。

もう少し先まで行ってみようぜ。そしたら誰がいるかもしれねえだろ？」

「うう、怖いよお。帰りたくなってきた」

「ホントですね。暗くて不気味です」

「全く、主等は本当に情けないのう」

「おい、出口みたいだぞ」

賑やかな会話と共に、彼等はピカチュウ達の前に姿を現した——

ピカチュウ「なんか、展開早いね？」

ま、まあね。次回以降をじっくりとやっていきたいからね。
ここでgdgdするわけにはいかんのよw

ピカチュウ「サブタイ特訓の日々なのにバトルおざなりにしちゃダメでしょ」

言うな。わかってるんだから(涙)
次回以降ちゃんとしたバトル書いていくから。勘弁してくれ(土下座)

ピカチュウ「――で、出るの？　とうとう。彼等が」

出ますw

最強の対戦相手の登場ですwww

ピカチュウ「最強というより、最凶？」

いや、それ一人だけだし(汗)
しかもその最凶さん次回は出てこないから。

ピカチュウ「そうなんだ。ちょっと安心」

というわけで、ようやくこちら也开始れそうです。
何が始められるか？　それは次回のお楽しみです。
今回はこの辺にて。ではまた♪

ピカチュウ「あれ？ またこっち更新？

順番的には『外伝』じゃないの？」

まあ、前回のあれは六月分が押して七月に更新されたって感じだから。

ホントの七月分の更新はここからだから（苦笑）

ピカチュウ「なる程ね」

というわけで、前回探検隊の間に現れた彼等の正体がいよいよ判明します！

ピカチュウ「お楽しみに♪」

——現れたのは、細目でアリクイのような顔立ちの背中から炎を噴き出すポケモン——ヒノアラシと、その進化形であるバクフーン。そして、ピカチュウと同じ二人のピカチュウ。目元が似ている辺りから察するに兄弟であろうか、どことなく同じ雰囲気を漂わせている。

そして、鎧のような体の特徴のバンギラスともう一人——

ピカチュウは、その最後の一人を見て、驚きの表情を浮かべる。

「……ミュウツー……」

一言。ただ一言ばつりとそう洩らす。

ピカチュウの洩らした呟きで、ようやくこの場に自分達以外に誰かいることに気付いたその集団は、一斉にピカチュウ達の方へと視線を向ける。

「誰だ？ お前等」

問いかけるように口を開いたのはヒノアラシである。

初対面でいきなりお前よばわりされたことに気分を害したのか、ピカチュウは僅かだがむっとする。

「えと、ボク達は——」

「聞く方から名乗るものだよ？」

ナエトルが応えようとするのを制し、代わりにピカチュウが言葉を発する。

「俺はリュウタだ」

やや挑発的だったピカチュウの口調にもかかわらず、全く気にする様子も見せずに素直にヒノアラシは自分の名を口にする。

……リュウタ？ 何か、人間みたいな名前だけど……まさかね。

ヒノアラシの名前を聞いた瞬間、ピカチュウの中である考えが芽

生える。が、すぐにそれを否定する。

ピカチュウ自身が、その考えをあり得ないことだと考えたためである。

ピカチュウが一人思考を巡らせているその間に、他のポケモン達も次々と名乗りを上げていく。

「ピカです」

「初めまして。コウといいます」

「俺おれあ、ブラットだ」

「我輩はバンと申す」

……我輩……って、何時の時代のポケモンなのよこのバンギラス。考え事をしていたピカチュウであったが、バンの喋り口が特有であったため、思考を中断して思わずツツコミをいれてしまう。

「私はテラだ」

最後にテラと名乗ったミュウツーに、やはり疑問を感じずにはいられないのか、思い切ってピカチュウはテラに向けて質問をぶつけてみることにする。

「……あの、アナタミュウツーですよな？」

「いかにも。そうだが」

質問を肯定され、ピカチュウはさらに言葉を失う。

衝撃のあまり、人前（いや、ポケ前？）だという事を忘れ、口をあんぐりとさせ、間抜けな表情を曝していた。

「……嘘でしょ！？ 数多い伝説のポケモンの中でも極めて稀な存在であるポケモンミュウツーが。なんでこんな所につ！？」

「そりゃ、俺等の仲間だからなテラは」

「はあっ！？」

得意げにそう答えるのはリュウタと名乗ったヒノアラシである。

どうやら彼がこの集団のリーダーらしい。

リュウタの言葉に、ピカチュウは思わず反射的に声を上げてしま

う。

一方で、ナエトルはピカチュウが驚く理由が分からず、横で首を傾げていた。

伝説のポケモンというのは滅多なことでは人前に姿を現さない。故に伝説とか幻だと言われている。

なのに、このヒノアラシはいとも平然とミュウツー^{テラ}を仲間だと言いつ放った。

それが如何に凄い事で奇跡的であるかを、果たしてこのヒノアラシは理解しているのだろうか、否、絶対理解していないとピカチュウは悟る。

「——えーっと、着ぐるみ？」

ピカチュウのぼけた発言にナエトルを除く全員がずるこける。

「な、何でそういう発想になるんだよっ!？」

ピカチュウの台詞に最速ツツコミを入れたのはリュウタである。「いや、だって。伝説のポケモンがそんな簡単に仲間になるものなのかなあ、って」

しかし、ピカチュウは頬を掻きながら、悪びれもせずにそう応える。

自分の仲間に侮辱ともとれる発言をしたにもかかわらず全く反省の色をみせないピカチュウの姿に、リュウタは表情を引きつらせる。「ま、まあそう思うのも無理はねえわな。」

俺等だって最初は驚いたんだからな。信じられねえのは当然だ」

苦笑いを浮かべながら口を挟んだのはブラットと名乗ったバクフインである。

だが、ブラットのフォローを聞いても今イチ信用できていないのか、ピカチュウは相変わらず疑いの眼差しをテラへと向けている。

「そのピカチュウ。確かに私はミュウツーだ。着ぐるみを着ているわけではない」

『そこ、乗らなくていい』

テラ、ピカチュウ、ナエトルを除く全員の声が八モる。

「なんなら尻尾を引つ張ってみるがいい。作り物でないことが明らかに——」

『もいい』

ツツコミ二回目。さすがに二度も突っ込まれて反省したのか、テラはそれ以上何も言わず黙ってしまった。

「ねえ、テラさんって一体どんなポケモンなの？」

ボク、あなたみたいなポケモン初めて見るからよく知らなくて」

着ぐるみ疑惑の議論が無理矢理終結してすぐ、今度はナエトルがテラに向けて質問をする。

だが、この質問に答えたのはテラ本人ではなく、ピカチュウであった。

「ミュウツーは、ミュウと呼ばれる伝説のポケモンの細胞を操作して人間が造った遺伝子ポケモン。

遺伝子組み換えを行った結果、ミュウツーは凶悪な心を持つようになったと言われている。

——まあ、どうやらテラさんは違うみたいだけどね」

ピカチュウの説明に、全員が感心する。ここまで深くミュウツーのことを理解したポケモンに出逢ったのは、リュウタ達自身も初めてだったからである。

「ほお、中々詳しいな。私のことを知っているのか？」

「いえいえ、知識として聞きかじった程度だよ」

そう言うてにつこりと微笑むピカチュウ。その表情は、先程までの疑っていた時とは打って変わっている。

どうやら疑惑の念はいつの間にかどこかへ消えていってしまったらしい。

「こっちは名乗ったんだ。今度はそっちが名乗る番だろ？」

和む雰囲気が漂う中、その雰囲気を打ち破るようにしてリュウタが口を挟んでくる。

リュウタの言葉に、ナエトルはあっ、とした表情を見せる。

テラの事を話すうちに、自分達が名乗ることをすっかり忘れていた事を思い出したのである。

「あ！ そうだったね。ボクはナエトル」

「ワタシはピカチュウよ。よろしくね」

「……………」

ピカチュウの挨拶に、何故か全員が沈黙する。その様子を見て、嫌な予感がピカチュウの脳裏を駆け巡る。

「………… お前、もしかして女なのか？」

ひびくう！

リュウタの言葉に、こめかみをケーレンさせるピカチュウ。

いつも通り、反射的に電撃をぶちまけそうになるのをなんとか堪えて耐える。そして、殺気を込めた視線でリュウタ達を一瞥すると、

「おんなのこですう！」

ピカチュウの怒気を含んだ言葉に怯んだのか、全員うつ、と呻いて僅かに身じろぎする。

「うつ。なんかスマン」

あまりの迫力に生命の危険を感じ取ったリュウタは素直に謝罪する。

だが、ピカチュウの気分は晴れない。仏頂面でむすつとしたまま黙り込んでしまう。

「ボク達はチーム・ポケダンズ。探検隊だよっ！」

フォローの意味を含めて今度はナエトルが口を開く。

ナエトルの言葉に、今度はピカ達が反応を見せる。

「キミ達も探検隊なの？ 僕達もだよ？」

「そうなのっ!？」

驚くナエトルの反応に、リュウタはこくりと頷き、

「ああ。チーム炎雷。それが俺達の探検隊のチーム名だ!」

胸を張り得意げにそう言うリュウタに対し、ナエトルは疑問の表情を浮かべ首を傾げる。

「——でも、ボク、キミ達みたいな探検隊初めてみたよ? 何処から来たの?」

ナエトルの言葉に、今度は炎雷のメンバーが首を傾げる。

「どこ——って、トレジャータウンからだが?」

「ええっ!?!」

ブラットの返答に驚き声が漏れるナエトル。

それを見ていたコウが不思議そうな表情でナエトルを見つめ、
「どうしてそんなに驚くんですか?」

「だって、ボク達もトレジャータウンから来たし」

『はっ!?!』

ナエトルの言葉に全員驚きの反応を見せる炎雷のメンバー達。

そして、ピカチュウ達に背を向け、全員で円陣を組み、何やら相談事を始めた。

「おい、ポケダンスなんて探検隊聞いたことあるか?」

リュウタの問いに、ピカは首を横に振る。

「ううん、ないよ?」

「僕もありませんね」

「我輩もないのう」

「右に同じ」

コウ、バン、テラも順番に否定の言葉を並べていく。

「じゃ、聞くが、お前等の所属してるギルドって何処だ?」

「プクリンのギルドだけど?」

『はあああああっ!?!』

ブラットの質問に答えたナエトルの言葉を聞き、炎雷は更に衝撃を受ける。

「俺達と同じじゃねえか！」

「ええ〜っ!？」

リュウタの言葉に今度はナエトルが驚きの声を上げる。

「で、でも！ ギルドでは今まで一度も顔を見たことはありませんよっ!？」

コウの言葉に、口には出さないがナエトルは賛同していた。ギルドに入って随分経つが、炎雷なんて探検隊がいるなどという話は一度も聞いたことがないからである。

「俺もプクリンからこんな探検隊がいるなんて聞いたことねえ」

ブラットは頭をがじがじ掻きながらそう零す。

それにつられて、バンも悩んだような表情を見せ、腕組みしている。

「どうということかのう？」

バンの疑問の一言を最後に、全員が解答を導き出そうと、難しい顔をして、うんうんうなり始める。

だが、一向に正解こたえが出る気配はない。

どれだけ時間が流れたのか、沈黙の空気が流れるなか、

「……アナタ達、この世界のポケモンじゃないね？」

静寂を突き破るように、静かに、ピカチュウが口を開いた。

——『はいいいっ!？』

唐突に言われたその言葉に、この場にいる誰もが驚いてピカチュウの方を向く。

だが、たった一人、ピカチュウの言葉に冷静に応えた者がいた。

「どうやらそのようだな」

——テラである。

ピカチュウの推測を、唯一理解したテラが納得して頷く動作を見

せる。残りのメンツは未だに状況を理解しきれていないのか、悩んだり、首を傾げるなどの表情を見せている。

「おいテラ、どういうことだよ？」

考えても結局わからなかったのか、リュウタがテラに尋ねる。

「推測だが、この『探検隊の間』は、異なる世界の空間と繋がっていると思われる。」

修業したい探検隊が同時に部屋へ入ると、空間が繋がりで合システム合わせする——そういう仕組みになっているのだろう」

テラの説明に、ピカチュウはこっくりと首を縦に振り、

「——世界は、『それ』を知る者の前では、一つじゃない——ということだね」

「ああ、その通りだ」

『全然わからん』

ピカチュウとテラを除く全員が声をハモらせる。どうやらまだ理解しきれてない様子であった。

「……………」

これ以上どう説明していいかわからず、テラは困ったような表情を浮かべる。

ピカチュウも目を閉じ、ぽりぽりと頬を掻きながら、

「……………あー、えーっとお、つまり、『ここ』はアナタ達がいた世界とは違う世界みこってこと」

『ああ、なる程』

「……………」

ピカチュウのぶっちゃけた解説に納得する一同。

それを見て、テラは凹んでしまう。

……………あ、テラさん凹んでる。

見れば、テラは隅っこでうずくまり、のの字を書いている。

伝説のポケモンが、いじけてのの字を書く姿を一体誰が想像できるだろうか。その姿にギャップを感じたピカチュウは思いつきリド

ン引いてしまう。

……なんか、想像していたミュウツー像とかなり違うような。ミュウツーって、皆こんななの？

全世界のミュウツーが聞いていたら怒る事請け合いの考えを平気で思い浮かべるピカチュウ。

「——じゃが、お主は何故そのようなことがわかるんじゃ？」

いじけるテラを無視してバンがピカチュウに向かって尋ねる。

ピカチュウは、バンの方を向いて小さく微笑み、

“気”だよ。

アナタ達から感じられる気は、この世界にいるポケモンとは微妙に違う感じがしたの」

「ほう……」

言っていることはわかるのか、バンは納得したように小さく声を漏らす。

「——ま、何にせよだ、修業部屋（じうぎょうぶつ）にいてことはだ、お前達も戦いたくているってことだろ？」

「……そうだよ」

リュウタの言葉に、ピカチュウは少しの間を置いて応える。

……まあ、多分、“向こう”の戦いたいと“こっち”の戦いたいの意味合いは違うと思うけどね。

ピカチュウは、ちらりとリュウタの方に視線を向けて、心の内でそう付け足す。

見たところあのリュウタってヒノアラシ（バトル）、戦闘（バトル）そのものが好きなのように見える。

こっちは戦闘目当てじゃなくて、修練（トレーニング）が目的なんだけど——

「せっかく別の世界に来て強そうな奴等に出逢ったんだ。

戦わなきゃ損だぜ！」

「だな！」

「そうじゃのう」

『だよね』

「うむ」

リュウタの言葉に全員が頷く。どうやら向こう側の考えている事は皆同じらしい。そう見受けられた。

「……なんか、皆戦う気満々だね」

苦笑まじりでナエトルはピカチュウの方を向く。

一方、ピカチュウは少し啞然とした表情でタメ息をつき、

「ま、まさかチーム全員が戦闘マニアとは……」

よのなか
世界にはいろんな探検隊がいるんだねえ……」

「つつわけで、早速始めようぜ戦闘！」

どうやらこれはもう戦るしかないようである。リュウタの言葉に、ピカチュウは苦笑いするしかない。

「仕方ないなあ。」

「じゃあ、行ってみようか？」

「オッケー！」

ピカチュウの言葉にナエトルは元気よく相づちを打つ。

ピカチュウ達の了解を確認すると、リュウタはざっと辺りを見回し、

「俺達が六人でそっちは二人か」

人数を確認する。

「どうする？ 対等に2v・s2で戦るか！？」

リュウタの提案にしかし、ピカチュウは首を横に振る。

「うっん、面倒だね。」

そっち全員まとめてかかってきていいよ！」

『なにいいいつ！？』

神をも恐れぬ大胆発言とはこのことであろうか。

ピカチュウの逆提案に、リュウタ達は驚きの発言を洩らす。

「ほ、本当にいいのか!?」

ブラットが驚きつつ問い返す。

もし仮に六対二の戦闘となれば、一人当たり三人を相手にする計算になる。さすがにそれはムチャなのは、と引っかつたのである。

だが、ブラットの心配をよそに、ピカチュウはにつこりと微笑み、
「もちろん。そうでないと修練トレーニングにならないし。

それに――」

ピカチュウは中途半端な所で口を閉じ言葉を切る。

続きが気になったのか、炎雷のメンバーは誰もがピカチュウの次の言葉に注目する。

そんな炎雷に向けて、ピカチュウ不適な笑みを見せ、

「言い忘れてたけど、ワタシ達結構強いよ?」

頬の電気袋を光らせつつ言葉を紡ぎ出す。

既にピカチュウの頭の中では全員を相手にする計算が組み立てられている。

隣ではナエトルが真剣な表情で体勢を整えていた。

これにはさすがに炎雷の全員も、苦笑せざるをえない。

「おもしれえ!

なら、六対二だ! 遠慮なくいくぜ!？」

リュウタは背中から炎を吹き出し臨戦態勢となる。他の面々も、
次々と戦闘態勢バトルモードへと入っていた。

「じゃあ、こっちから行かせてもらっわよっ!？」

10万ボルトっ!」

ピカチュウは炎雷に向けて電撃を放出する。だが、リュウタ達は
怯むことなくその場に佇んでいた。

「コウ!」

「わかってるよ兄さん!」

『10万ボルトっ！』

ピカとコウが一步前に出て同時に電撃を放出する！

その一撃は、ピカチュウの電撃とぶつかり合い、両者の丁度ど真ん中で押し合う形式かたちとなった。

「電気技なら僕らだって！」

「ええ！ 負けませんよ！？」

二人は電撃の出力を上げる。すると、中央でぶつかり合う電撃が僅かにピカチュウの方へと押し戻される。

——なる程。二人がかりだから確かに威力パワーがある。

でも！ ここ数日の特訓でワタシの10万ボルトは技の精度をかなり高めてある！

例え二人がかりでも、引けは取らない！

徐々にピカチュウも放電する電撃の出力を上げていく。

それにより、押し戻された10万ボルトでんげきの押し合いは、段々とピカ達の方へと押されていく。

「——おい、ありやあやべえぞ？」

ピカチュウ達のぶつかり合いを黙って静観していたリュウタが小さく呟く。

他の者達も感じているのか、リュウタの呟きに応えるように小さく頷いた。

「——これで、どうだあ！」

まるで止めと言わんばかりにピカチュウは一気に出力を上げる！それにより、押し合いのパワーバランスは崩れ、ピカ達の攻撃も含んだそれは巨大な電気の塊となり、リュウタ達へと向かっていく！

「皆、散れ！」

ブラットの掛け声に残りのメンバーは一斉にその場から跳び、離れる。

巨大な電気の塊はその形を維持できず、辺りに火花をまき散らし

ねえ。

——でも、草タイプのナエトルに、こっちの二人ないし一人を相手にするのはかなり厳しい。

なら、ワタシが相手をするのが当然。

ま、ここは一つ、死んだ気で頑張ってもらうことにしよう。

「ほほお、お主が我が輩達の相手か」

バンがナエトルを見てにやりと笑う。これだけでもうナエトルをびびらせるのには十分だった。

「ふっ。楽しみだ」

そこに、テラが不適な笑みを浮かべて追い打ちをかける。

元々身長差がかなりある事に加え、両者から放たれるオーラに気圧されたナエトルは、

……うう、負けそう。っていうか、殺られる。絶対に。

バンとテラという黄金コンビを相手にし、早くもナエトルは気持ちで負けてしまっていた。

「お！ お前が俺達の相手か！？」

嬉々として言うリュウタ。そんなリュウタの様子に、ピカチュウはひょいと肩をすくませ、

「ま、そういうこと」

「好都合だぜ。俺もお前と戦いたいと思ってたからな。

お前強そうだからさ。強い奴を見てるとわくわくすんだよ俺」

「あ、そう。ま、その期待は裏切らないと思うよ？」

ピカチュウはウィンクを一つ。

ピカチュウの挑発を含んだその言葉に、依然やる気がでたのか、リュウタは背中^の炎を更に強く燃え上がらせ、

「おもしれえ！ 行けばブラットお！」

「おうっ！」

——さてこの戦闘^{バトル}、一体どうなることやら。

予測不可能な戦闘^{バトル}に期待と不安を入り交じらせつつ、ピカチュウ

はリュウタに向かって電撃を放った！

というわけで、『探検隊』で初のコラボです。

コラボ相手は、究極神団・零さん作『ポケモン不思議のダンジョン 未来への探検隊』より、チーム炎雷の皆さんにおいでいただきました〜♪

ピカ・ナエ『わ〜♪』 ↑拍手

依頼を快く引き受けて下さった究極神団さん、本当にありがとうございました（お辞儀）

因みにサブタイトルになっている「とある探検隊」というのは旧タイトルです。

なんとなく私がこちらのタイトルの方が気に入っていたのでサブタイにはこちらを採用させていただきました。

炎雷の皆様には遠征までの残り二日間のお話までお付き合いいただきます。

ピカチュウ「てゆつかさあ、前々回後書きで堂々と特訓相手は募集しませんよ〜とか言っておきながら、コラボってどうなの？」

だからあ、後書きであれ書く前からここは既にコラボって決まってたんだよ。

別にあの後応募があって採用したとかじゃないから。断じて。

ナエトル「でも読者さんからしてみれば、あるえ？ って思うこと間違い無しだね？」

ここは素直に謝つとした方がいいとおもうよ？」

ぐっ。まさかなえゝに正論言われるとは思ってなかった（汗）

ナエトル「酷くない？」

酷くない（きつぱり

というわけで、一応謝罪しておきます。どうもすみません（土下座

ピカチュウ「でもさあ、作者さん。今回の話、ピカとコウ君の扱い酷くなかった？」

いいの？ ゲストキャラをあんな粗雑に扱って」

うーん、でも残り四人が厄介だからねえ。ああでもしないと話が長くなりそうでやってられなかった。

ピカ&コウ「……………」

ピカチュウ「あ、向こうで二人がの字書いてる」

うおう、出たなっ！？ ミラーツインの必殺！ のの字攻撃っ！

ピカチュウ「……ま、まあそれはさておき、次回はナエトルとバンさん&テラさんのバトル。

その次がワタシとリュウタとブラットさんとのバトルみたいね」

イエス！ その通り！

激戦必須のバトルだからね！ 気合い入れてやるよ！

ピカチュウ「それじゃあ今回はこの辺で」

ミ・ピカ『さよならっ
っ』

えー、前回更新してから約一ヶ月と三週間ぶりの更新になるわけだがw

ナエトル「笑い事じゃないでしょ（汗）」

ま、ツツコミはしない方向でw

いよいよ、炎雷メンバーとのバトルスタート！

果たして我らがなえくはめでたくあの世行きとなってしまうのでしょうか？ こうご期待ですw

なえく「ちよつと！ 期待するとこ違くない！？（滝汗）」

はてさて、なんのことやらw（↑

——「ふう。取り敢えず、落ち着かなきゃね」

気持ちを落ち着かせるためナエトルは息を大きく吸って吐いて、深呼吸を繰り返す。

暫くして大分気持ちが落ち着いてきたのか、ナエトルは穏やかな笑みを浮かべて、目の前に立っている相手——バンとテラの二人を正面から見据えた。

「心の準備はできたか？」

それまでナエトルの様子を黙って静観していたテラが尋ねる。

その問いに、ナエトルはこっくりと頷いて、

「うん！ いいよ！」

「なら、主が先攻じゃ」

バンからの譲渡にナエトルは穏やかな表情を一変、バトル戦闘モードへと切り替える。

そして、姿勢を低くして体勢を整えると、精神を集中させる。

「よし！ 行くよ！ ハッパカッター！」

ナエトルは頭の葉を揺らし大量の葉を出現させると、それをバンとテラ目がけて勢いよく放った！

ハッパカッターは相手二人を同時に攻撃できる数少ない攻撃手段の一つ。

しかも、内一人、バンは岩タイプを有している。命中すればかなりのダメージを与えられるはずだとナエトルは踏んでいた。

だが——

「バン」

飛んでくるハッパカッターから視線を外さぬまま、テラはバンに

声をかける。

その呼びかけに、バンはにやりと口元を歪ませ、相づちを打つと、両手を広げて構えを取る。

「任せておけ。」

砂よ！」

バンのかけ声と共に二人の前に大量の砂が出現し、壁を造り出す。生み出された砂の障壁に阻まれ、ハッパクターはただの葉となり、バン達に届く前に、ひらひらと全て地面へと落ちてしまった。

「え？ ウソっ！？」

驚きのあまりナエトルは声を上げ戸惑いの表情を見せる。

——無理もない。バンがとった戦い方は、これまでナエトルが一度も見たことのないものであったのだから。

未知の物を目にした時、それに対して生き物は恐怖心を抱く。

それは生き物なら誰しもが持っている本能。当然の感情である。故にナエトルのこの反応は正しいといえる。あくまで生物学的観点から見ればであるが。

「我輩の砂はただの砂ではない。

あらゆる攻撃から身を守ることできる——“鉄壁の砂”なのじや！」

驚き困惑するナエトルにご丁寧に砂の壁の仕組みを説明するバン。だがその説明を聞いて、ナエトルは益々混乱の表情を見せる。

……何それ？ そんな砂聞いたことないんですけど。

ポケモンの中には稀に天候に影響を与える種類がいる。バンの種族であるバンギラスもそうである。

砂起こしと呼ばれる特性で、バンギラスの周囲には常に砂嵐が発生する。

それを利用し、バンは本来なら吹き荒ぶだけである砂を自在にコ

ントロールし、さっきのような芸当をやつてのけたのである。

砂起こしの特性を知らないナエトルには理解できるはずもないが。

説明を聞いてもよくわからなかったナエトルはこれ以上考えることを止めることにする。

考えるよりも、戦闘^{バトル}に集中しなければと考えたからであつた。

「——なら、接近戦だ！ 体当たり！」

遠距離からの攻撃ではさっきのようにまた砂に阻まれてしまうと考えたナエトルは直接技を当てようと二人に向かつて走り出す！

直接攻撃ならば、自力で砂の壁を突破してダメージを与えられると考えたのである。

しかしその計算もあつさりと打ち崩されることになる。

今度はバンではなくテラに——

「ふっ、短絡的な発想だな。

サイコキネシス！」

テラはナエトルに向けて左手を伸ばす。

向けられた手の平から水色のオーラが漂い始めると、やがてそれは強力な念波となつて、ナエトルに襲いかかつてきた！

「——え！？ な、何これ！？

動けな……！？」

テラのサイコキネシスに捕らえられたナエトルは、動きを封じられ、強制的にその場に静止させられてしまう。

さらに、テラが左手をくいつと上に振ると、それに合わせて、ナエトルの体はふわりと浮き上がり、空中へと持ち上げられる。

脱出を試みようともがくナエトルであるが、テラの念波^{サイコキネシス}の押さえつける力が強すぎてうまくいかない。

暫らくその様子を静観して楽しんでいたテラであつたが、やがて小さく笑みを浮かべると、念波を発している手を大きく下へと振り下ろした！

「うつ！？ わあああああ！？」

テラの動きと同時に、ナエトルは下へと急降下！ 真つ逆さまに地面に落ちていく！

テラの念波から解放されると同時に、ナエトルは体を強く地面へと打ち付けられる！

直接的ではないとはいえ、体に来る衝撃はナエトルに多少のダメージ与えていた。

「——いてて。今のつて、サイコキネシス？ つてことは、テラさんつてエスパークタイプ？」

「その通りだ」

ナエトルの疑問に、テラは不敵な面構えで応える。

さらにはバンまでもがにやりと口を歪ませて笑顔を見せていた。

「遠距離からの攻撃は我輩の砂で防御し——」

「直接攻撃は私の超能力技で動きを封じる」

「この完璧な防御態勢、主はどう攻略する？」

——まさしく完璧なる防御。

そしてそれを説明するバンはまるで悪役のようなノリである。

絶対的な防御を如何にして打破するのか——解決の糸口がナエトルには見えてこない。

それにより、ナエトルは攻撃の手段を完全に封じられてしまう形となってしまう。

「うう、二人共強すぎ。」

こんな人達に勝てるわけないよお」

対抗手段を失ってしまったナエトルの中で、またも気持ち折れかける。

——いや、既に折れているといった方が正しい。

その証拠に、いつそ戦闘^{バトル}などもう止めて、敗北宣言でもしてしまおうかとさえ考え始めていたほどであった。

——だが、ナエトルが敗北宣言を言う暇など戦闘^{バトル}狂の二人が与えてくれるはずもなく、既にバンが次の攻撃の態勢に入っていた。

「今度はこちらから行かせてもらうぞい！」

「ダークブーメラン！」

漆黒^{くろ}いリング状の形をしたエネルギー体が生成され、どんどん大きくなっていく。

十分な大きさまで蓄めると、バンはそれをナエトル目かけ、思いっきり投げ飛ばした！

「うわっ！？ 何あれっ！？」

「ダークブーメランは“悪の波導”のエネルギーを一つに凝縮してブーメラン状に集束させた我輩オリジナルの技じゃ！ さあ、どうする！？」

ナエトルは半ばパニック状態になりながらあたふたと周囲を見回す。

そして、導き出した結論は——

「さ、避けるっ！」

——逃げることだった。

ナエトルは寸での所で横へと飛ぶ。

ナエトルがその場から離れた丁度そのタイミングでブーメランが横を通り過ぎ、遠くへと飛んでいく。

とりあえず回避できた——ブーメランが飛んでいく様子を見てそう思い、安堵するナエトル。

——だが甘かった。飛んでいったブーメランは何故か途中で急旋回し、向きを変え、再びナエトルへと向かってきたのである！

「えっ！？ 何でっ！？」

「無駄じゃ！ 避けることはできん！

そのブーメランは主に命中するまでどこまでも追ってくるぞい！」

バンの言う通りであった。

さらにその後数回ブーメランを避けたナエトルであったが、何度避けてもその度にブーメランは方向を転換し、執拗にナエトルの後を追いかけてくる。

「なら！ ハツパカッター！」

回避は不可能と判断したナエトルはブーメランを迎撃しようとハツパカッターを放つ！

——が、ナエトルの一撃はブーメランの進行速度を少し緩めただけで、相殺するまでには至らなかった。

その光景にナエトルは目を見張る。

「まだ消滅^きえない！？」

驚きのあまりナエトルは動くことを忘れその場に立ち尽くしてしまふ。

それによりダークブーメランの格好の的になってしまう。

「その程度のハツパカッターで我輩のブーメランを打ち消すことはいんぞい！」

既にブーメランは目前にまで迫っている！

——かハか！

とつさにナエトルはあることを思いつき、それを実行しようと口を開け大きく開く！

「——え、えい！ かみつく！」

——『んなっ！？ なにiiiiiiii！？』

ナエトルはブーメランに向かってかみつくを繰り返しブーメランを捕捉する。

かみつくを受けたブーメランはその一撃に耐えきれず、亀裂が走り、そして粉々に打ち砕かれ、消滅、霧散する。

「な、なんと」

バンは驚きの表情を見せて思わず声を洩らす。

横では、同様にテラが今の一部始終を目の当たりにして、啞然としていた。

「……ダークブーメランを、あんな方法で相殺するとは……」

「……ハア、危なかったあ。

同じタイプのかみつく^{わさ}ならもしかしたら打ち消せるかと思ってやってみたけど、上手くいってよかった」

安堵の息を洩らすナエトル。

どうやら今の一撃は最初^{はじめ}から計算していたわけではなく、突発的にやったものだったらしい。

ナエトルの言葉に、バンは大きな声で笑い声を上げる。

「お主おもしろいのう！」

お主が次どんな行動を取るのか、我輩にはまるで予測がつかない！」

ええっと、ボクにもわかりません。

次の行動の予測なんて考えてないし。いや、考えられないし。

バンの賛辞にナエトルは困ったような表情を浮かべる。

「バン」

短く声をかけてテラはバンに目配せをする。

その呼びかけにバンも、まるで承諾するかのように小さく頷いて見せた。

「うむ、どうやら我輩達はお主の事を少し甘く見過ぎていたようじやのう」

バンはそう言って両手両足を大きく開く。

テラも、腰を落として攻撃の姿勢を整える。

「ここからは、我々も全力ほんきでいくとしよう！」

え？ 今までの、本気じゃなかったってこと？ 十分なんですけどっ！？

てか、本気なんか出されたら、ボクホントに死んじゃうんじゃないっ！？

バンとテラの全力宣言ほんきに怯みそんなことを思ってしまうナエトルである。

「テラよ、宙つえに逃げておれよ？」

「了解した」

テラはそう言うと言力ごうりきで自らの体を持ち上げ空中へと移動する。

「ゆくぞい！ 地震！」

バンは尻尾を思いきり強く地面に打ち付ける！

衝撃で地面には亀裂が走り、それに合わせて、まるで悲鳴をあげるかのように、大地が激しく震動する！

「うわっ！？ わわわわわ！？」

ナエトルは四肢を大地にしっかりとつけ、なんとか踏ん張る。

揺れが襲ったのはナエトルだけでない。少し離れた所にいたリュウタとブラット、二人にも影響を及ぼした！

「お？ おわああああっ！？」

「どわっ！？」

バンの放った一撃は一頻り辺りを揺らした後、ゆっくりと終息に向かっむかっていき、やがて止まる。

「おいこらバン！ 危ねえだろ！？」

揺れが収まるなり即座に文句を言い放つブラット。

その叱責に、バンは苦笑いを浮かべ、頭を搔く。

「す、すまんつい」

「……ふう、地震は草タイプのボクにはあまり効果ないよ？」

体勢を戻し、バンの方を向いて口を開くナエトル。

だが、ナエトルの指摘に動揺することなく、バンはにやりと笑みを浮かべていた。

「わかっておる。ダメージを与える為に出した技ではないからのう」
「え!？」

バンの言っていることがわからずナエトルは首を傾げる。

そこへ――

「隙だらけだぞ! シャドーボール!」

上空からの声にぎりとりとし、思わずナエトルは宙を見上げる!

そこには、上空へと逃れていたテラが、漆黒の球体――シャドーボールを、ナエトルに向けて放とうとしているところであった!

ナエトルは理解する。さっきバンが使った地震は、自分の足を止める為の、罠であると――

「っ! ハッパカッター!」

ナエトルはシャドーボール目がけてハッパカッターを放つ!

だが、やはり威力不足なのか、ハッパカッターはいとも簡単に吹き散らされてしまう!

「さ、避ける!」

迎撃を諦めまたもナエトルは横へと跳びシャドーボールを避ける。先程のダークブーメランと違い、標的を失ったシャドーボールはそのまま直進していき、何もない場所で爆発する!

「逃げ回っておるだけでは勝てんぞい!? 大砂流!」

またもバンの周囲に砂が発生する!

無数の砂が一箇所に集まり、今度は巨大な波となってナエトルに向かっていく!

「また砂!？」

――でも、これなら!」

これなら——相殺できる！

ナエトルは迫り来る砂の巨大波を真正面から睨み付ける。
ビッグウェーブ

そして、体勢を低くして、全身に力を込める！

「ハッパカッター！」

——一枚——

たった一枚の葉に有りつ丈の力を込めて、ナエトルはハッパカッターを大砂流目がけ、放つ。

フルパワー
全力で放った一枚刃は、シングルカッター一直線に飛んでいき、砂の波とぶつかり合う！

すると驚くことに、今度は砂の波を粉碎してしまったのである！

「なんとっ！ 我輩の砂を！？」

今の一撃が相殺されると思っていなかったバンは驚きの声を上げる。

そこへ、ナエトルが、

「相性的にはボクの技の方が有利だからね。

一点に集中して威力のある一発を撃ち込めばなんとかなるんじゃないかと思つて」

得意気に説明する。

その説明に、バンは納得したような表情で頷き、
「なる程のう。」

——じゃが、次に繋がってないのはよくないぞい？」

不敵な笑みを見せる。

バンの言葉に、ナエトルの笑顔が凍り付く。

「え？ それってどういう——」

——どうということと問いかけようとしたナエトルであつたが、すぐに理解することになる。

「——サイコキネシス！」

——突如、ナエトルの背後から声が鳴り響く！

振り向こうとしたがそれは叶わず。ナエトルの体は浮き、強く前へと押し出される！

「わあああ！？」

どこまでも飛び続けようとする体に力を入れ、ナエトルは地面に足をつけ何とか踏みとどまる。

そして、肩で荒く息をつきながら、背後の方に目をやった。

「……ア、ハア。何時の間に後ろに……？」

ナエトルが目をやったその場所には、テラの姿があった。

——バンの忠告を聞くまでナエトルは背後に一切気配を感じなかった。

——宙^{うえ}にいたはずのテラさんが何故後ろ^{こし}に？

「テレポートで接近した。」

お前がバンの攻撃に気を取られている隙にな」

ナエトルの疑問に応えるようにして口を開くテラ。

謎が氷解し、ナエトルは納得したような表情をして苦笑いする。

……テレポート。なる程、それなら一瞬のうちに移動できるもんね。

「えへへ。すごいね。全然気がつかなかったよ」

ナエトルはえへら笑いをして余裕の雰囲気を漂わせて言う。

——だが、実際にはナエトルは追い詰められていた。

今、ナエトルはバンとテラに完全に挟まれてしまっている。

この状態で攻撃を受ければどうなるか——言わなくてもわかるだろう。

ナエトルは思考を巡らせ、どうすればこの現状を打破できるかを必死になって考える。

その時、ナエトルは足元に違和感を感じる。

疑問に思って見ると、最初に放ったハッパカッターの残骸が床に

大量に散らばっているのが目に入ってきた。

……これ、最初に砂に阻まれたハッパカッター。

ナエトルは散乱した葉をじっと見つめ、何かを考え始める。

——そうだ！ これを使ったらもしかして！

打開策を見出し、ナエトルは無意識に口を緩ませ笑顔を見せる。
その笑みに当然違和感を感じたバンとテラは眉をひそめる。

「——でも、ボクも負けるわけにはいかないんだよね。
強くなるって決めたから。」

……だから、どんなに自分の状況が不利になっても、最後まで絶対、諦めないっ！」

——その言葉と同時にあつた。

ナエトルの頭の葉が輝きだしたのは。特性の新緑が発動したためであつた。

「【葉の嵐よ乱れ舞い斬れ——サイクロンカッター】！」

——サイクロンカッター——

それはリングの森でナエトルが編み出した新たな技。

直線的にしか飛ばすことのできないハッパカッターを、自身を中心として周囲へと打ち出す。

その見た目が台風サイクロンのようであることからピカチュウが名付けた、ハッパカッターを応用した技である。

道場で特訓を始めてから、ナエトルはこの技の習得を完全なものにするため、個人練習の時間の半分以上をこの技の練習に費やしていた。

始めたばかりの頃は、自身の体を回転させることで何とか周囲に葉を飛ばしていたが、回数を重ねるうちに、打ち出した葉を周囲に

維持、そして、発射方向を操作コントロールできるようになった。

四方へとまき散らされた葉の嵐は、当然バンとテラに向かってくる！

一瞬サイクロンカッターに驚かされた二人であつたが、すぐに平静を取り戻し、迫り来る葉の嵐を真つ向から睨みつける。

「これくらいということはない！ 砂よ！」

バンの前に再び砂の壁が形成される。

——これでサイクロンカッターは無効になると、バンはそう思つていた。

だが、サイクロンカッターが砂の壁に到達する前に、もう一つある事象が発生した。

「なっ！？」

「これは！？」

サイクロンカッターが、床に落ちていた葉を巻き上げ、バンの目の前に草の壁を造り出したのである。

舞い散る葉は砂とぶつかり、混ざり合い、壁となっていた砂を分散させ、粒子化し、辺りに広がっていく。

その作用で、周囲の視界はどんどん悪くなつていった。

「これでは相手の姿が見えんぞい？」

「さっきのサイクロンカッターは視界遮断これの為おとりの罠か！？」

その通りである。

ナエトルが放った一撃はこの状況を作り出すためのものであつて攻撃のためではなかつた。

そしてもう一つ、ナエトルには策があつた。

それを実行するために、気付かれぬよう、ナエトルは静かに行動に移る。

「……時間が経てばそれだけこちらが不利になるな。
バン！ 相手が動く前に攻撃を仕掛けるぞ！」

「承知した！」

テラの呼び掛けに大きな声で応えるバン。

そして、二人は構え、

「波導弾！」

「ダークブローメラン！」

両者、互いに必ず命中する技——必中技を繰り出した。

もし万が一この状況を利用してナエトルが攻撃を避けたとしても、
自動追尾で必ず命中するよう配慮したためであった。

——だが、いつまで経っても相手に攻撃が当たった手応えが感じられない。

おかしいと思い始めていたその時、突然二人の前に、味方の放った技が出現し、対応しきれないバンとテラを直撃した！

『ぐわっ！？』

それぞれが放った一撃は互いに効果抜群の技同士。

特にバンは岩と悪、両方の弱点である格闘タイプを受け、その一撃は致命的ともいえる。

「……ぐ、はあ。何故、相手に当たらず我輩達に？」

相手は一体何処に……！？

バンは大きく肩で息をつき、周囲を見渡す。視界が悪いため、ナエトルの位置を特定することができない。

そこへ——

「——ボクならここにいるよ？」

バンの疑問に応えるかのように、背後から声が聞こえてきた。

振り返ってみればそこには、いつの間にも移動したのかナエトルの

姿があった。

バンはそのことに驚きを隠せない。

「お主！ いつの間につ！？」

「さつきからだよ。」

足下にハッパカッターの葉が散らばってるのを見たときに思いついたんだ。

これを使って視界を悪くすれば、ボクの姿を見失って正面に攻撃を放つんじゃないかなあ、って」

「まさかお主、さつきの一瞬でそれを思いついたのか！？」

驚きの籠もったバンの言葉に、ナエトルは無言で笑みを浮かべて応える。

「まあ、たまたまだけだね」

——謙虚。

ナエトルの姿勢に、バンはそんな印象を受ける。

バンは小さく笑みを浮かべる。それは、これから起きることを予期しているような、そんな笑みであった。

「お主は本当におもしろい奴じゃのう。」

この勝負、どうやら我輩の負けのようじゃな」

「シングルカッター！」

ナエトルは先程放った一枚の重い一撃をバンに向けて放つ！
ハッパカッター

その一撃はバンを正確に捕らえ、直撃した。

止めの一撃を食らったバンは何も言わず、どこか満足した表情で、ゆっくりと、大きな音を立てて、地に伏した。

——「……ハア、ハア。まず一人……」

バンを倒したことで安堵するナエトル。

だが、安心したのも束の間。球状のエネルギー弾がナエトルに迫り、弾けた！

「わあああああ!？」

不意打ちを受けナエトルは大きく吹っ飛ばされる!

「——やってくれたな。」

まさかこれほどとは思わなかった」

晴れゆく砂煙の向こうから、攻撃してきた主——テラは静かにそう言い放った。

「——……やっぱり、テラさんは倒せなかったみたいだね」

震える足に何とか力を込め、かろうじてナエトルは立ち上がる。

テラはちらりとバンに視線を送ると、再びナエトルに視線を送り向き直る。

「まさかバンを倒してしまうとはな。」

おかげで私も真の力を出さざるを得なくなった」

「今のままでも十分なんだけどね」

テラの言葉に思わず本音が零れるナエトル。

「シャドーボール!」

テラは漆黒の球体を放つ!

対するナエトルはその場を動かず、飛来してくるシャドーボールを正面から見据える!

「かみつく!」

再びナエトルはかみつくで相殺しようと口を開く。

——だが、シャドーボールの飛行速度はナエトルの反応速度よりも速く、ナエトルが口を開けた瞬間、シャドーボールが口の中へと飛び込んだ!

ナエトルは思わずそれを飲み込んでしまう!

「……た、食べちゃった。どうしよう……?」

そう思った次の瞬間、異変がナエトルに襲い掛かる。体全体を、

圧力がかかるような強い負荷がかかったのである。

圧力に耐えきれずナエトルは顔を歪め苦悶の表情を浮かべる。

「ぼーっとしている暇はないぞ！？ サイコネシス！」

ナエトルの異変を知らないテラは間髪入れず追撃を仕掛けてくる！

「――ハッパ……カッター！」

攻撃に気付き、苦痛で顔を歪めながらなんとか技を繰り出すナエトル。

苦し紛れに放ったその一撃は何故か黒い色をしており、はじき散らされると思っていたサイコネシスを、何と相殺してしまう！

「バカな！？ 私のサイコネシスを！？」

これにはテラだけでなく技を放った張本人も面食らってしまう。

いくら新緑の特性が発動し、威力を上げているとはいえ、元々の能力にかなりの差があるナエトルに、テラの技を打ち消してしまえるはずはない――普通なら。

ならば一体何故なのか――

二人の頭に、ある考えが浮かんでくる。

「――まさか、さっきのシャドーボールのせい？」

「体内に取り込まれたシャドーボールが内部でエネルギー変換され、自身の技に付加したというのか。まさか！？」

テラはナエトルに目を向ける。

見れば、ナエトルの頭の葉は、新緑の翠と、シャドーボールの漆黒が混ざり合い、オリーブの淡い輝きを放っている。

それを見て、自分の仮説が正しいとテラは理解する。

「ハッパカッター！」

ナエトルは再び黒の葉の刃をテラへと向けて飛ばす！

テラ程自身の技の威力がアップした理屈はわかってないが、今がテラを倒す絶好の機会だということだけは理解できたからである。

だが、テラはハツパクターをシャドーボールで迎撃してしまう。最初は戸惑いもしたが、冷静に対処すればということはないのである。

一方でナエトルは焦りを感じる。

残りの体力はあと僅か。一撃で決められなければこっちが負ける――そう考えていた。

「――この一撃に、全てを込めるよ!」

そう言っテナエトルはテラに向かって駆け出す!

遠距離タイプの技では、先程のように迎撃されてダメージを与えられないだろうと判断したナエトルは、直接技を当てて決着をつけようと覚悟を決めたのである。

テラは近付けさせまいとシャドーボールで迎撃を試みるがナエトルは巧みにそれを避けて距離を詰めていく!

「かみつく!」

力を振り絞り、思い切り跳躍^{ジャンプ}し、ナエトルはテラの右腕に思いつきり噛みついた!

テラは痛みで顔を歪める。だが――

「――残念だったな。」

最後の一撃にお前がかみつくを選ぶことは私もわかっていた」

まるでダメージを受けていないかのように、テラは平然と笑みを浮かべて口を開く。

――え!?

テラの腕に噛みついたままナエトルは心の中でそう洩らす。

ナエトルの反応に、テラは更に笑みを浮かべて、

「確かに中々の威力だ。」

だが、僅かに私には及ばない!」

テラは左手にエネルギーを集束し始める！

そのエネルギー量は念力やサイコキネシスの比ではない、凄まじい力であった！

「そして私も、お前が接近してくるのを待っていた。

かみつ^{その}いた状態でこの一撃を避けるのは不可能だからだ！

見せてやろう！　これが私の真の力！　サイコボールだ！」

テラはナエトルに向かって溜めていたエネルギーを一気に解き放つ！

攻撃の最中だったため、逃げることも避けることもできず、ナエトルはあっさりとサイコボールの中に飲み込まれ、テラの腕から離れ、サイコボールと一緒に吹っ飛んでいく！

サイコボールはある程度まで飛ぶと、エネルギーが凝縮され、大きな爆発を引き起こす！

爆発が収まったその後には、苦しそうではあるが、何とか立っているナエトルの姿があった。

「……えへへ。まさかあそこで反撃が来るとは思わなかったよ……
……でも、残念だなあ。あそこがかみつ^{とき}くが決まった瞬間は……
勝てると思ったんだけどなあ……やっぱり伝説のポケモンは違うね。
敵わないや」

途切れ途切れに言葉を紡ぎ出すナエトル。だがその声は弱々しく、足はがくがくと震えている。

もはや倒れるのは時間の問題であった。

「……いや、お前も中々強かったぞ」

テラの言葉に、ナエトルは笑みを浮かべる。

「……ボク、少しは強くなれたのかなあ……？」

弱々しく尋ねるナエトルの言葉に、テラはこくりと頷く。
それを見たナエトルは満足そうな表情を浮かべる。

「……そっか。良かった……」

全て言い終わる前に、ナエトルはゆっくり地面に倒れ込んだ――

――「大丈夫か？」

疲れた声でテラはナエトルに呼びかける。

その言葉に反応し、ナエトルはゆっくりと目を開け、意識を取り戻す。

「……うん。大丈夫だよこのくらい……」

そう言つとナエトルは再び目を閉じ意識を集中させる。

すると、ナエトルの全身を光が包み込み、同時にナエトルの体の傷が、どんどん塞がっていった。

「“光合成”か。なるほど」

“光合成”は自身の傷を癒し、体力を回復させる技である。

光が消えたその後には、すっかり体力を回復したナエトルがそこにいた。

「……ふう。もう大丈夫だよ」

そう言つてナエトルは立ち上がる。

「それにしても、バンさんもテラさんも強いね。」

ボク、二人の戦い方に最後まで振り回されっぱなしだったよ」

「……いや、正直私も危ない所だった。」

一歩間違えたら負けていたのは私の方だったかもしれない」

ナエトルの言葉に、テラは首を横に振り言う。

その言葉に、ナエトルは少し慌てた様子で、

「そ、そんなことないよ!? ボクがテラさんに勝てるわけ――」

「お前は十分強い。もっと自信を持ってい。」

そしてその謙虚さを忘れない限りお前は更に強くなれる」

テラの言葉にナエトルは顔を赤らめ照れたような笑いをする。

「そ、そうかな？」

そう言われると、なんだか照れちゃうよ」

ナエトルの様子に小さく笑みを浮かべると、やがてテラは別の方に視線を向ける。

「――さて、こちらは終わった。」

向こうはどうなっているのか――」

テラの視線の先に、ナエトルも顔を向ける。

それはもう一組のバトルが行われていると思われる方向。

ピカチュウとリュウタ・ブラット組との戦闘――バトル

並の相手ではあのコンビに敵うはずはない。テラはそう考えている。

だが――

「10万ボルト！」

朗々たる声が響き渡り、眩き光が辺りを包み込む。その光景を目の当たりにして、テラは言葉を失う。そこに映し出されていたのは、あるうことが、リュウタとブラットが、ピカチュウに押されている情景であった――

ナエトル「あゝあ、負けちゃったあ」

そりや仮にも相手はミュウツーなんだから、勝とうと思っちゃいけないねえw

因みにテラさんにはサイコボールのさらに上級技でサイコボールEXという凶悪無比な技をお持ちですが、今回はあえてそれを封印させていただきましたw（蹴

そんなん使われたらこっちは抵抗する間もなく瞬殺されてしまいそうなんでw

ナエトル「気になったんだけど、シングルカッターって、あの有名なマンガを参考にしたの？」

……いや。この原稿を書いてる段階ではその技知らずに書いてた。まだ単行本もそこまで進んでなかったし。

ナエトル「んで、発売されてから見て驚いたと」

（頷）まあ、向こうはスピードに特化したものになってたけど、こっちはパワーを特化させたものだからまるつきり同じとは言えないけど。というか、言えないということにしといてくれ（殴打

ナエトル「てか、シングルカッターって、名前どうなの？ 今イチ捻りないよね？」

うーん、色々考えたんだけど、それしかしっくりくる名前が浮かばなかった。

これ読んでる方でこんな名前いいんじゃない？ とかって意見あったら逆に教えて欲しいくらい（撲殺）

ナエトル「（汗）」

ま、まあ、それは置いといて。

次はピカチュウの番だね！？」

そうだねえ（頷）

こちらもまた黄金コンビだからねw 苦戦必死ですなあww

ナエトル「……まさか、ピカチュウも負けちゃったりしないよね？」

さあ？ ただこれだけは言える。

おまいのように振り回されまくりのバトルにはならんっ！

ナエトル「ヒドス（´；ω；´）」

顔文字使うなや（汗）

次回は探検隊の間 後編！ 今話以上に白熱したバトルになりそな予感！

ナエトル「お楽しみにね！」

けどその前に外伝！（の原稿と更新）

ナエトル「え」（汗）」

ピカチュウ「ちょっと作者さん、前回更新してから1ヶ月以上経ってるじゃないのよ。何してたのよ一体」

いやあ、ブラック・ホワイトが面白くてねえ。つい夢中になっちゃった♪

ピカチュウ「早い段階でクリアしてたんじゃないの？」

一回はクリアしたんだけどねえ、でももう一度やり直しがしたくてねえ。

ブラックで貯めた道具を全部ホワイトに移送してたw
全部移送するのに一週間かったよw

ピカチュウ「……ほほお。よくわかった。死にたいのね？」↑充電

ちよ、待て！ 何でそうなるっ！？

ピカチュウ「問答無用！ 大人しくペナルティ受けなさいっ！」

ちよ、待て！ 早まるなっ！ って、ぎゃあああああ！？↑感電

——「火炎放射！」

「電気ショック！」

ピカチュウとリュウタ。互いの技がぶつかり合い、爆発を生む。だが、どちらも本気を出していないためか、発生した爆発はごく小規模のもので、目立った被害はない。

ピカチュウが本気で戦っていないことにリュウタも気付いているのか、火炎放射を止め、不満げな表情でピカチュウを見つめて、まるで憂さを晴らすかのようにその本音をぶちまけた。

「——おい。」

お前、さっきから俺の攻撃防いでるばっかでさ、全然本気出していないだろ？ 戦う気あんのか？」

「あら？ バレた？」

リュウタの指摘にピカチュウはいたずらっぽく笑みを浮かべてぺろつと舌を出す。

リュウタとの戦闘^{バトル}が始まってから、ピカチュウは電気技で最も下位の技——電気ショックしか使用しておらず、しかもその威力^{パワー}は、通常時と比べて並以下。全力^{フルパワー}で放った時の半分もない。

さらに言うなら、ピカチュウはリュウタが攻撃を仕掛けてきた時にのみ技を使用し、その他の使用は一切無し——即ち零^{ゼロ}。自分から仕掛けようという意気込みが全く感じられない。

まるで戦う気がないといったような、そんな雰囲気であった。

「アナタ達がどの位の實力^{レベル}なのか知りたくてさ。様子見てたんだ。」
ピカチュウの様子見発言に気分を害したのか、リュウタは益々不機嫌な表情をする。

今までリュウタが戦ってきたポケモン達^{あいて}は皆、正々堂々、正面か

らぶつかつてきた者が殆どであつた（中には例外もいたが）

ピカチュウのように、腹の内を探り合いながら戦^やるような相手とは戦つたことがないため、そのやり方がリュウタには納得がいかなかったようである。

「んなもん必要ねえよ。最初^{はじめ}から全力でこいよ！
でなきやつまんねえだろ！？」

——確かに。命がけの戦^{バトル}闘つてわけでもないしね。

リュウタの苦情に、ピカチュウは下を向いて考える。

これはただの純粹な競^{バトル}技。勝敗に深い意味はない。

——なら、深く考える必要もないか。

そういえば、よく考えたら、競^{バトル}技としての戦^{バトル}闘つていうのは、これが初めてかもしれないな。今まではどっちかっていうと、命が掛かつた闘いが殆どだったから——

そう思い、これまで経験してきた戦^{バトル}闘を思い出しながら、ピカチュウは苦笑いを浮かべる。

その様子に、事情を知らないリュウタは訝しげな表情をしている。だが、不振がるリュウタの視線には目もくれず、尚もピカチュウは一人、頭の中で考察を続ける。

何も考えない気楽なバトル——こんなバトル、できるチャンスなんか滅多にないし、せつかくの機会だもん楽しまないと損だよね。そう思つた瞬間、ピカチュウの中でふと、懐かしい感情が甦^{バトル}る。何も考えず、ただ純粹に競^{バトル}技を楽しむという想い。それがとつもなく心揺さぶられ、且つわくわくしてくる。

こんな感情が芽生えるということは、記憶が失^なくなる前の自分はトレーナーか何かだったのかもしれない——心の内のどこかでそんな考えが浮かぶ。

「——そうだね。」

ワタシって、体を動かすよりも先に頭が動いちゃうんだよね。ゴメン」

そう言ってピカチュウは前で両手を合わせて謝罪の言葉を並べる。ピカチュウの言葉に、今まで傍観していたブラットが笑い声を上げ、

「ハハハハ！ リユウタと真逆だなそりゃあ」

「るっせえぞブラット！」

腹抱えて笑うブラットを見てリユウタは額に青筋を浮かべてブラットを睨み付ける。

だが、ブラットが笑い止む気配は一向に見えない。そのことにリユウタは益々怒りを募らせていく。

リユウタとブラットのやりとりがおかしかったのか、ピカチュウも声を出さず笑い声を上げている。

「お前も笑うなよっ！」

ピカチュウが笑っていることに気付いたのか、リユウタは鋭い眼差しでピカチュウに目を向ける。

怒りの籠もったリユウタの視線に、ピカチュウは涙を拭きつつ、左手をぱたぱたさせて、

「ごめんごめん。」

——じゃあ、ここからが本番！

ワタシも全力で——行かせてもらっわよっ！」

その瞬間——周囲の空気が一変する。

ピカチュウが、思考を完全に戦闘モードへと切り替えた為であった。

その証拠に、ピカチュウの気の上昇に反応しているのか、頬にある電気袋から、ぱちぱちと音を立てて僅かに電気が漏れだしていた。先程までとすっかり雰囲気が変わったピカチュウの様子と言葉に、バトル中であつたことを思い出したのか、怒りを忘れリユウタは集

中力を取り戻し、にやりと笑みを湛えてピカチュウを見る。

「そうこなくちやな！ 仕切り直した！」

「電気ショックっ！」

――今度はピカチュウから攻撃を仕掛ける！

その威力は先程の比ではない。火炎放射を迎撃する為に放っていた電撃とは桁違いの威力である！

「火炎放射っ！」

対するリュウタは、再び火炎放射で電撃を受け止める。

第二破は先程の衝突とは比べものにならない、凄まじいぶつかり合いとなった！

ぶつかった瞬間大きな爆発音が発生し、まるで悲鳴を上げるように大気が大きく震え、震動する！

爆発で発生した爆風と衝撃波によって押され、ピカチュウとリュウタは片目をつむりながら、強制的にその場から僅かな後退を余儀なくされる。

「さつきとは威力が全然違う！ そうこなくつちやな！」

相打ちだったにもかかわらず楽しそうな表情で言うリュウタ。さすがは戦闘狂といったところか。その様子は先程までの不機嫌がウソのようである。

「こつちも本気で行くぜっ！」

大文字！

漢字の大的形をした大きな炎がピカチュウ目がけて飛んでいく！
「10万ボルトっ！」

一方、ピカチュウは10万ボルトでそれを受け止める。

――だが、若干威力が足りないのか、僅かだが電撃が押され始める。押された衝撃で、ピカチュウは僅かに顔を歪める。

「っ！　すごい威力^{パワー}！
でも——！」

ピカチュウは出力を上げ威力^{パワー}上げる。それにより、電撃と炎の勢いが互角になり、再び爆発が起きる！

「きゃあ！」

「うぐあ！」

爆発で発生した衝撃に巻き込まれ、ピカチュウとリュウタは大きく後ろへと吹っ飛ばされる！

爆風に巻き込まれ地面に叩きつけられ、倒れながらも、暫らくすると両者共に同時に起き上がり、立ち上がる。どちらも致命傷と呼べるほどのダメージは受けなかったようである。

「俺の大文字を相殺するとはな。

やっぱ強いなお前」

「そっちもね」

ピカチュウとリュウタは互いの視線を重ね合い、笑みを浮かべる。二人は今、純粹にこの勝負^{バトル}を楽しんでいる——そんな様子だった。

「——さてと、そろそろ俺も参加するかなあ」

そう言いつつ、場の雰囲気壊さぬようにして、肩に手をあてこききと動かしながら、ブラットが二人の間に割って入ってくる。

それを、ピカチュウは表情を引き締め、警戒の姿勢で見る。

進化前のリュウタでさえあの力量^{レベル}なのである。その進化体であるブラットが弱いはずがない——そう考えたためであった。

ブラットは両腕をぐるぐると回し、屈伸運動などの準備運動を済ませると、にやりと笑みを浮かべてピカチュウへと視線を向ける。

……来るっ！

そう思い、思わずピカチュウは身構える。

「行くぜ嬢ちゃん！　大放射！」

首から勢い良く炎を燃え上がらせ、ブラットはピカチュウ目かけ、

口から炎の塊を吐きだした！

——その炎は通常の火炎放射の色ではなくそれより更に高温の炎の色をしていた。

「何あれっ！？」

火炎放射と似ても似つかぬその炎を目にし、思わずピカチュウは驚きの声を上げる。

この技の正体は何なのか——じっくりと考えたいところではあったが、既に炎は目前に迫っている。そのような時間は残されていない。

「何だか知らないけど、あれをくらったらヤバイ！」

迫りくる灼熱炎を目の前にし、ピカチュウはそう判断した。だが、電撃であれを相殺するには距離が詰まりすぎている。それ以前に、相殺できるかも疑わしい。

——ならば！

「電光石火！」

後ろ足に電気を送り込み、筋力と瞬発力を飛躍的に高めると、急ぎピカチュウはその場から離れる。

ぼひゅっ！

標的を失った炎はそのまま進んでいくが、やがて失速し、壁へと激突する。

「避けたか。いい判断だな」

特に驚いた様子も見せず、ブラットは笑みを浮かべてそう洩らす。リュウタと同じく、余程バトルが好きなのか、一撃をかわされたはずなのに、その表情に悔しさはなく、寧ろ楽しそうな様子である。

ピカチュウは電光石火を解除し、先程炎がぶつかった壁の方に目

をやる。

見れば、炎がぶつかった部分だけ大きく焼けただれ、まるで穴が空いたかのように、半分溶けかけていた。

「何今の。あんな技見たことない」

呆然とした状態でピカチュウは呟く。

その疑問に答えようと、得意気な様子でブラットが口を開く。

「そりゃそうだろうな。大放射は俺のオリジナルの技だからよ」

……オリジナル技。なる程。それならわかるわけないや。

ピカチュウはすぐに落ち着きを取り戻し納得した表情を見せる。

あの大放射って技、察するに火炎放射と大文字の複合技って感じに見える。

火炎放射に大文字の熱量をプラスして、火力を大幅に上げてるってとこかな。

とにかく、あんな技受けたら一発で負けること確実ね。

ピカチュウは思考を巡らせて対策を講じる。

リュウタもブラットさんも、強力な炎技でがんがん攻めてくる特攻タイプ。まともにぶつかりあっていたらこちらの体力が持たないさて、どうするか――

ピカチュウがそのような事を考えていた時である。僅かに地面が揺れていることに気付いた。

リュウタ達に気付かれぬよう横目でちらりと別の方を見ると、バンが自身の尻尾を思いっきり強く地面に打ち付けているのが目に入ってきた。

それを見てヤバイと感じ取ったピカチュウ。いきなり地面を思い切り蹴って、高く宙に飛び上がった。

「お？ 上空から来るってか？」

事情を知らないブラットはそれを見上げながらのんきそうにそう

言う。

「逆に好都合だぜ。空中^{うへ}じゃ逃げようがねえからな。狙い撃ちだぜ！」

対するリュウタはこれを見て好機と捉えたのか、不適な表情を浮かべて上に向けて火炎放射を放とうと体勢を整えて、かまえる。

同様に、ブラットもピカチュウに向けて狙いを定めて攻撃態勢に入る。

だが、二人が技を放とうと息を吸い込んだその時――

――突然地面が揺れ始めた。

揺れは当然のことながらリュウタとブラット――地表にいた二人に襲いかかってきた！

「お？ おわああああ！？」

「どわあ！」

いきなりの揺れに対応しきれず、リュウタは背中から地面に落ち、ブラットは両足に力を込め、なんとか踏ん張っている。

揺れは徐々に小さくなり、やがて完全に止まる。そして、大地は元の静けさを取り戻した。

「おいこらバン！ 危ねえだろっ！」

揺れが収まるなり直ぐさま揺れを引き起こした張本人であるバンに向かって文句を言い放つブラット。

ブラットの苦情に、バンは困ったような表情を浮かべ、

「す、スマン。つい」

謝罪の言葉を聞いても腹の虫が収まりきらないのか、ブラットは不機嫌な表情を崩さぬまま。

そこへ――

「――お、おいブラット」

額に汗しつっリュウタが口を開いているのに気付き、ブラットは

リュウタの方を向く。

それは驚きの表情。何故リュウタがそのような表情をするのか、理解ができずブラットは眉をひそめる。

ブラットの反応の薄さに、思わずリュウタは片手を上げ、指を差す。

指差した先にいたのは自分——つまりはブラット本人へと向けられている。

ブラットは益々訳が分からなくなるが、先程から感じていた違和感を思い出し、上へと視線を向けた。

「……何してんだ嬢ちゃん？」

——ブラットは何時の間にもやらの自分の頭の上に乗っかっていたピカチュウに向かって問いかける。

> i 1 3 0 7 7 — 3 8 4 <

その問いに反応して、ピカチュウはにんまりと笑顔を作って、

「いやあ、だって、さすがに地震は食らいたくないし^{あれ}」

その答えにブラットはひききつと、顔を引きつらせる。

その様子を、リュウタは両手で口を押さえ、何やらぶくくつと笑い声を上げている。

「そこ！ 笑うな！」

リュウタが笑っている事に気付いたブラットは最速ツツコミを入れる。

だが、沸き立つ感情を抑えきれないのか、構わずリュウタは笑い続けている。

それを見て、ブラットは後でテラにリュウタへのお仕置きを頼むことを固く誓ったとかそうでないとか。

「……降りてくれねえかな？」

「やだ」

ぎこちない笑みを浮かべてブラットはピカチュウに問いかけるが、ピカチュウは笑顔でそれを拒否する。

その返答に血管をびくつかせるブラットであつたが、ふとここで何かに気がつく。

そしてそれが表情にも表れにやりと口元を緩ませる。

そのことに疑問に思ったピカチュウは、数度瞬きを繰り返し、首を傾ける。

「——そうかい。そんなにそこにいたいなら、ずっとそこにいな！
噴火っ！」

次の瞬間、ブラットの首の回りから炎が吹き出し塊となってピカチュウに襲いかかる！

慌ててピカチュウは上へと跳躍とんでそこから離れるが、複数ある火の玉のうちの一つがピカチュウの横を掠める。

なんとか噴火から逃れたピカチュウは、ブラットから少し離れた場所へと着地した。

「っ熱うっ。びつくりしたあ」

ピカチュウは焦げた毛の一部をはたきながら口を開く。
「不意打ちとは随分ですね？」

女の子には優しくしましうって習いませんでした？」

ピカチュウの問いに、ブラットは笑みを浮かべて、
「ああ。知らねえな。」

バトルは常に真剣勝負。男とか女とか関係ないだろ？」

——確かに、一理あるわね。

女だからって舐められるのはワタシも嫌だし。

ブラットの言葉にピカチュウが納得していたその時——

「俺のことも忘れるなよっ！ 電光石火！」

「えっ！？」

——いきなり横から声が聞こえてきた。

見れば、着地した直後で動きを止めていたピカチュウを狙って、リユウタが突っ込んできているのが目に映った。

「まずっ！？ 高速移動！」

ピカチュウは加速度を高めて通常よりも速度を上げると、追撃それから逃れようと駆け出す。

「逃がさねえよ嬢ちゃん！ 電光石火！」

だがブラットも電光石火を使いピカチュウを追いかける。

その速さはピカチュウとほぼ互角——いや、それ以上であった。

「うそっ！ ついてきてるっ！？」

ピカチュウ

ブラットが自分の後をぴったりとついてきていることに驚愕するピカチュウ。まあ、基本能力の高いヒノアラシの最終形態という事を考えれば当たり前なのだが。

両者の差が段々と縮まっていることに気付いたピカチュウは、

「さらに高速移動っ！」

さらに素早さ（スピード）を上げ二人を引き離しかかる。

相変わらずブラットはピカチュウの後をぴったりくっついてきているが、リユウタはそうではない。両者の間に、徐々にではあるが、差がつき始めた。

「ちっ！ あの速さじゃ追いつけねえ！

ブラット！ 回り込んでくれ！」

「了解っと！」

ブラットは更に素早さ（スピード）を上げると、ピカチュウを追い抜き、前に立ちはだかる。

それを見て、リユウタは勝ち誇ったような笑みを浮かべて、

「よしっ！ 挟んだぞ！」

ふっ。甘い！

リュウタの言葉に、ピカチュウは小さく笑みを浮かべると、速度を落として減速し、横へと飛ぶ。

標的が消えたことで力をぶつけるものがなくなったリュウタとブラットはぎよつとする。

『げ』

ごっちいいいん！

何かが派手にぶつかる音がした。

何かとはもちろん、リュウタとブラットの頭である。

『あだああああ！？』

二人は頭を押さえその場にうずくまる。それだけではリュウタは痛みを堪えきれず、丸くなってごろごろとその辺の地面を転がり回っている。

「くっ痛うう……」

ブラット！ お前頭硬すぎっ！

っーか、何でそんなとこに突っ立ってるんだよっ！」

目に涙を浮かべつつブラットに向け非難の言葉を述べるリュウタ。その言葉にすぐさまブラットが反応を見せる。

「いや！ お前が回り込めって言っただろ！？」

第一、石頭はどっちだ！？ お前だって相当な——」

あらら？ なんか言い合いが始まっちゃったわよお？

口論を続ける二人を面白そうな様子で観察してるピカチュウ。二人は完全に言い合いに夢中になっており、ピカチュウのことを忘れ、完全に放置していた。

ともあれこれは、チャンス！

「10万ボルト！」

ピカチュウは二人目がけ電光を閃かせる！

その事に気付いた二人は、言い合いを止め、迫る電光に目を向けた。

「げ！」

何時の間にか迫っていた電撃に驚き思わず仰け反るリュウタ。

「大放射！」

だが、ブラットが冷静に対処する。

ブラットの放った強力な炎が10万ボルトを打ち消し、そのままピカチュウへと向かっていく！

「んなっ！？」

避けることができず、炎はピカチュウを巻き込み、爆発を引き起こした！

「やったか！？」

歓喜の声を上げるリュウタに対して、ブラットは表情を崩さぬまま。

「——いや、やってねえな」

そう応えた。その言葉に、リュウタは驚きを隠せない。

「ウソだろ！？ 今の一撃受けて無事でいられるはずがねえ！」

リュウタの言葉にしかし、ブラットは首を横に振る。

「いや。あの嬢ちゃん、当たる直前に高速移動使って逃げたな。

直撃したなら声の一つも上がってもいいはずだ」

ブラットの説明に、リュウタははつとしたような表情を見せる。

「だが、それが聞こえてこなかった。

なら考えられるのは一つ。あの一撃を避けたんだ」

「マジかよ」

未だ信じられぬリュウタは半信半疑のまま。対するブラットは、笑みを浮かべ、

「でないとなんところにいる説明がつかねえだろ。なあ嬢ちゃん？」

後ろに向かって呼びかける。

それを聞いて、リュウタは慌てて後ろを向く。

そこには、一体いつの間に移動したのか、ピカチュウの姿がそこにあった。

——「い、いつの間に!？」

驚きのリュウタの言葉に、ピカチュウはにこりと微笑んで、

「よくわかりましたね。ワタシがここにいてるって」

驚いた様子も見せずにブラットに向けて問いかける。

対するブラットも、ふっ、と笑みを浮かべて、

「三回目の高速移動でバレねえと思ってたようだが……残念だったな。」

感じたぜ？ 嬢ちゃんが横を通り抜けていく時に僅かに発生した風をよ」

ブラットの説明に、ピカチュウは苦笑いを浮かべる。

全てはブラットの説明の通り。からくりはこうである。

まずピカチュウは高速移動を使用して横へ移動。大放射を避ける。

そしてその後ブラットの横を一気に駆け抜け、後ろへと回ったのである。

まさかこの動きを読まれるとは思っていなかったピカチュウは、少し困ったような表情をする。

「どうやらお互いの攻撃を相殺しあってかわし合ってたんじゃない切りがなさそうですね」

「そりや奇遇だな。俺もそう思ってたところだ」

ピカチュウの言葉にブラットはにまりと笑みを浮かべて反応を返す。

「なら、互いの持ち技の中で、一番強い技で決着^{けり}をつける！

それでいいじゃねえか！」

そこへすかさずリュウタが口を挟んでくる。

……確かに、互いの持ち技も少なくなってきたし、このままでは消耗戦になってしまう。

それで決着をつけるのも悪くないかもしれないよね。

「うーん……それもそうだね」

ピカチュウの返答にリュウタは満足げな表情をする。

「なら、行くぜ！ おおおおおお！」

リュウタの背中が炎が勢いよく燃え上がる。

横ではブラットが同じように炎を燃え上がらせていた。

さらにそれだけではない。炎の温度の上昇に反応して、二人の周りに陽炎が発生していた。

それを見てピカチュウは本能的に察する。

——こいつはマズイ——と。

しかし、ピカチュウが気付いた時には、既に二人の技の蓄積^{チャージ}が完了していた。

『ブラストバーン！』

灼熱の炎が二人から放たれる！

二つの炎は、違えることなくピカチュウへと向かって飛んでいく！

「電気ショック！」

ピカチュウは、飛んでくる炎を正面から見据え、電撃を放ち、相殺を試みる！

——だが、仮にも究極技と呼ばれる最終奥義。電気ショックレベルで弾き返せる代物ではない。
ピカチュウが放った電撃はいともあっさりと、簡単に吹き散らされる！

「なっ！」

驚きの声を遮り、燃音が辺りに響き渡る！

今の一撃で著しく体力を消耗したのか、リュウタとブラットは息を荒げ、大きく肩で息をつく。

「……あ、ハア……ハア……」

「……や、やったか？」

爆発により発生した爆煙が徐々に晴れていく。
煙が収まったその後には、当然だが倒れたピカチュウの姿がその目に飛び込んでくると、二人はそう思っていた。

だが——

「んなっ！？」

二人は驚愕する。

そこには、まるで何事もなかったかのように、平然とその場に佇むピカチュウの姿がそこにあった。

「今の一撃、確かに強力だったよ？」

——「……んな……ウソだろ……？」

俺達の合わせ技を受けて……立ってられるわけが……」

息も絶え絶えに言うリュウタに対し、ピカチュウはくすりと笑い声を洩らす。

そして、不敵な笑みを浮かべて、

「残念だけど受けてないのよ。さっきのブラストバーン。ワタシはね」

「んなっ!？」

驚きの声を上げるリュウタ。ブラットも、訝しげに話を聞いている。

「影分身って知ってる？」

素早く動いて残像を作り出し、相手の技をかわす技。

電気ショックが弾かれた瞬間、それを使ってその場から離れたのよ」

……影分身だと？

だがあれば、無数の幻影を生み出してその中に本体しぶんが紛れ込む回避技のはず。

発動させたらいやでも気付くはずだ。何故気付かなかった？

ブラットが考えてることを素早く察したのか、ピカチュウは更に解説を続ける。

「ワタシが作り出した分身は一体。

それを身代わり代わりに使用したの。だから気付かなかったんじゃないかな？」

「いつ一体!？」

驚きの声にピカチュウは満面の笑顔でにっこりとする。

「元々電気ショックも身代わりそれ影分身を作り出すために使ったもので迎撃する為のものじゃなかったし」

「んな……ずっけえ……」

リュウタは肩で大きく息をつきながら愚痴を零す。

そんなリュウタに対し、ピカチュウは、

「アナタ達は確かに強い。

それがわかってて尚も真正面からぶつかっていくほど、ワタシは無謀じゃないんだよ？」

——それは前回、スカタンク達に敗北して得た反省点だった。

勝負は最後まで何が起こるかわからない。だから、何時、如何なる時も、冷静さを欠いてはならない——それがピカチュウがドクローズとの戦闘^{バトル}で得た教訓。学んだことであつた。

「最初の^{ぶつかりあい}一撃でそれがわかつてたから——待つてたのよ。

アナタ達が、最強の一撃をぶつけてくる——その瞬間をね。

アナタ達は卑怯だと思つかもしれないけどね」

苦笑いを浮かべるピカチュウに対し、ブラットが、

「……これは……やられたな。

^{はじめ}最初から全部嫌ちゃんの計算のうちだったとは」

やはり同じ苦笑いをしている。横では、リュウタが心底悔しそうな表情をしている。

それを見つつ、ピカチュウは電気袋を光らせる。

「ブラストバーンは強力な分^{リスク}反動も大きい。

撃つた後は反動で暫く動くことがなくなる。

今のアナタ達にワタシの攻撃を避けることは——不可能だよ」

リュウタとブラットは応えない。それはどこか諦めたようにも見える。

だが、ピカチュウは警戒の姿勢を崩さない。一步、また一步と、確実にゆつくりと近づいていく。

動くことができない為、リュウタ達はそれを黙って見ていくことしかできない。

「……くそっ……」

「悪いけどこの勝負、ワタシの勝ちね？」

10万ボルト！」

ある程度まで近づくと、ピカチュウは^{うえ}宙へと跳び、二人目がけて電光を閃かせる！

フルパワー

全力で放った10万ボルトにより、周囲が明るく照らし出される。これで勝負がつくかと思われた。その瞬間――

「……………」

負けて……たまるかよっ！」

気合いを込めてリュウタは背中の炎を激しく燃え上がらせる！

それを見ていたブラットも、

「俺もだぜ！」

同様に首回りの炎を全開にする！

その様子を見てぎよっとするピカチュウ。

「えっ！？」

『ブラストバーン！』

リュウタとブラットは再び灼熱の炎をはき出す！

それにより、目前まで迫っていたピカチュウの電撃は二人には届かず、空中で押し止められてしまう！

うそっ！ 二発目を撃ってきた！？

信じられない光景であった。

ブラストバーンは一度発動した後、連続で撃つことはできないというのが通説である。

――だが、その通説を、二人は気合いと根性でひっくり返したのである。これには驚かないわけがない。

「――でも、ここまで来て……負けてたまるもんですか！」

気力を振り絞り、ピカチュウは放電の出力をさらに上げる。それにより、押し合いが僅かにリュウタ達の方へと傾く。

「俺等だつて！」

「絶対、負けねええええ！」
ぜってえ

だが、リュウタとブラットも火力を上げ威力を上げる！
パワー

それにより、再び電撃は押し返され、再び最初の位置で拮抗する！
両者、互いに一步も引かず、もはや気力のみのがチンコ対決とな
った。

「うああああああ！」

『うおおおおおお！』

両者、互いに気迫の籠もった声が響き渡る。このまま押し合いが
続くかと思われたその時――

戦局が――動いた。

「うそっ!？」

ピカチュウの電撃が弾かれたのである。

巨大な炎は塊となってピカチュウに襲いかかる！

慌ててピカチュウは放電を止め、下へと落ちていく。
標的を失った炎はそのまま真っ直ぐ飛んでいき――

ぼぐわがああああん！

――天井を貫いた。

――その日、いつもは訪れる人もなく、ただ静かに時が流れてい
くだけの道場で轟音が響き渡り、トレジャータウンの者を震撼させ
た。

様子を見に、道場へとやってきたたくさんのポケモン達は、衝撃
で目を疑ってしまう。

何故なら、道場の屋根が半分以上、跡形もなく、木っ端微塵に吹
っ飛んでいたからである。

ちよつと技のパワーバランスがおかしいような気もしますが、そこはまあ、ご愛敬w

気にしないということ♪

ピカチュウ「実際のゲームなら10万ボルトでプラストバーン×2を受け止めるなんてこと絶対不可能だと思っんですけど」

究極技の名が泣くよね（笑）

中クラスレベルの電撃に最強技が止められたとなるとw

まあ、雷ならなんとか互角だったのかもしれないけれども（苦笑）

ピカチュウ「なら雷出せば良かったんじゃない？」

それはできない。だってまだそこまでレベルアップしてないしwでも、技の精度を高めて特攻MAXまで上げておけば、もしかしたらこういうこともあり得るんじゃないかなあ、なんて思っんだよねえ。

ピカチュウ「技の精度っていうのは作者さん独自の概念よね？」

だね。ただむやみやたらに技を出すんじゃないくて、技の精度を突き詰めて、その本質を理解する——そうすることで威力の低い技も強力な一撃として撃ち出すことができるっていう概念だね。実際キミの技は殆どそれで強化されてるしね。

ピカチュウ「電気ショックで火炎放射が受け止められたのもそのせいね。

てか、今回のワタシのノリって、何か悪役みたいなノリじゃない？」

だろうねえw

実際のアニメやゲームでこんなキャラがいたらまず間違いなく私はリユウタ達を応援してるw

ピカチュウ「おい。どうなのよそれは。作者として」

まあまあ。これが君流の戦い方w

ひたすら知恵を巡らせて打開策を見出し勝ちを取る。げき弱な君には君にはこのやり方がびったりなんだよw

ピカチュウ「なんか気になる言い方ね。てか、結局勝負の行方ってどうなるのよこういう場合？」

そらあ、負けに決まってんでしようよ。渾身の一撃が弾かれたわけなんだから。

ピカチュウ「でもワタシ避けたんだけど？」

運良くな。でも、あのまま続けててもどのみち負けてたよw

ピカチュウ「次は絶対負けない！」

ブラット「こっちだって負けねえぜえw」↑

ああー！ ブラット来たんだねえ♪ 待ってたよー！↑ダッシュ

ピカチュウ「ちょ、仕事放棄すんなっ！

——って、遅かったか（汗）しょうがないわねえ。

さて、次回は一体どうなりますやら。それはお楽しみ
といつことぞw

それでは皆様、またお会いしましょう。

さよならー」

Expedition - 23 同じ存在（前書き）

新年一発目！

今年最初の更新だよ」

ピカチュウ「遅すぎんよ。てか、去年12月一度も更新してないし」

クリスマス特別編が『探検隊』の更新分ということにしておいてくれ」

ピカチュウ「できるかあ！　とうとうこの小説にまで魔の通知出ておいて！

何事もなく済ませられるとでも！？」

……え？　ということはつまり……？

ピカチュウ「もちろん！　ペナルティに決まってるでしょうよ！」

理不尽だああああ！（号泣）

——「んのうあうえあああああ！？……お、オラの……オラの……道場がああああああ！？」

絶叫に近い悲鳴をあげ、でろでろと涙しながら、ガラガラはおいおいその場でうずくまり、泣きじゃくる。

まあ、数時間前まで道場であつた「それ」が、今は跡形もない、半ガレキ化したわけのわからない物体と化しているのだから、この反応は当然といえば当然であつた。

ガラガラはなおも地面に膝をつけ、頭を抱えながらうんうん唸っている。

それを横目で見つつ、ピカチュウは白い目を向ける。

こつなつた道場半壊原因を作り出した張本人——リュウタとブラットへと向けて。

『申し訳ありません』

リュウタとブラットはだくでくと汗を流しながら土下座をしている。

バトル戦闘が終わつた後、進んで自らこの体勢を取つてきた。まあ、当たり前といえば当たり前前の態度ではあるのだが——

「もう、リュウタつてばすぐに熱くなるんだからあ」

ピカが困つたような表情でリュウタを見つめながら苦笑いをする。返す言葉もないのか、リュウタは黙つたままである。

「本当だよ。建物の中だつてのに、全力出すやつがある？」

ピカの意見に同調し苦言を呈するピカチュウ。

その言葉に、リュウタはさらに汗をだらだらと垂らしながら下を向いている。

「でも、困りましたねえ」

コウがガレキの山を見つめながらぼそりと呟く。

コウの言葉に、テラがこくりと頷いて、

「ああ。『あぁなつて』しまつて、元の世界へと帰ることができなくなつてしまつた」

——道場がガレキの山となつてしまつたことによつて、空間の調和が崩れたのか、扉をくぐつても、コウ達は自分達の世界へと戻ることができなくなつてしまつたのである。

そのため、炎雷の他のメンバーは、すっかり途方に暮れてしまつている様子であつた。

数多の異世界を渡り歩いてきた彼等であるが、やはり元の世界へ帰ることができないというのは、割とショックが大きいようである。ましてやそれを引き起こしたのが自分達の身近にいる存在なのだから。寧ろにこやかでいるという方が無理である。

「さてえ、どうするかのおゝ？」

バンがそう付け加えると、コウとテラも加え、白い目でリュウタとブラットに目をやる。

その視線に二人は、

『本つつ当に申し訳ありませんっ！』

地面に額をこすりつけんとばかりの勢いで土下座をしていた。

「どうしようピカチュウ？」

困つたような表情でナエトルはピカチュウに向けて問いかける。

それに対しピカチュウは、ぼりぼりと頬を掻き、やれやれといったような表情をして、

「しょうがないわねえ。」

とりあえず、ギルドに行つてみましょう。プクリンなら何か、方法を知つてるかもしれないし」

ピカチュウの提案に異議はないのか、全員が首を縦に振る。

未だ嘆くガラガラを放置し、ポケダンズと炎雷は一路、ギルドへ

と足を運んだのであった。

——ギルドへとやってきた一行。

炎雷のメンバーは、自分達がいたギルドと、何から何からまでそっくり同じなことに言葉が出なくなり、皆驚きの目を向けて呆然としていた。

「……間違いなくプクリンのギルドだな……」

「本当、何から何まで同じだねえ」

リュウタの言葉に、ピカが頷きながらきよろきよろと辺りを見回している。

「何だか不思議な感じですね。」

別の世界に來たという感じがしません」

他の者もコウと同意見なのか、全員同じ反応である。

「取り敢えず中に入ろうよ。」

早くプクリンに話を聞かなきゃ」

そう言うなり、ナエトルとピカチュウは一足早く中へと入っていく。

遅れて炎雷もそれに続いていった。

「……こつちの世界のプクリンで、どんなだろうな？」

梯子を降りる途中、唐突にリュウタが口を開いた。その言葉に、ピカをはじめ、他のメンバーも首を傾げる。

異世界を渡ったことは数あれど、自分達の世界と全く同じ、平行^{パラレル}世界を訪れるのは初である。見知った存在であっても、それは別の^{ワールド}世界^{ばいよ}で生きる別人。同じだけれど同じじゃない、異なる存在なのである。

自分達の世界^{ミユミ}にいたプクリンと似たような性格なのか、それとも全く違うのか、期待が籠もってリュウタは少しわくわくしていた。

梯子を降りきり、一階へと辿り着く。そこでは、様々な探検隊が、依頼書を見ていたり、雑談していたりと、賑やかな光景が広がっていた。

——この光景はどの世界に行っても変わらないんだな。

薄く微笑を浮かべそんなことを考えるリュウタ。他の者も似たようなことを考えているのか、全員表情が穏やかである。

六人が和み、足を止めているところへ、

「——おやおや。これはこれは。誰かと思ったら、弱虫君じゃないか」

いきなり嫌味な声が聞こえてくる。

聞き覚えのあるその声に、一斉にそちらの方を向く。

そこに立っていたのは――

「……ドクローズ」

ナエトルが嫌そうな表情で相手の名を呟いた。

そこにいたのはドクローズの面々。なにやらニヤニヤした様子でピカチュウ達のことを見つめている。

「よお。お前等、昨日はよくもやってくれたなあ」

ズバットの言葉の意味を理解したのか、ナエトルは、あ、とした表情をし、ピカチュウはにやりと口を歪ませている。事情を知らない炎雷のメンバーはただ眉をひそめていた。

「何のこと？」

ピカチュウはさわからない、といった様子で返事を返す。だが、その目が完全に笑っている。これでは嘘をついているのが丸わかりである。

「ケツ。とぼけてんじゃねえよ。」

昨日のポフィン、あれあお前等の仕業だろう！？」

「さあ、どうだかね？」

曖昧にしか答えず、知らん顔のまま笑みを浮かべているピカチュ

ウ。その姿に殺気立つドガースとズバットの二人。それに対応するかのよう、ナエトルが瞳を釣り上げ見据え、何故だかりユウタ達まで構えを取っている。

——一触即発の状態。もはや、何時この場が戦場^{バトル}になってもおかしくない、そんな雰囲気であつた。

——だが、それを止める者がいた。スカタンクである。スカタンクは、二人に短く声をかけ、下がらせると、自分が半歩前に出、「ククククツ。何やらくだらぬ企みをしたようだな。この間の仕返しのもりか？」

スカタンクの問いかけにしかし、ピカチュウは答えない。完全黙秘である。

だが、スカタンクは動じることなく、あの嫌みったらしい含み笑いをする。

暫くの間、ピカチュウとスカタンクの睨み合いが続いたが、それを突き破るように、ズバットとドガースの二人が口を開いた。

「あんな子供だましなイタズラしねえでよ、文句があるならこつちでこいよ。へへッ」

そう言つてズバットが翼を大降りに羽ばたかせる。その意味が実行行使を意味しているのは誰が見ても明らかである。

「ま、お前等には無理だよなあ。なんてつたつてお前等、實力不足だからなあ。」

弱虫君にはああいう子供騙しな仕返しが関の山だ。ケッ」

ドガースの台詞に殺気立ち、ピリピリした空気が周囲に流れる。その空気を出しているのは何故か炎雷のメンバーである。その瞳には怒りの感情がありありと籠もり、完全に戦闘^{モード}体勢に入っている。もしこの場に誰がいなければ、問答無用でしばき倒しているところだろう。

場の空気を読んだのか、スカタンクは含み笑いをし、「ま、そんなことをしてる暇があつたらせいぜい仕事頑張りな。と

「いつでも雑用だがな。ククククッ」

言いたいことだけ言っと、三人は最後にもう一度嘲笑を浮かべをさつさとその場を立ち去ってしまった。

後に残されたのは、ポケダズと、未だ興奮冷めやらぬ炎雷だけとなった。

「——おい、二人共、アイツ等沈めるなら喜んで手え貸すぞ」

どれ位経ったか、ふいにリュウタの口からそんな言葉が発せられた。

しかも、その台詞を、危ないオーラを漂わせながら口ずさんでいるのだから第三者から見ればかなり怖い。現に、リュウタの様子に若干だが怯え気味のナエトルであった。

だが、そう思っているのはリュウタだけではない。

「ボクも」

「ボクもです」

「俺もだ」

「吾輩も」

「当然だ」

まさかの炎雷全会一致しての意見であった。

何故リュウタ達がそのような反応を見せるのか——それがわからず、ナエトルは怯えたような目でリュウタ達に視線を向ける。

「え？ え？ 何？ 皆、どうしたの？」

何でそんなに怒ってるの？」

「だってよお！ ムカツクだろおアイツ等あ！」

リュウタの言葉に、炎雷のメンバー全員がこくこくと首を縦に動かす。

「まさかこの世界にもアイツ等がいるなんてねえ」

「本当に。どこの世界にいても進歩がありませんねえ」

ピカとコウのこの会話に、ナエトルが反応する。

「え？　もしかして、君達の所にも、ドクローズ、いるの？」

ナエトルの言葉に、バンは首を縦に動かして、

「左様。^{ポケモン}人を陥れ愚行を働く不届きな連中よ」

「俺等も少なからずちよつかいかけられてな。無論撃退してやったがな」

「奴等は万死に値する」

ブラットとテラの言葉を聞いて思わず体を震わせるナエトル。

——　　いたい、リュウタ達がいいた世界で、ドクローズはどんな目に遭ったのだろう——　想像しただけで怖くなった。

「大丈夫だよ。」

アイツ等はちゃんとワタシ達の手でリベンジするから。

だから余計なことしないでくれる？

アナタ達に手助けされちゃあワタシが自分でアイツ等を絞めることができなくなるから」

会話を聞くなり、ピカチュウは笑顔を見せてそう応える。

その背後には、何やらどす黒いオーラがゆらゆらと漂っている。

ドクローズと話している時はあまり感じなかったが、どうやら怒りのメーターがマックスできているらしい。いや、もういつ振り切れてもおかしくない、そんな様子であった。

あまりに強烈すぎるその気に圧倒されて、ナエトルと炎雷は思いっきり後ずさった。そして――

——　ピカチュウ^{コイツ}だけは怒らせないようにしよう――
全員が堅くそう誓ったとか。

ドクローズのことはさておいて、八人はプクリンに逢いに二階へと降りてくる。そして、降りるなり、真つすぐプクリンの部屋へと向かっていった。途中ペラップの、おやお前達、そのポケモン達は一切誰だい？――なんて声が聞こえてきたが無視した。

「やあ！ どうしたの君達？ 一緒にいるポケモン達はだあれ？」
ヘコむペラップを放置し、中へと入るなり、恒例の椅子事振り返り現象を見せて言葉を発すプクリン。その姿を見て、炎雷は絶句する。

プクリンの態度、言葉遣い、その何もかもが――

――全く同じだ――との印象を抱く。唯一違うのはこの椅子振り返り現象だろうが、それを差し引いてもその言動が瓜二つなことへの驚きを帳消しにできそうにない。

啞然とし炎雷のメンツが言葉を失くしている中、ピカチュウは道場で起きた一連の出来事をプクリンに説明した。

ピカチュウの説明に、プクリンはこくこくと頷く仕草を見せる。その表情は真剣そのものだが、果たして本当に話を聞いているのだろうかと不安になるピカチュウであった。だが、話終えるなり、プクリンは笑顔を見せて口を開く動作を見せたので、大丈夫だと安堵した。

「話はわかったよ。」

僕のトモダチにそういう問題に強い子がいるから、その子に頼んで道場を修理してもらおうよ。」

「マジで!？」

驚き問うリユウタに対し、プクリンはこくくと頷いて、

「うん、それまではギルドにいるといいよ。」

自分達のギルドだと思って、ゆっくりしていつてね。」

「あ、ありがとうプクリン！」

「ありがとうございます！」

ピカとコウが順番にお礼を述べていく。

「さすがはプクリンだな。」

その度量のデカさはどの世界にいても変わんねえな」

ブラッドの賛辞に、プクリンにはこりと笑みを浮かべる。

「ピカチュウ、ナエトル。彼等を君達の部屋に泊めてあげてもいいよね？」

「え？ それは、まあ」

プクリンの提案にピカチュウは曖昧な返答を返す。

「もちろん！ 大丈夫だよ！」

それに対し、ナエトルは二つ返事で快く了承した。

ここでピカチュウは横目でチラリと炎雷達の方を見る。そして――
……こんなにたくさん的人数、果たして部屋に入れるのだろうか――と、不安になった。

――「ここがボク達の部屋だよ！」

ナエトルはリュウタ達を自分達の部屋へと案内する。六人は、中へと入るなり、きよろきよろと辺りを見回した。

「俺等の部屋と同じだな。ここで二人で寝泊まりしてんのか」

「うん。そうだよ」

ナエトルの返答にリュウタはにんまりと笑顔を浮かべる。

そして、ナエトルの首をがっちりとホールドして、小声でナエトルにささやきかけた。

「なあおい。お前、ピカチュウとはどんな仲なの？」
アイツ

「ええっ！？ な、仲って、どういう意味っ！？」

リュウタの質問にナエトルはあたふたとして赤面する。

だが、リュウタの詰問は終わらない。笑みを更に深めて、再び詰問を開始する。

「とぼけるなよ。一緒の部屋で生活したらそういうこともありえるだろ？」

てか、ないほうがおかしいだろ」

一つ前の質問で既に赤くなっていたナエトルであったが、今の質問でその赤さがさらに増す。

「よ、よよよ、よしてよ！　べべべ別に变なことは何もないよっ！？
……手、繋いで寝たことは……あるけど……一度だけ……」

徐々に声の調子トーンを下げていくナエトルであるが、リュウタ達は今の一言を聞き逃さない。

ナエトルの言葉に、リュウタとブラット、バンはにやりと笑みを浮かべる。

その視線に、ナエトルはおたおたとし、

「え？　え？」

「ほほう」

「奥手だと思っておったが……なかなかにやり手だのう」

「え？　え？　え？」

「今の話、詳しく聞かせてもらおうじゃねえか」

「ええええええええええ！？」

それから、ナエトルが三人にしつこく問い詰められたのは言うまでもない。

「へえー。ピカとコウ君は、やっぱり兄弟だったんだあ」

スタンドにトレジャーバッグをかけつつ、ピカチュウは二人に向けて口を開く。

こちらは同族同士で気が合うようで、電気ネズミ三人で、和やかに会話を弾ませていた。

ピカチュウの言葉に、二人はこくつと頷いて、

「ええ。離ればなれになっていたんですけど、また逢うことができ
たんです」

「コウと逢えたのも、リュウタと探検隊を始めたおかげだよ！」

「ピカは、どうやってリュウタと知り合ったの？」

「ギルドの近くの海岸だよ。」

そこでリュウタが倒れてたのを、僕が見つけたんだ」

「……え……？」

ピカの言葉に、ピカチュウは固まる。

——^{デジャ・ヴー}既視感。

どこかで聞いたことある情景に、ピカチュウは動揺を浮かべる。
驚くピカチュウの声が聞こえたのか、リュウタ達も話を止め、一
斉にピカチュウの方に注目する。

だが、それに気付くことなく、ピカは更に話を進める。

「目が覚めた時、リュウタは記憶を失く^なしててね。

憶えていたのは、自分の名前と、元々は人間だったってことだけ
みたい」

『！！』

その言葉に、ピカチュウも、そして、離れて話を聞いていたナエ
トルも言葉を失く^なし、驚愕の表情を浮かべる。

ピカチュウは、動揺する心を何とか抑え、リュウタに向けて問い
かける。

「……アナタ、元は人間だったの……？」

ピカチュウの質問に、リュウタはこくりと頷き、

「ああ。俺は元人間だ。信じられないだろうけどな」

リュウタ達は、ピカチュウ達が、人間からポケモンになったとい
う話しが信じられなくて驚いているのだろうと考えていた。実際は
それだけではなく、真相はもっと深い所にあるのだが——

「……うそ……ピカチュウと——同じだ」

沈黙が流れる空間の中、ぽつりとナエトルが呟いた。

ナエトルの言葉に今度はリュウタ達が驚く番であった。

リュウタ達はその呟きに驚愕し、驚きの眼差しでピカチュウの方
を見た。

「お、お前も人間だったのか！？」

驚きのあまり、少々上擦った声で尋ねるリュウタに、ピカチュウ

は無言で頷いて応える。

その反応に、ブラッドとテラは特に面食らったような反応を見せていた。

……記憶を失った……元人間だと……？

心の内で一人、ブラッドは動揺の言葉を洩らす。

そしてテラも。

……馬鹿な。あまりにリュウタと状況が酷似しすぎている。

あり得るのか……？ そのような事が。だがもし――

テラとブラッドの中で同時に全く同じ考えが閃く。

――もし、ピカチュウピカチュウが、リュウタと同じ存在なんだとしたら――
――まさか、こいつ――！？

「へえ。不思議なこともあるものですねえ」

コウが人差し指を口元に当てながらそう呟く。そこへ――

「――ピカチュウ」

唐突にテラが口を開いた。

呼ばれて当然ピカチュウはそちらの方を向く。他の者も、皆全員がテラに注目する。

「……お前は、自分が人間だと言ったな？」

その問いに、またもピカチュウは頷く。

それを確認して、テラはおそろおそろ、ゆっくりと口を開く。

「――なら、名前は？ 人間だった時の名前はなんという？」

その問いに、ブラッドは驚いたような表情を見せ、他の者は皆首を傾げる

何故そのような質問をするのか――と。

全員が疑問を持ちつつも、期待を寄せてピカチュウの解答を待った。

しかし、

「——それが、憶えてないの。」

人間だったときの事とか。どんな名前だったのか。全く憶えてないんだよねえ」

「……そうか」

その解答に、テラは少し残念そうにそう返した。

「何でお前がそんなこと気にするんだ？」

他の者には聞こえぬよう、ブラッドはテラに向けて問いかける。

その問いに、テラはちらりと横目を向け、

「……いや、なんでもない」

そう言っただけ黙ってしまう。

それと同時に、頭の中で、昔のことを思い浮かべた。

とある場所で修業の旅の途中に出逢った一人の少女——心優しく美しかったその少女に、好意を抱きつつ、テラは再会の約束をして別れていた。

その少女がピカチュウなのではというのがテラの推測だった。

だが、あくまでこれはテラの推測であって明確な証拠はない。もし、ピカチュウの名前がわかっていれば、推測も確信へと繋がるのだが——

一方、テラが過去の記憶に想いを馳せる一方で、ブラッドも同じような事を考えていた。

ブラッドもまた、こことは違う場所で、一人のとある少女と逢っていたのである。リュウタと一緒に^{とも}。もちろんリュウタは憶えていないだろうが。

もしも、ピカチュウがリュウタと同じ存在であるなら、その可能性は極めて当たりである可能性が高い。そう思えてならなかった。

だがしかしこれもやはりテラと同様推測の域を出ないのだが——

その日、八人は遅くまでそれぞれの探検の話に談義を花を咲かせ、

楽しい夜を過ごした――

――一方、その傍らで、プクリンはギルドを離れ、ある場所へとやってきていた。

「やあつ！ 久しぶりだねトモダチ♪」

プクリンにはこやかに友人（ただしプクリン談）に向けて話しかける。

プクリンの声に気付き、その存在はそちらの方を向き、

「――お前か。本当に久しぶりだな。何時以来だ？」

「僕が世界中をあちこち巡っている時に逢ったきりだから、それ以来かな」

暫しの間プクリンは唸ったのちにそう答える。

「それで、何の用だ」

問われて思い出したのか、プクリンは手をぽんと叩き、

「ちよっと、空間が壊れちゃった部分があってね。キミに直してほしいんだけど、いいかな？」

プクリンの依頼に、相手は少し考えるような素振りを見せる。暫しの沈黙の後に、

「――まあ、いいだろう。他ならぬお前の頼みとあったら」

その解答に満足したのか、プクリンはぱつと瞳を輝かせる。

「ありがとトモダチ♪ どれ位かかる？」

「損傷の度合いにもよるが、早くて半日。遅くとも一日あれば直せるだろう」

プクリンにとってそれはとてもいい返事であった。

プクリンは瞳を輝かせ、こくりと頷いて、

「十分だよ♪ 遠征にも間に合いそうだし、良かった♪」

「善は急げだ。早速取りかかるぞ」

その存在が瞳を閉じて意識を集中させる。だが、そこへ、プクリンが待ったをかける。

「その前に、トモダチと話をしたいんだけど、いい？」

プクリンの頼みに、やや不満げな表情^{かお}をして瞳を開く相手。

「——まあ、いいだろう。長話はするなよ？」

「ありがとトモダチっ」

相手は周囲に目をやり、無数に浮かぶガラスの欠片の中から一つを目にとめる。

相手は、くいつと、爪を自らの方へと動かし、その一枚を、自分の元へと引き寄せた。

「ほらよ。これだ」

相手は、ガラスの欠片をプクリンの元へと飛ばす。

プクリンはそれを受け取ると、欠片に向けて話しかけた。

「やあっ！ 久しぶりだねっ」

言葉を発して僅か数十秒。プクリンの呼びかけに応えるかのよう
に、欠片の向こう側から、何者かの声が聞こえてきた。

「あゝ ともだちだっ わーい」

ホントに久しぶりだねっ 元気にしてたー？」

——どうやら話し相手はプクリンと同じタイプのポケモンらしい。
軽いノリで挨拶をしてきた。

その軽いノリに、やはりプクリンも同じように軽いノリで挨拶を返す。

「うん。元気元気っ」

「どうしたの？ 何か用事？」

相手の問いに、プクリンはこくりと頷く。

因みにこちらの映像は向こうにも届いていることを読者にお伝えしておく。簡単に言うのなら、テレビ電話をしていると思っていた
だけばいい。

「うん。実はね、以前にトモダチから聞いてた探検隊のことなんだけど――」

「炎雷のこと？ 彼等がどうかしたの？」

相手の言葉に、プクリンは頷く。そして、表情を変えぬまま、
「今“こつち”に来てるんだよ」

暫しの沈黙。相手から返事が返ってこず、静かな時が流れる。

「え？ 僕何もしてないよ？」

口調からは全く感じ取れないが、どうやらかなり驚いてる様子。
それを聞いて、

「わかってるよ。どうやら道場にある探検隊の間に入ったらしいんだ」

「ああゝなる程お。あそこはいろんな空間せかいと繋がってるからねえ」
相手は納得したような声で応える。

「その空間なんだけど、実はアクシデントがあつて。どうやら空間に歪みができちゃったみたいでね、炎雷の皆が帰れなくなっちゃたんだよ」

「へえゝそんなことがあつたの」
リュウタかブラットがまた戦闘バトルに夢中になりすぎて熱くなっちゃったのかな？」

「それで、僕のトモダチがこれから空間を修理するから、それまで彼等にはこつちにいてもらおうと思うんだけど、いい？」

「必要なら、僕が“扉”を開けるけど？」
自覚がないのか、相手はとんでもないことを平気でさらりと口にする。

だがしかし、プクリンはその提案に首を横に振る。

「――いや。一緒にいた僕の所のチームと意気投合したみたいだから。」

だから、もう少し一緒にいさせてあげたいと思ってね」

再び沈黙。どうやら何かを考えているようである。表情からは全くそんな気配を感じさせない、ただにこやかなままにしか見えないのだが。

相手が悩んでいるらしいということを察したのか、さらにプクリンは言葉を続けた。

「きっとこの遭遇には何か意味がある——
そう思えてならないんだよ」

「——全ての生命は別の生命と出逢い、何かを生み出す——ってやつ？」

「うんそれ」

プクリンの返事に、相手は暫し悩むような仕草を見せる。そして

「いーよ。わかったよ。」

暫くの間、炎雷の皆をヨロシクね」

了解の意を示す。それを聞いたプクリンは、

「ありがとうトモダチ」

「それはそうと、前に教えてあげたやつ、できるようになった？」

その問いに、プクリンは苦笑いをして、

「うーん、まだ。」

トモダチみたいに次元の扉を開くなんてことはできてないよ。

空間に穴を開けることはできるようになったけど——」

「そこまでできればもうすぐだよ」 頑張ってね」

「ありがとうトモダチ」

「……お前等、俺の前で空間に穴開ける話するなよ」

困ったようにして呟くその存在の声を流して、プクリンは欠片の向こう側の相手と、いつまでも楽しく談笑していたという——

さて、何やら謎が謎を呼ぶ今話となってしまいましたw

ピカチュウ「一番の疑問はドクローズが言つてた昨日のポフィンつてやつだと思うんだけど」

だろうねえw

そこところは、また別の機会に、日を改めてでも」

ナエトル「読者放置で進行進めるのはいかなものかと思うんですけど」

ツッコミいくないw

それに、教えないとは言つてないし、今後に楽しみを残しておくと思つていてくれいw

リュウタ「なあ、ドクローズの連中何処にいる？」

おや、リュウタ、アイツ等に何の用？

リュウタ「いや、やつぱり腹の虫が治まんないから、奴等をサンドバックにでもしようかと」
↑

ナエトル「うわあ（汗）」

そうさねえ、オフレコの場面でゆっくりやらせてあげるから、今は勘弁してくれる？

リュウタ「おお、いいぞw」

ナエトル「……ホントに、いいの？」

突っ込んだら負けだw

Expedition - 24 プクリンからの依頼（前書き）

作者「えー、お久しぶりの探検隊です。大変長らくお待たせして
申し訳ない」

ピカチュウ「週一で更新してたあの頃が懐かしい……」↑遠い目

作者「うっ、それを言いなさんな（汗）」

——「起きろおお！ 朝だぞおおー！」

朝の恒例、ドゴームによる騒音公害モニングコールが部屋中に響き渡り、衝撃で微かに部屋が震動する。

毎度お馴染みのこの起こされ方に反応し、ナエトルは僅かに体を動かしした後、眠そうに目をこすってゆつくりと起き上がる。

「……うん、おはよう……ピカチュウ……」

「……おはよう……」

寝ぼけの籠もったナエトルの声に、やはり眠気の抜けきらない表情で、ピカチュウは応える。

いつもならこれで終わりなのだが、今日はいつもと少し違う。

「……んあ？ もう朝か？」

「……ふえ……」

「……ふわあ」

「この起こされ方は、こちらでも変わらんのか……」

「…………むう」

リュウタ、ピカ、コウ、バンとテラが口々に呟きながら、薄目を開け、ゆつくりと起き上がる。

だが、約一名、まだ床に伏している者が。

「……んがあああ」

ブラットである。

ドゴームの騒音めいしなどなんのその。仰向けになって大の字になり、鼻ちようちゃんを作りながら高らかにいびきを上げ、盛大に眠りこけていた。

「……す、すごいね。あの声を聞いて、まだ寝てられるなんて」

「ああ。なんたってブラットだからなあ……」

ナエトルとリュウタが、なおも眠り続けるブラットを見ながら、感心した様子で言葉を洩らす。

「なにのんきなこと言ってるの。遅れたらまたペラップに文句言われるわよ？」

ほら、ブラットさん起きて」

ピカチュウはブラットをゆすってなんとか起こそうと試みる。

だが、ブラットはまだ起きるつもりはないのか、寝ぼけたような表情で、

「んあ？ あと三十六時間……」

——その後、ポケダングスの部屋から、電撃の光と、何者かの悲鳴が聞こえてきたと、後にビッパは語っていたと言ふ。

——『今日も笑顔で明るいギルド！』

今日も、弟子達の快活な号令がギルドに響き渡り、賑やかな空気が流れる。

そして、

「さあみんなっ！ 仕事に取りかかるよー！」

『おおーっ！』

締めくくりもいつもと何ら変わることなく、本日の朝礼は幕を閉じた。

朝礼を終えると、弟子達は自分の仕事をするため、それぞれ思い思いの場所へと散っていく。

そんななか、ピカチュウは、ここ数日の癖か、自然とギルドの倉庫の方へと足を向けていた。

きつと今日の仕事も雑用だろう——と考えてのことである。

昨日までなら、その後の道場での特訓のことを踏まえ、前日に調^{チエ}ッ

査を済ませておくのだが。

——しかし、リュウタ達との戦闘^{バトル}で、道場が使い物にならなくなったことがわかっていたため、昨日は何もしなかったのである。

ピカチュウと同じことを考えていたのか、やはりナエトルの足も、自然と倉庫の方へと向いていた。

しかし、そんな二人に、ペラップから待ったの聲がかかる。

「……あー、お前達、ちよっと待ってくれ」

呼ばれて二人は倉庫に向かっていた足を止め、ペラップの方へ振り返る。

その視線に、若干の気まずさを感じるペラップであるが。しかし、それを表には出さず、つとめて冷静であるかのように見せ、二人に向け口を開く。

「親方様がお前達二人に話があるそうだ。」

朝礼が終わったら部屋へ来るようにとのことだ」

「プクリンが？」

小首を傾げながらナエトルが言葉を返す。それに、無言でペラップは頷き返す。

ナエトル同様、ピカチュウも疑問を感じたのか、不思議そうな表情をペラップに向け、

「一体何なの？」

「詳しいことは私も知らん。ただそう伝えるよう言われたただけだからな」

「——わかった。」

とりあえず、プクリンの部屋に行ってみればいいんだよね？」

問われてペラップはこくりと頷く。

ピカチュウはナエトルの方を向き、頷いたのを確認すると、一路、プクリンの部屋へと向かうのだった。

——セカイイチの件での失敗以来、プクリンの部屋を訪れるのは久方ぶりであった。

正確には昨日だが。しかし、昨日はリュウタ達のことと頭がいっぱいになっており、深く考える必要もないし、また緊張感もなかった。

が、今日はプクリン直々の呼び出しである。あの時の失敗をまだ少し引きずっているのか、ナエトルは緊張した面持ちで部屋の入口の前に立っていた。

ピカチュウとナエトルは互いの顔を見合うと、一つ頷いて、数回ノックして扉を開け、中へと入る。

中へ入ると、例によって例のごとく、プクリンは椅子にもたれかかった状態のまま、ピカチュウ達に背を向けていた。

「やあつ！

キミ達、もうすっかりケガの具合はいいようだね？」

「はっ！？」

既に数回経験しているため、椅子ごと振り返し現象にはすっかり慣れていた。故に、今の声は、プクリンの動きに驚いたわけではない。驚いたのは、プクリンの発した言葉にであった。

「まあ、毎日道場で特訓して、あの炎雷とバトルもできたんだから、そんなものにつくに治っちゃったかな？」

「な、なんでボク達がケガしてるってことをっ！？」

それに、道場での特訓のことも！？」

驚くナエトルの言葉にしかし、プクリンは表情を変えることなく、にこにこ笑顔を見せ、笑い続けている。

まるで、最初から全て知っていたと言わんばかりに。そのことが逆にピカチュウには驚かされる。

確かに前日、プクリンに道場でリュウタ達とバトルしたことは伝えていた。が、それ以前の詳しいことは何も伝えていない。故に、バトル、イコール、特訓に繋がるとは思ってもみなかったのである。

……プクリンって、一体何者……？

ピカチュウが内心でそんなことを考えていることに気付いているのかいないのか、プクリンは笑みを零しながら、さらに言葉を続ける。

「細かいことは気にしない」

それより、今日はキミ達に頼みたいことがあるんだけど、いいかな？」

「頼みたいこと？」

「何なの？ それは？」

「実は今日、僕のトモダチが、ギルドに遊びに来てくれることになってるんだけど。」

どうやらそのトモダチが道に迷っちゃったらしくってね、まだ来てないんだよ」

……の割には超落ち着いてるわね？

ピカチュウはプクリンの表情や雰囲気から、動揺している素振りが一切感じられなかった。

まあ、この辺りがプクリンが大物たる所以なのだろうと思い、追求しようとは思わないが。

「ええっ！？ そ、それは大変だよっ！」

話を聞いて何故かナエトルが慌て出す。

ナエトルの言葉に、プクリンはこくりと頷いて、

「うん」そこでなんだけど、キミ達、ちょっと行って、その人を迎えに行ってくれない？」

「ええっ！？ ボク達が！？」

再び驚きの声を上げるナエトル。

言い換えればそれはつまり、数日前言い渡された、探検禁止令が解かれたことを意味しているからである。これには驚かないわけがない。

「そ、それってつまり、また探検に行けるってことだよね!？」

「うん♪ そうだよ♪」

プクリンの返答に、ナエトルは思わず涙がこぼれそうになる。

だが、なんとかそれを堪え、気合いのこもった表情で力強く頷いて見せる。

「わかった! 任せておいて!」

「ありがと。お願いするよ♪」

「——それで、その、相手って、一体どんなポケモンなの?」

相手が誰なのか、わからなければ迎えにいくこともできない——ピカチュウは確認のためプクリンに向けて問いかける。

だが、プクリンはにこりと笑みを浮かべ、

「それは……行ってみればわかるよ♪」

わかりやすいから、きつと間違えないと思うよ♪」

……なんなんだそりは?

プクリンのいい加減な説明に、思わず眉をひそめ、ピカチュウは声に出してツツコミを入れてしまいたいそうになる。

——だが、プクリンがこういうのであれば、余程インパクトのある相手なのだろう。

それに、プクリンの名を出せば、相手は何らかの反応を見せるはず——そう考え、ピカチュウはこれ以上追求するのを止めることにする。

「——わかった」

ピカチュウの返事に満足したのか、プクリンはにこりと満面の表

情を浮かべて、

「場所は夕焼けの森。ここから北東へ行ったところ、リンゴの森よりさらに奥の場所だよ」

「わかった」

「あ、因みにこの依頼、ペラップには内緒ね？ 何か聞かれたら、お使いを頼まれたって言うておいてね」

「？ わかった」

疑問を持ちつつも、首を縦に振るピカチュウを見て、プクリンは、
「じゃあ、頼んだよ。トモダチトモダチ」
右手をふりふりしつつポケダズを見送る。

プクリンに促され、腑に落ちないながらも、ピカチュウはナエトルと共に、プクリンの部屋を後にしたのだった。

——「お？ お前達、親方様は何か言ってたか？」

プクリンの部屋を後にするなり、二人は運悪くいきなりペラップと遭遇する。

内緒と言われて、隠し事が苦手なナエトルは、ペラップの顔を見るなり、思いきり動揺の表情を浮かべてしまう。

だが、ペラップがそれに気付くより先に、間一髪ピカチュウから言葉が発せられる。

「なんだか、倉庫に足りないものがあるから買ってきてくれって。早い話がおつかいだよ」

ピカチュウはプクリンに言われた言葉に、所々に付け足しをして、さも本当にそう言われたかのように話をリアルに作り出してペラップに伝える。

「はて？ 足りないもの？ そんなものあったかなあ？」

羽を組んで悩むペラップの言葉に、ナエトルは黙ったまま。だら

だらと冷や汗を垂らして状況を見守っている。

そこへ、またしてもピカチュウの一言。

「プクリンが必要だって言うんだから必要なんでしょ。

深く考えない方がいいと思うけど？」

絶妙なタイミングでフォローを入れる。

その言葉に納得したのか、ペラップは羽を組んだ状態のまま、頭を捻らせながら、

「う、うむう、確かに」

「でしょ？」

なら、もう行ってもいいかな？ のんびりしてたら親方様からまた、たあー！ を食らうことになっちゃうから」

先日の記憶がまだ新しいのか、それを聞くなり、ペラップの表情が真っ青になり、態度が一変する。

「むう！ それはいかん！

お前達、さっさと行かんか！ 全速力！ 大至急だ！」

「わかってますって。

さ、行くよナエトル」

「うええっ！？ う、うん！」

いきなり振られておっかなびっくりの声を上げるナエトルを引っ張り、ピカチュウは未だ何かを喚いているペラップを残し、その場を後にした。

「――ハア、びっくりしたあ。

ペラップにばれちゃうかと思ったよ」

ペラップに嘘がばれなかったことに安堵し、自室に戻ってくるなり、ナエトルは盛大なタメ息をつく。

「ナエトルには一生隠し事は無理そうだね」

それを見ていたピカチュウが、苦笑いしつつ、スタンドにかけて

あったバッグを手に取り、中身を確認しだす。久々の探検であるため、忘れ物がないか、足りない物がないかのチェックである。

ピカチュウの言葉が納得いかなかったのか、ナエトルは少しムツとした表情を見せ、

「そ、そんなことないよ！」

ボクだって、ウソの一つや二つつけるよ！」

「じゃあ、試しになんか一つついてみてよ」

ここでまさか切り返しカウンターが来るとは思ってたのか、言われた瞬間、思わずナエトルはうっと呻く。そして、下を向き、真剣な表情で何かを考え始める。

暫くして――

「ぴ、ピカチュウ！ 後ろにお化けがいるよっ！」

自信満々にそう言い放つ。

ピカチュウは表情一つ変えず、沈黙を保ちつつ、数秒後に、
「ほらね」

冷たくそうあしらうのだった。

――準備を済ませたポケダンは、ギルドの一階へとやってきていた。
た。

そこで――

「お。お前等、どっか行くのか？」

声をかけられ、そちらの方を向く。

そこには、リュウタをはじめ、チーム炎雷の姿がそこにあった。
「ちよつと仕事にね」

ピカチュウはそう答えながらリュウタ達の方へと歩いていく。

「久しぶりに探検に行けるんだボク達！」

「へえ。どこまで行くの？」

ナエトルの言葉に食いついたピカが、興味深そうに尋ねる。

「夕焼けの森——ってところみたい。

あるポケモンを迎えに行行って欲しいって、プクリンに頼まれたんだよ」

「ほお、夕焼けの森ねえ」

「聞いたことのない地名じゃのう」

「確かに。興味深いな」

ブラットがあごに手をあてながらそう洩らし、バンとテラもそれに乗っかってくる。

話を聞いていたリュウタが、

「なあ、俺達も行ってもいいか？

やることもないし、暇だからさ」

期待を込めて問いかけてくる。

「別に構わないよ。ねえ、ナエトル？」

リュウタのお願いに、ピカチュウは嫌な表情一つせずそう応えてナエトルに視線を送る。

その視線に、ナエトルは大きく頷き、

「うん！ リュウタ達が一緒なら心強いし、大歓迎だよ！」

「おっしや！ 決まりだな！」

「本当？ ありがとう！」

「ありがとうございます！」

快諾に思わず喜びの言葉が洩れる炎雷の一同。

「んじゃ、さっそく行こうぜ」

すると、言うが早いか、ブラットが、いのーに外目指してすたすたと歩きだしていく。

「ちょ、待ってブラットさん！ 場所わかってるの！？」

「……………あ」

ナエトルの指摘に、ブラットは足を止める。

それを見ていたピカチュウが一言。

「……………本当に大丈夫なの…………？」

「た、多分…………」

そう言って苦笑いするしかないピカであった。

——その森が夕焼けの森と言われる由縁は、森に生息する木々にあった。

赤や黄。色とりどりのカラフルな葉を茂らせた木々が、年中変わることなくその姿を見せているのがその要因である。

まるで、夕日を浴びたかのような見事な色彩を保っていることからその名が付いたと言われている。

そんな目にも鮮やかなダンジョンを、ポケダンスと炎雷の一行は、気持ちを高揚させながら、ウキウキした気分で歩を進めていた。

「キレイな森だねえ」

美しい景観に高ぶる気持ちを抑えられなかったのか、上を見上げながらピカが口を開く。

他の者も、言葉こそ発していないが、ピカと同じ気持ちなのだろう。その表情は自然と綻んでいた。

「本当だね。こんな綺麗なダンジョンがあるなんて、ボク今まで知らなかったよ」

やはり草ポケモンだからであろうか、ナエトルはいつもよりも張りのある声でピカの言葉に反応を返す。

「ちよっとした紅葉狩り気分って感じだねえ」

「ふっ。この木々よりも、お前の方が断然美しいぞ？」

皆が景観に見惚れるなか、いきなりテラがピカチュウに向けて爆弾発言をする。

ただの日常的な会話ならばスルーすることも可能であろうが、今の言葉には色々な箇所に問題が含まれていた。よって聞き逃すわけにはいかない。その言葉に、全員が反応を見せたのは言うまでもない。

「……オイ、お前いきなり何言ってた？」

最速ツツコミを入れたのはブラットである。

だが、ブラットのツツコミに怯むことなく、

「言葉通りの意味だが？」

テラは悪びれもせず冷静な口調で堂々とそう返す。

なんの迷いもなく、きっぱり言い放ったため、一同目が点になり、口をあんどりとさせ呆然とする。

しまいには、こいつ、とうとう逝ってしまったのでは？——と思うまでに至っていた。

「ま、まあ、間違っではないと思うけど……」

誰にも聞こえぬよう、一人でナエトルがぼそりとそう呟く。

その声が聞こえたのか、コウが首を傾げて、

「何か今言いましたか？」

「うえっ！？ な、なんでもないよ！？」

まさか聞かれていると思ってなかったのか、ナエトルは顔を赤くしてぶんぶかと首を横に動かす。

何故そんな反応を見せるのか、わからずコウはきょとんとしている。

「おいテラ、熱でもあんのか？」

「ふっ。熱か。あると言えばあるかもな」

「熱の意味が違っただろ」

ブラットの鋭いツツコミをしかし、テラはスルーする。

だが、テラの言葉を真に受けたのか、リュウタが、からかうような口調で、

「重症みたいだなあ。幻覚まで見えるだなんて」

「それはどういう意味かな？ リュウタ君」

背後から聞こえた声に、思わずリュウタはびくりと肩を震わせる。そこには、笑顔のまま怒りのオーラを漂わせたピカチュウの姿が。その後、その場所に、盛大な花火が上がったと、後に付近に住んでいた野生ポケモンが語っていたとかいなかったとか。

——それから数分。

かなり森の奥までやってきた一行であったが、未だ肝心のポケモンは見つけられずにいた。

「見つからねえなあ」

付近を見回しつつ、ブラットが小さくそう洩らす。

「探してるポケモンで、一体どんなポケモンなんですか？」

「それが、プクリンには行けばわかるからって言われたから、どんなポケモンだか、詳しくは聞いてないのよ」

コウの質問に、ピカチュウも辺りを見回しながら応える。

「困ったのう。どんなポケモンかわからねば、探しようがないぞい」
バンの言葉に、ナエトルは途方に暮れた感じで、うーん、と首を捻らせる。

その時——

「あれ？ もしかして、あのポケモンかなあ？」

ピカが、一人のポケモンに目を止めた。

ピカの見ている先に、他の者が全員、一斉に視線を向ける。

そこには、しきりに辺りを見回す一人のポケモンの姿が。

音符のような頭に、首回りにはえりがついた、派手目な出で立ちをしている。その姿は、ピカチュウ達もよく知っているポケモンの容姿であった。

「——あれ、ペラップ？」

姿を見るなり、思わず疑問の言葉がナエトルから零れる。その疑問に、ピカチュウも黙って頷くしかない。視線の先に立っているのは、どう見てもペラップにしか見えないのだから。

「た、確かにペラップだね」

「でも、ペラップはギルドにいるんだよね？」

ピカの疑問に、ピカチュウもナエトルもこくこくと頷く。

「——なら、こんな所にいるわけないですよねえ」

「まあ、ギルドにいるペラップだけがペラップなわけじゃないし。

きっと別人——」

「失礼だなっ！」

『うわっ！？』

いきなり飛び込んできた合いの手に驚き、全員が飛び上がって思いきり後ずさる。

「い、いつの間に。てか、聞こえたの？ 今の会話」

独り言のつもりで呟いていたつもりが、しっかりと声に出て喋っているピカチュウ。

その言葉に、ギン！ と、ペラップは鋭い視線を向けて、

「あれだけ騒ぎ立てれば嫌でも聞こえてくるわっ！」

……いや、普通に会話してただけなんですけど。

それに、結構距離も空いてたし、普通の人は聞こえないと思うんですけど。

今度はちゃんと心の中でツツコミを入れたピカチュウであった。

「それよりっ！ 誰が誰に似てるってっ！？」

「へっ！？ あ、えっと、ペラップ……だけど……ギルドの」

「私をあんなチキンと一緒にするんじゃない！」

問われて素直に応えるナエトルを、ペラップが一喝する。

すると、それを聞きつけて、何時の間に復活していたのか、リュウタが、

「チキン……って、自分だっけ鳥——」

「だああああ！ そのチキンではないっ！」

「うわあああ！？ すみません！ すみません！」

叫びまくりつつ顔を近づけてきたペラップに驚き、ひたすら謝り続けるリュウタ。

そこに、一連の問答を静観していたコウが口を開いた。

「——言われてみれば、このペラップさん、ギルドのペラップさんと色が違いますよ？」

指摘されて全員がペラップの容姿をよく見る。

見れば、本来黒いはずの頭部は群青色をしており、くちばしはピンク色ではなく黄色。翼も、青ではなく、濃淡の違う二色の桃色のツートンカラーである。俗に言う、色違い、というやつであった。更に、その頭には、一体どこで手に入れたのか、一昔前にパイロットが被っていたであろう、飛行帽に、丸縁ゴーグルと、少し変わった出で立ちをしていた。

「ホントだ！ ペラップと全然違う！」

「だから！ あんな未熟者と私と一緒にするなというに！」

「失礼だが、貴公は何故そこまでペラップと同等の扱いを受けるのを嫌がられるのか？」

ナエトルに詰め寄っていたペラップであったが、バンの質問で元いた場所へと戻る。

暫し黙っていたペラップであつたが、ジト目で一同を見つつ、嫌々ながらも静かに口を開く。

「……弟と一緒にの扱いを受けて喜ぶ兄がどこにいる？」

「普通の人は喜ぶと思うけど——って」

『ええええええええ！？』

ペラップを除く全員がハモリ声を上げる。

八人揃つての同時の大合唱であつた為、ものすごいまでの声量である。そのすさまじさに、思わずペラップは耳を塞ぐ。

「兄っ！？ ペラップのお兄さんのっ！？」

「だから、そうだと言つてゐるだろうが！ 同じ事を二度も言わせるんぢやないっ！」

ピカチュウの言葉にプチ切れるペラップ。だが、皆の驚く反応は変わらない。

「ペラップにお兄さんなんていたんだ……」

「信じらんねえ」

「ほ、ホントですね……」

ナエトル、ブラット、コウが、順番に驚きの言葉を並べていく。

もはや怒る気も失せたのか、ペラップはムスツとした表情のまま、黙り込んでしまふ。

「それで、お前達は一体誰なんだ？」

「あ、ワタシ達、アナタをギルドまでお連れするよう、プクリンに言われてきたんです」

「何っ！？ プクリンだとっ！？」

ピカチュウの言葉に、ペラップは素早く反応する。あまりのその反応速度の速さに、ピカチュウは思わずこくこくと頷くことしかできない。

ペラップは黙ってピカチュウ達の顔を順番に見ていく。そして、見終えるなり、タメ息をついて一言、こう洩らす。

「……ハア。プクリンの奴め、手を抜きおって。

こんな弱そうな奴等を迎えに寄越すとは。どう見ても新人、ひよっひよのど素人じゃないか」

……ムカっ。

おそらくペラップは他の者には聞こえないよう、独り言のつもりで呟いたのであろう。だがしかし、ピカチュウの耳にはばっちり今の言葉が届いていた。

それを聞いていたピカチュウの心情を一言で表すと、文字通り、むかつ、であった。

まあ、この感情はピカチュウだけでなく、同様にやはりペラップの呟きが聞こえていた他の者も感じていたが。

だが、ピカチュウ達の心情などお構いなしの様子で、ペラップは更に言葉を続ける。

「ギルドに行ったら説教してやらねばならんな」

その言葉に、ピカチュウは度肝を抜かれる。

……せ、説教っ！？

あのプクリンに説教っ！？ どんだけエライのよこのペラップっ！？

「あー、出迎えには感謝する。

だが！ 私は今別な用があつてな。悪いがギルドへ行くところではないのだ」

「ええっ！？」

ペラップの言葉に、思わず驚きの声を洩らすナエトル。

そして、ナエトルの中で、再び依頼失敗の四文字が頭の中を掠めた。

ようやく探険禁止令が解かれ、久々に探険に出たというのに、再び失敗では洒落にならない。

前回の失態で、仕事を失敗すればどのような仕置きが待っているか——既に身を以て経験している。もしかた今回も失敗してしまえば、一体どんな悲惨な事態が待っているか。想像は難くない。下手をすればクビもあり得るのではないだろうか、という思考が動く。次々と良くない考えが頭の中に湧きだし、それに恐怖したナエトルの顔から、一気に血の気が失せ、真っ青になる。

「では、ギルドへは来ないということでもいいのか？」

テラの問いにしかし、ペラップは首を横に振り、

「——いや、ギルドには行かねばならん。

用件が片付き次第すぐにでも向かうつもりだった。

そこでなんだが、お前達——」

「何だよ？」

ペラップの呼びかけに反応するリュウタ。

ペラップは、リュウタの方を向き、

「護送の仕事とは別に、お前達に私の仕事を手伝ってもらいたい」

「はあっ！？　なんでそんなこと——」

「うるさい！　つべこべいわず手伝えばよいのだー！」

リュウタが文句を言おうと口を開くと、すかさずペラップが口を開いて黙らせる。

それを見ていたピカチュウは、

……うわー。ペラップに輪をかけて強引な性格だなあ。

つーか、きつとペラップがこの人の影響受けたんだろうなあきつと。

「どうしようピカチュウ？」

「どうもこうも、やるしかないでしょ。」

プクリンから受けた依頼は、ペラップを無事、ギルドまで送り届けること。

「ここではないそうですか、じゃあ頑張っつて、って言っわけにもいかないし」

「お！ 物わかりの良い奴だな。」

感心感心。探検隊にとって依頼人は大切に扱わねばならぬ存在^{もの}。常に依頼人を第一に考え行動せねばならん。

故に、常に謙虚な姿勢でいなければならないからな」

…… アナタに最も必要な姿勢だけどねそれ。

「お前はなかなか見所があるな。将来私のように優秀な探検家になれるぞきつと」

そう言っつてペラップは羽でベシベシピカチュウの肩を叩きつける。その反応に、ピカチュウはただ苦笑いを浮かべて黙っているしかない。

「それで、一体何をすればいいんです？」

ピカチュウの低姿勢に気をよくしたのか、上機嫌でペラップは大きく数度頷き、

「実はな、この先にある常夜の森と呼ばれるダンジョンに潜んでいと思しきポケモンに、大事な物を盗られてしまったのだ」

「大切なもの？」

「なんなの？ それは？」

ナエトルとピカが順番に尋ねる。

その問いに暫しの間を置いて、

「……それは……言えん」

身も蓋もないペラップの返答に、当然ながら全員がズルこける。

「だが、とても大切な物だ！」

「い、言わなきゃ取り返しようがないじゃない」

曖昧な言葉に、何とかピカチュウは立ち上がりながらツッコミを入れる。

だが、そんなツッコミに負けじと、ペラップは胸を張り、

「私が見れば一発でわかるから大丈夫だ！」

「つて、ついてくる気なのかよ」

ペラップの言葉に思わず反応するブラット。

まあ、リユウタ達が元いた世界で、彼等は依頼人を連れての仕事
をこなしたことがないので、当然といえば当然なのだ。

だが、ブラットの反応が気に入らなかったのか、ペラップは再び
目を三角にして吊り上げる。

「当たり前だっ！」

……アレは、私の、命の次に……大事な物なのだからな」

そう言ったきり、ペラップは黙り込んでしまう。

ペラップのこの言葉に、ナエトルがはっとしたような表情をし、
反応を見せる。

「……大切な……もの……」

大切な物と言われ、ナエトルは首に下げたペンダントに目を向け
る。

それは、ナエトルにとって命の次に大切な物。かつて一度、ナエ
トル自身もそれを奪われたことがあった。

その時のことを、ナエトルは今でもよく覚えている。あの時の衝
撃は計り知れない。だから、ナエトルには、何が何でも取り返した
いという、ペラップの気持ちがよく理解できた。

「わかったよペラップ！一緒にペラップの宝物を取り返そう！」

「おおっ！お前、話がわかるじゃないかっ！」

ペラップの賛辞に、ナエトルはにこりと微笑みを浮かべる。

ナエトルの意見に納得したのか、全員それ以上反論することもなく、そのことから、皆の意見はまとまった。

「それで、盗んだポケモンはどんなポケモンなの？」

まさか、それも教えられないっていうんじゃないよね？」

「いや！ それは教えられる！」

あれは確か……そうだ！ ドンカラスというポケモンだ！」

「ドンカラスか。厄介な相手だな」

テラが腕組みをしながらそう洩らす。

ドンカラスは、飛行タイプに加え、悪タイプも併せ持っている。

悪タイプは、テラの得意とする超能力技^{エスパー}が全く効力を発揮しないのである。それ故洩らされた呟きであった。

「まあ、でも、こんだけいりやなんとかなんだろ。」

もつとポジティブにこうぜ」

ブラットのフォローに、何故かペラップが強く頷いて反応を見せる。

そして、胸をどんと大きく叩き、

「そうだ。それに、心配はいらないぞ？ 何せ、この私がついているのだから！」

あんな奴は、この私がいれば一発でKOしてくれる！ ドーンと大船に乗ったつもりでいいぞ！？」

……いや、アナタがいるから余計に不安なんですけど。

ピカチュウは心の中でそんなツツコミを入れてみたりする。

だが、そう思っていたのはピカチュウだけではないようで、

「でもよお、お前そのドンカラスに大切なもの盗まれたんだろ？」

言っても説得力ないぞ？」

「……………」

リュウタの一言でペラップが凍り付く。いや、ペラップだけではな

く、その場にいる全員が凍り付いた。

あぁっ！　そこでそれ言うか！？

どんだけKYなのよアンタはっ！？

ピカチュウが何か言おうと口を開きかけるが、時既に遅し。

「乱れ突き！　乱れ突き！」

既にペラップは、リュウタに向けて攻撃を仕掛けていた。

鋭いくちばしの先が容赦なくリュウタの後頭部めがけて突撃してくる。

いきなりの攻撃にわけがわからず、思わずリュウタは頭を抱える。

「いででで！　何でええええ！？」

襲われる理由が全くわからず、声を上げるリュウタ。

「自業自得よ」

それを見たピカチュウが、冷たく一言、そう洩らした。

「さてと、それでは早速行くとしよう。

皆の者、準備はいいか！？」

『……おお……』

ピカチュウ達のやる気のない返事が気に入らなかったのか、ペラ

ップは不機嫌そうな表情を見せ、

「なんだ！？　そのやる気のない声は！？」

もつと根性出してけ！」

『おおーーーーー！』

先程とは一転。めちやくちゃ気合いの入ったかけ声に思わずペラップは耳を押さえる。

「うっ、今度はでかすぎっ」

「もういいから行こうよ」

ピカチュウのツッコミに思わずたじろぐペラップであるが、渋々の表情で、

「うつ、わ、わかった。
——っと、そうだ」

ここでペラップが何かに気付く。

「まだ何かあるの？」

それに気付いたピカチュウの言葉に、ペラップは大きく頷いて見せて、

「私のことは、ペラン——とでも呼んでもらおう。

弟と同じ呼び方だと紛らわしいだろうからな」

「そっか。わかったよペラン」

ペラップ、もといペランの言葉に納得の表情を見せるナエトル。

「んじゃ、行くとするか！」

かけ声と共にリュウタが歩き出そうと一歩前へ足を出す。

だが——

「それは私の台詞だ！

昔から号令をかけるのは隊長の役目というのを知らんのかお前は
っ！？」

またもペランがリュウタの頭を突いて阻止する。

もはや恒例行事となりつつあるその反応リアクションに、他の者達は言葉が出ない。

だが、ペランがかなりの仕切りやであるということだけは、よく理解した。

……難儀なやつぢやなあ……

ピカチュウは、のど元まで出かかった言葉をなんとか飲み込む。
そして、笑顔でペランに向かって、

「——では、号令をお願いしますペラン隊長」

「うむ！ これより我々は、盗まれた品物を取り返すため、常夜の

森へと向かう！

それでは出発！」

『お——っ！』

気合いの入ったかけ声と共に、全員が歩き出す。

目指すは常夜の森——夕焼けの森とは対称的に、永遠に夜が支配すると言われている、不気味な森であった——

作者「えー、今回は久しぶりのオリジナルキャラ登場になります。

それではご紹介しましょう。ペラップ兄こと、ペランでえす

♪」

ペラン「あー、お初にお目にかかる。ペランである」↑威張り

作者「ペラップを一とすると、このペランはその八倍にも増して性格が酷いですw」↑

ペラン「ちょ、何だその説明！？ この私をあのチキンの八割増しだのと！」

作者「今話を読んでいただいてわかる通り、役職はプクリンよりも上。一応エライ人なのです。一応。重要なので二度言いました」↑↑

ペラン「一応とはなんだ一応とはっ！？ こう見えても私はPEUの——（オフレコ）」

作者「えー、次回以降の軽いネタバレになるので切らせていただきましたw」↑

さて、次回の舞台は常夜の森っ！ 果たしてポケダンは無事ペランのお宝を取り戻せるのかっ！？ 全ては次回を待てっ！」

ピカチュウ「で、結局ペランのお宝って一体何な——」

作者「ではまた次回っさよならっ♪」↑↑

ピカチュウ「作者^{アンタ}まで流すのっ!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7377h/>

ポケモン不思議のダンジョン～時の探検隊・闇の探検隊～

2011年6月12日00時11分発行